

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第14集

<small>まえ</small> 前	<small>なか</small> 中	<small>にし</small> 西	<small>い</small> 遺	<small>せき</small> 跡
<small>にし</small> 西	<small>べっ</small> 別	<small>ふ</small> 府	<small>やかた</small> 館	<small>あと</small> 跡
<small>おう</small> 王	<small>じ</small> 子	<small>にし</small> 西	<small>い</small> 遺	<small>せき</small> 跡
<small>たて</small> 立	<small>の</small> 野	<small>い</small> 遺	<small>せき</small> 跡	

— 市内遺跡発掘調査報告書Ⅳ —

2 0 1 3

埼玉県熊谷市教育委員会

序

私たちの郷土熊谷は、丘陵、台地、沖積低地と地形が変化に富んでいる上、我が国及び関東を代表する2大河川である利根川・荒川が市内を流れ、大河がもたらす肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。このような自然環境のもと、市内には、先人たちによって多くの文化財が営々と引き継がれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たち子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代に伝え、さらに豊かな熊谷市形成の礎としていかなければならないと考えております。

さて、市内には地下に埋蔵されている多くの遺跡が所在します。そして、これらの遺跡内では各種開発が行われ、遺跡を保護保存できない場合が多数あります。その場合には、発掘調査という記録保存を行い、後世に伝えるべく方策を採っています。

本書は、平成16年度に実施された立野遺跡、平成21年度に実施された前中西遺跡及び西別府館跡、王子西遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く活用されることとなれば幸いです。

結びに、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護に御理解、御協力を賜りました関係者の皆様に厚くお礼申し上げます、発刊のあいさつといたします。

平成25年3月

熊谷市教育委員会
教育長 野原 晃

例 言

1 本書は、市内遺跡Ⅳ「前中西遺跡、西別府館跡、王子西遺跡、立野遺跡」の発掘調査報告書である。

前中西遺跡 埼玉県熊谷市中西四丁目2514番地2他所在 (埼玉県遺跡番号59-092)

西別府館跡 埼玉県熊谷市西別府字天神2214番地1所在 (埼玉県遺跡番号59-039)

王子西遺跡 埼玉県熊谷市弥藤吾字王子584番8所在 (埼玉県遺跡番号61-032)

立野遺跡 埼玉県熊谷市板井238番地2他所在 (埼玉県遺跡番号65-054)

2 本調査は、前中西遺跡・西別府館跡・王子西遺跡が個人住宅建築工事に伴う事前の記録保存目的の発掘調査であり、立野遺跡が国体会場及び公園建設に伴う保存目的のための範囲内容確認調査である。いずれも市内遺跡発掘調査等事業国庫補助金、県費補助金の交付を受け、熊谷市教育委員会が実施した。ただし、立野遺跡については、旧江南町教育委員会が実施した。

3 本事業の組織は、各調査の「発掘調査の概要」のとおりである。

4 確認調査及び発掘調査期間は、前中西遺跡が平成21年7月15日～8月14日、西別府館跡が平成21年9月2日～10月9日、王子西遺跡が平成22年1月25日～2月12日、立野遺跡が平成17年12月1日～12月24日である。

整理・報告書作成期間は、平成24年4月1日～平成25年3月26日である。

5 確認調査及び発掘調査の担当は、前中西遺跡・西別府館跡を熊谷市教育委員会吉野 健が、王子西遺跡を熊谷市教育委員会新井 端・蔵持俊輔・長谷川一郎が、立野遺跡を旧江南町教育委員会森田安彦が、それぞれ担当した。

また、整理・報告書作成事業は、前中西遺跡及び西別府館跡を吉野が、立野遺跡及び王子西遺跡を熊谷市教育委員会森田が担当した。

6 本書の執筆は、整理・報告書作成事業を担当した森田、吉野が分担した。

7 写真撮影は、確認調査・発掘調査、及び遺物を各々の担当者が行った。

8 出土遺物は、熊谷市教育委員会で保管している。

9 発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。

瀧瀬芳之 熊谷市区画整理中央事務所 熊谷市立別府公民館 埼玉県教育局生涯学習文化財課
公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

凡 例

1 本文中、遺構の略記号は、次のとおりである。

S A…掘立柱列 S B…掘立柱建物跡 S D…溝跡 S E…井戸跡 S I…竪穴建物跡
S K…土坑 S R…方形周溝墓 P…ピット

2 土層断面図及び平面図中の表記記号は、次のとおりである。

S…川原石 P…土器 T…瓦 F…鉄製品

3 遺構挿図の縮尺は、原則として1／60であるが、それ以外のものは個別に示した。

4 遺構挿図中、遺物に添えてある番号は、該当する遺構の遺物挿図中の遺物番号と一致する。

5 遺構挿図中、断面に添えてある数値は標高を示している。また、原則として、前中西遺跡及び西別府館跡の同一図版の標高は統一し、Aポイントに表記した。なお、前中西遺跡の図版中、筋状の黒塗りは、噴砂を表す。

6 遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

弥生土器・土師器・須恵器・須恵系土師質土器・灰釉陶器・陶磁器・石製品（砥石）…1／4
瓦…1／4・1／5 弥生土器（破片・底部）…1／3 土錘・石器…1／2 鉄鏃…1／2
太刀…1／4 鉄製品…1／2

7 遺物実測図の中で、中心線はすべて実線で示し、遺物観察表にできる限り残存率で示した。また、表現方法は、以下のとおりである。

須恵器のうち還元焰焼成の断面：黒塗り、酸化焰焼成の断面：白抜き

灰釉陶器断面： 瓦断面：

上記以外の土師器等土器断面：白抜き

釉薬： 赤彩： 炭化（煤・タール付着）： 墨書：黒塗り

底部調整 回転ヘラ削り \

8 遺物拓影は、原則として、左右あるものは向かって左に外面、右に内面、左のみのものは外面を示した。瓦については、平瓦が左に凹面、右に凸面、丸瓦が左に凸面、右に凹面を示した。

また、土器の底部調整のうち回転糸切り痕があるものは、拓影で示した。

9 遺物観察表の凡例は、次のとおりである。

法量の単位は、cm、gである。また、推定値は括弧付けで示した。

胎土は、土器に含まれる鉱物等を以下の記号で示した。

A…白色粒子 B…黒色粒子 C…赤色粒子 D…褐色粒子 E…赤褐色粒子 F…白色針状物質
G…長石 H…石英 I…白雲母 J…黒雲母 K…角閃石 L…片岩 M…砂粒 N…礫

焼成は、次のように区分した。

A…良好 B…普通 C…不良

10 写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。

11 土層及び遺物の色調は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行）に照らし最も近似した色相を示した。王子西遺跡・立野遺跡出土土器の色調は、第一合成株式会社製SCR-1で測定、マンセル値で示している。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
I 前中西遺跡の調査	3
1 発掘調査の概要	3
2 遺跡の立地と環境	5
3 検出された遺構と遺物	12
4 調査のまとめ	28
II 西別府館跡の調査	31
1 発掘調査の概要	31
2 遺跡の立地と環境	33
3 検出された遺構と遺物	41
4 調査のまとめ	61
III 王子西遺跡の調査	65
1 発掘調査の概要	65
2 遺跡の立地と環境	67
3 検出された遺構と遺物	72
4 調査のまとめ	86
IV 立野遺跡の調査	91
1 発掘調査の概要	91
2 遺跡の立地と環境	93
3 検出された遺構と遺物	98
4 調査のまとめ	116

挿 図 目 次

第 1 図 埼玉県の地形図	X
第 2 図 前中西遺跡周辺遺跡分布図	6
第 3 図 前中西遺跡調査地点位置図	10
第 4 図 前中西遺跡調査区全測図	11
第 5 図 前中西遺跡第 1 号竪穴建物跡	13

第 6 図	前中西遺跡第 1 号掘立柱建物跡	14
第 7 図	前中西遺跡第 2～4 号掘立柱建物跡	15
第 8 図	前中西遺跡第 2～4 号掘立柱建物跡土層断面図	16
第 9 図	前中西遺跡第 2～22 号ピット	18
第 10 図	前中西遺跡第 23～29 号ピット	19
第 11 図	前中西遺跡第 30～34 号ピット	20
第 12 図	前中西遺跡第 5・7・19・24 号ピット出土遺物	20
第 13 図	前中西遺跡第 1～3 号溝跡	22
第 14 図	前中西遺跡第 1 号方形周溝墓、第 1 号ピット	23
第 15 図	前中西遺跡第 1 号方形周溝墓出土遺物	24
第 16 図	前中西遺跡遺構外出土遺物	27
第 17 図	西別府館跡周辺遺跡分布図	34
第 18 図	西別府館跡調査地点位置図	39
第 19 図	西別府館跡調査区全測図	40
第 20 図	西別府館跡第 1 号竪穴建物跡	42
第 21 図	西別府館跡第 1 号竪穴建物跡出土遺物 (1)	43
第 22 図	西別府館跡第 1 号竪穴建物跡出土遺物 (2)	44
第 23 図	西別府館跡第 2 号竪穴建物跡、第 10・11 号ピット	46
第 24 図	西別府館跡第 2 号竪穴建物跡遺物出土状況	47
第 25 図	西別府館跡第 2 号竪穴建物跡出土遺物 (1)	48
第 26 図	西別府館跡第 2 号竪穴建物跡出土遺物 (2)	49
第 27 図	西別府館跡第 3 号竪穴建物跡	51
第 28 図	西別府館跡第 3 号竪穴建物跡出土遺物	51
第 29 図	西別府館跡第 1 号掘立柱建物跡	52
第 30 図	西別府館跡第 1・2 号土坑、第 2 号土坑遺物出土状況	53
第 31 図	西別府館跡第 2 号土坑出土遺物	54
第 32 図	西別府館跡第 1～9・12～26・29 号ピット	55
第 33 図	西別府館跡第 8 号ピット出土遺物	56
第 34 図	西別府館跡第 1～3 号溝跡、第 27・28 号ピット	58
第 35 図	西別府館跡第 1 号井戸跡	58
第 36 図	西別府館跡第 1 号井戸跡出土遺物	59
第 37 図	西別府館跡遺構外出土遺物	60
第 38 図	王子西遺跡周辺の地形 (迅速測図)	67
第 39 図	王子西遺跡周辺遺跡位置図 (1/25,000)	68
第 40 図	王子西遺跡の範囲と調査地点	72
第 41 図	王子西遺跡全測図	73

第 42 図	王子西遺跡第 1 号竪穴建物跡	74
第 43 図	王子西遺跡第 1 号竪穴建物跡出土遺物	75
第 44 図	王子西遺跡第 2 号竪穴建物跡 (古)	76
第 45 図	王子西遺跡第 2 号竪穴建物跡 (新)	77
第 46 図	王子西遺跡第 2 号竪穴建物跡遺物分布図	78
第 47 図	王子西遺跡第 2 号竪穴建物跡出土遺物 (1)	79
第 48 図	王子西遺跡第 2 号竪穴建物跡出土遺物 (2)	80
第 49 図	王子西遺跡第 2 号竪穴建物跡出土遺物 (3)	81
第 50 図	王子西遺跡第 3 号竪穴建物跡	82
第 51 図	王子西遺跡第 3・4 号竪穴建物跡出土遺物	82
第 52 図	王子西遺跡第 4・6 号竪穴建物跡	83
第 53 図	王子西遺跡第 5 号竪穴建物跡出土遺物	83
第 54 図	王子西遺跡第 4・6 号竪穴建物跡出土遺物	85
第 55 図	王子西遺跡遺構外出土遺物	85
第 56 図	江南台地・比企丘陵地質概略図 (比企団体研究グループ 1991 より)	93
第 57 図	立野遺跡周辺遺跡位置図	96
第 58 図	立野遺跡の範囲と調査地点 (1/5,000)	98
第 59 図	立野遺跡第 2 号墳現況測量図	100
第 60 図	立野遺跡第 2 号墳墳丘断面図 (1)	101
第 61 図	立野遺跡第 2 号墳墳丘断面図 (2)	102
第 62 図	立野遺跡第 2 号墳石室断面図	103
第 63 図	立野遺跡第 2 号墳前庭部セクション図	104
第 64 図	立野遺跡第 2 号墳前庭部舗石平面図	104
第 65 図	立野遺跡第 2 号墳石室計測部位	104
第 66 図	立野遺跡第 2 号墳石室平面・立面図	105
第 67 図	立野遺跡第 2 号墳石室遺物出土状況	108
第 68 図	立野遺跡第 2 号墳出土遺物 (1)	109
第 69 図	立野遺跡第 2 号墳出土遺物 (2)	110
第 70 図	立野遺跡第 2 号墳出土遺物 (3)	111
第 71 図	立野遺跡第 2 号墳出土遺物 (4)	112
第 72 図	立野遺跡第 2 号墳出土遺物 (5)	113
第 73 図	立野遺跡第 2 号墳出土遺物 (6)	115
第 74 図	立野古墳群全測図	117

表 目 次

第 1 表	前中西遺跡ピット一覧表	19
第 2 表	前中西遺跡第 5・7・19・24 号ピット出土遺物観察表	20
第 3 表	前中西遺跡第 1 号方形周溝墓出土遺物観察表	25
第 4 表	前中西遺跡遺構外出土遺物観察表	26
第 5 表	西別府館跡第 1 号竪穴建物跡出土遺物観察表	45
第 6 表	西別府館跡第 2 号竪穴建物跡出土遺物観察表	50
第 7 表	西別府館跡第 3 号竪穴建物跡出土遺物観察表	51
第 8 表	西別府館跡第 2 号土坑出土遺物観察表	54
第 9 表	西別府館跡ピット一覧表	56
第 10 表	西別府館跡第 8 号ピット出土遺物観察表	57
第 11 表	西別府館跡第 1 号井戸跡出土遺物観察表	59
第 12 表	西別府館跡遺構外出土遺物観察表	60
第 13 表	王子西遺跡周辺遺跡一覧表	69
第 14 表	王子西遺跡第 1 号竪穴建物跡出土遺物観察表	74
第 15 表	王子西遺跡第 2 号竪穴建物跡出土遺物観察表	81
第 16 表	王子西遺跡第 3 号竪穴建物跡出土遺物観察表	84
第 17 表	王子西遺跡第 4 号竪穴建物跡出土遺物観察表	84
第 18 表	王子西遺跡第 5 号竪穴建物跡出土遺物観察表	85
第 19 表	王子西遺跡遺構外出土遺物観察表	85
第 20 表	立野遺跡周辺遺跡一覧表	97
第 21 表	立野遺跡第 2 号墳石室各部位計測表	104
第 22 表	立野遺跡第 2 号墳出土鉄鏃計測表	114
第 23 表	立野遺跡第 2 号墳出土金属製品計測表	114
第 24 表	立野遺跡第 2 号墳出土遺物計測表	115

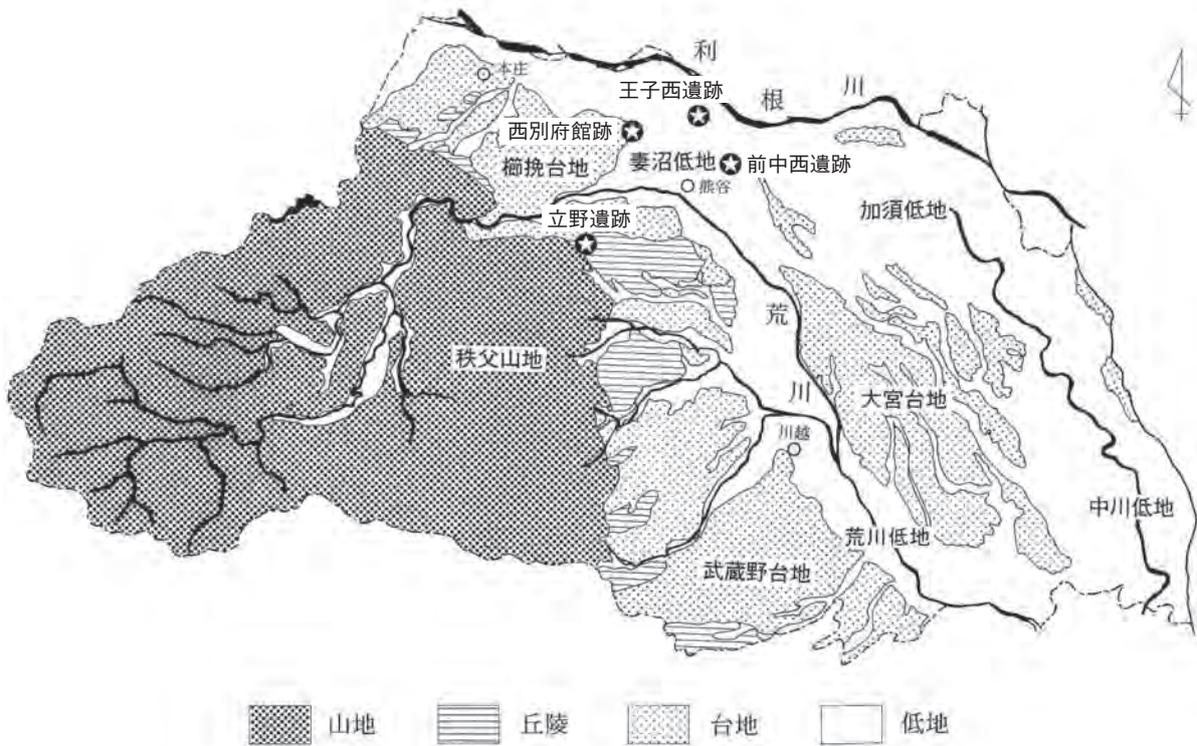
図版目次

- 図版 1 前中西遺跡 調査区全景（西から）
前中西遺跡 調査区全景（北から）
- 図版 2 前中西遺跡 第1号竪穴建物跡（南西から）
前中西遺跡 第1号掘立柱建物跡（北から）
前中西遺跡 第2～4号掘立柱建物跡（北東から）
- 図版 3 前中西遺跡 第1・2号溝跡（北から）
前中西遺跡 第3号溝跡（南から）
- 図版 4 前中西遺跡 第1号方形周溝墓（南から）
前中西遺跡 第1号方形周溝墓南溝遺物出土状況（北から）
前中西遺跡 第1号方形周溝墓南溝弥生土器壺出土状況（南から）
- 図版 5 前中西遺跡 第1号方形周溝墓 第15図1～24
前中西遺跡 第5号ピット 第12図1～3、第7号ピット 第12図4、第19号ピット
第12図5、第24号ピット 第12図6
前中西遺跡 遺構外 第16図18
- 図版 6 前中西遺跡 第1号方形周溝墓 第15図26・27
前中西遺跡 遺構外 第16図1～17・20～24
- 図版 7 西別府館跡 調査区西半部（南から）
西別府館跡 調査区東半部（南から）
- 図版 8 西別府館跡 第1号竪穴建物跡（西から）
西別府館跡 第1号竪穴建物跡掘方（西から）
西別府館跡 第1号竪穴建物跡カマド付近遺物出土状況（西から）
- 図版 9 西別府館跡 第2号竪穴建物跡（西から）
西別府館跡 第1号竪穴建物跡遺物出土状況（西から）
- 図版 10 西別府館跡 第2号竪穴建物跡遺物出土状況（南から）
西別府館跡 第3号竪穴建物跡（南から）
西別府館跡 第1号掘立柱建物跡、第1～3号溝跡、第27・28号ピット（南から）
- 図版 11 西別府館跡 第2号土坑（南から）
西別府館跡 第2号土坑遺物出土状況（南から）
- 図版 12 西別府館跡 第1号土坑（北から）
西別府館跡 第14～26号ピット（南から）
西別府館跡 第1号井戸跡（東から）
- 図版 13 西別府館跡 第1号竪穴建物跡 第21図2・4・5
西別府館跡 第2号竪穴建物跡 第25図3～5・10～12・16～18
- 図版 14 西別府館跡 第1号竪穴建物跡 第21図10・11
西別府館跡 第2号竪穴建物跡 第25図20～22
西別府館跡 第3号竪穴建物跡 第28図2
西別府館跡 第2号土坑 第31図1～3

- 図版 15 西別府館跡 第 1 号竪穴建物跡 第 21 図 12
西別府館跡 第 2 号竪穴建物跡 第 26 図 24・25・31～34
西別府館跡 第 3 号竪穴建物跡 第 28 図 3
西別府館跡 遺構外 第 37 図 4～6
- 図版 16 西別府館跡 第 1 号竪穴建物跡 第 22 図 17・18
西別府館跡 第 1 号井戸跡 第 36 図 1～3
西別府館跡 遺構外 第 37 図 1
- 図版 17 西別府館跡 第 1 号竪穴建物跡 第 21 図 13～14・16
西別府館跡 第 2 号竪穴建物跡 第 26 図 36・37
西別府館跡 第 3 号竪穴建物跡 第 28 図 5
西別府館跡 遺構外 第 37 図 11
- 図版 18 王子西遺跡 航空写真（平成 16 年 5 月撮影）
- 図版 19 王子西遺跡 調査区全景写真（南東より）
王子西遺跡 第 1 号竪穴建物跡（南西より）
王子西遺跡 第 1 号竪穴建物跡完掘状態（北東より）
王子西遺跡 第 1 号竪穴建物跡カマド
王子西遺跡 第 1 号竪穴建物跡貯蔵穴
- 図版 20 王子西遺跡 第 2～6 号竪穴建物跡（西より）
王子西遺跡 第 2 号竪穴建物跡（古）カマド
王子西遺跡 第 2～6 号竪穴建物跡（東より）
王子西遺跡 調査風景
王子西遺跡 第 2 号竪穴建物跡（新）カマド
王子西遺跡 第 2 号竪穴建物跡（新）遺物出土状態
王子西遺跡 第 2 号竪穴建物跡（新）遺物出土状態
王子西遺跡 第 2 号竪穴建物跡遺物出土状態
- 図版 21 王子西遺跡 第 1 号竪穴建物跡 第 43 図 1～8
- 図版 22 王子西遺跡 第 1 号竪穴建物跡 第 43 図 9～10
王子西遺跡 第 2 号竪穴建物跡 第 47 図 1～6
- 図版 23 王子西遺跡 第 2 号竪穴建物跡 第 47 図 7～15
- 図版 24 王子西遺跡 第 2 号竪穴建物跡 第 48 図 16～22
- 図版 25 王子西遺跡 第 2 号竪穴建物跡 第 48 図 23～28
王子西遺跡 第 3 号竪穴建物跡 第 51 図 1・2
- 図版 26 王子西遺跡 第 3 号竪穴建物跡 第 51 図 3～5
王子西遺跡 第 4 号竪穴建物跡 第 51 図 6
- 図版 27 王子西遺跡 第 2 号竪穴建物跡 第 49 図 29・30
王子西遺跡 遺構外 第 54 図 5
王子西遺跡 第 2 号竪穴建物跡出土炭化種子
王子西遺跡 遺構外 第 54 図 1～4
- 図版 28 立野遺跡 航空写真（昭和 58 年 11 月撮影）

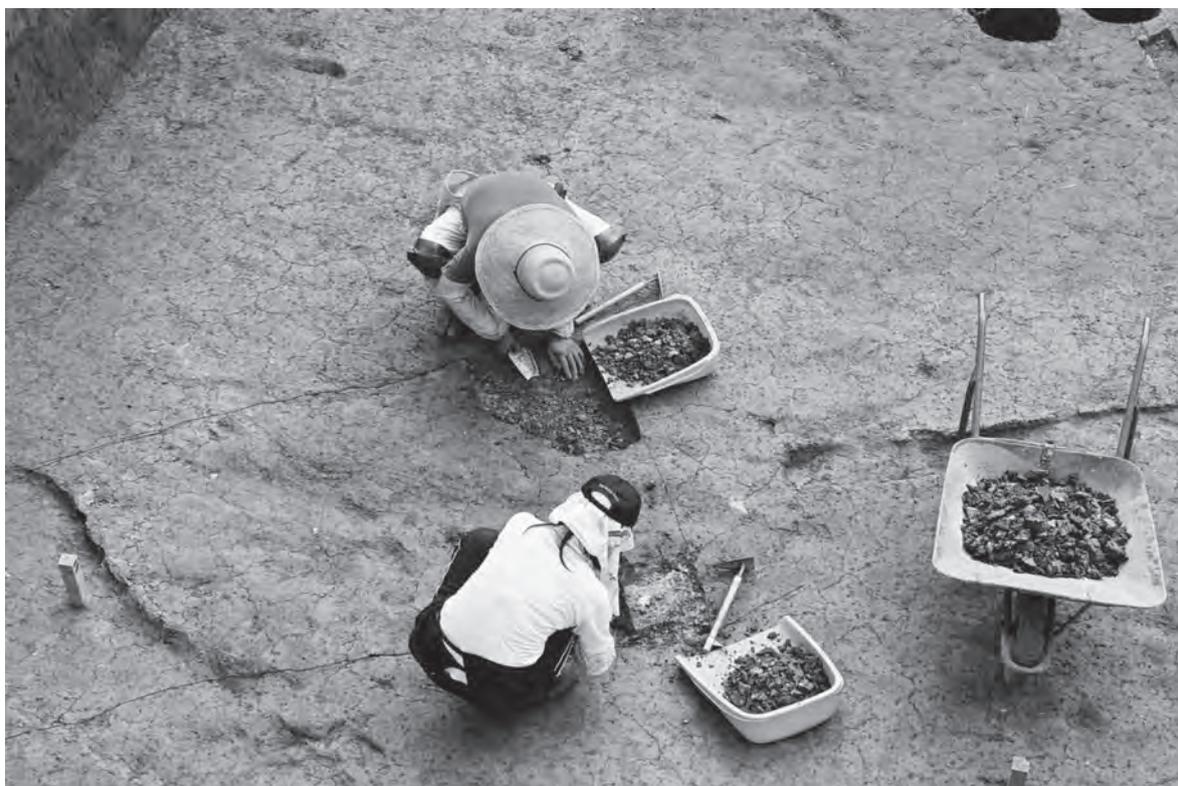
図版 29	立野遺跡	第 2 号墳	墳丘現況
	立野遺跡	第 2 号墳	前庭上部舗石
	立野遺跡	第 2 号墳	前庭上部舗石遺物出土状況
	立野遺跡	第 2 号墳	調査風景
	立野遺跡	第 2 号墳	墳丘盛土土層断面
	立野遺跡	第 2 号墳	前庭下部舗石
	立野遺跡	第 2 号墳	調査風景
図版 30	立野遺跡	第 2 号墳	玄室内大刀出土状況
	立野遺跡	第 2 号墳	前室内大刀出土状況
図版 31	立野遺跡	第 2 号墳	前室内大刀出土状況
	立野遺跡	第 2 号墳	玄室内刀子出土状況
	立野遺跡	第 2 号墳	玄室内鉄鎌出土状況
	立野遺跡	第 2 号墳	前室内鏝出土状況
	立野遺跡	第 2 号墳	玄室内靱尻金具出土状況
図版 32	立野遺跡	第 2 号墳	羨道部（南から）
	立野遺跡	第 2 号墳	前庭部と羨道部（南より）
	立野遺跡	第 2 号墳	調査風景
	立野遺跡	第 2 号墳	石室全景（南より）
	立野遺跡	第 2 号墳	石室（北西より）
	立野遺跡	第 2 号墳	調査風景
図版 33	立野遺跡	第 2 号墳	石室全景（南東より）
	立野遺跡	第 2 号墳	石室全景（西より）
図版 34	立野遺跡	第 2 号墳	羨道部（東より）
	立野遺跡	第 2 号墳	玄室石材（東より）
	立野遺跡	第 2 号墳	前室（西より）
	立野遺跡	第 2 号墳	玄室奥壁石材内部
	立野遺跡	第 2 号墳	玄室（東より）
	立野遺跡	第 2 号墳	羨道部（西より）
	立野遺跡	第 2 号墳	玄室石材内部（東面）
	立野遺跡	第 2 号墳	玄室奥壁コーナー内部（北西部）
図版 35	立野遺跡	第 2 号墳	鉄鎌 第 68 図 1 ~ 6
	立野遺跡	第 2 号墳	鉄鎌 第 68 図 7 ~ 12
	立野遺跡	第 2 号墳	鉄鎌 第 68 図 13 ~ 16、第 69 図 17・18
	立野遺跡	第 2 号墳	鉄鎌 第 69 図 19 ~ 24
図版 36	立野遺跡	第 2 号墳	鉄鎌 第 69 図 25 ~ 30
	立野遺跡	第 2 号墳	鉄鎌 第 69 図 31 ~ 32、第 70 図 33 ~ 36
	立野遺跡	第 2 号墳	刀子 第 70 図 46
	立野遺跡	第 2 号墳	前庭部出土 台付碗 第 73 図 59
	立野遺跡	第 2 号墳	前庭部出土 碗 第 37 図 60

図版 37	立野遺跡	第 2 号墳	前室出土	大刀	第 72 図 55
	立野遺跡	第 2 号墳	前室出土	鞘尻金具	第 72 図 58
	立野遺跡	第 2 号墳	前室出土	鏝	第 72 図 57
	立野遺跡	第 2 号墳	前室出土	大刀	第 72 図 56
	立野遺跡	第 2 号墳	玄室出土	大刀	第 71 図 47
	立野遺跡	第 2 号墳	玄室出土	金銅製喰出鏝・足金具	第 71 図 48 ~ 50
	立野遺跡	第 2 号墳	玄室出土	鞘口金具・鞘尻金具	第 71 図 51・52
	立野遺跡	第 2 号墳	玄室出土	金銅製喰出金具	第 71 図 48
	立野遺跡	第 2 号墳	玄室出土	鞘尻金具内残存木質部	



第 1 図 埼玉県地形図

前中西遺跡



I 前中西遺跡の調査

1 発掘調査の概要

(1) 調査にいたる経過

前中西遺跡の調査は、平成8年度から始まった上之土地区画整理事業に伴う発掘調査が端緒である。この発掘調査は、区画整理地内における街路築造工事箇所について発掘調査を実施しているが、その調査後に街路が築造され整備されることに伴い、家屋の移転や新築工事等で個人専用住宅の建築が近年増大している。また、上之地区は地盤がやや軟弱なことから、柱状改良等の地盤改良工事を伴う建築ケースが徐々に増えてきているところである。柱状改良工事の場合、小径の柱ではあるが多数の本数により、実質上埋蔵文化財を破壊する恐れがあることから、発掘調査を実施せざるを得ない状況になっている。

本調査は、建築主（横山 薫氏）との調整を経て、柱状改良工事を伴う個人専用住宅の建築により埋蔵文化財の現状保存が困難と判断されたため、国庫・県費補助事業として実施したものである。経過については、次のとおりである。

平成21年6月23日付けで、文化財保護法第93条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出される。これを受けて、熊谷市教育委員会は、届出のあった熊谷市中西四丁目2514-2、2515-4・6・7地内は、埋蔵文化財包蔵地（県遺跡番号59-092前中西遺跡）に該当することから、埋蔵文化財の詳細な状況を把握するため、平成21年6月29日に試掘調査を実施した。この調査により、現地表面下120cm～135cmで弥生時代の遺構・遺物が確認された。

個人専用住宅建築は、前述のとおり柱状改良工事（杭打）を伴うもので、その掘削深度は現地表面下250cm、杭はおよそ200cmの間隔で39本を建物の範囲全面に打つものであったため、発掘調査の措置が適当である旨副申を付して、平成21年7月10日付けで埼玉県教育委員会あてに埋蔵文化財発掘の届出を送付した。その後、建築主あてに埼玉県教育委員会教育長から周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知がなされ、これは発掘調査実施の指示がなされた。

発掘調査は、発掘調査に先立ち、文化財保護法第99条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を、平成21年7月13日付け熊教社発第1240号で提出し、熊谷市教育委員会が実施した。

(2) 発掘調査、整理・報告書作成の経過

発掘調査は、平成21年7月15日から同年8月14日にかけて行われた。調査面積は、家屋建築予定箇所全面の120㎡である。

まず、重機による表土除去を行い、その後人力による遺構確認作業を行った。検出された遺構は、方形周溝墓の周溝跡、溝跡、ピット等で、順次掘り下げを行った。

そして、掘り下げ作業と並行して、土層断面図の作成、遺物出土状況の分布図を作成し、適宜写真撮影を行った。

また、遺構の分布状況については、平面図を作成した。遺構の写真撮影については、遺構ごとに行い、最後に調査区全景について写真撮影を行った。

整理・報告書作成作業は、平成24年4月から平成25年3月にかけて実施した。

まず、遺物の洗浄、注記、接合、復元作業を行った。その後、遺物の分類を行い、実測作業を開始した。また、これらと並行して遺構の図面整理を行った。

次に、土器等の遺物のトレース・拓本を採り図版を作成し、併せて遺構等のトレース・図版の作成を行った。そして、遺構の写真整理・遺物写真撮影を行い、写真図版の割付をした。また、これと並行して原稿執筆を行った。

最後に、印刷業者の選定を行い、校正を経て本報告書を刊行した。

(3) 発掘調査、整理・報告書作成の組織

主体者 熊谷市教育委員会

ア 発掘調査

平成 21 年度

教育長	野原 晃
教育次長	柴崎 久
社会教育課長	斉木 千春
社会教育課文化財保護担当副参事	小林 英夫
社会教育課副課長兼文化財保護係長	新井 端
副課長	出縄 康行
社会教育課文化財保護係主査	寺社下 博
主査	吉野 健
主査	鯨井 敬浩
主任	松田 哲
主任	蔵持 俊輔
主事	山下 祐樹
発掘調査員	長谷川一郎
発掘調査員	原野 真祐

イ 整理・報告書作成

平成 24 年度

教育長	野原 晃
教育次長	鯨井 勝
社会教育課長	岩上 精純
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	根岸 敏彦
社会教育課副課長兼文化財保護係長	森田 安彦
副課長	出縄 康行
副課長	木村 稔
主幹（文化財保護係）	吉野 健
文化財保護係主査	松田 哲
主査	杉浦 朗子
主任	蔵持 俊輔
主事	山下 祐樹

2 遺跡の立地と環境

(1) 立地と環境

報告する前中西遺跡(1)は、荒川左岸に広がる妻沼低地の標高25m前後を測る自然堤防上に立地する。遺跡は、熊谷市東部、J R高崎線熊谷駅の北東約1.3km、荒川から北へ約2.5km、利根川から南へ約7.0kmの距離にある。また、遺跡の範囲は東西に長く広がり、今回報告する箇所はその中央部やや西寄りにあたる。周辺は、平成8年度から始められた上之土地区画整理事業により街路築造が進み、徐々に宅地化が進行している。

次に、本報告遺跡を中心に歴史的環境について少し概観する(第2図)。

旧石器時代から縄文時代の遺跡は、熊谷市東部では確認例が極めて少なく、隣接する諏訪木遺跡(2)において、縄文時代後期から晩期かけての集落が営まれている。調査により、後期末から晩期の遺物が検出され、遺構に伴って大量の遺物が出土する集落跡の存在が明らかとなっている。

弥生時代は、前期末から中期前半については隣接する藤之宮遺跡(3)で土器片が若干確認されているだけで、遺構は確認されていない。

中期中頃になると、集落跡の確認例が多くなる。本報告である前中西遺跡のほかに、東日本最古段階の環濠集落が確認された池上遺跡(4)、その墓域と考えられる最古段階の方形周溝墓が検出された行田市に跨る小敷田遺跡(5)等があり、本格的な集落の展開が認められる。中期後半には、本遺跡のほか諏訪木遺跡、北島遺跡(6)等でも集落が営まれ、墓域として本遺跡、諏訪木遺跡、藤之宮遺跡では方形周溝墓が検出されている。特に、本遺跡範囲中央西寄り南側では、多数の方形周溝墓が検出されており、本報告の方形周溝墓もこのエリアに属し、集落とともに後期初頭まで続くことが明らかとなっている。諏訪木遺跡では、住居跡と方形周溝墓が確認されている。北島遺跡では、大規模な集落が営まれるとともに墓域も形成されている。さらに、北島遺跡について特筆すべきは、水田へ導水する水路跡・堰跡という灌漑施設が水田跡とともに検出され、これは、当時本格的な水田経営が行われていたことを物語っており、その規模や内容から東日本屈指の遺跡として注目されている。

後期初頭以降については、本遺跡、藤之宮遺跡で土器片が若干検出されているだけで、遺構は確認されていない。また、中条条里遺跡(7)に含まれる東沢遺跡、行田市池守遺跡(8)では吉ヶ谷式土器が検出されている。

古墳時代になると、古墳は台地・自然堤防等の微高地に形成され、集落は台地のみならず低地の自然堤防上にも活発に営まれるようになり、次第に遺跡数も増加傾向にある。前期の遺跡は近年特に低地における確認例が増え、弥生時代から引き続いて本遺跡、諏訪木遺跡、藤之宮遺跡、北島遺跡では集落跡が確認され、特に北島遺跡では大規模な集落が営まれ、墓域も形成されている。また、中条条里遺跡に含まれる東沢遺跡とあわせて河川跡から鋤・鍬をはじめとした多量の木製農具を出土した遺跡として知られるほか、東海地方にその系譜が求められるパレス壺や高坏が多く見られ、近接する小敷田遺跡においても畿内や東海地方などの外来系の土器が多数出土している。木製品の出土例として注目されるのは、諏訪木遺跡で検出された河川跡から出土した大量の木製品の中に、板倉造建物の「樋部倉矧」と呼ばれる特殊加工が施された壁板材が検出されたことである。墓域としては、本遺跡に隣接する箱田氏館跡(9)で、最近、古墳時代前期初頭の確認長15mの前方後方形周溝墓の新知見があった。



第2図 前中西遺跡周辺遺跡分布図

中期は確認例が少ないが、集落が大規模に展開していくのは中期後半以降となるようである。前期から引き続いて本遺跡、藤之宮遺跡、中条遺跡等で集落跡が確認されている。本遺跡では、近年住居跡や溝跡等の検出例が増え、土師器高坏を主体とする土器が多数検出されている。

藤之宮遺跡では溝跡から水辺の祭祀に使用されたと考えられる高坏・甕を中心とする土器群がほぼ完形に近い状態でまとまって検出されている。

一方、古墳に目を転じてみると、数こそ少ないが、妻沼低地の福川の自然堤防上に市指定史跡・横塚山古墳（10）が存在する。これは、B種横刷毛の埴輪をもつ前方後円墳（後円部は一部欠損）で、築造年代が5世紀後半に比定される。また、中条古墳群（A）中の鎧塚古墳（11）や女塚1号墳（12）等の古墳が築造されている。鎧塚古墳は全長43.8mの帆立貝式前方後円墳で、須恵器高坏型器台等（県指定文化財）を伴う墓前祭祀跡2か所が確認されており、築造年代は5世紀末～6世紀初頭に比定される。鎧塚古墳と同時期の築造年代と比定される女塚1号墳も全長46mの帆立貝式前方後円墳で、二重周溝を持ち楯持武人埴輪3体ほか多数の人物埴輪が出土している。

後期になると遺跡数は爆発的な増加をみる。集落は台地ばかりでなく自然堤防上にもさらに積極的に進出を図っていったようであり、奈良・平安時代へと継続して展開する大規模なものも多く見受けられる。一方、古墳を見てみると群を形成して築造されているのがわかる。妻沼低地では、本遺跡の近隣に上之古墳群（B）が存在するほか、中条古墳群、上江袋古墳群（C）等が分布する。また、荒川左岸に広がる新荒川扇状地には広瀬古墳群（地図未掲載）、石原古墳群（D）、肥塚古墳群（E）等が分布する。これらは概ね6世紀から7世紀末ないしは8世紀初頭にかけて形成された古墳群である。特筆すべき古墳を挙げると、中条古墳群の大塚古墳（13）は大型の胴張型横穴式石室をもち、側壁に角閃石安山岩、奥壁・天井石に緑泥片岩を使用しており、7世紀前半に比定される。広瀬古墳群中の宮塚古墳（地図未掲載）は、上円下方墳という特異な墳形を今に残し熊谷市唯一の国指定史跡として知られる。肥塚古墳群では、川原石乱石積と角閃石安山岩切組積の2種類の胴張型横穴式石室をもつ古墳が確認されており、前者は荒川水系の石材、後者は利根川水系の石材と判断され非常に興味深い様相を呈している。

奈良・平安時代になると、この地域も律令制の体制に組み込まれていき、市内には幡羅郡、男衾郡、大里郡、埼玉郡の4郡が存在していたとされ、本遺跡周辺は埼玉郡域ないしは大里郡域に含まれると推定される。前述のとおり、古墳時代後期に形成された集落の多くは、増減はするものの奈良・平安時代へと継続されていき、また規模の大きいものも多く見られる。この頃の中心的集落遺跡は北島遺跡に見られ、300軒以上もの住居跡が検出されている大規模集落である。それは9世紀を中心に7世紀から12世紀さらには中世にまで及ぶ集落であり、大規模な掘立柱建物跡・道路状遺構・河川跡等様々な遺構

第2図 掲載遺跡一覧表

1 前中西遺跡	2 諏訪木遺跡	3 藤之宮遺跡	4 池上遺跡	5 小敷田遺跡
6 北島遺跡	7 中条条里遺跡	8 池守遺跡	9 箱田氏館跡	10 横塚山古墳
11 鎧塚古墳	12 女塚1号墳	13 大塚古墳	14 宮町遺跡	15 中条氏館跡
16 成田氏館跡	17 熊谷氏館跡	18 市田氏館跡	19 久下氏館跡	
A 中条古墳群	B 上之古墳群	C 上江袋古墳群	D 石原古墳群	E 肥塚古墳群

と遺物が検出されている。また、同遺跡では9世紀前半には二重の溝で区画され、区画内に大型の掘立柱建物跡と少数の竪穴住居跡で構成される地区が登場する。この区画施設は、10世紀前半には位置を変え、11世紀前半には消滅する。つまり、北島遺跡は地域の中核となる典型的律令制集落であると考えられる。さらに、7世紀末から8世紀初頭頃の出挙木簡を出土した小敷田遺跡、整然と配された9世紀代の掘立柱建物跡群が検出された池上遺跡も存在する。また、諏訪木遺跡では、古墳時代後期から平安時代にかけての祭祀が行われた河川跡が検出され、玉類、被熱した銅鏡、さらには斎串・人形等の木製祭祀具を使った水辺の祭祀が行われていたことが確認されたほか、平安時代の溝に区画された集落跡や四面庇の大型掘立柱建物跡を含む掘立柱建物跡群、多数の灰釉陶器や緑釉陶器が検出されるなど、官衙の様相が看取できる遺跡が集中する。そして、近年の発掘調査により明らかとなった妻沼低地に立地する宮町遺跡（14）においては、火災を受けた大型の四面庇掘立柱建物跡が検出され、その片付けに使われたと考えられる土坑から多量の緑釉陶器及び灰釉陶器が出土したことから、何らかの官衙的要素がある地区があったと考えられている。なお、この遺跡の発見は、熊谷市中心市街地下においても、重要な遺跡が埋蔵されている可能性を示唆するものとして注目される。

集落以外の遺跡では、条里制に関わる痕跡をとどめている条里遺跡が北島遺跡や池上遺跡の東に広がり、幡羅郡に属する中条条里遺跡、埼玉郡に属する行田市小敷田条里遺跡、南河原条里遺跡（いずれも地図未掲載）、大里郡に属する大里条里遺跡（地図未掲載）などが所在する。

平安時代末から中世になると、武蔵七党やその他の在地武士団の館跡が点在するようになるが、実態については不明なものが多い。本遺跡の近辺の妻沼低地には中条氏館跡（15）、成田氏館跡（16）、熊谷氏館跡（17）、市田氏館跡（18）、久下氏館跡（19）等がある。本遺跡に近い成田氏館跡は、平安時代末の成田助高から親泰が15世紀後半に行田市忍城を構えるまでの居館とされ、隣接する諏訪木遺跡では近年の調査で成田氏関連と考えられる遺構や遺物がいくつか検出されている。それは、館跡から南へ約300mの所で、中世の居館と考えられる変形方形区画が検出されており、『新編武蔵風土記稿』の成田氏一族がこの地に居を構えたという記述と合わせて成田氏に関連する館跡との見解が示されている。また、井戸枠に器高70cmを超える13世紀中頃と推定される常滑窯産の大甕を使用した井戸跡が検出されている。

同遺跡の古墳時代後期の円墳の周溝埋没後に掘られた土坑からは、5,000枚を超える大量の埋蔵銭が検出され、それは15世紀前半を上限とし、成田氏に関連するものであると推定されている。また、埋蔵銭が検出されたすぐ西側では館跡の可能性が考えられる区画が検出され、区画溝と考えられるL字状の溝跡からは青磁・白磁・かわらけが出土し、区画内では木枠が残存する井戸跡1基を検出している。さらに、東側の隣接地においては池状遺構が検出されており、かわらけ・板碑が一括して廃棄されたような状態で出土している。この区画もまた、『新編武蔵風土記稿』に記述がある成田氏の一族である秋葉七郎の館の所在との関連が推定されている。

最後に、近世については、中世と同様に、隣接する諏訪木遺跡等市内において調査例が見られるものの、不明な点が多いといった実態である。

(2) 調査の方法

調査の方法は、現地での基準点測量については道路境界杭・民家建物を基準点、見返点として任意の測量を行い、建築物予定地全体を網羅できるように一辺5 mのグリッドを設定して行った。そして、整理・報告書作成の際に、従前から上之土地区画整理事業地内発掘調査で用いている国家方眼座標（国土標準平面直角座標第Ⅸ系）に合わせた。

実測作業にあたっては、交点を基準に水糸で1 m間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による方法で行った。



第3図 前中西遺跡調査地点位置図

3 検出された遺構と遺物

調査地点は、前述のとおり遺跡範囲の中央部やや西寄りの場所で、平成8・9年度に上之土地区画整理事業の街路築造に伴い調査を行った箇所東にあたる。この調査により、本報告調査地点西隣には弥生時代の方形周溝墓3基、竪穴建物跡1棟、土器棺墓1基等が確認されている（第4・6調査区：吉野2002）。本報告の調査地点では、方形周溝墓が東に広がり分布することが確認され、古墳時代前期から中期に該当すると考えられる竪穴建物跡が検出された。

検出された遺構・遺物は、遺構については、弥生時代中期の方形周溝墓1基（周溝は南及び西溝のみ）、古墳時代前期から中期と推定される竪穴建物跡1軒、時期を特定するには詳細な情報が不足する掘立柱建物跡4棟、溝跡3条、ピット34基（概ね弥生時代～古墳時代後期の遺物出土）であった。遺物については、弥生土器壺・甕、土師器壺・坏・甕、須恵器蓋・坏・甕、石器等が出土し、その量はコンテナにして2箱であった。

特記事項としては、調査区の約2/3を占める部分に幾条もの噴砂が確認され、その走向方位は北西から南東へ向かうものであった。また、いずれの遺構も噴砂によりほぼ切られた状態で確認されている。噴砂の時期の特定は困難であるが、土層断面観察ができたところで、少なくとも第1号溝跡よりも古く、第2号溝跡よりも新しい。なお、第1号溝跡と第2号溝跡の新旧関係は、第1号溝跡が第2号溝跡よりも新しい。

(1) 竪穴建物跡

第1号竪穴建物跡（第5図）

調査区のほぼ中央部に位置する。B-2・3グリッドを中心にあり、C-2グリッドに及ぶ。第1号方形周溝墓、第2・3号掘立柱建物跡、第5～10号ピットと重複関係にあり、本遺構が第2・3号掘立柱建物跡、第5～10号ピットに切られ、第1号方形周溝墓を切っている。ただし、第2号掘立柱建物跡とは直接切り合いの関係にない。

規模は、長軸3.60～4.20m、短軸4.00～4.45mを測ると推定され、平面プランは、壁溝と考えられる溝跡からやや菱形の方形を呈する。主軸方位は、主軸と考えられる短軸方向でN-38°-Wを示す。

埋土は、表土除去の際に削平が過ぎたのか、ほとんど確認されず床面のみであった。

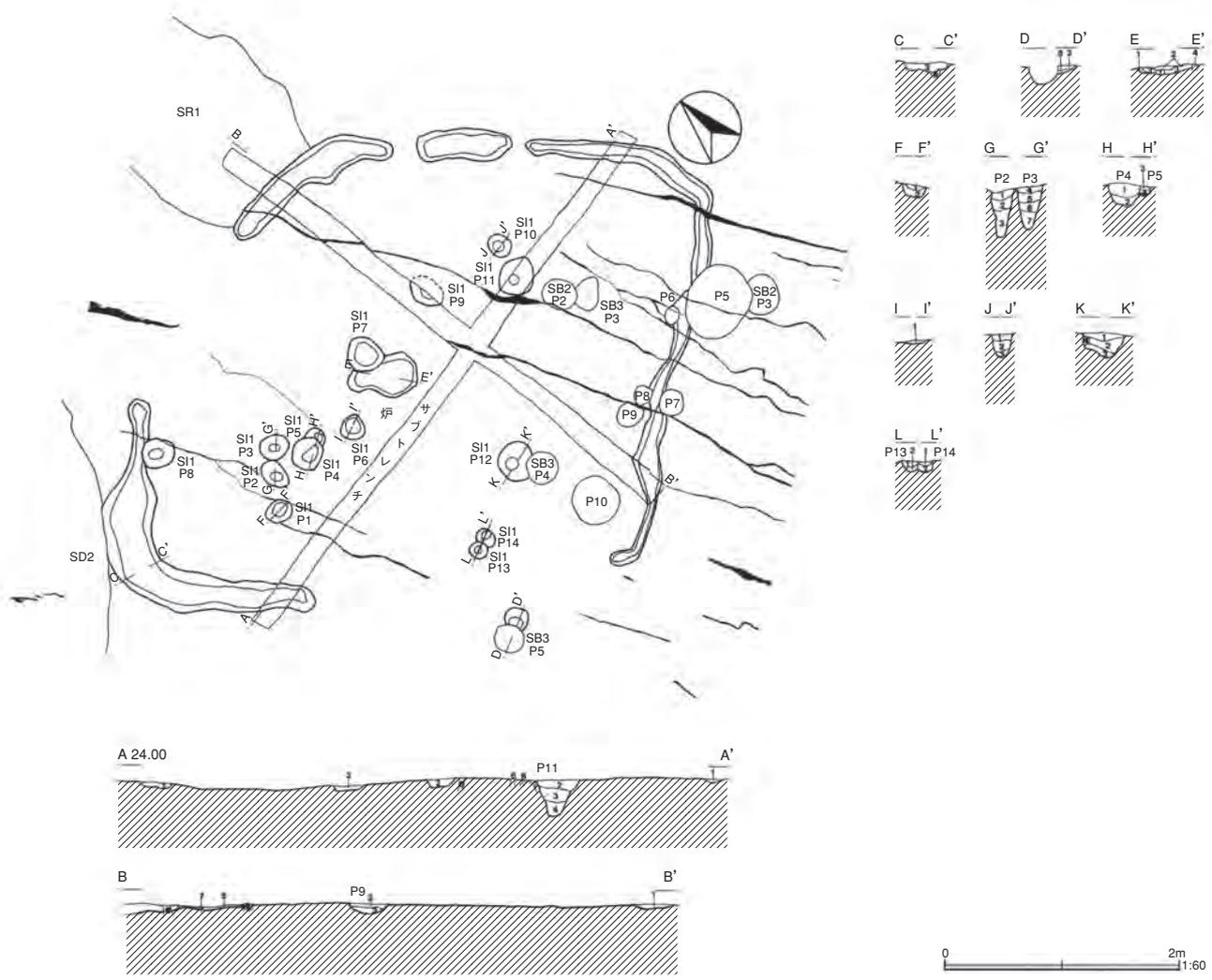
床面は、ほぼ平坦である。

壁溝は、長軸の北壁中央部及び短軸の西壁南西部を除いて、ほぼ途切れなく確認された。なお、東壁の壁溝は、一部途切れ途切れであった。

柱穴は、柱穴と考えられるピットが3基（P4、P11、P12）検出された。また、柱穴の可能性のあるピットがさらに2基（P2、P3）検出されている。その他のピットは9基検出されたが、本遺構に伴うものかは不明である。

炉は、中央部やや北寄りの、柱穴（想定柱穴も含む）を結ぶ線のやや内側に確認された。平面プランは長軸0.59m、短軸0.36mを測る瓢箪形状を呈し、深さは0.6cmと浅かった。覆土には焼土ブロックが混じり、堆積土の灰白色シルト質土は被熱によりにぶい橙色を帯びていた。

出土遺物は、弥生土器片が数点検出されたが、図示できなかった。全て混入したものと考えられる。



土層説明 (A-A' ~D-D')

- | | |
|------------|----------------------------------|
| 1 灰色粘質土 | 灰白色シルト質土粒子少量、酸化鉄わずか |
| 2 灰色粘質土 | 灰白色シルト質土粒子わずか、炭化物粒わずか |
| 3 青灰色粘質土 | 灰白色シルト質土ブロック・粒子少量、炭化物粒わずか、酸化鉄若干含 |
| 4 灰色粘質土 | 灰白色シルト質土混じり、灰色粘質土ブロック少量含 |
| 5 灰白色シルト質土 | 灰色粘質土粒子少量含 |
| 6 灰色粘質土 | |
| 7 噴砂 | |

土層説明 (E-E')

炉址

- 1 灰色粘質土ブロック
- 2 焼土ブロック及び被熱層
- 3 灰白色シルト質土 被熱によりにぶい橙色帯びる
- 4 灰色粘質土

土層説明 (F-F')

P 1

- | | |
|------------|----------------------------------|
| 1 灰色粘質土 | 灰白色シルト質土微粒子多量含 |
| 2 灰白色シルト質土 | 灰色粘質土ブロック・粒子多量含 |
| 3 青灰色粘質土 | 灰白色シルト質土ブロック・粒子少量、炭化物粒わずか、酸化鉄若干含 |

土層説明 (G-G')

P 2・P 3

- | | |
|------------|----------------------------------|
| 1 灰色粘質土 | 灰白色シルト質土微粒子多量含 |
| 2 青灰色粘質土 | 灰白色シルト質土ブロック・粒子少量、炭化物粒わずか、酸化鉄若干含 |
| 3 灰白色シルト質土 | 灰色粘質土ブロック・粒子多量含 |
| 4 灰色粘質土 | 灰白色シルト質土微粒子多量含 |
| 5 青灰色粘質土 | 灰白色シルト質土ブロック・粒子少量、炭化物粒わずか、酸化鉄若干含 |
| 6 青灰色粘質土 | 灰白色シルト質土粒子若干含 |
| 7 灰色粘質土 | やや粘性強 |

土層説明 (H-H')

P 4・P 5

- | | |
|----------|----------------------------------|
| 1 灰色粘質土 | 灰白色シルト質土微粒子多量含 |
| 2 青灰色粘質土 | 灰白色シルト質土ブロック・粒子少量、炭化物粒わずか、酸化鉄若干含 |
| 3 灰色粘質土 | 灰白色シルト質土粒子若干、酸化鉄若干含 |
| 4 灰色粘質土 | 灰白色シルト質土粒子わずか |

土層説明 (I-I')

P 6

- | | |
|---------|---------------------|
| 1 灰色粘質土 | 灰白色シルト質土粒子若干、酸化鉄若干含 |
|---------|---------------------|

土層説明 (J-J')

P 10

- | | |
|---------|----------------------|
| 1 灰色粘質土 | 灰白色シルト質土粒子わずか、酸化鉄わずか |
| 2 灰色粘質土 | 酸化鉄若干含 |
| 3 灰色粘質土 | やや粘性強 |

土層説明 (K-K')

P 12

- | | |
|----------------|----------------------------------|
| 1 灰色粘質土 | 灰白色シルト質土粒子わずか、炭化物粒わずか |
| 2 青灰色粘質土 | 灰白色シルト質土ブロック・粒子少量、炭化物粒わずか、酸化鉄若干含 |
| 3 灰色粘質土 | 灰白色シルト質土粒子わずか |
| 4 灰白色シルト質土ブロック | |

土層説明 (L-L')

P 13・P 14

- | | |
|------------|-----------------------|
| 1 灰色粘質土 | 灰白色シルト質土粒子わずか、炭化物粒わずか |
| 2 灰白色シルト質土 | 灰色粘質土粒子多量含 |
| 3 灰色粘質土 | 灰白色シルト質土粒子わずか、炭化物粒わずか |
| 4 灰色粘質土 | 灰白色シルト質土ブロック多量含 |

第5図 前中西遺跡第1号竪穴建物跡

時期を特定するのは困難であるが、他の遺構との重複関係や炉の存在から、おおむね古墳時代前期から中期であると考えられる。

(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第6図）

調査区の北西隅に位置する。C-2・2グリッド内にある。第3号溝跡、第23～29号ピットと重複関係にあるが、いずれの遺構とも直接切り合いの関係にないため、新旧関係は不明である。

北部及び西部が調査区域外にあると推定され、柱穴が4基検出されているだけである。

建物は南北に長い、2間以上×3間以上の側柱式掘立柱建物跡と推定され、規模は、桁行4.50m以上、梁行2.40m以上を測る。柱間は、桁行が北から1.75m-1.70m、梁行が1.60mを測る。主軸方位は、N-2°-Wを示す。

柱穴は円形ないしは楕円形の掘方で、長軸0.30～0.41m、短軸0.29～0.37mである。掘方の深さは、確認面から、P1が11cm、P2が10cm、P3が8cm、P4が最も深く24cmを測る。

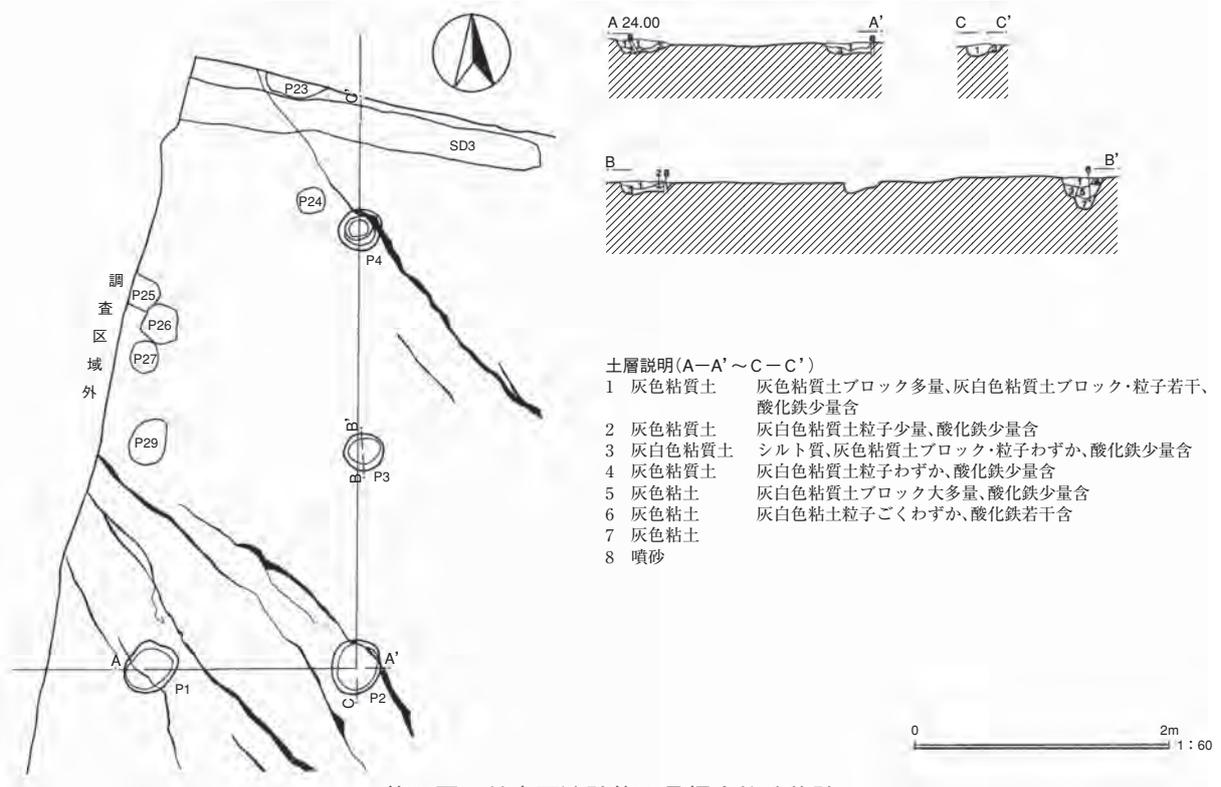
柱は、確認できなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、不明である。なお、噴砂がP1、P2、P4の覆土を貫いている。

第2号掘立柱建物跡（第7・8図）

調査区の東部に位置する。A・B-2・3グリッド内にある。第1号竪穴建物跡、第1号方形周溝墓、第3・4号掘立柱建物跡、第3・5号ピット等と重複関係にある。第4号掘立柱建物跡、第5号ピットに切られ、第1号方形周溝墓、第3号掘立柱建物跡、第3号ピットを切っている。第1号竪穴建物跡と



第6図 前中西遺跡第1号掘立柱建物跡

は直接切り合いの関係にないが、第1号竪穴建物跡の推定時期と第5号ピットとの切り合い関係から、第1号竪穴建物跡よりも新しいと推定される。

北部及び東部が調査区域外にあると推定され、柱穴が5基検出されているだけである。

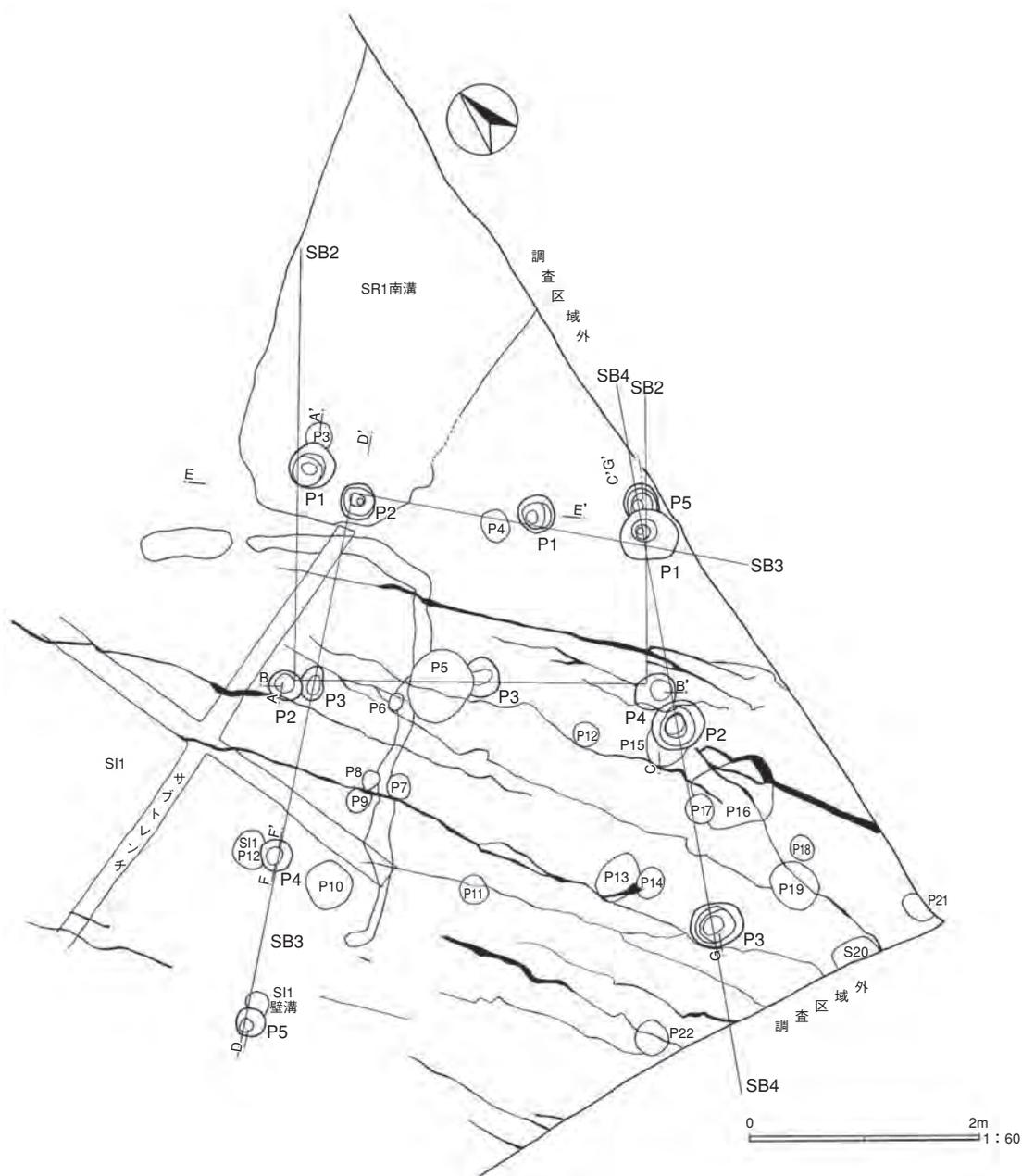
建物は、2間×2間以上の側柱式掘立柱建物跡と推定され、規模は、桁行2.3m以上、梁行3.0mを測る。柱間は、桁行が1.60～1.80m、梁行が1.60mを測る。主軸方位は、N-43°-Eを示す。

柱穴は円形ないしは楕円形の掘方で、長軸0.29～0.40m、短軸0.24～0.36mである。掘方の深さは、確認面から、P1が44cm、P2が14cm、P3が11cm、P4が20cm、P5が34cmを測る。

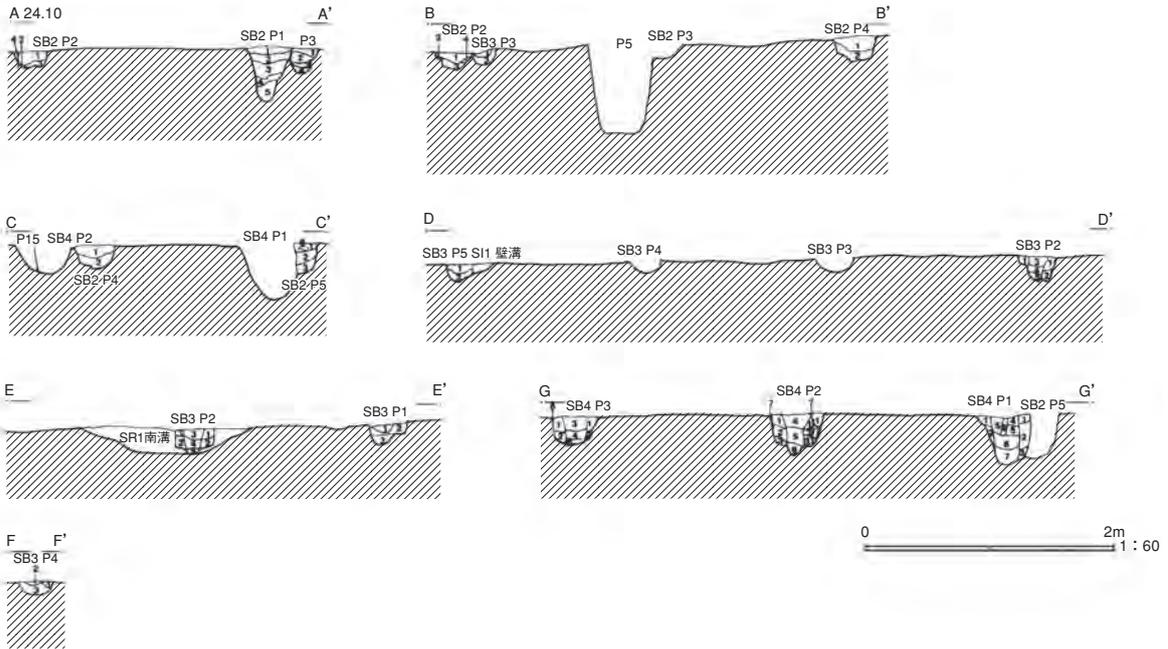
柱は、確認できなかった。

出土遺物は、わずかであるが土師器坏、弥生土器等が検出できたが、図示できなかった。

時期は、P5から出土した土師器坏と、第1号竪穴建物跡との新旧関係から、古墳時代後期としてお



第7図 前中西遺跡第2～4号掘立柱建物跡



土層説明(A-A'～C-C')

SB 2 P 1

- | | | |
|---|--------|-----------------------|
| 1 | 灰白色粘質土 | 灰色粘質土ブロック多量、酸化鉄少量含 |
| 2 | 灰色粘質土 | 灰色粘質土ブロック・粒子少量、酸化鉄若干含 |
| 3 | 灰色粘質土 | 灰色粘質土ブロック多量、酸化鉄若干含 |
| 4 | 灰色粘質土 | 灰白色粘質土粒子わずか含 |
| 5 | 灰色粘土 | 粘性強 |

SB 2 P 2

- | | | |
|---|-------|-----------------------|
| 1 | 灰色粘質土 | 灰色粘質土ブロック・粒子少量、酸化鉄若干含 |
| 2 | 灰色粘質土 | |
| 3 | 灰色粘質土 | 灰色粘質土ブロック多量、酸化鉄若干含 |
| 4 | 噴砂 | |

SB 3 P 3

- | | | |
|---|-------|-----------------------------|
| 1 | 灰色粘質土 | 酸化鉄若干含 |
| 2 | 灰色粘質土 | 明オリブ灰色シルト質土ブロック・粒子多量、酸化鉄若干含 |

SB 2 P 4

- | | | |
|---|-------|-----------------------|
| 1 | 灰色粘質土 | 灰色粘質土ブロック・粒子少量、酸化鉄若干含 |
| 2 | 灰色粘質土 | 灰色粘質土ブロック多量、酸化鉄若干含 |

SB 2 P 5

- | | | |
|---|-------|-----------------------|
| 1 | 灰色粘質土 | 酸化鉄わずか、礫含 |
| 2 | 灰色粘質土 | 灰色粘質土ブロック・粒子少量、酸化鉄若干含 |
| 3 | 灰色粘質土 | 灰色粘質土ブロック多量、酸化鉄若干含 |

P 3

- | | | |
|---|--------|----------------|
| 1 | 灰色粘質土 | 酸化鉄若干含 |
| 2 | 灰白色粘質土 | 炭化物粒わずか、酸化鉄若干含 |
| 3 | 灰白色粘質土 | 炭化物粒わずか、酸化鉄多量含 |
| 4 | 灰色粘質土 | |

土層説明(D-D'～F-F')

SB 3 P 1

- | | | |
|---|-------|------------------------|
| 1 | 灰色粘質土 | |
| 2 | 灰色粘質土 | 明オリブ灰色シルト質土ブロック・粒子わずか含 |
| 3 | 灰色粘質土 | |

SB 3 P 2

- | | | |
|---|--------|---------------------------|
| 1 | 灰色粘質土 | 明オリブ灰色シルト質土粒子わずか、酸化鉄若干含 |
| 2 | 灰色粘質土 | 明オリブ灰色シルト質土粒子わずか、炭化物粒わずか含 |
| 3 | 灰色粘質土 | |
| 4 | 灰色粘質土 | |
| 5 | 灰白色粘質土 | 明オリブ灰色シルト質土粒子わずか含 |

SB 3 P 4

- | | | |
|---|-------------|------------------|
| 1 | 灰色粘質土 | 酸化鉄若干含 |
| 2 | 灰色粘質土 | 酸化鉄若干含 |
| 3 | 明オリブ灰色シルト質土 | 灰色粘質土粒子多量、酸化鉄多量含 |

SB 3 P 5

- | | | |
|---|-------|-----------------------------|
| 1 | 灰色粘質土 | 酸化鉄若干含 |
| 2 | 灰色粘質土 | 明オリブ灰色シルト質土ブロック・粒子多量、酸化鉄若干含 |

土層説明(G-G')

SB 4 P 1

- | | | |
|---|-------------|-------------------------------|
| 1 | 灰色粘質土 | 灰白色粘質土粒子多量、酸化鉄少量含 |
| 2 | 明オリブ灰色シルト質土 | 明オリブ灰色シルト質土粒子少量、酸化鉄若干含 |
| 3 | 灰色粘質土 | 明オリブ灰色シルト質土粒子わずか含 |
| 4 | 灰色粘質土 | 灰白色粘質土粒子わずか、酸化鉄わずか含 |
| 5 | 灰色粘質土 | 明オリブ灰色シルト質土ブロック若干、酸化鉄わずか含 |
| 6 | 灰色粘質土 | 明オリブ灰色シルト質土粒子ごくわずか、炭化物粒ごくわずか含 |
| 7 | 暗灰色粘土 | 明オリブ灰色シルト質土ブロック少量、酸化鉄わずか含 |
| 8 | 攪乱 | |

SB 4 P 2

- | | | |
|---|--------|---------------------------------|
| 1 | 灰色粘質土 | 灰白色シルト質土ブロック非常に多く、焼土粒わずか、酸化鉄多量含 |
| 2 | 灰色粘質土 | 灰白色シルト質土ブロック若干、酸化鉄多量含 |
| 3 | 灰白色粘質土 | 灰色粘質土粒子ごくわずか、酸化鉄少量含 |
| 4 | 灰色粘質土 | 焼土粒わずか含 |
| 5 | 灰色粘質土 | 灰白色シルト質土ブロック多量、酸化鉄少量含 |
| 6 | 暗灰色粘土 | 明オリブ灰色シルト質土ブロック少量、酸化鉄わずか含 |
| 7 | 噴砂 | |

SB 4 P 3

- | | | |
|---|-------|---------------------------------|
| 1 | 灰色粘質土 | 灰白色シルト質土ブロック非常に多く、焼土粒わずか、酸化鉄多量含 |
| 2 | 灰色粘質土 | 灰白色シルト質土ブロック若干、酸化鉄多量含 |
| 3 | 灰色粘質土 | 灰白色粘質土粒子わずか、酸化鉄わずか含 |
| 4 | 灰色粘質土 | 明オリブ灰色シルト質土粒子ごくわずか、炭化物粒ごくわずか含 |
| 5 | 暗灰色粘土 | 明オリブ灰色シルト質土ブロック少量、酸化鉄わずか含 |
| 6 | 噴砂 | |

第8図 前中西遺跡第2～4号掘立柱建物跡土層断面図

きたい。なお、噴砂がP2の埋土を貫いている。

第3号掘立柱建物跡 (第7・8図)

調査区の南東部に位置する。A・B-3グリッドを中心にあり、わずかにA-2グリッドに及ぶ。第1号竪穴建物跡、第1号方形周溝墓、第2・4号掘立柱建物跡等と重複関係にある。第2号掘立柱建物跡に切られ、第1号竪穴建物跡、第1号方形周溝墓を切っている。第4号掘立柱建物跡や多数のピットと

は直接切り合いの関係にないが、第4号掘立柱建物跡、第2号掘立柱建物跡、第3号掘立柱建物跡の順に古いもの考えられる。

南部及び東部が調査区域外にあると推定され、柱穴が5基検出されているだけである。

建物は、2間以上×4間以上の側柱式掘立柱建物跡と推定され、規模は、桁行4.7m以上、梁行3.0m以上を測る。柱間は、桁行が北から1.70m-1.50m-1.50m、梁行が1.60mを測る。主軸方位は、N-54°-Eを示す。

柱穴は円形ないしは楕円形の掘方で、長軸0.24～0.32m、短軸0.20～0.31mである。掘方の深さは、確認面から、P1が16cm、P2が20cm、P3が13cm、P4が10cm、P5が14cmを測る。

柱は確認できなかったが、柱痕跡を残すものがP2で確認された。その柱痕跡から、柱の直径は15cmと推定される。

出土遺物は、検出できなかった。

時期の詳細は不明であるが、他の重複する掘立柱建物跡との新旧関係は、前述のとおり第4号掘立柱建物跡、第2号掘立柱建物跡、第3号掘立柱建物跡の順に古いもの考えられ、第1号竪穴建物跡との新旧関係も加味して、古墳時代後期でも第2号掘立柱建物跡より古い時期としておきたい。

第4号掘立柱建物跡（第7・8図）

調査区の南東隅に位置する。A・B-3グリッド内にある。第2・3号掘立柱建物跡、第15号ピット等と重複関係にあり、第2・3号掘立柱建物跡を切っている。また、数基のピットと直接切り合いの関係にないが重複関係にあると考えられる。

南部及び東部の大部分が調査区域外にあると推定され、柱穴が3基検出されているだけである。建物の全体像は不明である。規模は、桁行と考えられる柱筋が5.0m以上であるが、梁行は不明である。柱間は、桁行が北から1.70m-1.75mを測る。主軸方位は、N-33°-Eを示すと推定される。

柱穴は楕円形の掘方で、長軸0.44～0.48m、短軸0.38～0.43mである。掘方の深さは、確認面から、P1が40cm、P2が32cm、P3が23cmを測る。

柱は確認できなかったが、柱痕跡を残すものがP2、P3で確認された。その柱痕跡から、柱の直径は13～17cmと推定される。

出土遺物は、わずかであるが土師器甕等の土師器片が検出できたが、図示できなかった。

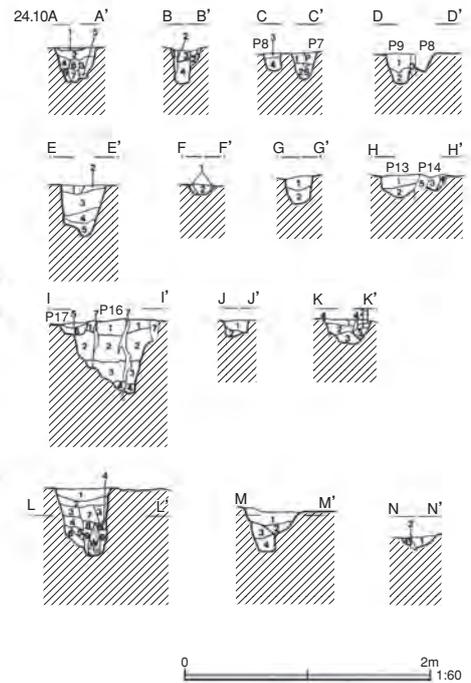
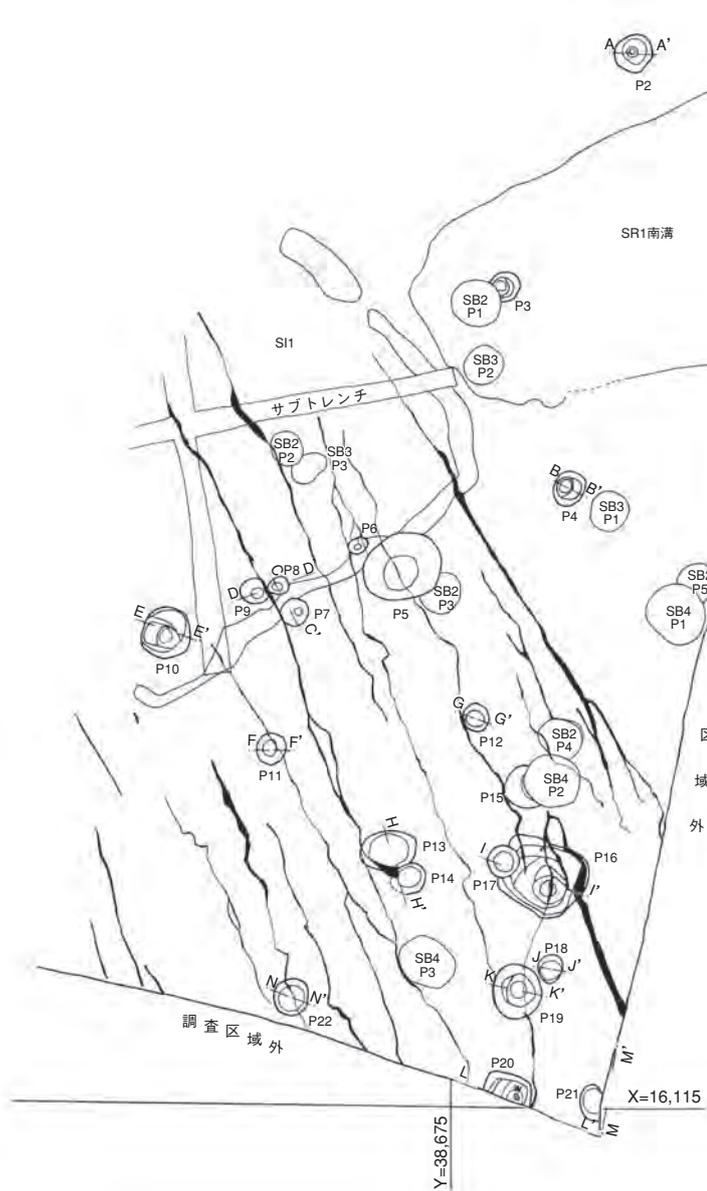
時期の詳細は不明であるが、前述のとおり第4号掘立柱建物跡、第2号掘立柱建物跡、第3号掘立柱建物跡の順に古いもの考えられ、第2号掘立柱建物跡より新しい時期と考えられるので、古墳時代後期以降であると推定される。

(3) ピット

ピットは、総数にして34基検出されたが、その位置は、おおむね第1号掘立柱建物跡が所在する箇所及び第2・3・4号掘立柱建物跡が所在する箇所の2か所に集中している。

プランは概ね楕円形を呈し、規模は径20～40cmが主体をなす。出土遺物は全てのピットからは検出できなかったが、弥生時代中期から古墳時代後期までの土器片が僅かに検出できた。

以下に、一覧表を掲載する（第9～12・14図、第1・2表）。



- 土層説明(A-A')**
P 2
1 灰色粘質土 灰白色シルト質土ブロック・粒子多量、酸化鉄若干含
2 灰色粘質土 酸化鉄少量含
3 暗青灰色粘質土 灰白色シルト質土ブロック少量、酸化鉄少量含
4 灰白色シルト質土 暗青灰色粘質土ブロック少量、酸化鉄少量含
5 灰色粘土 酸化鉄少量含
6 灰色粘質土 灰白色粘質土粒子若干、酸化鉄多量含
7 灰色粘質土 灰白色粘質土粒子少量、酸化鉄多量含
- 土層説明(B-B')**
P 4
1 灰色粘質土 酸化鉄わずか含
2 灰色粘質土 灰色粘質土ブロック・粒子少量、酸化鉄若干含
3 青灰色粘質土 酸化鉄多量含
4 暗灰色粘質土 酸化鉄わずか含
- 土層説明(C-C')**
P 7・P 8
1 灰色粘質土 灰白色シルト質土ブロック・粒子多量、酸化鉄少量、遺物包含
2 灰色粘質土 礫含
3 灰色粘質土 灰白色シルト質土粒子多量、酸化鉄若干含
4 灰色粘質土 灰白色シルト質土粒子少量、酸化鉄若干含
- 土層説明(D-D')**
P 9
1 灰色粘質土 灰白色シルト質土粒子少量、酸化鉄少量、マンガング粒わずか含
2 灰色粘質土 粘性強、灰白色シルト質土粒子若干含
3 噴砂
- 土層説明(E-E')**
P 10
1 灰色粘質土 灰白色シルト質土粒子少量、酸化鉄若干含
2 灰色粘質土 灰白色シルト質土ブロック・粒子多量、酸化鉄若干含
3 灰色粘質土 灰白色シルト質土ブロック・粒子多量、灰色粘質土粒子若干、酸化鉄少量含

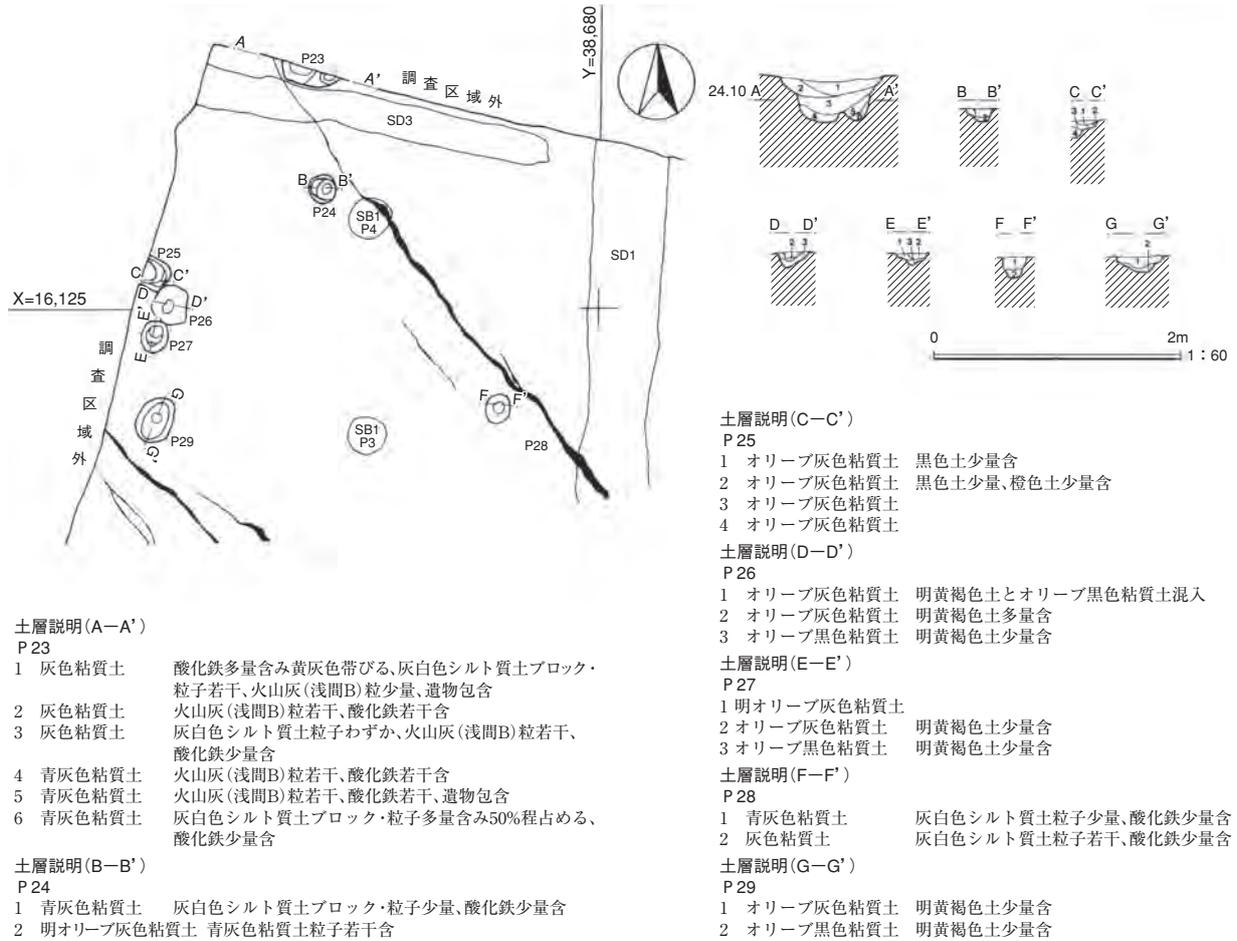
- 土層説明(F-F')**
P 11
1 青灰色粘質土
2 暗青灰色粘質土
- 土層説明(G-G')**
P 12
1 青灰色粘質土
2 暗青灰色粘質土
- 土層説明(H-H')**
P 13・P 14
1 灰色粘質土 灰白色シルト質土粒子少量、酸化鉄若干含
2 灰色粘質土 灰白色シルト質土ブロック大・粒子少量、酸化鉄若干含
3 暗青灰色粘質土 灰白色シルト質土ブロック大・粒子多量含み80%程占める
4 灰色粘質土 灰白色シルト質土粒子少量、酸化鉄若干含
5 噴砂
- 土層説明(I-I')**
P 16・P 17
1 黒褐色粘質土 灰白色シルト質土ブロックわずか、焼土粒・炭化物粒わずか、酸化鉄若干含
2 黒色粘質土 灰白色シルト質土粒子わずか、焼土粒・炭化物粒わずか、酸化鉄若干含
3 黒色粘質土 粘性強、灰白色シルト質土粒子少量、酸化鉄わずか含
4 灰色粘土 粘性強、酸化鉄若干含
5 灰色粘質土 灰白色シルト質土粒子若干、酸化鉄少量含
6 灰色粘質土 灰白色シルト質土粒子わずか、酸化鉄わずか含
8 噴砂
- 土層説明(J-J')**
P 18
1 灰色粘質土 灰白色シルト質土粒子わずか含
2 灰色粘質土 灰白色シルト質土粒子わずか含
- 土層説明(K-K')**
P 19
1 黄灰色粘質土 灰白色シルト質土粒子わずか、酸化鉄若干含
2 灰色粘質土 灰白色シルト質土ブロック・粒子多量、酸化鉄若干含
3 黒色粘質土 灰白色シルト質土粒子少量、酸化鉄若干含
4 噴砂
- 土層説明(L-L')**
P 20
1 青灰色粘質土 灰白色粘質土ブロック若干、酸化鉄若干含
2 灰色粘質土 酸化鉄若干含
3 灰色粘質土 粘性比較的強、酸化鉄わずか含
4 灰色粘質土 酸化鉄わずか含
5 灰色粘質土 灰白色シルト質土粒子わずか含
6 灰色粘質土 灰白色シルト質土ブロック少量、酸化鉄わずか含
7 灰色粘質土 酸化鉄若干含
8 灰色粘土 灰白色シルト質土粒子わずか含
9 オリブ黒色粘土
10 噴砂
- 土層説明(M-M')**
P 21
1 灰色粘質土 灰白色シルト質土粒子若干、酸化鉄若干含
2 青灰色粘質土
3 暗青灰色粘質土 灰白色粘質土粒子若干
4 暗灰色粘質土 灰白色シルト質土粒子ごくわずか含
- 土層説明(N-N')**
P 22
1 灰色粘質土 灰白色粘質土粒子わずか、酸化鉄わずか含
2 噴砂

明青灰色土混入、明黄褐色土少量含

灰白色シルト質土粒子少量、酸化鉄若干含
灰白色シルト質土ブロック大・粒子少量、酸化鉄若干含
灰白色シルト質土ブロック大・粒子多量含み80%程占める
灰白色シルト質土粒子少量、酸化鉄若干含

灰白色シルト質土ブロックわずか、焼土粒・炭化物粒わずか、酸化鉄若干含
灰白色シルト質土粒子わずか、焼土粒・炭化物粒わずか、酸化鉄若干含
粘性強、灰白色シルト質土粒子少量、酸化鉄わずか含
粘性強、酸化鉄若干含
灰白色シルト質土粒子若干、酸化鉄少量含
灰白色シルト質土粒子わずか、酸化鉄わずか含

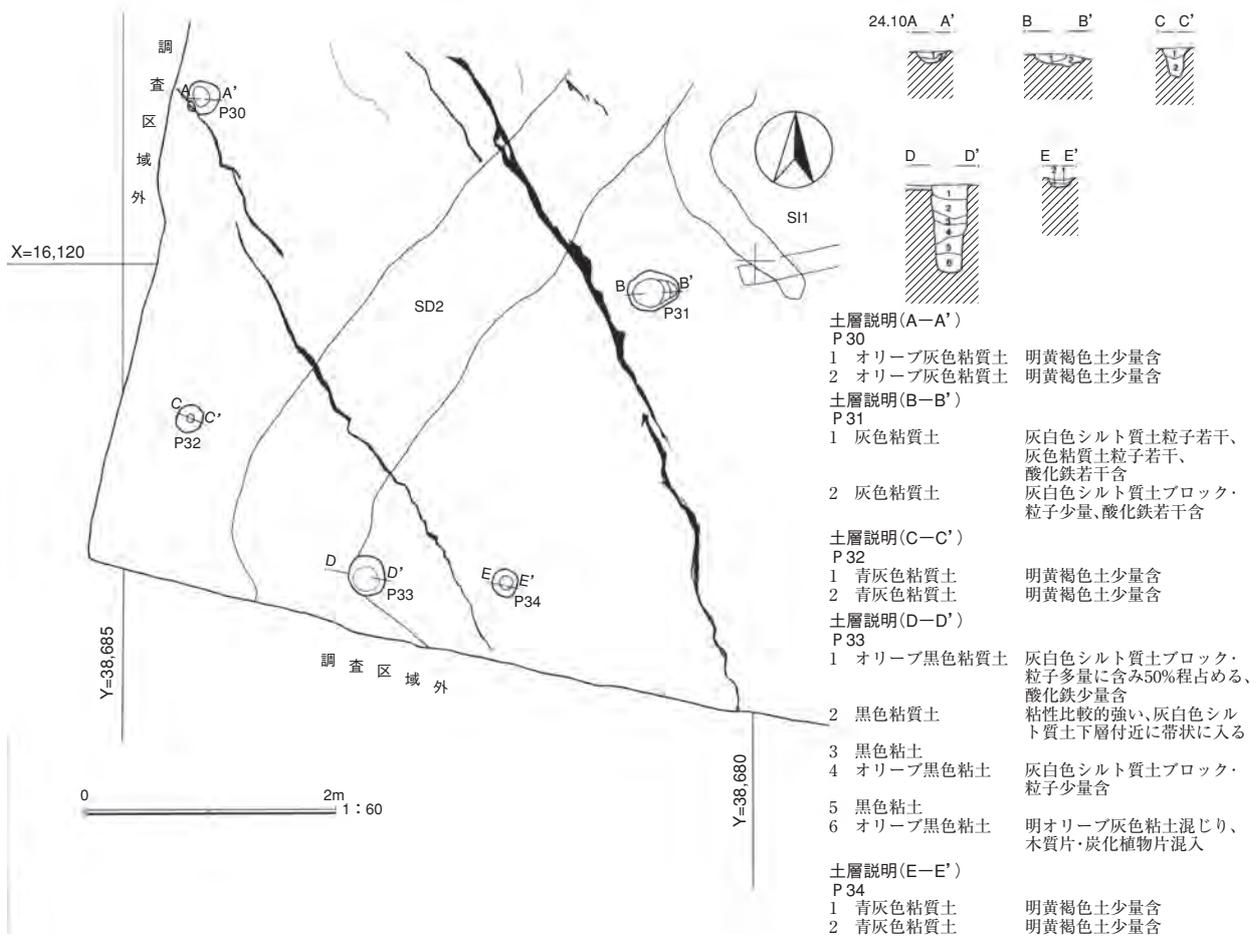
第9図 前中西遺跡第2~22号ピット



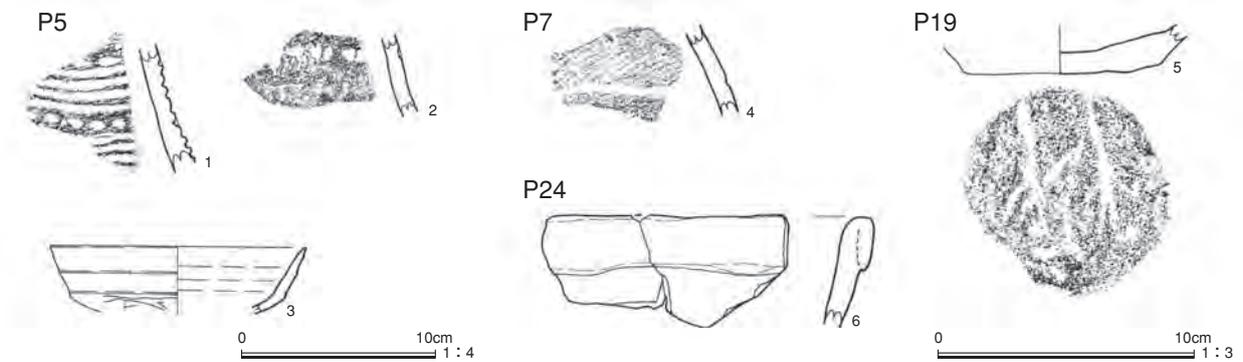
第10図 前中西遺跡第23～29号ピット

第1表 前中西遺跡ピット一覧表(第9～11図)

番号	位置	プラン	長軸×短軸×深さ (cm)	出土遺物	時期	備考
1	A-2	不明	— × — × 25	なし		SR1 南溝土層断面中にあり重複
2	A-2	円形	30 × 29 × 28	なし		
3	A-2	円形	22 × (22) × 20	土師器		SB2P1と重複
4	A-3	楕円形	28 × 24 × 29	弥生土器	弥生中期?	(SB2・SB3と重複)
5	B-3	楕円形	62 × 52 × 74	弥生土器、土師器	弥生中期、古墳後期	SB2P3・SI1と重複
6	B-3	楕円形	16 × 12 × 20	なし		SI1と重複、(SB3と重複)
7	B-3	円形	23 × 20 × 21	弥生土器	弥生中期	SI1と重複、(SB3と重複)
8	B-3	楕円形	18 × 14 × 14	なし		SI1・P9と重複、(SB3と重複)
9	B-3	楕円形	22 × 19 × 23	石器		SI1・P8と重複、(SB3と重複)
10	B-3	円形	40 × 38 × 40	土師器	古墳前期?	SI1と重複、(SB3と重複)
11	B-3	円形	25 × 23 × 7	なし		(SB3と重複)
12	A・B-3	円形	21 × 20 × 21	なし		(SB3と重複)
13	B-3	楕円形	46 × 32 × 18	弥生土器		P14と重複、(SB3と重複)
14	B-3	楕円形	(28) × 23 × 12	なし		P13と重複、(SB3と重複)
15	A-3	楕円形?	— × 35 × 19	なし		SB4P2と重複、(SB3と重複)
16	A-3	隅丸方形	68 × 58 × 59	弥生土器、土師器	古墳後期	P17と重複、(SB3と重複)
17	A-3	円形	24 × 24 × 9	なし		P16と重複、(SB3・SB4と重複)
18	A-3	楕円形	22 × 18 × 13	弥生土器		
19	A-3	楕円形	44 × 38 × 20	弥生土器	弥生中期	
20	A-3	隅丸方形	38 × — × 53	なし		柱痕残存
21	A-3・4	楕円形	29 × (20) × 32	土師器		
22	B-3	円形	30 × 29 × 7	なし		(SB3と重複)
23	C-1	楕円形?	48 × — × 38	なし		(SB1と重複)
24	C-1	円形	21 × 20 × 11	弥生土器	弥生中期	(SB1と重複)
25	C-1	隅丸方形?	— × 24 × 14	なし		P26と重複、(SB1と重複)
26	C-1・2	崩れた楕円形	31 × 28 × 12	なし		P25と重複、(SB1と重複)
27	C-2	楕円形	25 × 20 × 9	なし		(SB1と重複)
28	C-2	楕円形	24 × 20 × 18	土師器		
29	C-2	楕円形	39 × 28 × 12	なし		(SB1と重複)
30	C-2	隅丸方形	25 × 25 × 8	なし		
31	C-3	楕円形	40 × 32 × 8	なし		
32	C-3	楕円形	22 × 20 × 23	なし		
33	C-3	円形	32 × 29 × 70	土師器	古墳前期～中期	SD2と重複
34	C-3	隅丸方形	21 × 20 × 7	なし		



第11図 前中西遺跡第30～34号ピット



第12図 前中西遺跡第5・7・19・24号ピット出土遺物

第2表 前中西遺跡第5・7・19・24号ピット出土遺物観察表(第12図)

番号	器種	出土ピット	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	弥生土器壺	P5	—	—	—	ABDIJM	B	褐灰色	頸部～胴部上半破片	横位に刺突文、横位に沈線文。
2	弥生土器壺	P5	—	—	—	ABDIJM	B	にぶい黄褐色	頸部破片?	横位に刺突文。
3	土師器環	P5	(12.7)	3.3	—	AEGK	B	外面：黒褐色、にぶい黄褐色 内面：黒褐色	10%	
4	弥生土器壺	P7	—	—	—	ABEKMN	B	にぶい褐色	胴部上半破片	沈線文上位にLR縄文、下位すり消し。
5	弥生土器壺(甕)	P19	—	—	7.6	ABEIJM	B	外面：灰白色 内面：黒色	底部100%	木の葉痕。
6	弥生土器壺	P24	—	—	—	ABEJMN	B	にぶい橙色	口縁部破片	折り返し口縁。

(4) 溝跡

溝跡は3条検出された。いずれの溝跡も、調査区西半分に所在する。第1号溝跡と第2号溝跡は重複関係にあり、第3号溝跡は単独で検出された。

第1号溝跡（第13図）

調査区の北、中央部西寄りに位置し、北から南下する。B-1・2グリッド内にある。

第2号溝跡と重複関係にあり、本遺構が第2号溝跡を切っている。

規模は、北部が調査区域外となっているが、検出長3.16m、幅0.54～1.10mを測る。走行軸の方位は、ほぼ真北を示す。

断面形は逆台形を呈し、深さは、土層断面観察から25～43cmを測る。

出土遺物は、弥生土器、土師器片等がわずかに検出されたが、図示できなかった。

時期は特定できなかった。なお、後述するが、第2号溝跡が古墳時代前期から中期と推定される第1号竪穴建物跡を切ってつくられ、その第2号溝跡を切っているのが本遺構であることから、第2号溝跡の時期以降である。なお、本遺構からは、古墳時代後期と考えられる土師器片が検出されている。

第2号溝跡（第13図）

調査区の西部に位置し、北部からやや南西方向に南下し、南部の調査区域外直前で南東方向へ屈曲し向きを変える。B-1、B・C-2・3グリッド内にある。

第1号溝跡、第1号竪穴建物跡、第1号方形周溝墓、第33号ピットと重複関係にあり、本遺構が、第1号溝跡、第33号ピットに切られ、第1号竪穴建物跡、第1号方形周溝墓を切っている。

規模は、北部及び南部が調査区域外となっているが、検出長約10.9m、幅0.44～1.14mを測る。走行軸の方位は、N-39°-EからN-136°-Eに変化する。

断面形はやや丸味を帯びた逆台形で、深さは、土層断面観察から20～26cmを測り、底のレベルは北から南に傾斜する。

出土遺物は、弥生土器片、土師器片がわずかに検出されたが、図示できなかった。なお、弥生土器片については、おそらく第1号方形周溝墓等からの混入と考えられる。

時期は特定できなかったが、第1号竪穴建物跡の推定時期である古墳時代前期～中期以降で、第1号溝跡の時期より古いと考えられる。

第3号溝跡（第13図）

調査区の北西部に位置し、西部からほぼ東西に走る。C-1グリッド内にある。

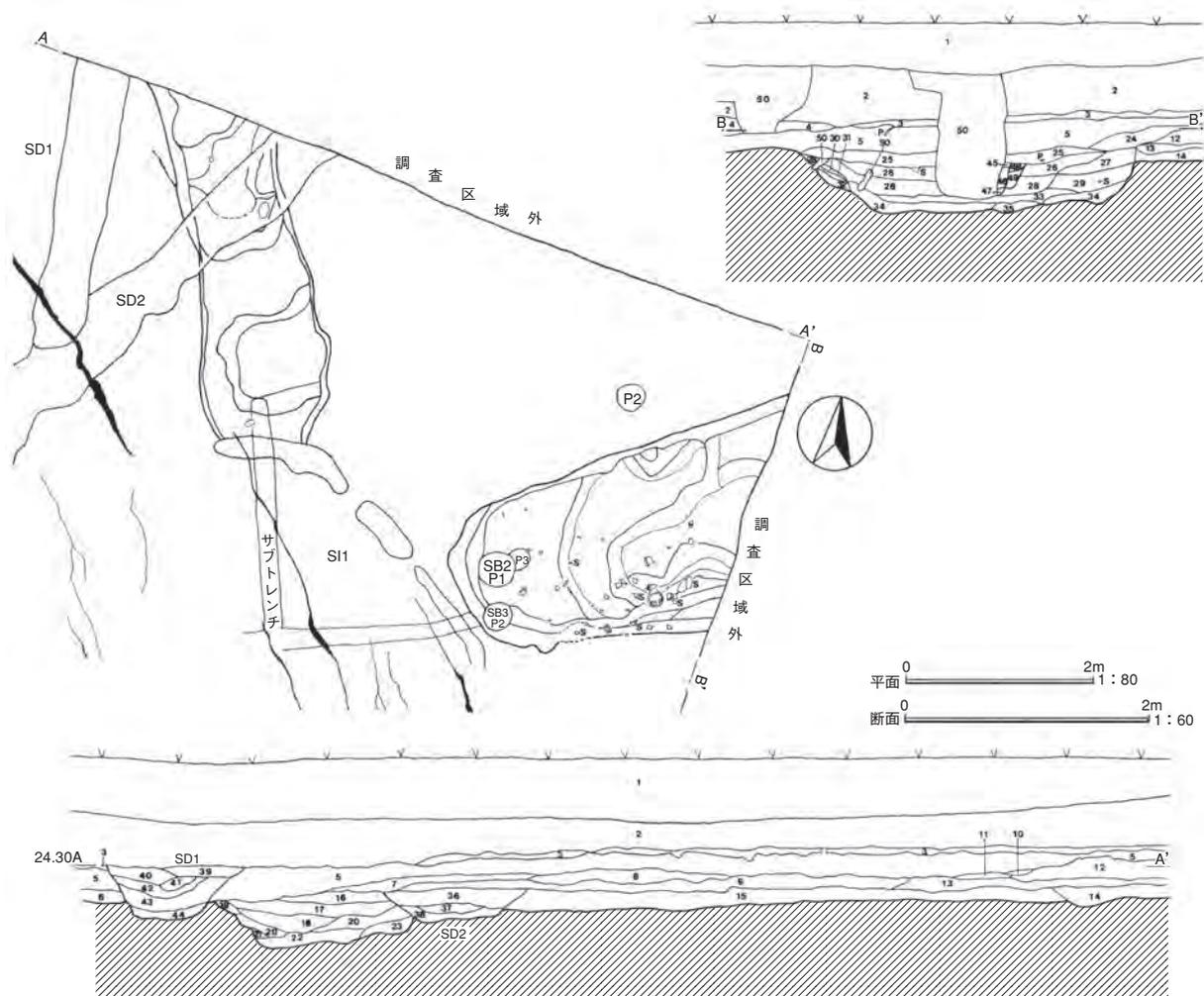
第1号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、直接切り合いの関係にない。

規模は、西部が調査区域外となっているが、検出長2.84m、幅0.24～0.40mを測る。走行軸の方位は、N-100°-Eを示す。

断面形は箱形で、深さは、土層断面観察から26cmを測る。

出土遺物は、弥生土器片、土師器片がわずかに検出されたが、図示できなかった。

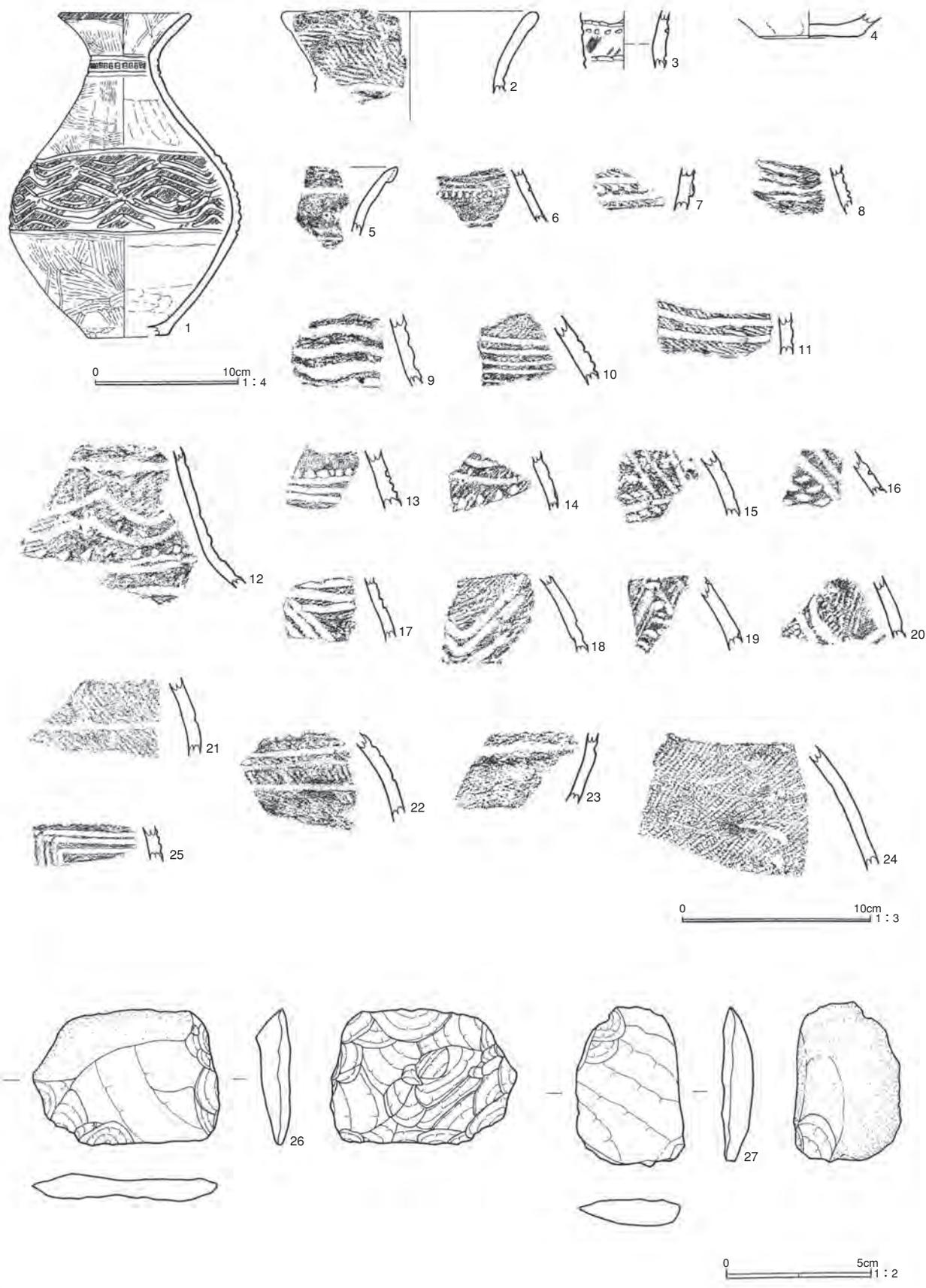
時期は、出土遺物や遺構の重複関係からも特定できなかった。



土層説明(A-A', B-B')

- | | | | |
|------------|---|--------------------------------|----------------------------------|
| 1 盛土 | | 28 灰色粘質土 | 炭化物粒わずか、酸化鉄多量含 |
| 2 灰白色粘質土 | 若干シルト質、火山灰(浅間B)多量、酸化鉄多量含 | 29 灰色粘質土 | 炭化物粒わずか、酸化鉄多量含 |
| 3 褐色粘質土 | 火山灰(浅間B)粒若干、酸化鉄多量含 | 30 灰色粘質土 | 酸化鉄わずか含 |
| 4 灰白色粘質土 | 火山灰粒若干、酸化鉄少量含 | 31 灰白色粘質土 | 灰色粘質土粒子少量、酸化鉄少量含 |
| 5 灰色粘質土 | 火山灰(浅間B)粒ごくわずか、酸化鉄多量含 | 32 灰白色粘質土 | 灰白色シルト質土粒子少量、灰色粘質土ブロック若干含 |
| 6 黄灰色粘質土 | 灰色粘質土ブロック・粒子少量、炭化物粒若干、酸化鉄若干、遺物包含 | 33 灰色粘質土 | 灰白色シルト質土ブロック・粒子わずか、酸化鉄少量含 |
| 7 明青灰色粘質土 | 酸化鉄少量含み灰黄色若干帯びる、灰白色粘質土微粒子若干含 | 34 灰色粘質土 | 灰白色シルト質土ブロック・粒子多量、炭化物粒わずか、酸化鉄少量含 |
| 8 明青灰色粘質土 | 灰色粘質土ブロック若干、酸化鉄少量含 | 35 灰白色シルト質土 | 灰色粘質土ブロック・粒子多量に混入 |
| 9 灰白色粘質土 | 黄灰色粘質土粒子若干、灰白色シルト質土粒子わずか、焼土粒わずか、マンガン粒わずか、酸化鉄多量含 | SD 2 | |
| 10 灰色粘質土 | 灰色粘質土粒子若干、灰白色粘質土粒子わずか含 | 36 灰色粘質土 | 灰色粘質土ブロック・粒子少量、酸化鉄少量含 |
| 11 灰色粘質土 | 灰白色粘質土粒子わずか、焼土粒・塊多量、炭化物粒わずか含 | 37 灰色粘質土 | 灰白色粘質土ブロックわずか、酸化鉄少量含 |
| 12 灰色粘質土 | 黒褐色粘質土ブロックわずか、酸化鉄若干含 | 38 灰白色粘質土ブロック多量+灰色粘質土ブロック若干混合層 | 灰白色粘質土ブロック・粒子少量、酸化鉄若干含 |
| 13 灰色粘質土 | 黒褐色粘質土ブロック多量含み黒褐色を呈す、酸化鉄若干含 | SD 1 | |
| SR 1 | | 39 青灰色粘質土 | 火山灰(浅間B)粒子少量、炭化物粒わずか、酸化鉄多量含 |
| 14 灰色粘質土 | 酸化鉄多量含 | 40 灰色粘質土 | 火山灰(浅間B)粒子少量、遺物包含 |
| 15 灰白色粘質土 | 灰白色シルト質土粒子わずか、黄灰色粘質土ブロック少量、酸化鉄多量含 | 41 灰色粘質土 | 灰白色粘質土粒子少量、酸化鉄少量含 |
| 16 明青灰色粘質土 | 酸化鉄含み暗灰黄色帯びる、マンガン粒若干含 | 42 灰色粘質土 | 火山灰(浅間B)粒子若干、酸化鉄少量、遺物包含 |
| 17 灰色粘質土 | 灰白色粘質土粒子ごくわずか、酸化鉄少量、遺物包含 | 43 青灰色粘質土 | 灰色粘質土ブロック混じる、酸化鉄少量、遺物包含 |
| 18 青灰色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック大わずか、酸化鉄若干含 | 44 青灰色粘質土 | 灰色粘質土ブロック少量混じる、酸化鉄少量含 |
| 19 灰色粘質土 | 灰白色粘質土粒ごくわずか、炭化物粒ごくわずか、酸化鉄わずか含 | P 1 | |
| 20 灰色粘質土 | 粘性強、灰白色粘質土ブロック・粒子わずか、酸化鉄少量含 | 45 灰色粘質土 | 灰白色シルト質土粒子わずか、焼土粒ごくわずか、酸化鉄若干含 |
| 21 灰色粘土 | 灰白色粘質土粒子少量含 | 46 灰色粘質土 | 炭化物粒ごくわずか、酸化鉄若干含 |
| 22 青灰色粘土 | 粘性強、酸化鉄少量含、遺物包含 | 47 灰色粘質土 | 灰白色シルト質土粒子若干含 |
| 23 灰色粘質土 | 灰白色粘質土粒子少量含 | 48 青灰色粘質土 | 灰白色シルト質土粒子わずか、焼土粒わずか、酸化鉄若干含 |
| 24 灰色粘質土 | 青灰色粘質土ブロック・粒子若干、酸化鉄少量含 | 49 灰色粘質土 | 灰白色シルト質土粒子ごくわずか、酸化鉄若干含 |
| 25 青灰色粘質土 | 灰白色シルト質土粒子若干、酸化鉄少量、遺物包含 | 50 攪乱 | |
| 26 灰色粘質土 | 青灰色粘質土ブロックわずか、酸化鉄若干含 | | |
| 27 青灰色粘質土 | 灰白色粘質土粒子若干、炭化物粒わずか、酸化鉄少量、遺物包含 | | |

第14図 前中西遺跡第1号方形周溝墓、第1号ピット



第 15 图 前中西遺跡第 1 号方形周溝墓出土遺物

しているが、部分的にブロック土を含む層が見受けられることから人為的に埋め戻された可能性も考えられる。また、南溝に顕著であるが、大きく2層に分層され（第25～28層及び第27・29・30～35層）、少なくとも2回に分けて堆積したことが伺われる。

方台部は、おそらく一辺10m前後の規模と推定され、ほとんど削平を受けていると考えられる。わずかに第14・15層に方台部と考えられる層が認められ、その高さは遺構確認面から最大で20cm程度である。

出土遺物は、南溝に多く検出され、弥生土器壺がほとんどで、搔器と考えられる石器がわずかに検出できた。1は約70%遺存しており、南溝の外側立ち上がり付近に底面から浮いた状態で、口縁を方台部側に向けて検出された。また、他の南溝出土遺物も同様に外側付近で概ね検出できた。

時期は、弥生時代中期後半と考えられる。

第3表 前中西遺跡第1号方形周溝墓出土遺物観察表（第15図）

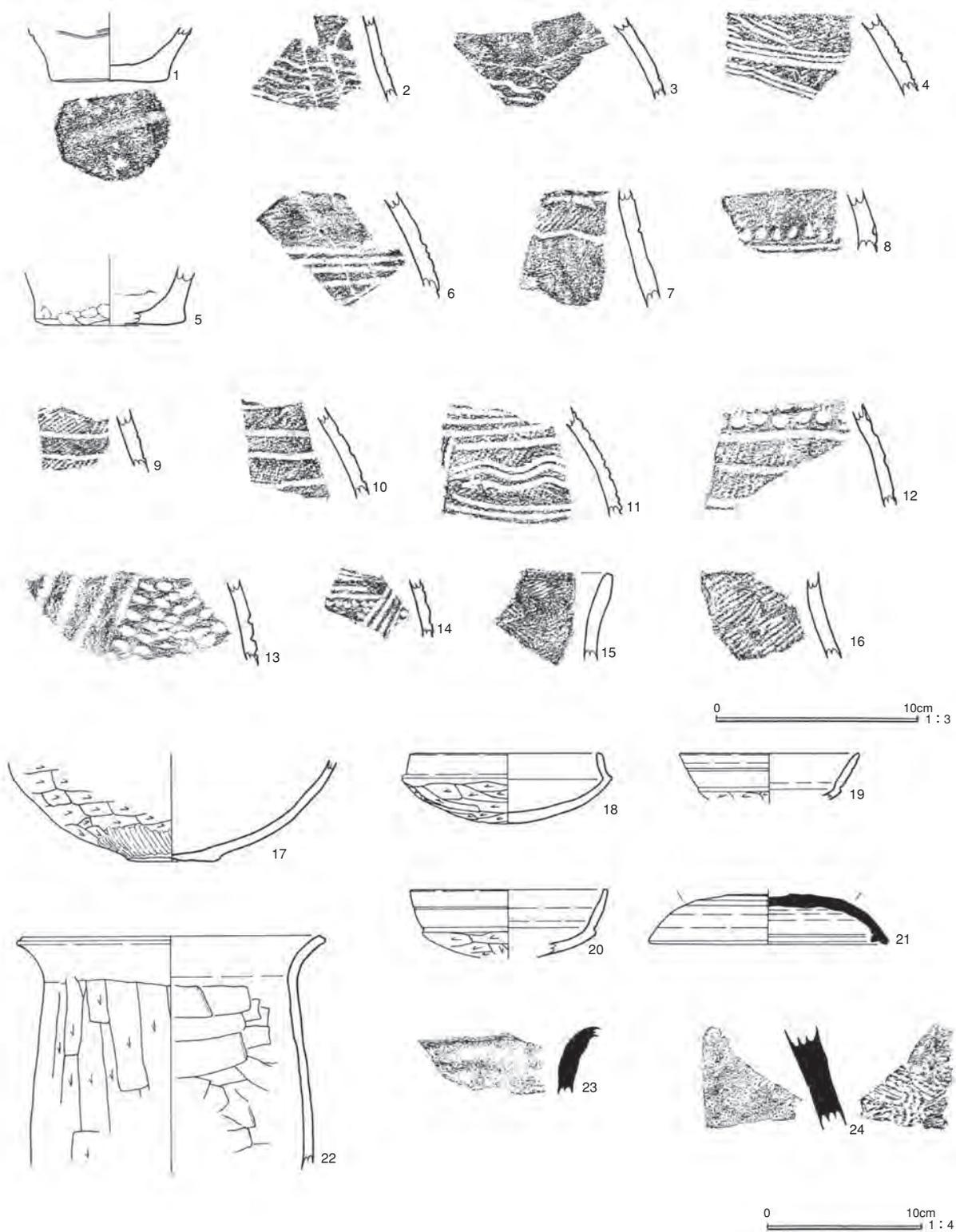
番号	器種	出土位置	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
1	弥生土器壺	南溝	9.3	(23.1)	(5.7)	AEGJLM	B	にぶい橙色、浅黄色、 灰黄褐色	70%	口唇部にLR縄文。頸部に2条横位の沈線文間 刺突文。胴部中位に2条沈線文間に地文LR縄 文、波状重ね沈線文。胴部上半・下半ミガキ。	
2	弥生土器壺	南溝	(13.7)	—	—	AEGHKMN	B	橙色	口縁部15%	無節RL縄文。	
3	弥生土器壺	西溝	頸部径 (4.6)	—	—	ABCIJM	B	にぶい橙色	頸部破片	横位の沈線文間に、LR縄文。 沈線文に並行して刺突文。	
4	弥生土器壺(甕)	南溝	—	—	5.6	ABCIJMN	B	橙色	底部60%		
5	弥生土器壺	南溝	—	—	—	ABEKMN	B	灰黄色	口縁部破片	折り返し口縁。	
6	弥生土器壺	南溝	—	—	—	ABCIM	B	外面：灰白色 内面：黒色	頸部破片	横位の沈線文間に並行して刺突文。	
7	弥生土器壺	南溝	—	—	—	ABKM	B	橙色	頸部破片？ 胴部上半破片？	地文RL縄文、横位に沈線文。 沈線文間に1条の紐線文を貼付し刺突文。	
8	弥生土器壺	西溝	—	—	—	ABEIJM	B	にぶい橙色	頸部破片	横位に沈線文。	
9	弥生土器壺	西溝	—	—	—	ABEHIJMN	B	にぶい橙色	頸部破片？ 胴部上半破片？	波状沈線文。	
10	弥生土器壺	南溝	—	—	—	ABCEGHM	B	外面：灰白色、褐灰色 内面：黒色	胴部上半破片	地文LR縄文、横位に沈線文。	
11	弥生土器壺	南溝	—	—	—	ABEGHM	B	橙色、褐灰色	胴部上半破片	地文RL縄文、横位に沈線文。	
12	弥生土器壺	南溝	—	—	—	ABDKMN	B	にぶい黄橙色	頸部破片	地文LR縄文、波状及び横位に沈線文。 横位に刺突文。	
13	弥生土器壺	南溝	—	—	—	ABCDHIJMN	B	にぶい黄橙色、黒褐色	頸部～胴部上 半破片	横位の沈線文に並行して刺突文。	
14	弥生土器壺	南溝	—	—	—	ABCGHJKMN	B	にぶい黄橙色	胴部上半破片	地文LR縄文、斜め横位に沈線文。 横位に刺突文。	
15	弥生土器壺	南溝	—	—	—	ABEGJKM	B	外面：橙色 内面：にぶい黄橙色	胴部上半破片	地文LR縄文、沈線文。	
16	弥生土器壺	南溝	—	—	—	ABCEIKM	B	灰白色	胴部上半破片	地文LR縄文、縦位に沈線文、刺突文。	
17	弥生土器壺	西溝	—	—	—	ABEGJM	B	外面：灰黄褐色 内面：灰白色	胴部上半破片	地文LR縄文？、逆三角形重ね沈線文。	
18	弥生土器壺	西溝	—	—	—	ABEGJMN	B	橙色、にぶい橙色	胴部上半破片	地文LR縄文、波状沈線文。	
19	弥生土器壺	西溝	—	—	—	ABCIKM	B	浅黄褐色	胴部上半破片	地文LR縄文、刺突文。	
20	弥生土器壺	南溝	—	—	—	ABCGKMN	B	明赤褐色	胴部上半破片	地文LR縄文、沈線文。	
21	弥生土器壺	南溝	—	—	—	ABDGKMN	B	にぶい橙色	胴部上半破片	地文RL縄文、横位に沈線文。	
22	弥生土器壺	南溝	—	—	—	ABDHJMN	B	外面：灰黄褐色 内面：にぶい橙色	胴部上半破片	地文RL縄文、横位に沈線文。	
23	弥生土器壺	南溝	—	—	—	ABCGMN	B	にぶい橙色	胴部下半破片	横位に沈線文。	
24	弥生土器壺	南溝	—	—	—	AEGHKMN	B	外面：黒色 内面：にぶい橙色	胴部上半破片	LR縄文。	
25	弥生土器壺	南溝	—	—	—	ABEGJKM	B	にぶい黄褐色、黒褐色	胴部上半破片	方形区画重ね沈線文。	
26	搔器	南溝	最大長4.80 最大幅6.58 最大厚1.0 重量37.2							一部欠損	
27	搔器	西溝	最大長5.69 最大幅3.71 最大厚0.95 重量26.0							一部欠損	

(6) 遺構外出土遺物

表土除去の際に出土した遺物及び遺構に伴わないと判断した出土遺物を掲載する(第16図、第4表)。
弥生時代中期から古墳時代後期までの、弥生土器、土師器、須恵器等が出土した。

第4表 前中西遺跡遺構外出土遺物観察表(第16図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	弥生土器壺(甕)	—	—	5.7	AEGIM	B	灰黄褐色	底部80%	胴部に沈線文。底部木の葉痕。
2	弥生土器壺	—	—	—	ABEM	B	にぶい黄橙色	頸部~胴部上半破片	波状沈線文。
3	弥生土器壺	—	—	—	ABDEJMN	B	外面:にぶい黄橙色 内面:暗灰色	胴部上半破片	波状沈線文。
4	弥生土器壺	—	—	—	AEIKMN	B	黒褐色	胴部上半破片	横位の沈線文の上位下位に波状沈線文。
5	弥生土器壺(甕)	—	—	(7.5)	ABDIJM	B	外面:にぶい黄橙色 内面:灰黄褐色	底部20%	
6	弥生土器壺	—	—	—	ABEIM	B	外面:にぶい橙色 内面:暗灰色	胴部上半破片	横位に沈線文。
7	弥生土器壺	—	—	—	ABEIJKM	B	灰白色	頸部~胴部上半破片	波状沈線文間にL R縄文。
8	弥生土器壺	—	—	—	AEIJM	B	褐灰色、黒色	胴部上半破片	横位の沈線文の上位にL R縄文、沈線文の直上に並行して刺突文。
9	弥生土器壺	—	—	—	AEIJM	B	黒褐色、にぶい橙色	胴部上半破片	横位に2条の沈線文、沈線文間すり消し、沈線文上位下位L R縄文。
10	弥生土器壺	—	—	—	ADEIM	B	外面:灰黄褐色 内面:にぶい橙色	胴部上半破片	地文L R縄文、横位に沈線文。
11	弥生土器壺	—	—	—	ABJMN	B	明赤褐色	胴部上半破片	地文R L縄文、方形区画重ね沈線文、区画内に波状沈線文。
12	弥生土器壺	—	—	—	ABEIJM	B	灰黄褐色	胴部上半破片	横位に沈線文、沈線文上位に刺突文。
13	弥生土器壺	—	—	—	ABDEMN	B	浅黄橙色	胴部上半破片	縦位に沈線文。刺突文。
14	弥生土器壺	—	—	—	AEIJM	B	オリーブ黒色	胴部上半破片	逆三角形重ね沈線文内に刺突文。
15	弥生土器甕	—	—	—	ABEIJM	B	黒色	口縁部破片	L R縄文?
16	弥生土器甕	—	—	—	ABDEIJM	B	褐灰色	頸部~胴部上半破片	L R縄文。
17	土師器壺	—	(6.5)	(5.8)	CEGN	A	外面:明赤褐色、橙色、にぶい黄橙色、黄灰色 内面:明赤褐色	胴部下半15%	外面ヘラケズリ、底部付近ミガキ調整。
18	土師器坏	(12.2)	4.6	—	AEJKM	B	外面:橙色、にぶい赤褐色、黒褐色 内面:橙色、にぶい黄橙色	70%	
19	土師器坏	(11.8)	3.1	—	AEHM	B	橙色	口縁部20%	
20	土師器坏	(12.8)	4.5	—	AEJM	C	外面:橙色 内面:橙色、にぶい橙色	20%	
21	須恵器蓋	15.6	3.2	—	ABDN	A	灰白色	20%	つまみ欠損。
22	土師器甕	(20.1)	(14.9)	—	ACEGLM	B	外面:にぶい黄褐色、褐灰色、明赤褐色 内面:浅黄褐色、褐灰色	口縁部~胴部上半20%	
23	須恵器甕	厚さ0.9~1.1		—	AEGLN	A	外面:灰色、青灰色 内面:灰色	口縁部破片	
24	須恵器甕	厚さ1.5~1.9		—	ADGLN	A	外面:灰色 内面:灰白色	胴部破片	外面:平行叩き。 内面:青海波文あて具痕。



第 16 图 前中西遺跡遺構外出土遺物

4 調査のまとめ

前中西遺跡は、平成8年度から上之土地区画整理事業に伴い発掘調査を行っている。これまでの調査で、主に弥生時代から江戸時代までの遺構・遺物が確認されているが、特徴的なのは、弥生時代中期後半から後期初頭の集落跡と墓域が確認されていることである。集落跡や墓域の時期は大きく分けて、弥生時代中期後半と中期末から後期初頭の2時期に分けられ、その分布は、主に遺跡範囲の北側に集落跡、南側に墓域が広がっている状況である。集落跡では70軒以上の竪穴住居跡が検出され、墓域は方形周溝墓が20基以上、土器棺墓が8基検出されている。

今回の調査では、調査区の北東隅において、規模にして溝の外法で12m以上と推定される四隅が切れるタイプの方角周溝墓の南溝及び西溝が検出された。方台部については、土層断面観察から僅かではあるが確認されている。この方形周溝墓は、同じく中期後半の四隅が切れるタイプの方角周溝墓が2基、中期末～後期初頭（後期初頭の可能性が高い）の全周するタイプの方角周溝墓1基が南北に検出されたエリアの北東50m程に位置する。特に、北側に分布する同時期の2基とは近距離の関係にある。この方形周溝墓が所在するエリアは、南に現況河川が西から東へ流れ、北へ屈曲しすぐにまた東へ屈曲し直線的に東へ流れるちょうど屈曲部付近に当る。また、現況河川は、上之土地区画整理事業に伴う発掘調査より検出された河川跡や谷状の落ち込みの位置から、当時の流路とほぼ一致することが想定され、現況の道路もほぼそれに沿う形を採っており、現流路及び現道の幅ないしはそれ以上の幅をもった河川が当時から流れていたものと推定される。

今回の調査で検出された方形周溝墓を含めてこのエリアの方角周溝墓群は、その河川の左岸に形成された自然堤防上において最も河川寄りの箇所に占地していたものと考えられる。そして、中期後半の方角周溝墓群はやや河川から離れた位置分布することが想定され、今後の調査でその状況が明らかにされていく可能性が考えられる。ちなみに、中期後半の集落跡は、この方形周溝墓群からやや離れた北側に分布し、この方形周溝墓群に最も近い分布をみせる集落跡は中期末～後期初頭の時期のものである。この現象は、このエリアの方角周溝墓の分布状況と偶然にも一致している。

主な引用・参考文献

- | | | | |
|------|------|----------|----------|
| 吉野 健 | 2002 | 『前中西遺跡Ⅱ』 | 熊谷市教育委員会 |
| 吉野 健 | 2003 | 『前中西遺跡Ⅲ』 | 熊谷市教育委員会 |
| 松田 哲 | 2010 | 『前中西遺跡Ⅴ』 | 熊谷市教育委員会 |
| 松田 哲 | 2011 | 『前中西遺跡Ⅵ』 | 熊谷市教育委員会 |
| 松田 哲 | 2012 | 『前中西遺跡Ⅶ』 | 熊谷市教育委員会 |

西別府館跡



Ⅱ 西別府館跡の調査

1 発掘調査の概要

(1) 調査にいたる経過

西別府館跡の調査は、建築主（小林信男氏）との調整を経て、地盤改良（表層改良）工事を伴う個人専用住宅の建築により埋蔵文化財の現状保存が困難と判断されたため、国庫・県費補助事業として実施したものである。経過については、次のとおりである。

平成21年7月24日付けで、文化財保護法第93条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出される。これを受けて、熊谷市教育委員会は、届出のあった熊谷市西別府字天神2214-1地内は、埋蔵文化財包蔵地（県遺跡番号59-039 西別府館跡）に該当することから、埋蔵文化財の詳細な状況を把握するため、平成21年8月12日に試掘調査を実施した。この調査により、現地表面下50cmで平安時代の遺構・遺物が確認された。

個人専用住宅建築は、前述のとおり地盤の表層改良工事を伴うもので、その掘削深度は現地表面下100cmに及び、建物の範囲全面に施工するものであったため、発掘調査の措置が適当である旨副申を付して、平成21年8月28日付けで埋蔵文化財発掘の届出を埼玉県教育委員会あてに送付した。その後、建築主あてに埼玉県教育委員会教育長から周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知がなされ、発掘調査実施の指示がなされた。

発掘調査は、発掘調査に先立ち、文化財保護法第99条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を、平成21年8月28日付け熊教社発第1334号で提出し、熊谷市教育委員会が実施した。

(2) 発掘調査、整理・報告書作成の経過

発掘調査は、平成21年9月2日から同年10月9日にかけて行われた。調査面積は、家屋建築予定箇所全面の71.5㎡である。

まず、重機による表土除去を行い、その後人力による遺構確認作業を行った。検出された遺構は、竪穴建物跡、土坑、ピット、井戸跡、溝跡で、順次掘り下げを行った。なお、重機による表土除去は排出土置き場の関係で2回に分けて行う反転方式を採った。

そして、掘り下げ作業と並行して、土層断面図の作成、遺物出土状況の分布図を作成し、適宜写真撮影を行った。

また、遺構の分布状況については、平面図を作成した。遺構の写真撮影については、遺構ごとに行い、調査区全景については2回に分けて写真撮影を行った。

整理・報告書作成作業は、平成24年4月から平成25年3月にかけて実施した。

まず、遺物の洗浄、注記、接合、復元作業を行った。その後、遺物の分類を行い、実測作業を開始した。また、これらと並行して遺構の図面整理を行った。

次に、土器等の遺物のトレース・拓本を採り図版を作成し、併せて遺構等のトレース・図版の作成を行った。そして、遺構の写真整理・遺物の写真撮影を行い、写真図版の割付をした。また、これと並行して原稿執筆を行った。

最後に、印刷業者の選定を行い、校正を経て本報告書を刊行した。

(3) 発掘調査、整理・報告書作成の組織

発掘調査は平成 21 年度に、整理・報告書作成は平成 24 年度に実施し、いずれも熊谷市教育委員会が主体者となって実施した。なお、組織については、第Ⅱ章の前中西遺跡と同一であるため記述を省略するため、前中西遺跡の記述を参照されたい。

2 遺跡の立地と環境

(1) 立地と環境

報告する西別府館跡跡（1）は、洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯に広がる櫛挽台地の標高31m前後を測る箇所立地する。遺跡は、熊谷市西部、J R高崎線籠原駅の北東約2.0 km、荒川から北へ約6.0 km、利根川から南へ約5.0 kmの距離にある。また、遺跡の範囲は東西約330m、南北約480m四方に大きく広がり、今回報告する箇所はその北端中央部にあたり、約800m北は台地崖線に至り比高差1 mをもって崖線下の低地に広がる別府沼になる。なお、扇状地である櫛挽台地裾部崖線下においては、扇状地で伏流水となっていた水が湧水となって現れていた。その湧水は、かつて多数確認されており、この湧水が水源となり別府沼を形成していた。

遺跡内の発掘調査は、本報告を含めて3回実施しており、他の2回は平成18年度及び平成20年度に公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団により実施された、遺跡範囲東辺に南北に走る県道新堀尾島線の歩道整備に伴う発掘調査である。その際には、奈良時代及び中世の集落跡が確認されている。また、近年、建替え等も含めて個人専用住宅建築にかかる発掘の届出が増えつつあり、開発が徐々にではあるが進行している。

次に、本報告遺跡を中心に歴史的環境について少し概観する（第17図）。

まず、旧石器時代から縄文時代であるが、この時期の遺跡の発見例は極めて少ない状況である。旧石器時代で知られているのは、近くでは平安時代の竪穴建物跡の埋土中から出土した櫛挽台地東端にある籠原裏遺跡（2）の黒耀石製尖頭器の事例である。

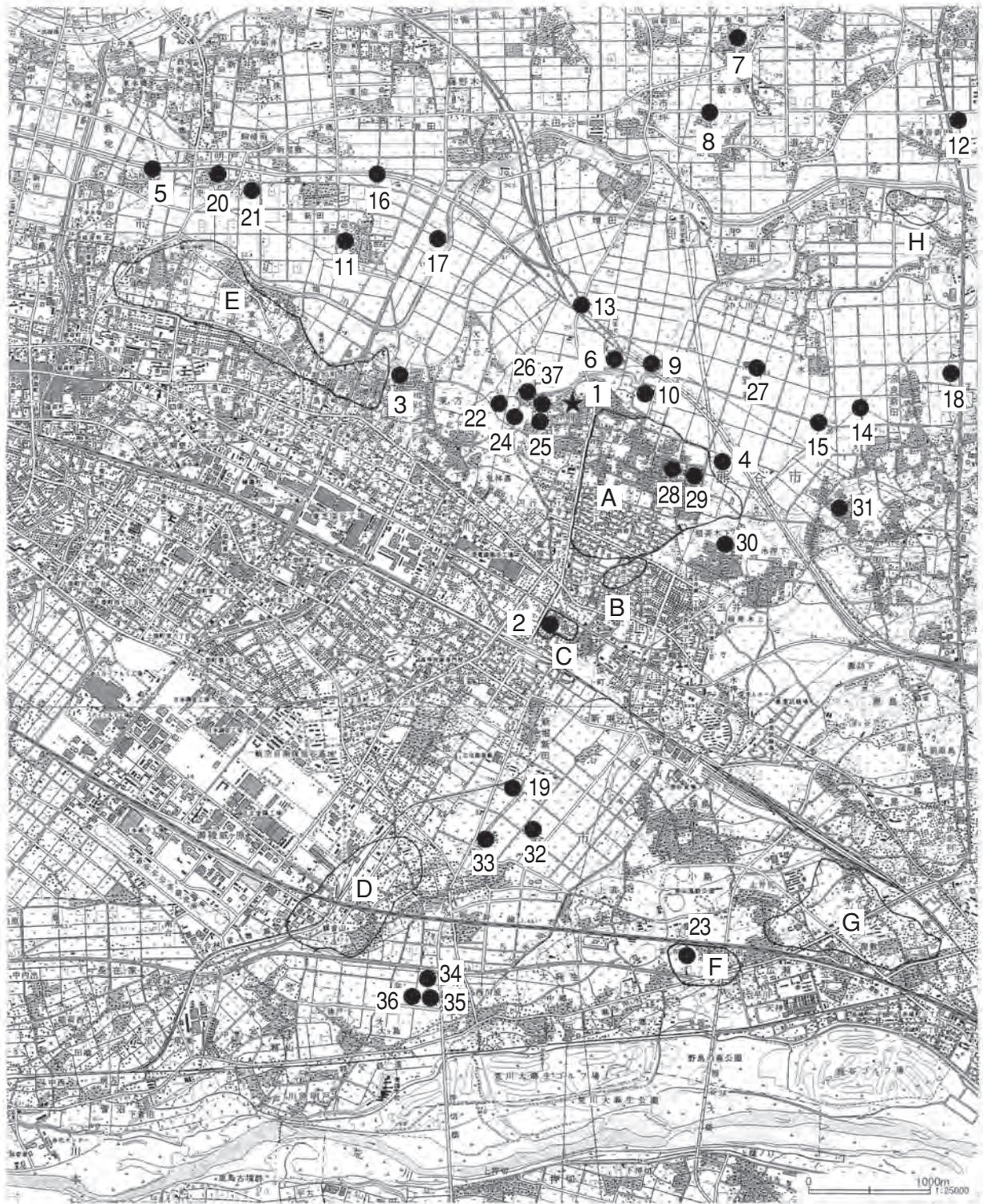
縄文時代になると、早期段階で櫛挽台地北端にある深谷市東方城跡（3）において尖頭器が検出されている。

前期には台地のみならず低地上にも遺跡が出現しはじめ、寺東遺跡（4）などの集落跡が確認されている。中期には、特に後半段階の加曾利E式期の遺跡が爆発的に出現するが、依然として櫛挽台地及び台地直下の低地上に集中している。

後期には遺跡数は減少傾向であるが、徐々に低地へと進出をはじめ、本遺跡周辺では、中期と同様に集中して所在し、深谷市内においても、台地縁辺部及び台地下の低地上で遺跡が確認されている。

晩期になるとさらに遺跡数が減少し、市内においては非常に少ないが、低地の自然堤防上に進出した遺跡が目立つようになる。市東部の妻沼低地に位置する上之地区で安行式土器が検出されている。深谷市では、低地においていくつかの遺跡が確認されているが、上敷免遺跡（5）では晩期最終末の浮線文土器片が多数検出されており、これは次の弥生時代が始まる以前に人々が低地に進出してきた証であり、次代へのつながりが看取できる。

弥生時代については、深谷市において妻沼低地上敷免遺跡の包含層から県内初の前期遠賀川式土器の胴部上半破片が出土している。その後、中期に至ると多くの遺跡の存在が確認されるようになる。中期以降の集落は、櫛挽台地上及び台地下の自然堤防上に営まれている。市内では三ヶ尻遺跡に含まれる三ヶ尻上古遺跡、平戸遺跡（地図未掲載）、横間栗遺跡（6）、飯塚遺跡（7）、飯塚南遺跡（8）、飯塚北遺跡（地図未掲載）、深谷市では上敷免遺跡等であり、飯塚遺跡を除きいずれも再葬墓が検出された



第 17 図 西別府館跡周辺遺跡分布図

遺跡である。横間栗遺跡は、前期末から中期中頃の再葬墓が16基検出され、この一括資料は1999年3月に埼玉県指定文化財となっている。この横間栗遺跡に近接する関下遺跡（9）では中期中頃の竪穴建物跡が検出され、隣接する石田遺跡（10）と共に集落域の広がりを想起させる遺跡である。一方、市内東部の低地上では、水稻耕作を基盤とした本格的な集落が営まれ、池上遺跡（地図未掲載）は環濠集落として知られ、その墓域とされる行田市小敷田遺跡（地図未掲載）では、関東地方最古段階の須和田式期の方形周溝墓が検出されている。中期後半には、市内東部の妻沼低地の北島遺跡、前中西遺跡、諏訪木遺跡（いずれも地図未掲載）で集落が確認されており、深谷市のやはり妻沼低地では、宮ヶ谷戸遺跡（11）や上敷免遺跡で集落が確認されている。

後期中頃から終末にかけては、少ないものの低地上各地に遺跡が見られる。弥藤吾新田遺跡（12）、中条条里遺跡（地図未掲載）に含まれる東沢遺跡、行田市池守遺跡（地図未掲載）が存在する。東沢遺跡・池守遺跡では吉ヶ谷式土器が、弥藤吾新田遺跡では南関東系の弥生町式土器が出土している。

古墳時代になると、古墳は台地・自然堤防等の微高地に形成され、集落は台地のみならず低地の自然堤防上にも活発に営まれるようになり、次第に遺跡数も増加傾向にある。前期の遺跡は特に低地における確認例が増え、本遺跡周辺では、横間栗遺跡、根絡遺跡（13）、中耕地遺跡（14）、一本木前遺跡（15）、深谷市には明戸東遺跡（16）、東川端遺跡（17）、宮ヶ谷戸遺跡、上敷免遺跡等がある。集落では、市内東部の北島遺跡においては弥生時代に続いて大規模な集落が営まれており、東沢遺跡とあわせて河川跡から鋤・鍬をはじめとした多量の木製農具が出土した遺跡として知られる。さらに、北島遺跡では東海地方にその系譜が求められるパレス壺や高坏が多く見られ、近接する小敷田遺跡においても畿内や東海地方等の外来系の土器が多数出土している。墓域の存在としては、一本木前遺跡、上敷免遺跡、東川端遺跡等で方形周溝墓群が確認されている。一本木前遺跡では、竪穴建物跡と共に一辺が11.72～17.40mを測る巨大な方形周溝墓が4基検出されており、第2号方形周溝墓の主体部からは、緑色凝灰岩製管玉と共に翡翠製の勾玉が出土している。また、東川端遺跡においても巨大な方形周溝墓が検出されており、特に第2号方形周溝墓からはパレス壺が出土している。

中期の様相は、他の時期と比べて不明な点が多いが、集落が大規模に展開していくのは中期後半以降となるようである。市内の東部の遺跡において集落跡が確認されているほか、深谷市の森下遺跡（地図未掲載）等で遺構・遺物が検出されている。

第17図掲載遺跡一覧表

1 西別府館跡	2 籠原裏遺跡	3 東方城跡	4 寺東遺跡	5 上敷免遺跡	6 横間栗遺跡
7 飯塚遺跡	8 飯塚南遺跡	9 関下遺跡	10 石田遺跡	11 宮ヶ谷戸遺跡	
12 弥藤吾新田遺跡	13 根絡遺跡	14 中耕地遺跡	15 一本木前遺跡	16 明戸東遺跡	
17 東川端遺跡	18 横塚山古墳	19 樋の上遺跡	20 本郷前東遺跡	21 新屋敷東遺跡	
22 幡羅遺跡	23 宮塚古墳	24 西別府遺跡	25 西別府廃寺	26 西別府祭祀遺跡	
27 別府条里遺跡	28 別府城跡	29 別府氏館跡	30 玉井陣屋跡	31 奈良氏館跡	
32 黒沢館跡	33 若松遺跡	34 社裏北遺跡	35 社裏遺跡	36 社裏南遺跡	37 西方遺跡
A 別府古墳群	B 在家古墳群	C 籠原裏古墳群	D 三ヶ尻古墳群	E 木の本古墳群	
F 広瀬古墳群	G 石原古墳群	H 上江袋古墳群			

一方、古墳に目を転じてみると、数こそ少ないが、妻沼低地の福川の自然堤防上に市指定史跡・横塚山古墳(18)等が存在する。これは、B種横刷毛の埴輪をもつ前方後円墳(後円部は一部欠損)である。

後期になると遺跡数は爆発的な増加を見せる。集落は台地ばかりでなく自然堤防上にもさらに積極的に進出を図っていったようであり、奈良・平安時代へと継続して展開する大規模なものが多く見受けられる。市内では、櫛挽台地の三ヶ尻遺跡、新荒川扇状地の樋の上遺跡(19)、妻沼低地の本郷前東遺跡(20)、新屋敷東遺跡(21)、一本木前遺跡、飯塚南遺跡等をはじめ数多くの遺跡が確認されている。樋の上遺跡では平安時代までの竪穴建物跡が150軒以上検出されている。一本木前遺跡では古墳時代後期を中心に奈良・平安時代の竪穴建物跡が450軒以上も検出されており、河川の氾濫にもかかわらず同じところに累々と集落が営まれている状況が確認されている。また、同じく後期の祭祀跡も発見されている。

一方、古墳を見てみると、群を形成して台地及び低地に築造されている。櫛挽台地の別府古墳群(A)、在家古墳群(B)、籠原裏古墳群(C)、三ヶ尻古墳群(D)、深谷市木の本古墳群(E)、新荒川扇状地の広瀬古墳群(F)、石原古墳群(G)、妻沼低地の中条古墳群(地図未掲載)、上江袋古墳群(H)等数多く分布する。これらは概ね6世紀から7世紀末ないしは8世紀初頭にかけて形成された古墳群である。これらのうち特筆すべき古墳を挙げると、籠原裏古墳群は川原石乱石積の胴張型横穴式石室を有する古墳群であるが、7世紀後半～8世紀初頭の築造と考えられる八角形の墳形をもつ古墳の存在が知られており、終末期の古墳の様相、さらには幡羅郡家跡である幡羅遺跡(22)との関係においても見逃すことのできない発見である。広瀬古墳群中の宮塚古墳(23)は同じく7世紀末から8世紀初頭の築造と考えられ、上円下方墳という特異な墳形を今に残し熊谷市唯一の国指定史跡として知られる。

奈良・平安時代には、この地域も律令制の体制に組み込まれていき、市内には幡羅郡、男衾郡、大里郡、埼玉郡の4郡が存在していたとされる。本遺跡周辺一帯はそのうち幡羅郡に属し、現在の市内西部及び北部、深谷市東部の一帯が該当すると考えられている。幡羅郡は、上秦、下秦、広沢、荏原、幡羅、那珂、霜見、余部の八郷からなる中郡である。

前述のとおり、古墳時代後半に自然堤防上に形成された集落の多くは、増減はするものの奈良・平安時代へと継続されていき、また規模の大きいものが多い。この頃の中心的集落遺跡は、市内東部の北島遺跡に見られる。300軒以上もの竪穴建物跡が検出されている大規模集落であり、地域の中核となる典型的律令制集落である。また、周辺には、整然と配された9世紀代の掘立柱建物跡群が検出された池上遺跡、7世紀末から8世紀初頭頃の出拳木簡が検出された小敷田遺跡、平安時代の溝に区画された集落跡や四面庇の付いた大型掘立柱建物跡を含む掘立柱建物跡群、多数の灰釉陶器や緑釉陶器が検出され、河川跡で行われた水辺の祭祀も確認された諏訪木遺跡等、官衙の様相が看取できる遺跡が集中する。

そして、集落以外の遺跡では、櫛挽台地北東端には深谷市幡羅遺跡が所在する。この幡羅遺跡は東西500m、南北400mの範囲をもつ幡羅郡家跡であり、これまでに郡庁を除く正倉院、館、厨家、曹司、道路等の施設が検出されている。7世紀後半小規模な倉庫などの掘立柱建物が建てられ、7世紀末には主要な施設が整えられていったようである。8世紀末には正倉の掘立柱建物から礎石建物への建て替えや敷地の拡張等が行われ、9世紀前半～中葉には二重溝と土塁による区画施設が造られ郡家の様相も大きく変化する。この施設は、10世紀前半または中頃の正倉院の廃絶後の11世紀前半まで存続していた

とされ、これが郡家の終焉と考えられている。また、この幡羅遺跡の周辺には、西別府遺跡（24）、西別府廃寺（25）、西別府祭祀遺跡（26）が存在し、幡羅郡家との関連で注目されている。西別府遺跡は、幡羅遺跡と一体の遺跡と捉えることができ、9世紀前半から10世紀後半まで存在していたと考えられる二重溝と土塁による区画施設が確認され、幡羅郡家の機能の一部を担っていたと考えられている。西別府廃寺は、郡司が創建に関わったとされる県内でも古い8世紀初頭創建の寺院であり、基壇建物跡、寺域を区画する溝跡、瓦溜り状遺構等が検出され、多数出土している軒丸瓦や軒平瓦等から9世紀後半まで存続していたと考えられている。西別府祭祀遺跡は、7世紀後半から11世紀前半まで湧泉で行われた水辺の祭祀跡であり、馬形・横櫛形・有孔円板形・有線円板形等の石製模造品をはじめ、墨書土器等の土器が多数検出されており、祭祀具や場所を時代と共に変えて祭祀が継続的に行われていたと考えられている。また、この西別府祭祀遺跡北西の妻沼低地上の本郷前東遺跡・新屋敷東遺跡では、河川跡の縁辺部で7世紀前半の土器と共伴する櫛形・剣形・有孔円板形・有線円板形石製模造品が出土し、集落内の祭祀跡においても櫛形・有線円板形・有孔円板形・勾玉形・剣形の石製模造品が出土しており、水利にかかわる再生を祈願した水の祭祀と理解され、西別府祭祀遺跡とは、「水の祭祀」という共通性と、西別府祭祀遺跡に続く前段階の時期のものとして注目される。なお、西別府遺跡は、幡羅遺跡、西別府廃寺、西別府祭祀遺跡に挟まれる遺跡であり、最近この周辺に幡羅郡家の郡庁院が存在するのではないかと注目されている。さらに、これらの遺跡が所在する台地下の低地には、同郡に属する別府条里遺跡（27）等が広がり、条里制に関わる痕跡をとどめている。

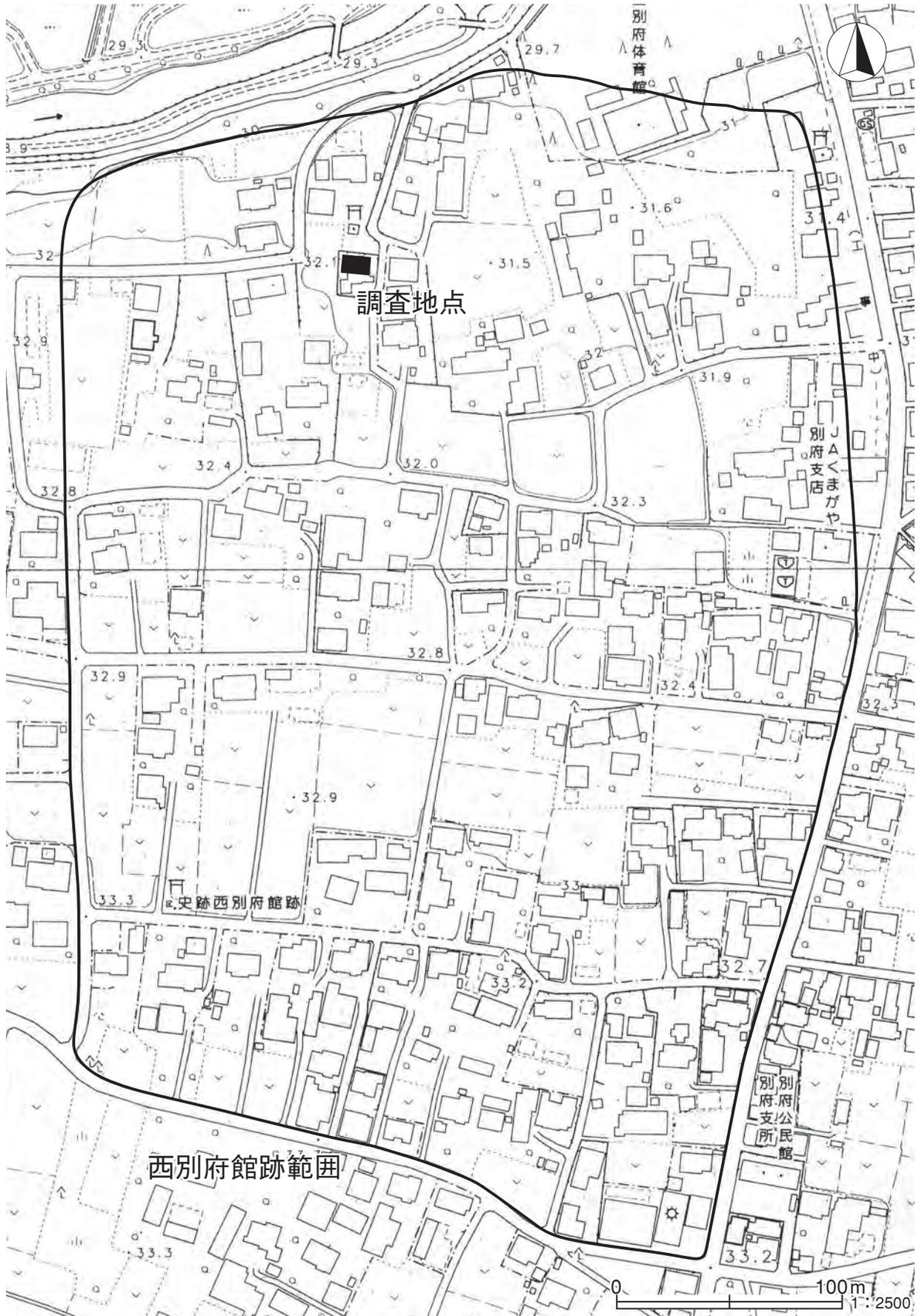
平安時代末から中世になると、武蔵七党やその他の在地武士団の館跡が点在するようになるが、実態については不明なものが多い。本報告の西別府館跡の近隣では、櫛挽台地に別府城跡（28）、別府氏館跡（29）、新荒川扇状地に玉井陣屋跡（30）、奈良氏館跡（31）等がある。西別府館跡は、別府次郎行隆の二子、別府次郎行助から甲斐守頼重までの居館があったとされ、『新編武蔵風土記稿』には「別府氏の居住地と云」と記述がある。以前は土塁を一部残す状態であったが、現在は石標がその存在を示すのみである。別府城跡は、別府次郎行隆から天正年間行田市忍城に籠城した尾張守長清（別府顕清）の代まで数代別府氏の居館であったとされ、現在でも土塁と空堀が良く残っている。別府氏館跡は、小字名に残る仲廓の地名や別府氏開基の伝承をもつ香林寺の地にあることなどから別府氏一族の居館跡と考えられている。玉井陣屋跡は、玉井四郎資遠、同資重の居館であったと考えられている。奈良氏館跡は、奈良三郎の居館と伝えられる。また、新荒川扇状地にある三ヶ尻地区には、黒沢館跡（32）や、樋の上遺跡、若松遺跡（33）、社裏北遺跡（34）、社裏遺跡（35）、社裏南遺跡（36）といった土坑墓が多数検出された遺跡等、数多く中世の遺跡や遺物が確認されている。なお、中世に関しては依然として資料が不足している状態で、今後の資料の蓄積に期待されるといった状況である。

最後に、近世については、本遺跡近辺の櫛挽台地北東端に所在する西方遺跡（37）では、土坑墓群が検出されているほか、西別府廃寺内に検出された土坑墓群や竪穴遺構からは近世の陶磁器、瓦質土器、瓦、古銭等が出土している。近世についても中世と同様に、市内において調査例が見られるものの、不明な点が多いといった状況である。

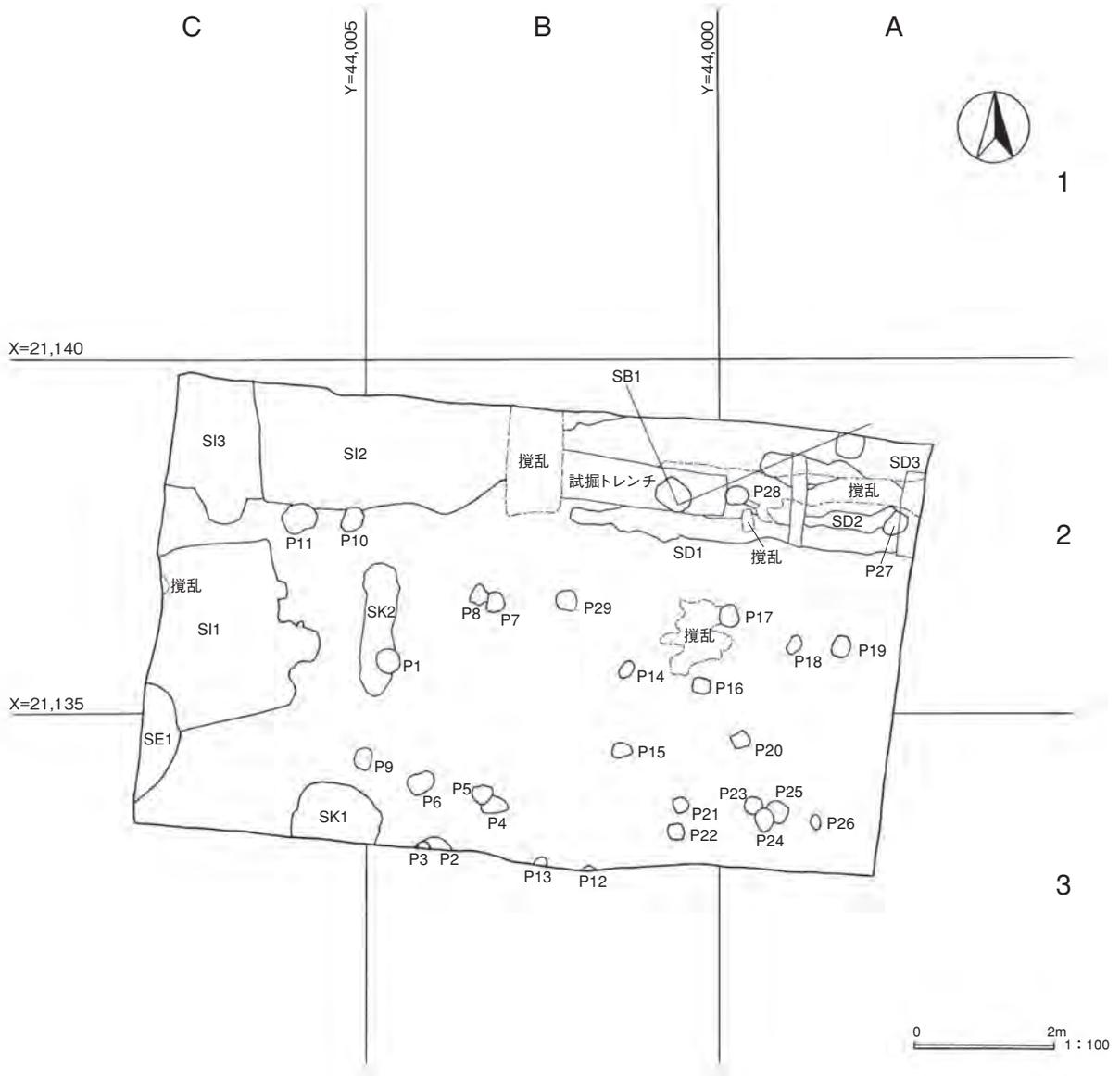
(2) 調査の方法

調査の方法は、現地での基準点測量については道路境界杭・民家建物を基準点、見返点として任意の測量を行い、建築物予定地全体を網羅できるように一辺5mのグリッドを設定して行った。なお、その後の整理・報告書作成の際には、国家方眼座標（国土標準平面直角座標第Ⅸ系）に合わせた。

実測作業にあたっては、交点を基準に水糸で1m間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による方法で行った。



第 18 図 西別府館跡調査地点位置図



第 19 図 西別府館跡調査区全測図

3 検出された遺構と遺物

(1) 竪穴建物跡

第1号竪穴建物跡（第20～22図、第5表）

調査区の西部中央に位置する。ほぼC-2グリッド内にあり一部がC-3グリッドまで及ぶ。第1号井戸跡と重複関係にあり、第1号井戸跡に切られている。

規模は、西部が調査区域外となっており、検出長軸2.00m、短軸2.52mを測り、平面プランは、長方形を呈すると推定される。主軸方位は、N-82°-Eを示す。

床までの深さは、土層断面観察から最大35cmを測る。埋土は、ほぼレンズ状に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。

床面は、ほぼ平坦である。また、貼床構造と考えられ、床面のほぼ全体に掘方が確認された。掘方は、床のほぼ全体を大きく土坑状に8～16cmの深さに掘りくぼめており、北半分ではさらに二段構造になる土坑状の掘り込みが確認され、その深さは床面から22cmの深さを測る。埋土を見ると、概ねハードローム土ブロック・粒子を含むややしまりのない黄褐色粘質土で埋めた後、ハードローム土と黒色土粒子で強く搗き固めて床面を形成したと考えられる。

壁溝は、長軸と考えられる南壁の一部で途切れるだけで全周する。その規模は、幅6～20cm、深さ4～8cmを測る。

柱穴と考えられるピットは検出されず、南壁の壁溝寄りに唯一ピットが検出された。その規模は、長軸24cm、短軸17cm、深さ7.5cmを測る。

カマドは、短軸と考えられる東壁に、炊口付近のみ確認された。平面検出長0.52m、焚口幅0.68m、煙道部は削平されて確認できなかった。カマドの炊口前には、長軸1.08m、短軸0.46m、深さ0.16mの土坑状の掘り込みが検出され、埋土に焼土粒を僅かに含んでいた。

貯蔵穴は、検出できなかった。

出土遺物は、土師器坏・甕・台付甕、須恵器坏・壺・甕、土錘、丸瓦等が出土し、カマド前や南壁付近に集中して検出された。なお、丸瓦は2個体分がカマド前で検出され、さらに左右に分かれた状態で検出されたことから、カマドの構築材として転用されたものと推定された。また、須恵器壺については、いわゆる壺Gといわれる形態のものであった。

時期は、9世紀前半と考えられる。

第2号竪穴建物跡（第23～26図、第6表）

調査区の北部中央西寄りに位置する。B・C-2グリッド内にある。第3号竪穴建物跡、第10・11号ピットと重複関係にあり、第10・11号ピットに切られ、第3号竪穴建物跡を切っている。

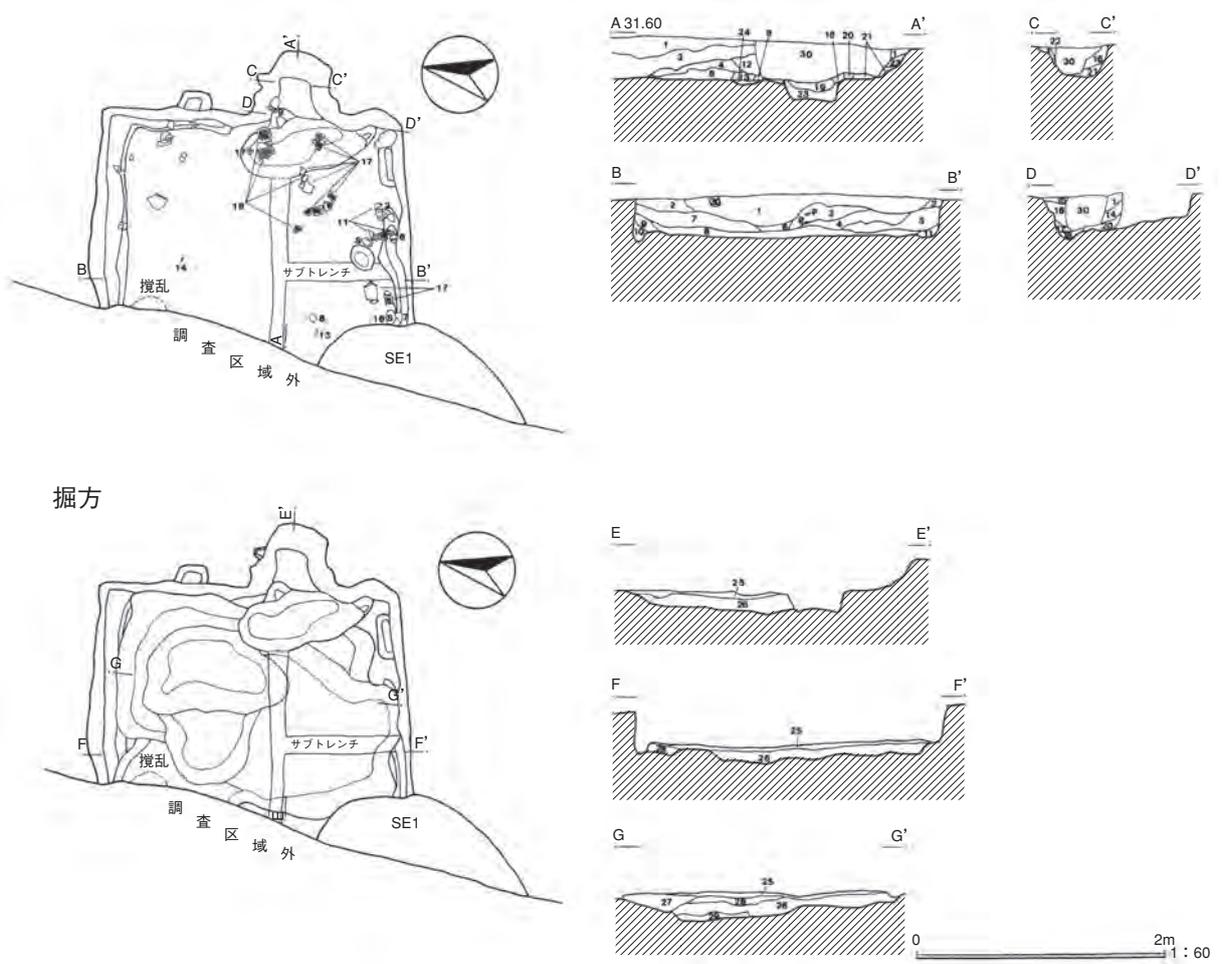
規模は、プランの約半分である北部が調査区域外となっており、長軸4.58m、検出短軸1.68mを測り、平面プランは、長方形を呈すると推定される。主軸方位は、N-90°-Eを示す。

床までの深さは、土層断面観察から最大34cmを測る。埋土は、ほぼレンズ状に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。

床面はほぼ平坦であるが、西壁付近及び中央部付近に大きな土坑状の掘り込み、さらに多数のピット

が掘り込まれ、確認された床面の範囲内では平坦部が少ない印象である。土坑状の掘り込みは、西壁付近のものが検出長軸1.76m、最大短軸0.68m、深さ0.08m前後、中央部のものが検出長軸0.68m、検出短軸0.30m、深さ0.23mを測る。また、貼床構造と考えられ、検出された床面のほぼ中央に大きな土坑状の掘方が確認された。掘方の構造は、長軸1.76m、短軸1.10m、深さ約0.06mの規程で隅丸形状に掘りくぼめた後、掘方内を炭化物粒及び焼土粒を含む黒褐色土で強く搗き固めて、床面を形成したと考えられる。

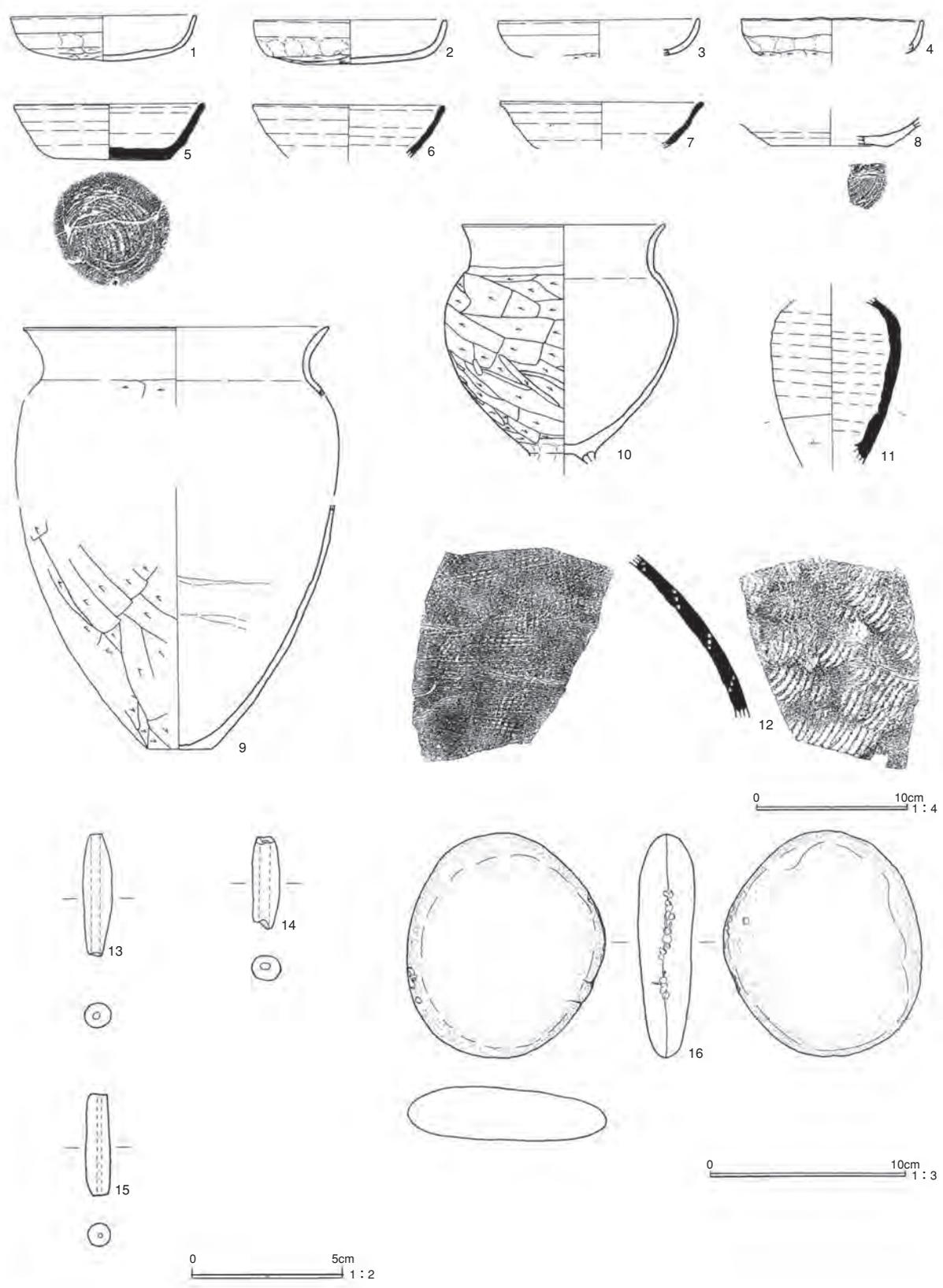
壁溝は、長軸と考えられる南壁に一部検出されただけである。その規模は、長さ1.22m、幅0.12~0.18m、深さ0.03~0.04mを測る。



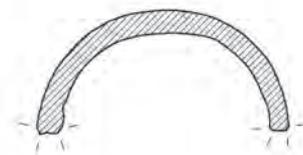
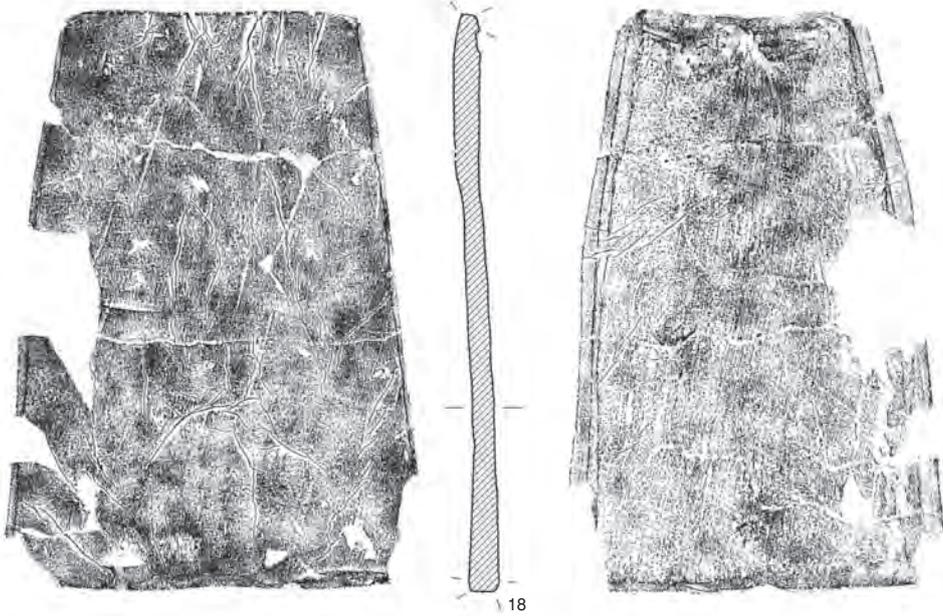
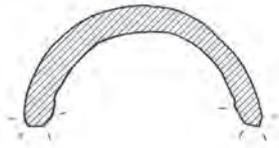
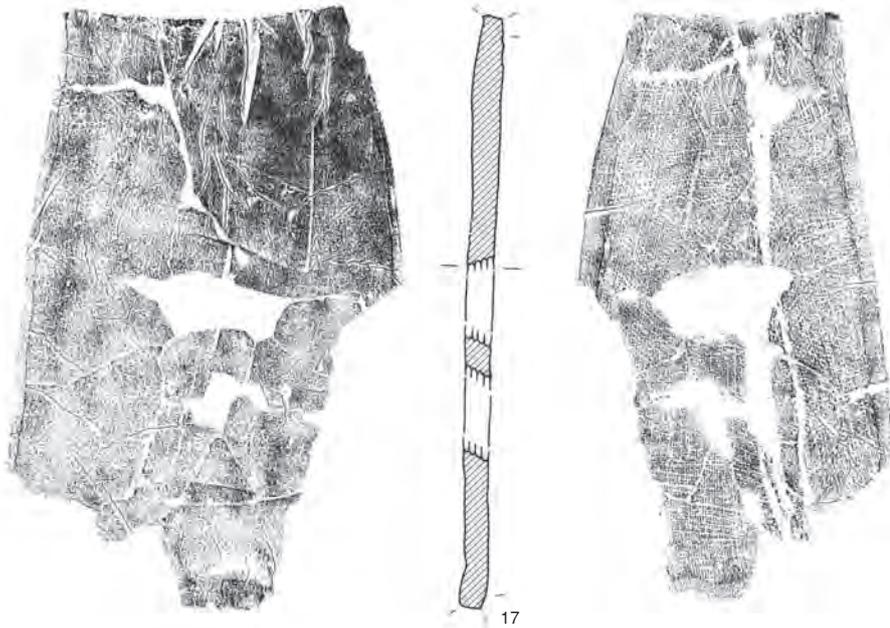
土層説明(A-A'~G-G')

- | | | | |
|----------------|---|------------|-------------------------------------|
| 1 黒褐色土 | ややしまりない、ソフトローム土粒子若干、ソフトローム土微粒子少量、焼土粒・炭化物粒わずか含 | 14 黒褐色土 | ソフトローム土ブロックわずか、ソフトローム土微粒子若干、焼土粒わずか含 |
| 2 黒褐色土 | しまりない、ソフトローム土微粒子ごくわずか含 | 15 暗灰黄色土 | ソフトローム土粒子多量、焼土粒若干含 |
| 3 黒褐色土 | ソフトローム土微粒子多量含、黒色土ブロック若干、焼土粒わずか含、土器包含 | 16 暗灰黄色土 | ソフトローム土微粒子少量、焼土粒非常に多く含、炭化物粒わずか含 |
| 4 黒褐色土 | ソフトローム土粒子・微粒子多量含みにぶい黄色帯びる、ソフトローム土ブロック大若干、焼土粒・炭化物粒わずか含、焼土塊わずか含 | 17 暗オリブ褐色土 | ソフトローム土微粒子少量、焼土粒多量含 |
| 5 黒色土 | 暗灰黄色土混じり、ソフトローム土ブロック若干、ソフトローム土粒子・微粒子少量、焼土粒わずか含 | 18 黒色土 | ソフトローム土粒子・微粒子少量、焼土粒少量含 |
| 6 黒色土 | 暗灰黄色土混じり、ソフトローム土粒子・微粒子少量、焼土塊わずか含 | 19 暗灰黄色土 | ソフトローム土微粒子若干、焼土粒わずか含 |
| 7 黒褐色土 | ソフトローム土ブロックわずか、ソフトローム土粒子若干、黒色土ブロックわずか含 | 20 黒褐色土 | ソフトローム土ブロック・粒子多量、焼土粒わずか含 |
| 8 オリーブ黒色土 | ソフトローム土ブロック・粒子若干含 | 21 暗灰黄色土 | ソフトローム土粒子・微粒子多量含 |
| 9 黒褐色土 | ソフトローム土ブロックわずか、黒色土ブロックわずか含 | 22 黒色土 | ソフトローム土微粒子若干、焼土粒・炭化物粒若干含 |
| 10 オリーブ黒色土 | ソフトローム土粒子わずか、黒色土ブロックわずか含 | 23 黒褐色土 | ハードローム土ブロック多量含、焼土粒わずか含 |
| 11 黒色土 | ソフトローム土ブロック・粒子多量含 | 24 | ハードローム土に黒色土が帯状に混入する層 |
| 12 暗灰黄色土 | ソフトローム土微粒子非常に多く含、ソフトローム土粒子若干、焼土粒ごくわずか含 | 25 | ハードローム土+黒色土粒子若干混入でつきかためた貼床土 |
| 13 ソフトローム土ブロック | | 26 黄褐色粘質土 | ややしまりない、若干粘性もつハードローム土ブロック・粒子混入 |
| | | 27 黒色土 | しまりない、ソフトローム土粒子多量に混じる、ハードローム土ブロック含 |
| | | 28 にぶい黄色土 | ややしまりない、ハードローム土ブロック多量含 |
| | | 29 黄褐色粘質土 | ややしまりない、ハードローム土ブロック多量含 |
| | | 30 攪乱 | |

第20図 西別府館跡第1号竪穴建物跡



第 21 図 西別府館跡第 1 号豎穴建物跡出土遺物 (1)



0 10cm 1:5

第 22 図 西別府館跡第 1 号豎穴建物跡出土遺物 (2)

第5表 西別府館跡第1号竪穴建物跡出土遺物観察表（第21・22図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器 坏	(12.5)	(3.0)	—	ADHM	B	明褐色	40%	
2	土師器 坏	13.0	3.0	—	A	B	外面：灰黄褐色、にぶい褐色 内面：にぶい褐色	70%	
3	土師器 坏	(13.6)	2.4	—	AH	B	明赤褐色	口縁部15%	
4	土師器 坏	(12.3)	2.6	—	ABE	B	にぶい赤褐色	30%	
5	須恵器 坏	12.8	3.9	7.8	ADGLN	B	外面：灰色、灰褐色 内面：灰色、にぶい黄橙色	100%	
6	須恵器 坏	(13.0)	3.6	—	ABFGN	A	灰色	15%	南比企産。
7	須恵器 坏	(13.7)	3.1	—	ADF	A	灰色	15%	南比企産。
8	須恵器 坏	—	1.4	(7.9)	AEGJL	C	橙色	底部20%	末野産。
9	土師器 甕	(20.4)	(28.8)	(4.3)	ABEGJ	A	橙色	口縁部25%、 胴部下半破片	
10	土師器 台付甕	13.7	16.1	—	ABEIKN	A	明赤褐色、にぶい黄橙色	90%	
11	須恵器 壺	—	11.3	—	ABGN	A	灰色	胴部50%	壺G。
12	須恵器 甕	厚さ0.7~1.0			AGLN	A	外面：灰色、褐色 内面：暗青灰色	胴部破片	外面：カキ目状調整痕。 内面：青海波あて具痕。
13	土錘	最大長4.2	最大幅1.0	孔径0.25	重量3.1	A	にぶい黄色、暗灰黄色	100%	
14	土錘	最大長3.2	最大幅0.9	孔径0.3	重量2.5	A	明赤褐色、橙色	両端欠損	
15	土錘	最大長3.5	最大幅0.8	孔径0.1	重量2.7	A	にぶい褐色	100%	
16	磨石	最大長11.6 最大幅10.1 最大厚2.8			重量4.82			100%	一面使用、敲打器兼ねる。
17	丸瓦	広端幅(19.3) 狭端幅10.5 全長39.0 厚さ1.4~1.9	ABJLMN		B	凸面：灰色 凹面：褐灰色、灰黄色	70%	凸面：ヘラナデ。 凹面：布目痕7×5本/cm ² 、布織じ目痕、糸切り痕。 粘土板一枚造り。	
18	丸瓦	広端幅(18.8) 狭端幅(10.9) 全長37.7 厚さ1.1~1.9	ABDHJN		B	にぶい黄橙色、橙色、 黄灰色、明黄褐色	90%	凸面：ヘラナデ 凹面：布目痕5×5本/cm ² 、糸切り痕。 粘土板一枚造り。	

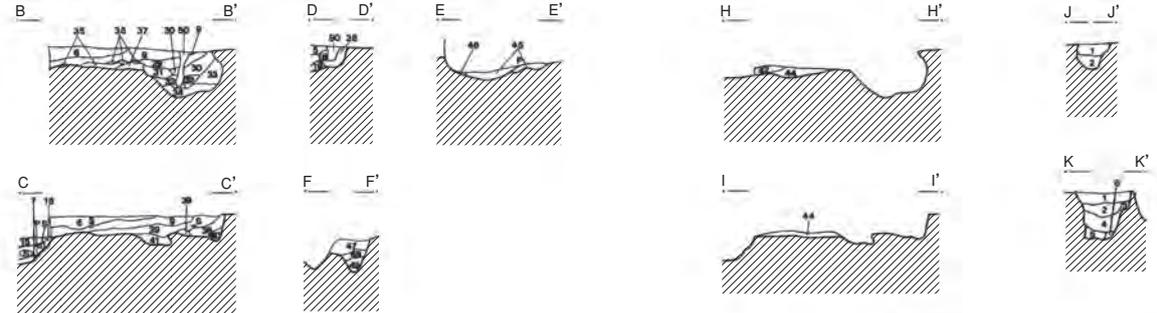
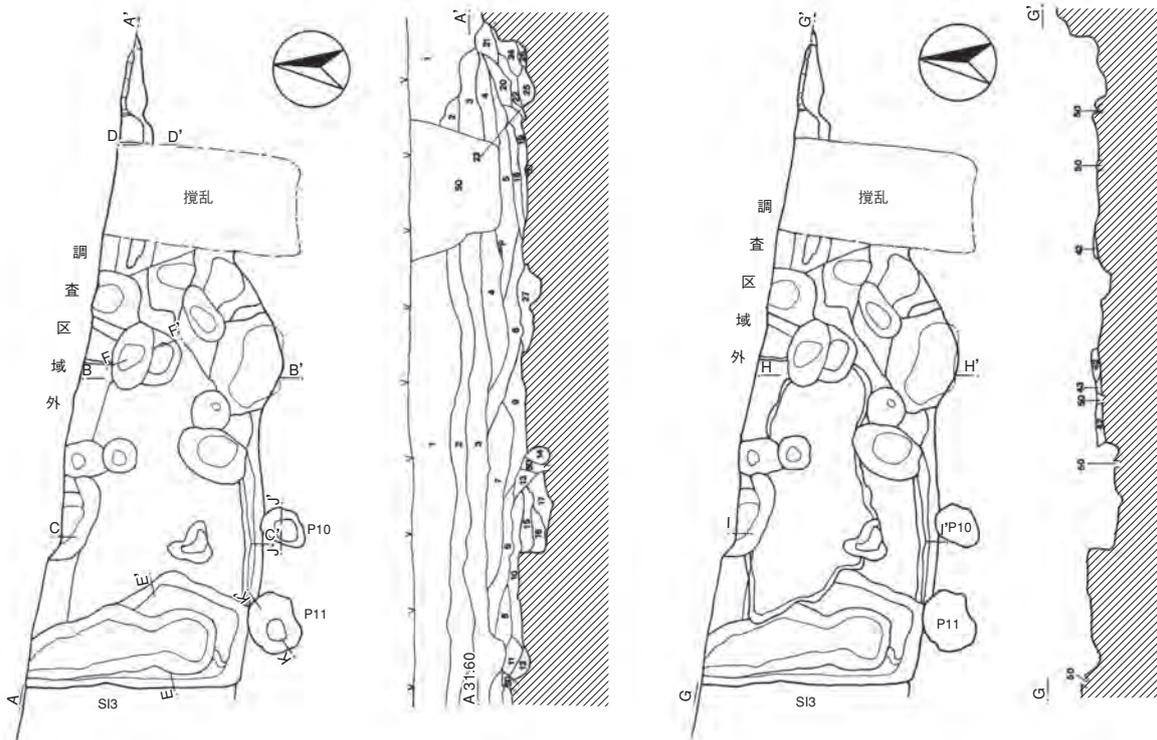
柱穴の可能性のあるピットが1基検出され、その規模は、長軸53cm、短軸30cm、深さ24cmを測る。このピットに接してほぼ同規模のピットが1基検出され、検出時に焼土がピット全体に広がっていたことが確認された。いずれかのピットが柱穴になると考えられると共に、建替えの関係にある可能性も考えられる。ピットについては、他に4基検出された。また、貼床の掘方にかかるピットは、いずれも貼床形成後に掘削されたものと考えられる。

カマドは、短軸と考えられる東壁に、炊口から煙出しと考えられる立ち上がりまで検出された。その規模は、検出長1.75mを測る。煙道は、炊口から約1.2mまではフラットで、その先は土坑状にやや深く掘り込まれ、煙出しに向かって段を持ち立ち上がる断面構造である。カマドの炊口前には、推定短軸の上面幅30cm、深さ5cmの土坑状の掘り込みが検出され、埋土に炭化物粒及び焼土粒を僅かに含んでいた。また、カマド右側に突起状の掘方が確認されたことから、カマド袖の痕跡と推定される。

貯蔵穴と推定される掘方がカマドに向かって右手の建物南東隅に検出された。平面プランは楕円形を呈し、規模は長軸0.72m、短軸0.58m、深さ0.22mを測る。掘方は、南壁の対してややオーバーハングの箇所が確認された。なお、この掘方からカマドにかけては、ピット状の掘り込みがいくつか認められた。

出土遺物は、土師器甕・台付甕、須恵器坏・椀・皿・甕、ロクロ土師器坏、土錘等が出土し、カマド右袖前から貯蔵穴にかけて特に集中して検出された。須恵器坏・椀の占める割合が高く、土師器は甕や台付甕が多くを占めたことから、須恵器と土師器の機能分化が明瞭化していたことが考えられる。また、西壁に近い所で長さ42cm、最大幅7cmの炭化材が検出された。

時期は、9世紀後半と考えられる。



土層説明(A-A'~I-I')

- S 1 2
- 1 表土 礫混じり
 - 2 灰色土 しまりない、礫若干含
 - 3 オリーブ黒色土 ややしまらない
 - 4 暗オリーブ褐色土 ソフトローム土微粒子わずか、焼土粒・炭化物粒若干含
 - 5 黒褐色土 ハードローム土粒子若干、焼土粒・炭化物粒若干含、遺物包含
 - 6 黒褐色土 ソフトローム土粒子・微粒子わずか、炭化物粒少量、焼土粒若干含
 - 7 黒褐色土 ソフトローム土粒子・微粒子若干、炭化物粒・焼土粒わずか、礫若干含
 - 8 暗オリーブ褐色土 ソフトローム土微粒子わずか、焼土粒・炭化物粒わずか含
 - 9 黒褐色土 ソフトローム土微粒子若干、炭化物粒・焼土粒少量含、礫含
 - 10 黒褐色土 ソフトローム土粒子・微粒子若干、炭化物粒・焼土粒多量含
 - 11 黒褐色土 ソフトローム土粒子わずか、焼土粒わずか、炭化物粒わずか含
 - 12 黒褐色土 ソフトローム土粒子若干、炭化物粒わずか含
 - 13 オリーブ黒色土 ハードローム土粒子若干、焼土粒若干含
 - 14 ソフトローム土ブロック・粒子層 黒褐色土若干混入
 - 15 黒褐色土 ソフトローム土粒子少量、炭化物粒・焼土粒若干含
 - 16 黒褐色土 ハードローム土ブロック少量、礫含、土器包含
 - 17 黒褐色土 ハードローム土粒子多量、焼土粒・焼土塊少量、炭化物粒わずか含
 - 18 黒褐色土 ハードローム土粒子わずか、ソフトローム土微粒子少量、焼土粒わずか含
 - 19 オリーブ黒色土 ソフトローム土粒子・微粒子若干含
 - 20 黒褐色土 ソフトローム土微粒子若干、焼土粒わずか含
 - 21 黄灰色土 ソフトローム土粒子・微粒子若干、炭化物粒・焼土粒若干含
 - 22 褐色土 ソフトローム土粒子わずか、焼土粒わずか含
 - 23 暗灰黄色土 ソフトローム土微粒子多量含、焼土粒若干含
 - 24 黒褐色土 ソフトローム土ブロック多量含、炭化物粒若干含
 - 25 黒褐色土 ややしまらない、ソフトローム土ブロック・粒子若干含
 - 26 灰色土 ソフトローム土ブロック混じる
 - 27 黒褐色土 ややしめる、ソフトローム土粒子少量、炭化物粒・焼土粒わずか含
 - 28 オリーブ黒色土 ソフトローム土粒子・微粒子多量、炭化物粒・焼土粒わずか含
 - 29 黒色土 ソフトローム土ブロックわずか、ソフトローム土微粒子若干、炭化物粒・焼土粒わずか、礫含
 - 30 黒褐色土 ソフトローム土粒子・ハードローム土粒子若干、炭化物粒・焼土粒わずか含

- 31 灰黄褐色土 ハードローム土ブロック若干、黒褐色土粒子少量含、炭化物粒わずか含
- 32 暗褐色土 ソフトローム土粒子若干含
- 33 黒褐色土 ハードローム土粒子わずか含
- 34 黒色土 ハードローム土ブロック少量、ソフトローム土粒子若干、焼土粒わずか含
- 35 ハードローム土ブロック
- 36 オリーブ黒色土 ソフトローム土粒子若干、焼土粒少量、炭化物粒若干含
- 37 暗灰黄色土 ややしまらない、ソフトローム土微粒子若干含
- 38 暗オリーブ褐色土 やや黄褐色帯びる、ソフトローム土混じる
- 39 黒色土 ソフトローム土ブロック大含
- 40 黄褐色土 ソフトローム土多量混じる
- 41 黒褐色土 ソフトローム土ブロック多量含
- 42 黒褐色土 かたくしまる、炭化物粒・焼土粒混じる
- 43 黒褐色土 ややしまらない、ソフトローム土微粒子多量含
- 44 ハードローム土 黒色土粒子若干混入
- 45 黒色土 ソフトローム土粒子少量、ハードローム土ブロック若干含、土器包含
- 46 黄褐色土 黒褐色土ブロック若干含
- 47 黒褐色土 ソフトローム土微粒子若干、炭化物粒・焼土粒若干含
- 48 黒色土 ソフトローム土粒子わずか含
- 49 黒褐色土 ソフトローム土ブロック・粒子少量含
- 50 攪乱

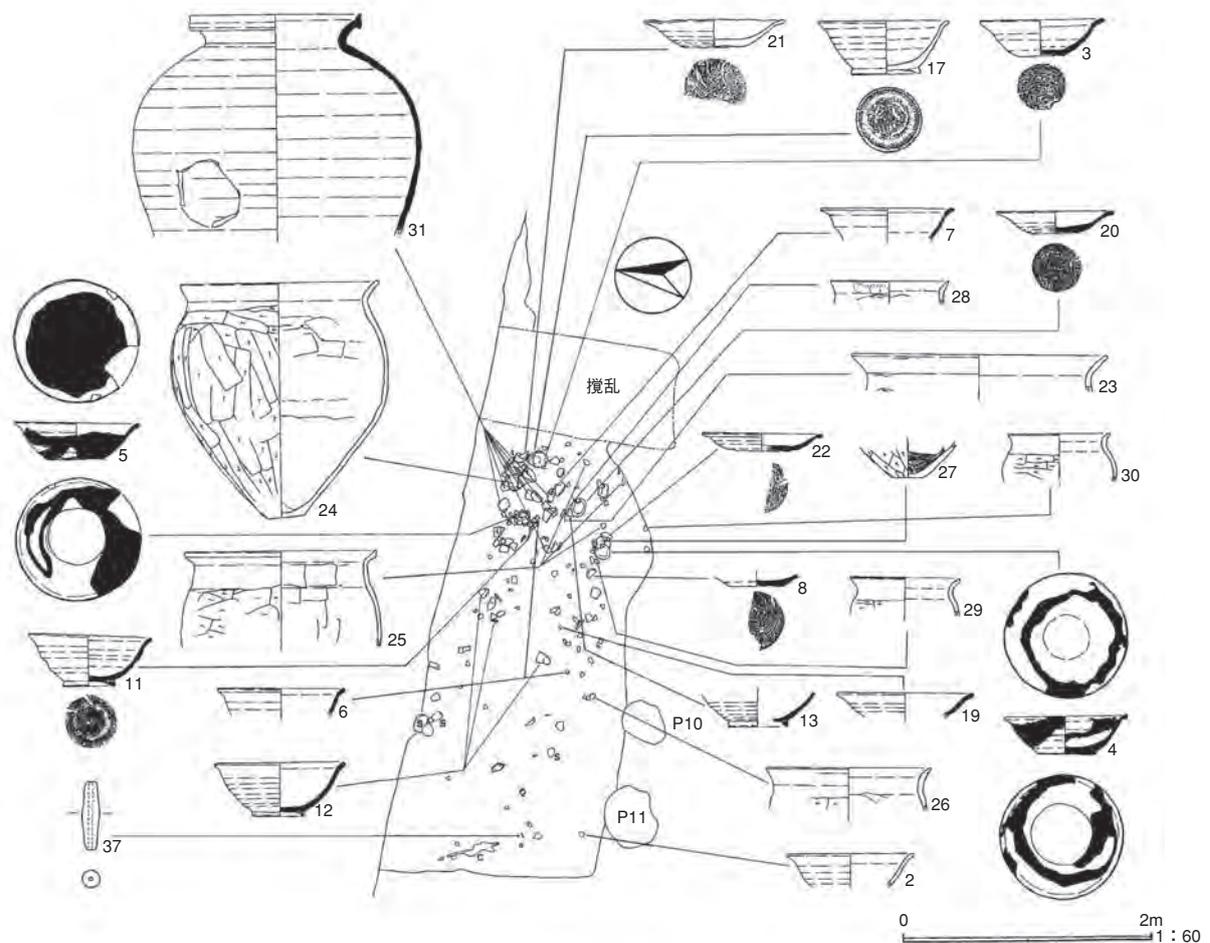
土層説明(J-J')

- P 10
- 1 黒褐色土 ソフトローム土ブロック・粒子多量、炭化物粒若干含
- 2 黄褐色土 黒褐色土粒子ごくわずか含

土層説明(K-K')

- P 11
- 1 黄灰色土 ソフトローム土粒子・微粒子少量、炭化物粒・焼土粒わずか含
- 2 黒褐色土 ソフトローム土粒子・微粒子若干含
- 3 にぶい黄色土 黄灰色土ブロック含
- 4 オリーブ黒色土 ソフトローム土粒子・微粒子若干含
- 5 黒色土 ソフトローム土粒子わずか含
- 6 灰黄色土 オリーブ黒色土粒子わずか含

第 23 図 西別府館跡第 2 号竪穴建物跡、第 10・11 号ピット



第24図 西別府館跡第2号竪穴建物跡遺物出土状況

第3号竪穴建物跡（第27・28図、第7表）

調査区の北西部隅に位置する。C-2グリッド内にある。第2号竪穴建物跡と重複関係にあり、第2号竪穴建物跡に切られる。

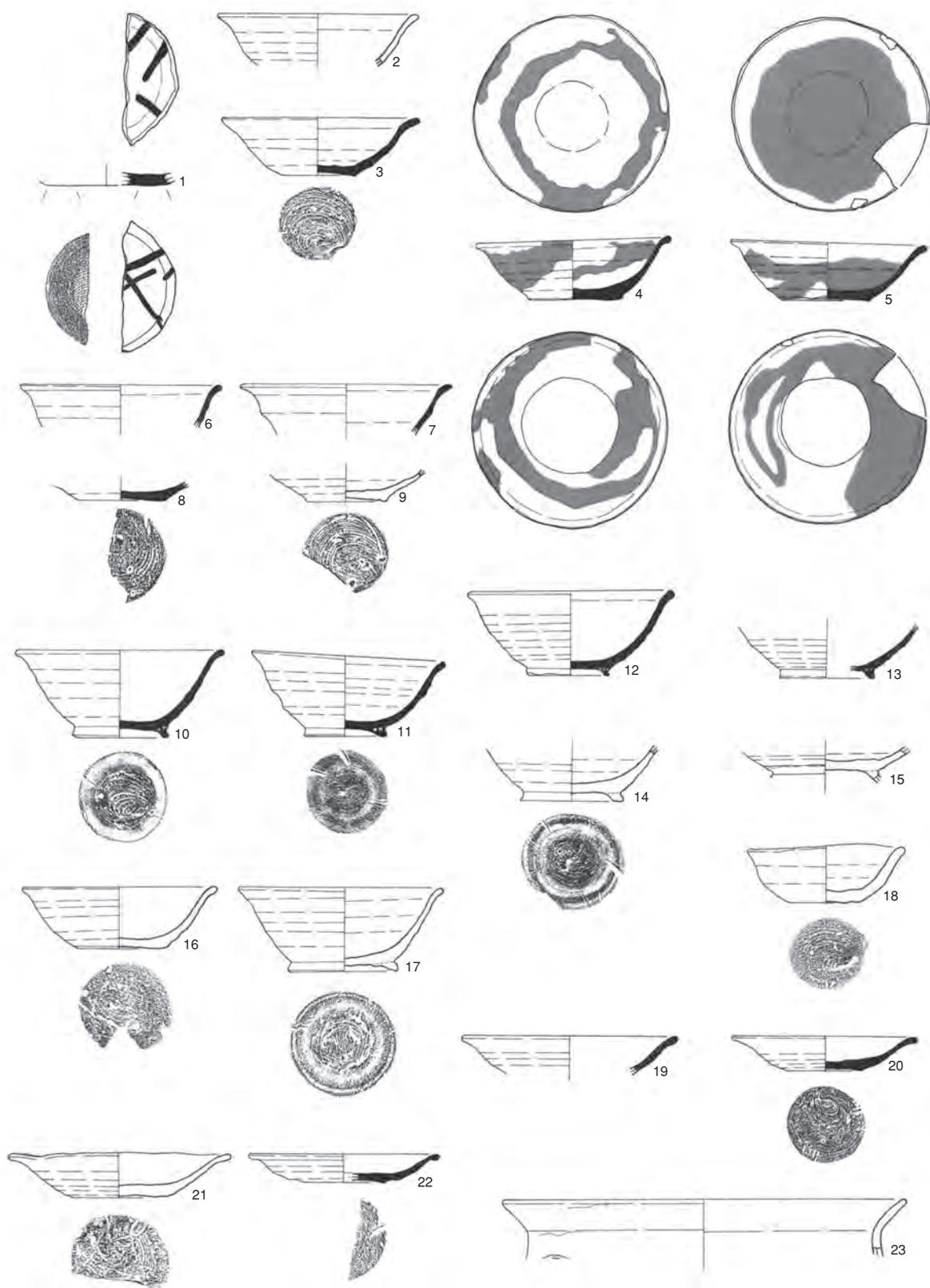
規模は、プランの東部が第2号竪穴建物跡に切れ、西部及び北部が調査区域外となっており、検出長軸1.64m、検出短軸1.35mを測り、平面プランは、方形を呈すると推定される。主軸方位は、N-170°-Eを示す。

床までの深さは、遺構確認面から最大10cmを測る。埋土は、ソフトローム土ブロックが多量に含まれ、ランダムな層位であることから、人為的に埋め戻されたと考えられる。

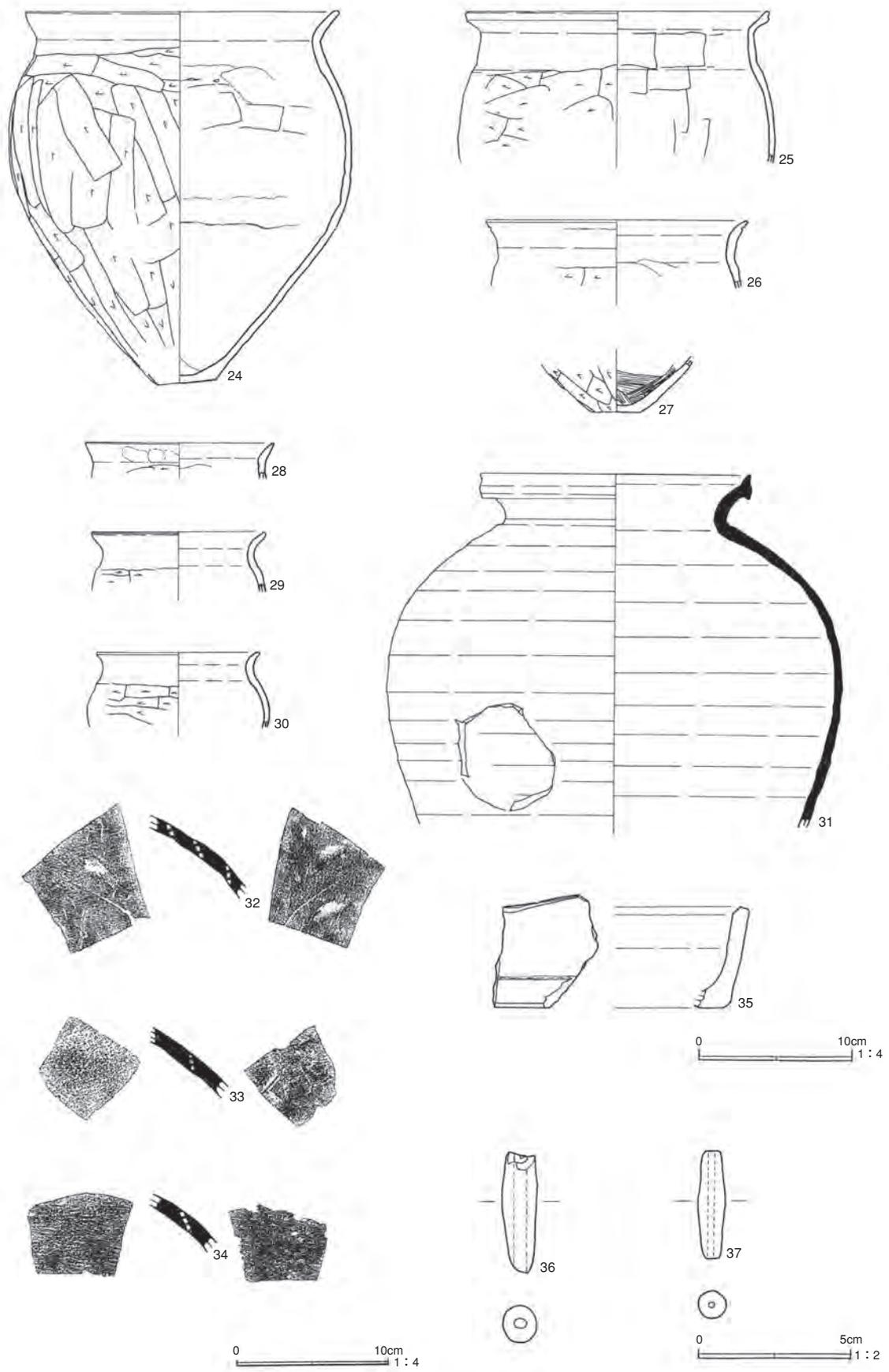
床面は凹凸が激しく、東部及び北部付近が大きく土坑状に掘り込まれた上に、さらに数基のピットが掘り込まれ、確認された床面の範囲内では平坦部が少ない印象である。なお、検出された床面の土坑状の掘方は貼床の掘方とも考えられ、その場合は、カマド以外の土層は貼床の埋土と考えられる。

壁溝は、検出できなかった。

柱穴の可能性のあるピットが西部の調査区域外にまたがる状態で1基検出され、その規模は、検出長軸36cm、検出短軸17cm、推定の深さ30cmを測る。ピットについては、他に3基検出され、カマド前に1基、北部の調査区域外にまたがる状態で2基検出された。



第25图 西別府館跡第2号豎穴建物跡出土遺物(1)



第26图 西别府馆跡第2号豎穴建物跡出土遺物(2)

第6表 西別府館跡第2号竪穴建物跡出土遺物観察表（第25・26図）

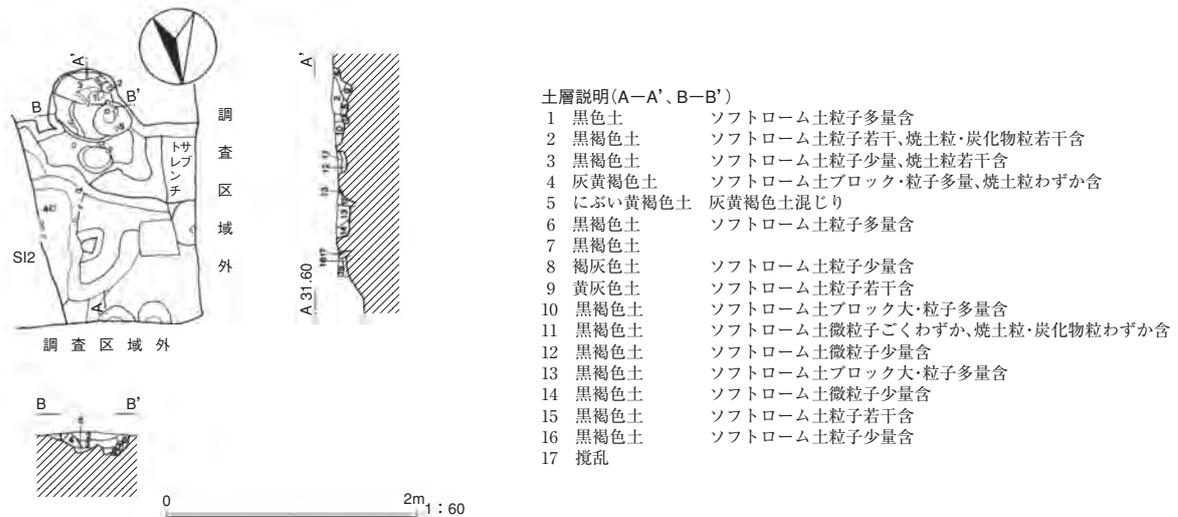
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器 環	—	0.3	(8.0)	ABF	A	灰色	底部25%	南比企産。
2	須恵器 環	(13.4)	3.5	—	ABGL	A	黄灰色	口縁部15%	末野産。
3	須恵器 環	13.2	3.9	4.9	ABLN	A	外面：灰色 内面：黄灰色、灰色	100%	末野産。
4	須恵器 環	13.0	4.1	6.2	BDGHLN	B	灰色、にぶい橙色	100%	内外面に煤付着することから灯明皿用途。 末野産。
5	須恵器 環	13.1	3.9	5.8	ADGLN	B	灰色、黄灰色	100%	内外面に煤付着することから灯明皿用途。 末野産。
6	須恵器 環	(13.4)	2.8	—	ABL	A	灰色	口縁部20%	末野産。
7	須恵器 環	(14.1)	3.4	—	ABDL	A	青灰色	20%	末野産。
8	須恵器 環	—	1.0	(6.0)	ABEL	A	灰色	底部50%	末野産。
9	須恵器 環	—	1.8	(5.3)	ADEGLN	C	にぶい褐色、にぶい黄褐色	30%	末野産。
10	須恵器 椀	(14.0)	5.9	(6.5)	ABDL	A	褐灰色、灰色	30%	末野産。
11	須恵器 椀	12.9	5.8	5.4	AGLN	A	灰色	60%	末野産。
12	須恵器 椀	13.7	5.7	5.5	ABDGLN	A	灰黄色、灰色	80%	末野産。
13	須恵器 椀	—	3.5	(6.3)	ABL	A	灰色	15%	末野産。
14	須恵器 椀	—	3.5	6.8	ABEHL	B	外面：にぶい橙色 内面：暗灰黄色	40%	
15	須恵器 椀	—	1.7	—	ABEJKN	B	にぶい黄褐色、橙色	30%	
16	須恵器 環	13.0	4.1	6.2	ADL	C	外面：褐灰色、灰黄褐色 内面：灰黄色、にぶい褐色	85%	
17	須恵器 椀	13.7	5.7	7.2	ABDL	B	黄灰色、にぶい黄褐色、橙色	100%	
18	口ク土師器 環	10.5	3.9	4.8	BEHJ	A	外面：灰黄褐色、にぶい褐色 内面：にぶい黄褐色、灰黄褐色	70%	内外面に煤付着箇所あり。
19	須恵器 環(皿)	(14.4)	2.6	—	ABGL	A	灰色	15%	末野産。
20	須恵器 皿	12.3	2.3	4.9	ABGL	A	青灰色	100%	末野産。
21	須恵器 皿	(14.8)	3.0	6.4	ABDHLN	B	外面：にぶい黄褐色、灰黄褐色 内面：にぶい褐色、黄灰色	50%	末野産。
22	須恵器 皿	(12.7)	1.9	(5.4)	ABDLN	B	灰褐色	35%	末野産。
23	土師器 甕	(26.9)	3.9	—	ABEGKN	A	明赤褐色	口縁部10%	
24	土師器 甕	20.7	25.1	3.8	ABEHLK	A	橙色、にぶい黄褐色	90%	胴部外面に煤付着。
25	土師器 甕	(20.2)	10.1	—	ABEJ	A	外面：褐色、橙色、にぶい黄褐色 内面：明赤褐色、浅黄褐色、灰黄色	口縁部～胴部 上半25%	
26	土師器 甕	(17.4)	2.4	—	ABK	A	外面：橙色、にぶい黄褐色 内面：橙色	口縁部 10%以下	
27	土師器 甕	—	3.3	3.2	ABEK	A	外面：にぶい黄褐色 内面：橙色	底部破片	
28	土師器 台付甕	(12.5)	2.3	—	ABDK	A	明赤褐色	口縁部15%	
29	土師器 台付甕	(11.5)	4.0	—	AEJ	A	外面：にぶい褐色、灰黄褐色 内面：黒褐色	口縁部20%	
30	土師器 台付甕	(10.7)	5.0	—	BEI	B	外面：明赤褐色 内面：褐色、橙色	口縁部～胴部 上半20%	内外面に煤付着。
31	須恵器 甕	(18.0)	23.6	—	ABLN	A	灰色	60%	胴部下半に故意による穿孔（径約 7cm）あり。末野産。
32	須恵器 甕	厚さ0.7～0.9			AFGHN	A	外面：灰オリーブ色 内面：黄灰色	胴部破片	外面：ヨコナデ。 内面：ヘラ削り後一部ヨコナデ。 南比企産
33	須恵器 甕	厚さ0.8～1.0			AEG	A	青灰色	胴部破片	内面：あて具痕。 外面に自然釉。
34	須恵器 甕	厚さ0.7～0.9			ABGM	A	灰色	胴部(上半) 破片	内面：あて具痕ナデ消し。 外面に自然釉。
35	陶器 香炉または火鉢	—	7.6	—	ABEHJ	A	外面：明赤褐色、灰褐色 内面：灰黄褐色、黒色	胴部破片	混入遺物。
36	土錘	最大長4.0 最大幅1.1 孔径0.4 重量5.4				A	橙色	75%	
37	土錘	最大長3.6 最大幅0.9 孔径0.2 重量2.8				A	浅黄色	100%	

カマドは、南壁に、炊口付近のみ検出された。その規模は、平面検出長0.44m、焚口幅0.69m、煙道部は削平され確認できなかつた。また、カマド左側に袖状の掘り残しが確認され、カマド袖の痕跡と考えられる。カマドの炊口前には、長軸0.27m、短軸0.22m、深さ0.08mのピットが検出され、埋土に炭化物粒及び焼土粒を僅かに含んでいた。

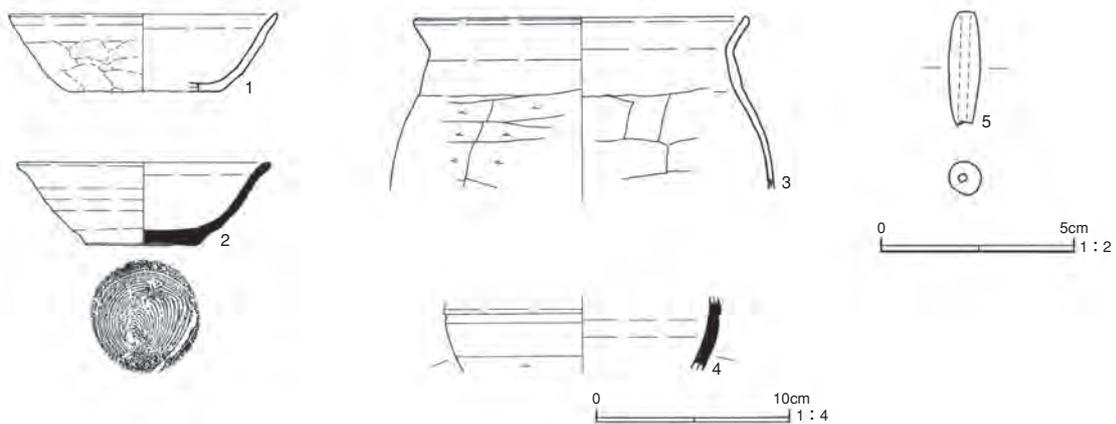
貯蔵穴は検出できなかった。

出土遺物は、土師器坏・甕、須恵器坏・壺（または甕）、土錘等が出土し、そのほとんどがカマド内で集中して検出された。なお、須恵器壺（または甕）は、混入遺物と考えられる。

時期は、第2号竪穴建物跡との重複関係を加味して、9世紀後半でも早い段階と考えられる。



第27図 西別府館跡第3号竪穴建物跡



第28図 西別府館跡第3号竪穴建物跡出土遺物

第7表 西別府館跡第3号竪穴建物跡出土遺物観察表（第28図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器 坏	(14.0)	4.1	(7.6)	ABEK	A	外面：橙色、にぶい赤橙色 内面：橙色、にぶい黄橙色	15%	
2	須恵器 坏	(13.3)	4.4	6.0	ABDEHLN	B	灰色、灰黄色、にぶい黄橙色	35%	未野産。
3	土師器 甕	(17.1)	9.2	—	AEJ	A	外面：にぶい橙色、にぶい褐色 内面：にぶい褐色	口縁部～胴部 上半20%	
4	須恵器 小壺または甕	—	3.8	—	FGN	B	灰色	胴部破片	混入遺物。 南比企産。
5	土錘	最大長3.0	最大幅0.8	孔径0.2	重量2.0	B	橙色、にぶい黄褐色	100%	

(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第29図)

調査区の北東部に位置する。A・B-2グリッド内にある。第2・3号溝跡と重複関係にあるが、直接切り合いの関係にはない。

大部分が北の調査区域外にあると推定され、柱穴が2基検出されているだけのため、建物の詳細は不明である。規模は、2柱穴の柱間が、約2.6mを測る。主軸方位は、検出された2柱穴を結ぶ側が梁行であると仮定すると、N-21°-Wを示す。

柱穴は隅丸長方形の掘方で、P1が長軸0.50m、短軸0.40m、深さ0.26m、P2が推定長軸の検出長0.34m、短軸0.38m、深さ0.56mを測る。埋土は、ソフトローム土ブロックや黒褐色土ブロックが含まれ、ランダムな層位であることから、人為的に埋め戻されたと考えられる。

柱は、確認できなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、不明である。

(3) 土坑

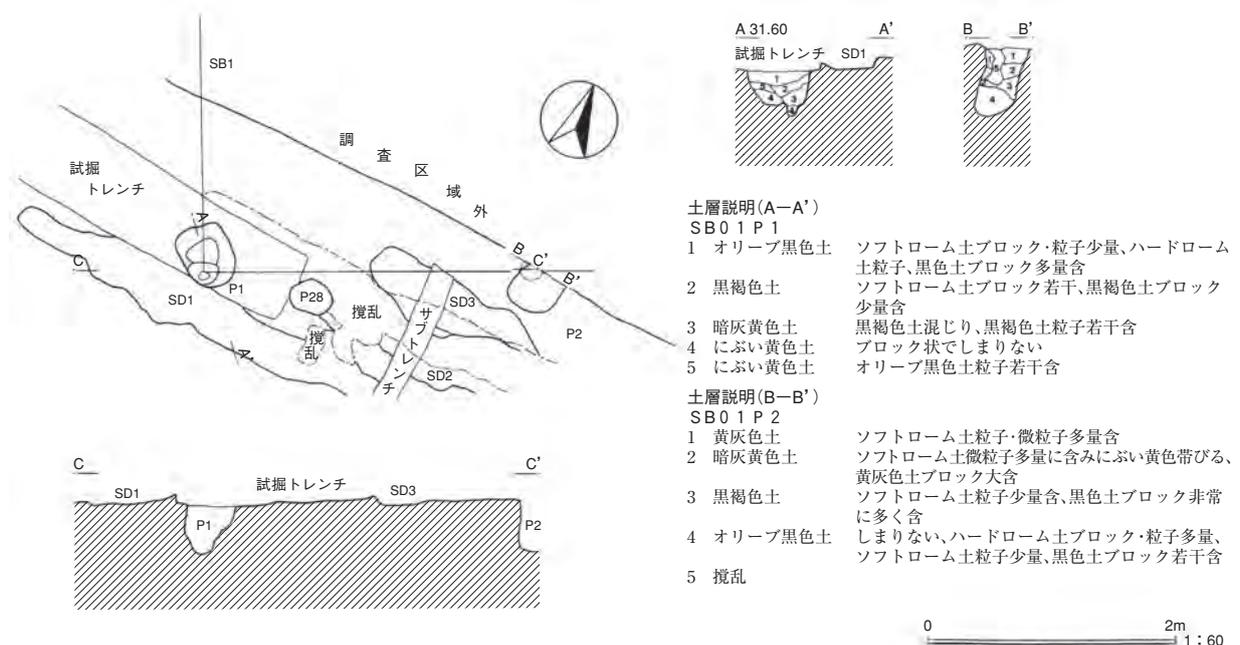
第1号土坑 (第30図)

調査区の南西部に位置する。B・C-3グリッド内にある。

規模は、南部が調査区域外となっており不明であるが、検出長軸1.27m、検出短軸0.82mを測る。平面プランは、プランが確認できた箇所やや不正形な楕円形を呈する。深さは、土層断面観察から、最深で44cmを測る。

埋土は、ほぼレンズ状に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。

床面にピット状の掘り込みが4基確認できた。



第29図 西別府館跡第1号掘立柱建物跡

出土遺物は、土師器坏・甕等の小破片が数点検出できたが、図示できるものはなかった。

時期は、古代に所属すると考えられる。

第2号土坑（第30・31図、第8表）

調査区の中央部やや西寄りに位置する。B・C - 2グリッド内にある。第1号ピットと重複関係にあり、第1号ピットに切られる。

規模は、長軸1.90m、短軸0.50mを測る。平面プランは、隅丸長方形を呈する。深さは、確認面から、最深で37cmを測る。主軸方位は、N-4°-Eを示す。

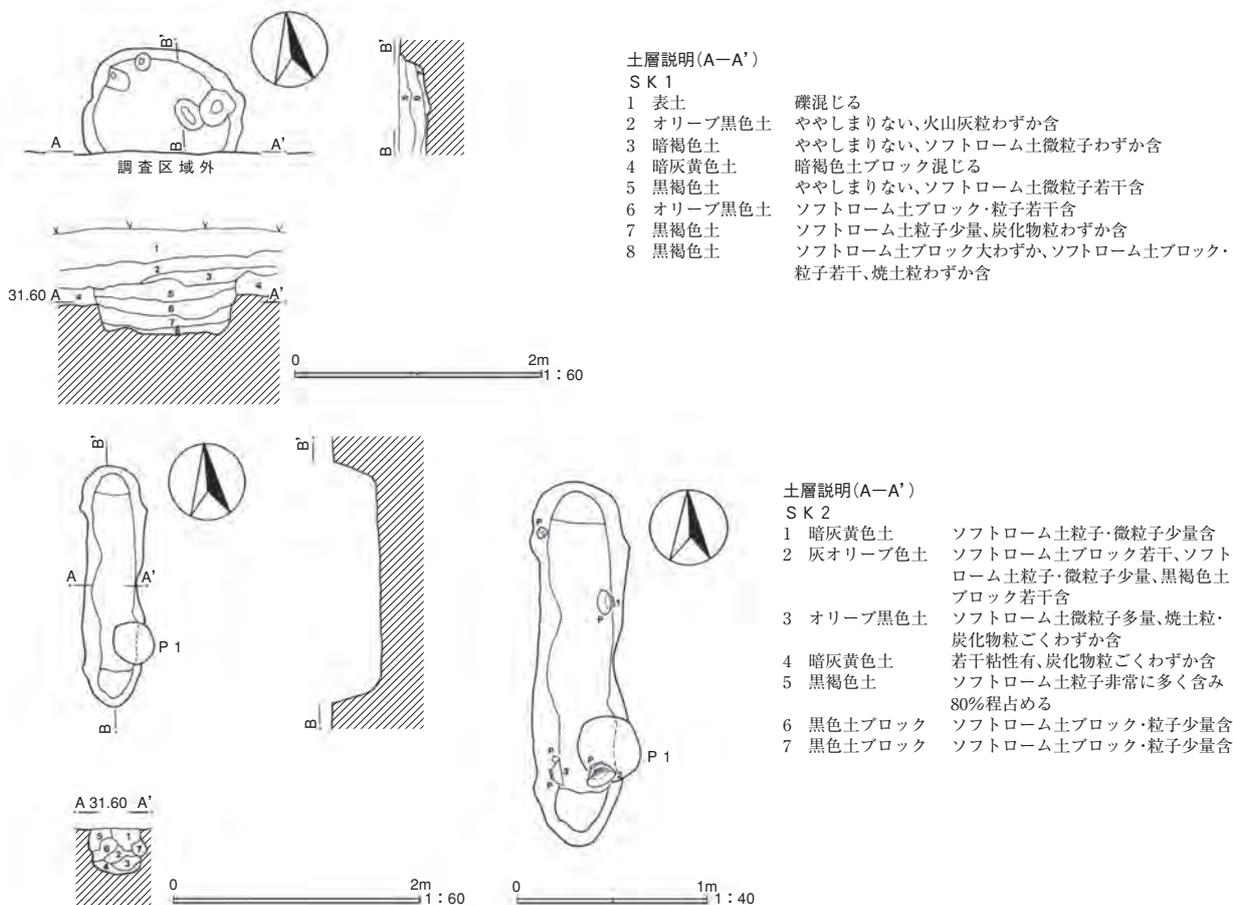
埋土は、ソフトローム土ブロックや黒褐色土ブロックが含まれ、ランダムな層位であることから、人為的に埋め戻されたと考えられる。

掘方はやや袋状の形状を示す箇所があり、床面はほぼ平坦である。

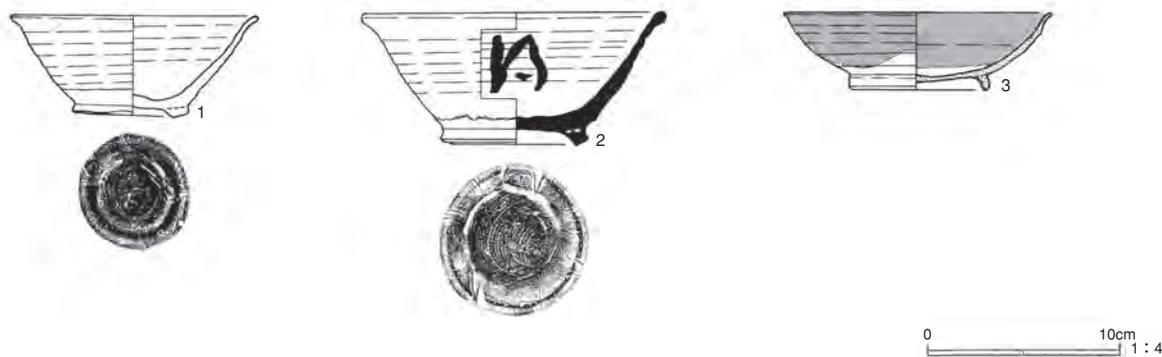
出土遺物は、須恵器椀、灰釉陶器椀等が検出され、須恵器椀のうち1点の体部内面には、墨書「得」？が見られた。また、これらの遺物出土状況は、北寄りの東壁に須恵器椀1点、南端では須恵器椀1点が東壁、灰釉陶器椀1点が西壁に検出された。

時期は、9世紀後半と考えられる。

なお、本遺構は、遺物の出土状況、器種構成、埋土の状況等から、伸展葬の土坑墓の可能性はある。よって、出土遺物は副葬品であり、頭部付近に須恵器椀1点、足元に須恵器椀、灰釉陶器椀を各々1点ずつ副葬したと考えられる。



第30図 西別府館跡第1・2号土坑、第2号土坑遺物出土状況



第 31 図 西別府館跡第 2 号土坑出土遺物

第 8 表 西別府館跡第 2 号土坑出土遺物観察表 (第 31 図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器 椀	13.0	5.4	6.0	AGKLN	B	灰色、灰黄色、浅黄色	95%	末野産。
2	須恵器 椀	15.9	7.1	7.7	ABDHJK	B	外面：灰白色、黄灰色 内面：灰色	100%	体部内面に墨書「得」?
3	灰釉陶器 椀	14.1	4.1	7.3	AB	A	灰白色	100%	内外面とも釉葉ハケヌリ。 猿投窯黒笹90号窯式。

(4) ピット

土坑は29基検出された。ピットの多くは調査区の中央部から東部にかけての、竪穴建物跡、土坑、溝跡、井戸跡が検出された箇所以外の空間に点在して検出された。これらのピットの位置には規則性がなく、掘立柱建物跡の柱穴の可能性は希薄である。また、出土遺物については、検出できたピットは少なく僅かに4基で、検出された遺物は小破片で図示できたものはP 8出土の平瓦の1点であった。

よって、時期を特定するには困難なピットが大多数である。詳細について、一覧表にて記述する(第23・32～34図、第9・10表)。

(5) 溝跡

溝跡は3条検出された。いずれの溝跡も調査区の北東隅に検出され、互いに近接して位置する。

第1号溝跡(第34図)

調査区の北東部を東西に走る。A・B-2グリッド内にある。第27号ピットと重複関係にあり、本遺構が、第27号ピットに切られる。

規模は、東部が調査区域外となっているが、検出長4.64m、幅0.19～0.42mを測る。走行軸の方位は、およそN-96°-Eを示す。

埋土は、ランダムな層位であることから、人為的に埋め戻されたと考えられる。

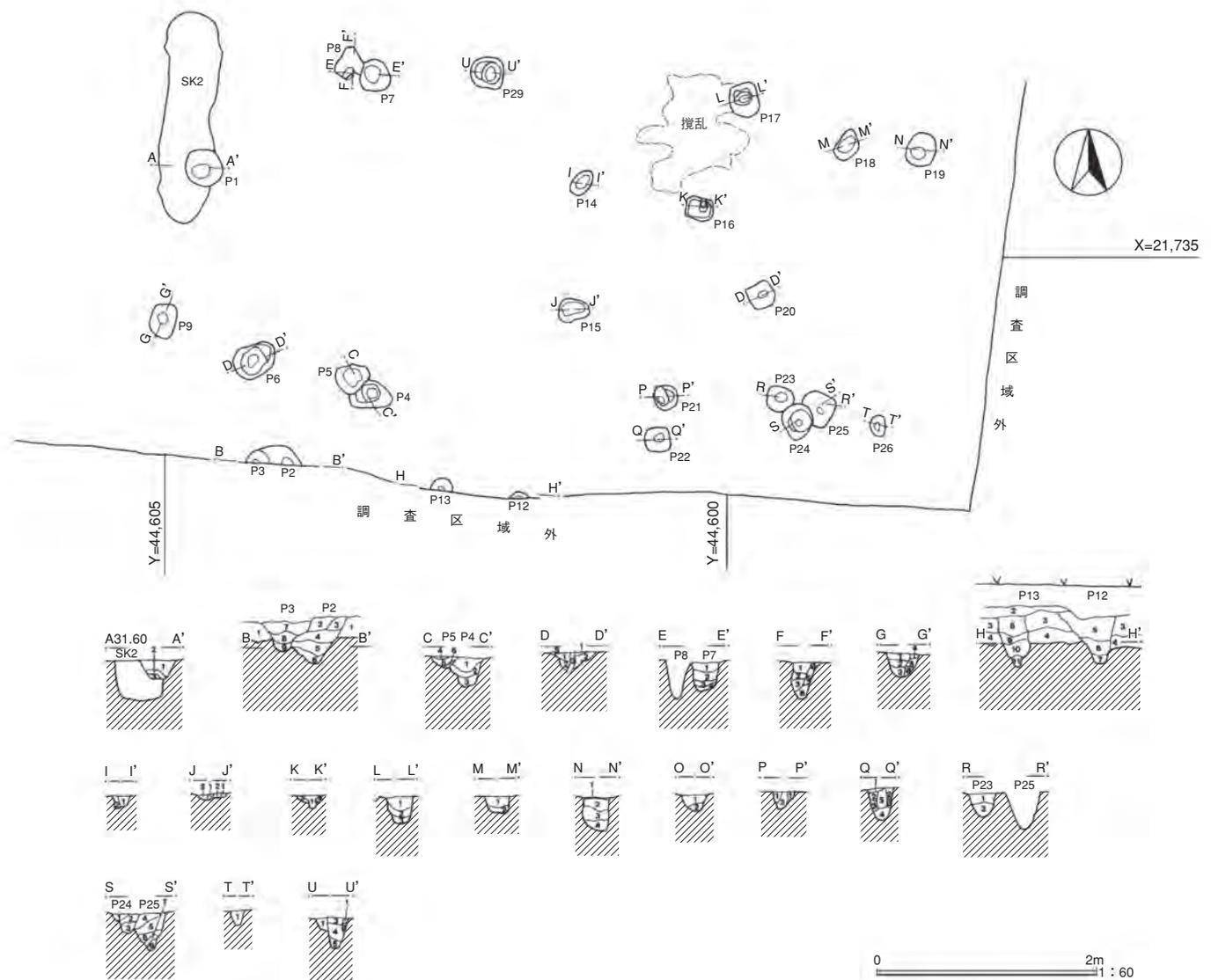
断面形はやや崩れた逆台形状ないしは船底状を呈し、深さは、確認面及び土層断面観察から6～12cmを測る。底は、西部で深く、東に行くほど浅くなる。

出土遺物は、土師器坏・甕の小破片が数点出土したが、図示できるものはなかった。

時期について詳細は不明であるが、出土した土師器坏から9世紀代の可能性が考えられる。

第2号溝跡(第34図)

調査区の北東を第1号溝跡と並行し東西に走る。A・B-2グリッド内にある。第3号溝跡、第27号ピッ



土層説明(A-A')

- P 1
 1 黒褐色土 ややしまりない、ソフトローム土粒子少量、黒褐色土ブロック多量含
 2 ソフトローム土ブロック
 3 暗灰黄色土 かたくしまる、ソフトローム土ブロック少量含

土層説明(B-B')

- P 2・P 3
 1 暗灰黄色土 暗褐色土ブロック混じり
 2 褐灰色土
 3 黒褐色土 炭化物粒ごくわずか含
 4 暗灰黄色土 ソフトローム土微粒子ごくわずか含
 5 黒褐色土 ソフトローム土微粒子ごくわずか含
 6 黒褐色土 黒褐色土混じる、ソフトローム土ブロックわずか含
 7 黒褐色土 ソフトローム土微粒子わずか含
 8 暗褐色土 ソフトローム土粒子若干含
 9 灰黄褐色土 ソフトローム土混じる

土層説明(C-C')

- P 4・P 5
 1 にぶい黄色土
 2 黒褐色土 ソフトローム土粒子・微粒子若干含
 3 黄褐色土 黒褐色土ブロック・粒子少量含
 4 灰黄褐色土 ソフトローム土粒子わずか含
 5 暗灰黄色土 ソフトローム土ブロック・粒子多量、黒色土粒子若干含
 6 黒褐色土 ソフトローム土粒子少量含

土層説明(D-D')

- P 6
 1 にぶい黄褐色土 黒色土粒子若干含
 2 オリーブ褐色土 黒色土ブロック混じる
 3 攪乱

土層説明(E-E')

- P 7
 1 黒褐色土 ソフトローム土ブロック若干、ソフトローム土微粒子少量含
 2 黒色土 ソフトローム土微粒子・粒子少量含
 3 黄褐色土 若干粘性有
 4 暗灰黄色土 若干粘性有

土層説明(F-F')

- P 8
 1 黒褐色土 ソフトローム土粒子多量含
 2 黒色土 ソフトローム土微粒子少量含
 3 黒褐色土 ソフトローム土微粒子ごくわずか含
 4 暗オリーブ褐色土 ソフトローム土粒子少量含
 5 黄褐色土 ややしまりない、黒褐色土ブロック・粒子多量含
 6 オリーブ黒色土 ソフトローム土粒子わずか、黒褐色土ブロックわずか含

土層説明(G-G')

- P 9
 1 黒褐色土 ソフトローム土微粒子わずか含
 2 黒色土 ソフトローム土粒子・微粒子少量含
 3 黄褐色土 黒色土ブロック多量含
 4 黄褐色土
 5 黒褐色土 ソフトローム土ブロック少量含
 6 暗灰黄色土 褐色土粒子わずか含

第 32 図 西別府館跡第 1~9・12~26・29 号ピット

土層説明(H-H')

P 12・P 13

- 1 表土
- 2 オリーブ黒色土 ややしまりない、火山灰粒わずか含
- 3 暗褐色土 ややしまりない、ソフトローム土微粒子わずか含
- 4 暗灰黄色土 暗褐色土ブロック混じる
- 5 灰黄褐色土 ソフトローム土粒子わずか、黒褐色土粒子含
- 6 黒褐色土 ソフトローム土粒子わずか、黒褐色土ブロック・粒子若干含
- 7 黒褐色土 ハードローム土ブロック・粒子少量含
- 8 暗灰黄色土 ややしまる、ソフトローム土粒子多量、ソフトローム土微粒子わずか、黒褐色土粒子若干含
- 9 黒褐色土 ややしまりない、ハードローム土粒子・微粒子少量、黒褐色土多量に混入
- 10 黒褐色土 ややしまりない、ハードローム土粒子、ソフトローム土粒子若干、黒褐色土粒子わずか含
- 11 黒褐色土 ソフトローム土ブロックわずか混じる

土層説明(I-I')

P 14

- 1 黒褐色土 ハードローム土粒子若干含
- 2 黒褐色土 ハードローム土ブロックわずか、炭化物粒わずか含

土層説明(J-J')

P 15

- 1 灰黄褐色土 黒褐色土粒子若干含
- 2 ハードローム土ブロック

土層説明(K-K')

P 16

- 1 暗灰黄色土 ソフトローム土微粒子多量に混じる
- 2 黄褐色土 黄灰色土粒子若干含
- 3 灰黄褐色土 ソフトローム土微粒子多量に混じる

土層説明(L-L')

P 17

- 1 暗灰黄色土 ハードローム土ブロックわずか、ソフトローム土粒子わずか含
- 2 黒褐色土 ソフトローム土粒子若干含む
- 3 黄褐色土 黒褐色土ブロック若干含

土層説明(M-M')

P 18

- 1 黒褐色土 ややしまりない、ソフトローム土ブロック・粒子多量、土器包含
- 2 黄褐色土 ややしまりない、黒褐色土ブロック若干含

土層説明(N-N')

P 19

- 1 黒褐色土 ソフトローム土ブロック・粒子少量含
- 2 灰黄色土 ソフトローム土微粒子多量含
- 3 黒褐色土 ややしまりない、黒色土粒子若干含
- 4 黄灰色土 やや黄褐色帯びる

土層説明(O-O')

P 20

- 1 黒褐色土 ソフトローム土ブロック・粒子多量含
- 2 黄褐色土 黒褐色土ブロック若干含

土層説明(P-P')

P 21

- 1 黒褐色土 かたくしまる、ハードローム土ブロック多量に含み60%程占める
- 2 にぶい黄色土 かたくしまる、ハードローム土ブロック多量に含

土層説明(Q-Q')

P 22

- 1 黒褐色土 かたくしまる
- 2 にぶい黄色土 ハードローム土ブロック多量、黒色土粒子少量含
- 3 黒褐色土 ハードローム土混じる
- 4 黄褐色土 ソフトローム土混じる
- 5 にぶい黄色土 かたくしまる、ソフトローム土ブロック多量、黒褐色土ブロック少量含

土層説明(R-R')

P 23

- 1 黒褐色土 ややしまりない、ソフトローム土粒子わずか、黒褐色土粒子わずか含
- 2 暗灰黄色土 しまりない、ハードローム土ブロック少量含

土層説明(S-S')

P 24・P 25

- 1 黒褐色土 ハードローム土ブロック多量含
- 2 にぶい黄褐色土 ややしまりない、黒褐色土粒子若干含
- 3 灰黄褐色土 しまりない、ハードローム土微粒子多量、黒褐色土粒子わずか含
- 4 黒褐色土 褐灰色土混じり、ハードローム土粒子若干、黒褐色土粒子少量含
- 5 にぶい黄褐色土 ややしまりない、褐灰色土ブロック混じる、ハードローム土ブロック若干黒褐色土粒子少量含
- 6 にぶい黄褐色土 ソフトローム土ブロック層状に入りしまりない
- 7 黄灰色土 しまりない、ハードローム土粒子混じる

土層説明(T-T')

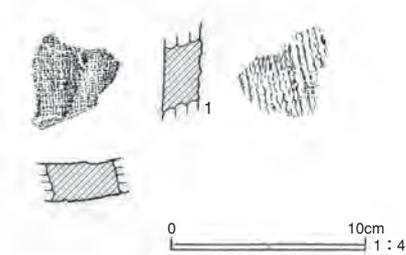
P 26

- 1 黒褐色土 ソフトローム土微粒子わずか含

土層説明(U-U')

P 29

- 1 にぶい黄色土 黄褐色土粒子若干含
- 2 浅黄色土 ソフトローム土粒子若干含
- 3 暗灰黄色土 ハードローム土ブロック若干含
- 4 にぶい黄色土 やや暗灰黄色帯びる
- 5 浅黄色土 黒褐色土ブロックわずか含



第 33 図 西別府館跡第 8 号ピット出土遺物

第9表 西別府館跡第 8 号ピット出土遺物観察表 (第33図)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	平瓦	厚さ1.8~2.0	ABEGMN	B	凹面：にぶい黄褐色 凸面：灰黄色	破片	凹面：布目痕6×6本/cm ² 、模骨痕。 凸面：縄叩き。 粘土紐桶巻造りか。

第10表 西別府館跡ピット一覧表 (第23・32・34図)

番号	位置	プラン	長軸×短軸×深さ (cm)	出土遺物	備考
1	B-2	ほぼ円形	34 × 32 × 18	なし	SK2と重複。
2	B-3	楕円形?	(40) × — × 42	なし	P3と重複。
3	B-3	楕円形?	(18) × — × 27	なし	P2と重複。
4	B-3	崩れた楕円形	40 × 26 × 26	なし	P5と重複。
5	B-3	崩れた隅丸三角形	31 × 26 × 9	なし	P4と重複。
6	B-3	楕円形	39 × 29 × 15	なし	
7	B-2	ほぼ円形	29 × 27 × 27	弥生土器	P8と重複。
8	B-2	隅丸三角形	29 × 24 × 36	平瓦	P7と重複。
9	B・C-3	隅丸方形	31 × 23 × 22	なし	
10	C-2	崩れた楕円形	38 × 28 × 19	なし	
11	C-2	崩れた楕円形	48 × 38 × 37	なし	
12	B-3	円形?	(18) × — × 48	なし	
13	B-3	円形?	(18) × — × 47	なし	
14	B-2	楕円形	26 × 15 × 12	なし	
15	B-3	崩れた楕円形	28 × 21 × 5	なし	
16	B-2	隅丸方形	24 × 21 × 12	なし	
17	A-2	隅丸方形	30 × 25 × 24	なし	
18	A-2	崩れた隅丸方形	29 × 18 × 15	焙烙	
19	A-2	楕円形	30 × 25 × 30	なし	
20	A-3	隅丸方形	23 × 22 × 16	なし	
21	B-3	ほぼ円形	23 × 21 × 15	なし	
22	B-3	隅丸方形	22 × 22 × 29	なし	
23	A-3	崩れた楕円形	24 × 23 × 22	なし	P24と重複。
24	A-3	崩れた楕円形	33 × 29 × 18	なし	P23・P25と重複。
25	A-3	楕円形	31 × 30 × 34	なし	P24と重複。
26	A-3	崩れた楕円形	20 × 13 × 14	なし	
27	A-2	崩れた楕円形	(38) × 26 × 20	なし	SD1・SD2と重複。
28	A-2	楕円形	34 × 25 × 47	土師器、須恵系土師質土器	SD2と重複。
29	B-2	楕円形	29 × 28 × 28	なし	

トと重複関係にあり、本遺構が、第27号を切っている。第3号溝跡との関係は、攪乱により不明である。

規模は、東部が調査区域外となり、西部及び掘方の上部が攪乱を受けているが、検出推定長2.15m、幅が確認できた箇所では0.31~0.40mを測る。走行軸の方位は、おおよそN-92°-Eを示す。

埋土は、ソフトローム土ブロック等が含まれ、ランダムな層位であることから、人為的に埋め戻されたと考えられる。

断面形はやや不整形な船底状を呈し、深さは、土層断面観察から7~9cmを測る。底の一部が土坑状に掘り窪められていた箇所が確認された。また、検出できた箇所の観察から、東部で深く、西に行くほど浅くなる。

出土遺物は、土師器、須恵器の小破片がわずかに検出されたが、図示できるものはなかった。

時期の詳細は不明である。

第3号溝跡 (第34図)

調査区の北東部をほぼ東西に走る。A-2グリッド内にある。第2号溝跡、第1号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、第2号溝跡との関係は攪乱により不明で、第1号掘立柱建物跡とは直接切り合いの関係にない。

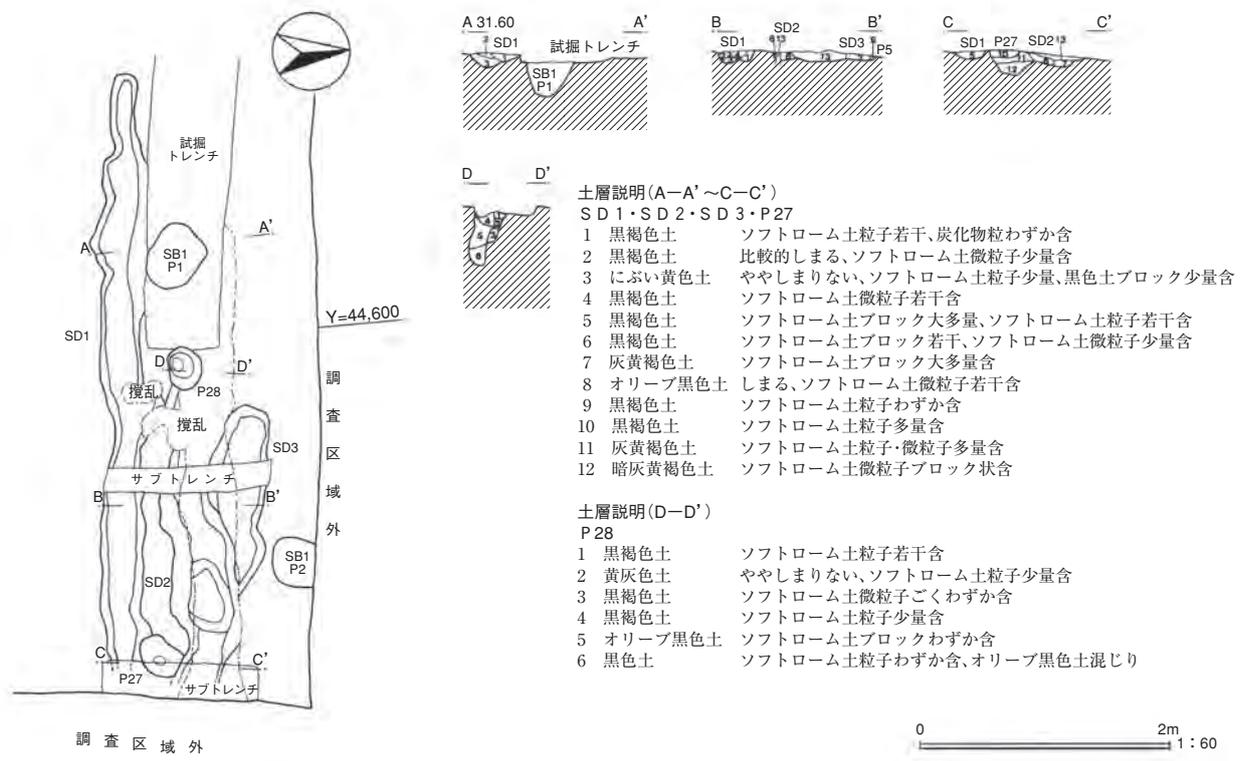
規模は、検出最大長1.50m、幅0.36mを測る。走行軸の方位は、N-103°-Eを示す。

埋土は、ランダムな層位であることから、人為的に埋め戻されたと考えられる。

断面形は、土層断面観察から、逆台形状を呈し、深さは5cmを測る。

出土遺物は、土師器台付甕破片が1点検出できたが、図示できなかった。

時期は、9世紀後半代の可能性が考えられる。



第 34 図 西別府館跡第 1～3 号溝跡、第 27・28 号ピット

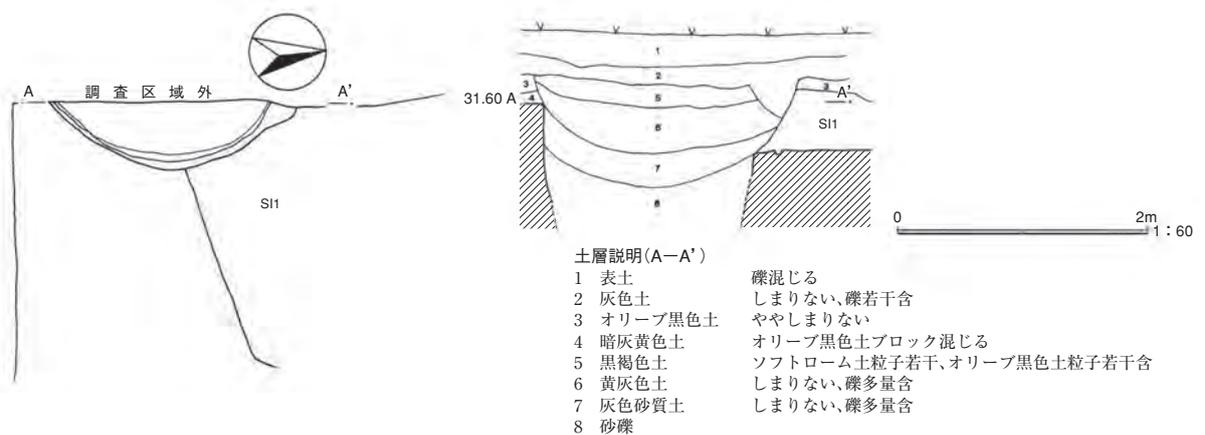
(6) 井戸跡

第 1 号井戸跡 (第 35・36 図、第 11 表)

調査区の南西隅に位置する。C-2・3 グリッド内にある。第 1 号竪穴建物跡と重複関係にあり、本遺構が、第 1 号竪穴建物跡を切っている。

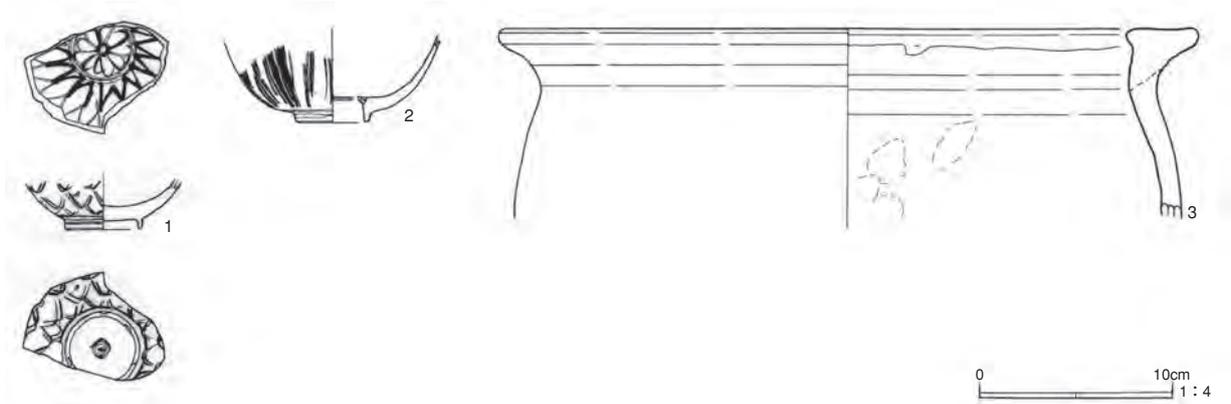
規模は、西部の大半が調査区域外となっており、検出最大径 1.93m を測る。平面プランは、円形を呈すると考えられ、深さについては確認面から約 1 m 掘り下げたが、崩落の危険があったためそれ以上は掘り下げを行わなかった。

埋土は、礫を多量に含むしまりのない土や砂礫がほぼ水平に堆積していることから、人工堆積であると考えられる。



第 35 図 西別府館跡第 1 号井戸跡

断面形は、基本的には井筒状であるが、上部の一部がやや広がるロート状を呈する。
 出土遺物は、土師質土器坏、磁器碗、陶器甕等が検出できた。
 時期は、江戸時代（18世紀後半か）と考えられる。



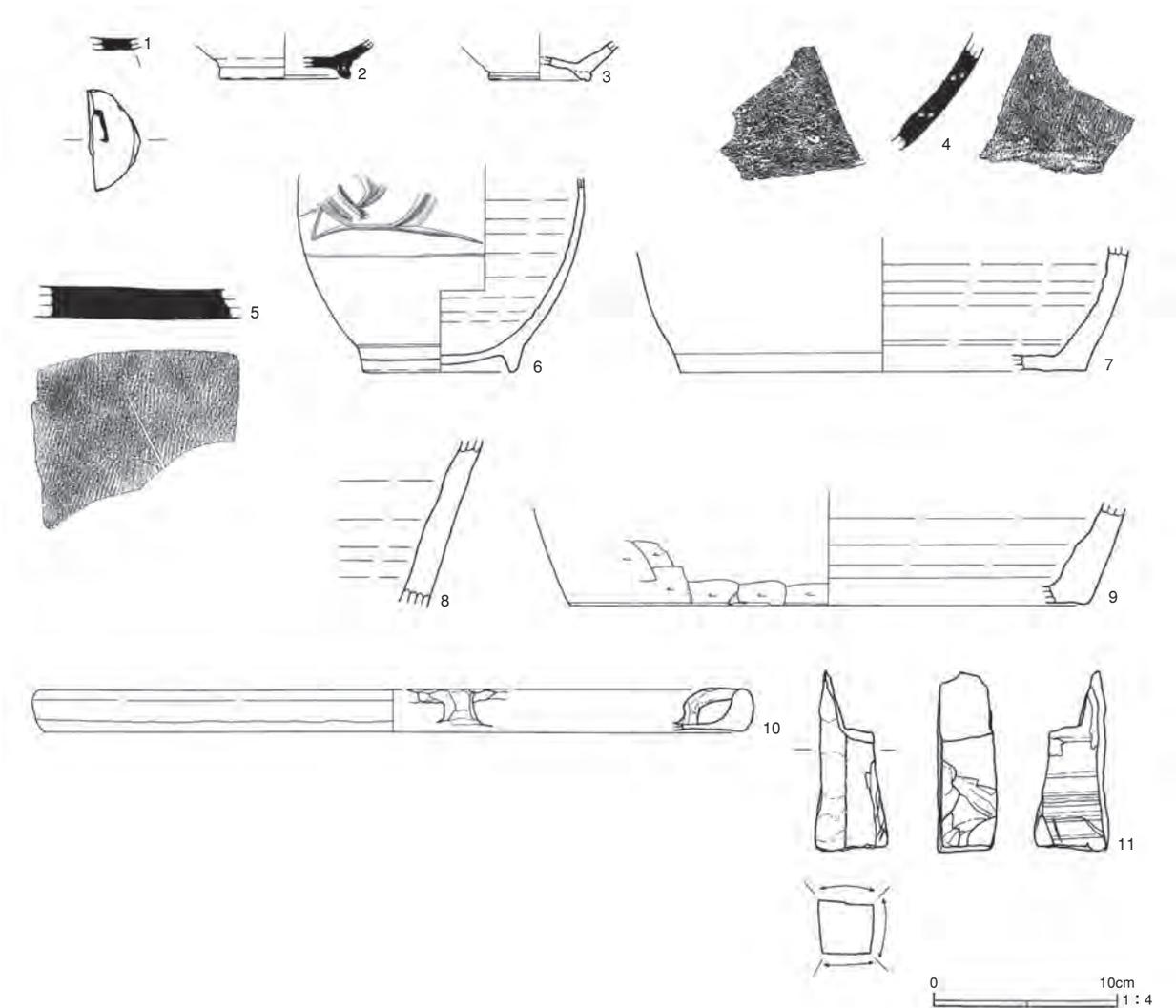
第36図 西別府館跡第1号井戸跡出土遺物

第11表 西別府館跡第1号井戸跡出土遺物観察表（第36図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	磁器碗	—	2.5	4.0				40%	肥前系
2	磁器碗	—	4.3	3.9				20%	肥前系
3	陶器甕	(36.8)	10.1	—		A	外面：暗赤灰色 内面：灰褐色	口縁部15%	鉄釉 常滑窯

(7) 遺構外出土遺物

表土除去の際に出土した遺物及び遺構に伴わないと判断した出土遺物を掲載する（第37図、第12表）。
 平安時代から江戸時代までの、須恵器、須恵系土師質土器、陶器、砥石等が出土した。



第 37 図 西別府館跡遺構外出土遺物

第12表 西別府館跡遺構外出土遺物観察表（第37図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器 坏	—	—	—	ADFN	A	灰色	底部40%	底部外面に墨書。 南比企産。
2	須恵器 椀	—	1.9	(7.2)	ADG	B	灰黄色	底部付近25%	
3	須恵系土師質土器 椀	—	1.9	(5.6)	AEKLN	C	外面：黄灰色、にぶい黄色 内面：にぶい黄褐色	底部付近25%	
4	須恵器 甕	厚さ0.6~0.9			AEGLN	A	外面：暗灰色 内面：青灰色	胴部下半破片	外面：回転ナデ、ヘラ削り。 内面：ナデ、回転ナデ。
5	転用硯	厚さ1.5~1.7			ABDHLN	A	灰色	胴部破片	須恵器甕の転用、内面が平滑 になり、外面は平行叩き。
6	磁器 瓶	—	10.8	8.5			明オリープ灰色	胴部下半60%	
7	陶器 鉢	—	6.7	(22.4)	AEI	A	外面：明赤褐色 内面：黒褐色	底部付近20%	
8	陶器 鉢	—	—	—	ABEHN	A	外面：明赤褐色 内面：橙色	胴部破片	No 9 と同一個体か。
9	陶器 鉢	—	5.3	(28.5)	ABEHN	A	外面：明赤褐色 内面：褐色、黒褐色	底部付近20%	No 8 と同一個体か。
10	焙烙	(38.8)	2.4	(38.4)	ABDEM	A	外面：黒色 内面：にぶい褐色	口縁部10%	
11	砥石	最大長10.0 最大幅3.9 最大厚3.1 重量161						一方端欠損	3面使用。 砂岩製。

4 調査のまとめ

西別府館跡は、遺跡名称が示すように別府次郎行隆の二子、別府次郎行助から甲斐守頼重までの居館であったとされるが、館跡としての範囲や構造は不明の状況である。今回の調査においても、埼玉県埋蔵文化財調査事業団による調査においても、奈良・平安時代の律令期の集落が確認されているに過ぎない。本調査は遺跡範囲の北部、埼玉県埋蔵文化財調査事業団の調査は遺跡範囲の東南端であったが、これは同時期に形成された幡羅郡家跡である幡羅遺跡を取り巻く周辺集落が確認されたと考えられる。幡羅郡家の周辺集落は、これまでに西及び南側で深谷市下郷遺跡が確認され、また、その下郷遺跡の東に展開する熊谷市大竹遺跡の平成24年度調査でもやはり律令期の集落が確認されている。西別府館跡における集落も同じく幡羅郡家、そして西別府廃寺の寺院活動と密接な関係をもった集落と推定され(劔持 2010)、今回の調査によりさらにその様相が判明しつつあるという状況になったと考える。そして、西別府廃寺との関係について言えば、今回の調査で検出された9世紀前半の第1号竪穴建物跡において、カマド袖の補強材として西別府廃寺所用と考えられる丸瓦が2枚使われていたことは、9世紀後半までは寺院としての体裁が存続していた(伽藍があった)と考えられる西別府廃寺の動向と合わせて考えると興味深いものであると思われる。

さて、今回の調査では、前述のとおり9世紀前半から後半までの竪穴建物跡3棟と同時期の土坑墓と考えられる第2号土坑を検出した。この第2号土坑は、いずれの竪穴建物跡からも近接する場所に造られており、9世紀後半の第2号竪穴建物跡との距離は80cm程、9世紀後半でも早い時期の第3号竪穴建物跡との距離は直線にして2m程、9世紀前半の第1号竪穴建物跡との距離は僅かに60cm程である。第2号土坑は、その出土遺物から9世紀後半と考えられるため、近接する第2・3号竪穴建物跡が存在した時期には共存していた可能性が高いのである。この土坑墓と考えられる土坑であるが、規模にして長軸1.90m、短軸0.50mとかなり規模の小さなもので、大人をやっと伸展葬で埋葬できる規模でしかない。しかし、この埋葬形態は、時期、場所を問わず古代において最も普遍的な埋葬方法と言え、西日本から東日本にかけて広く分布が認められるものである。遺存状態が良好ならば、棺の木質部が残存する状態で検出される場合もあり、長方形の木製棺を使用した埋葬形態と考えられる。検出例としては、近隣では、市内の妻沼低地の自然堤防上に立地する飯塚北遺跡、諏訪木遺跡、櫛挽台地に立地する深谷市六反田遺跡等がある。その検出状況については、飯塚北遺跡では9世紀後半の緑釉陶器椀、須恵器椀等が副葬品として出土している。諏訪木遺跡では、9世紀後半の須恵器坏、土師器坏及び須恵器椀、須恵器椀のみ、須恵器椀2点及び灰釉陶器椀1点の組み合わせで副葬品として出土している。六反田遺跡では、9世紀前半の土師器坏、須恵器椀・長頸瓶が副葬品として出土している。また、長野県塩尻市吉田川西遺跡の例では、白磁、緑釉陶器等が副葬品として出土している。

これら土坑墓は前述のとおり全国各地に分布することが知られているが、その中でも典型的な副葬品の組み合わせはというと、器種として長頸瓶、椀の組み合わせが主体で、長頸瓶がなく、椀だけの場合も認められる。また、複数以上の同一形態がある場合には、素材を替えて埋葬されている例がある。この点については、階層差や地域差が想定できるもので、例えば諏訪木遺跡のように同一地域内で素材の異なる副葬品を持った土坑墓があった場合は、階層的な差をそこに認めることができるであろう。実際に諏訪木遺跡例では、概ね3種類の副葬品の組み合わせが認められ、須恵器椀2点及び灰釉陶器椀1

点を副葬した土坑墓は、須恵器碗のみや須恵器碗及び土師器坏を副葬した土坑墓より、規模や構造の点でやや勝っているように見受けられる。また、諏訪木遺跡例のような須恵器碗と灰釉陶器碗の組み合わせが、須恵器に変わり緑釉陶器、さらに西日本では白磁などが使用された例もあり、階層や地域差により、副葬品として埋納されるものの素材が大きく変化すると考えられる。

さて、本遺跡例は、須恵器碗 2 点及び灰釉陶器 1 点が組み合わせで副葬されているが、同時期の竪穴建物跡に近接する位置に造られている点が大きな特徴である。前述した諏訪木遺跡や飯塚北遺跡では、集落内でも住居域とは隔絶された墓域としての区域または遠距離に土坑墓を造っていたが、本遺跡の場合は意図的に集落内に造られたことが想像できる。果たしてその意味はと考えると、最も近親者につき居住区内に造った、集落内の長的な立場の人の埋葬であり、その人の霊力をもって集落の安定を望むために居住区内に造ったなどが考えられるであろうか。なお、六反田遺跡例も、9 世紀前半の竪穴建物跡の周辺（距離にして 1 m 程）から検出され、この竪穴建物跡と有機的な関係が想定されている（梅沢他 1981）。

主な引用・参考文献

- 梅沢 太久夫 他 1981 『六反田遺跡』 岡部町六反田遺跡調査会
- 吉野 健 2001 『諏訪木遺跡』 熊谷市遺跡調査会
- 山本 禎 2006 『飯塚北Ⅱ／飯塚古墳群Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 321 集
埼玉県・(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 劔持 和夫 2010 『西別府館跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 374 集
埼玉県・(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 埼玉県教育委員会 1988 『埼玉の中世城館跡』
- 深谷市教育委員会 2008 『律令時代の郡役所』

王子西遺跡



Ⅲ 王子西遺跡の調査

1 発掘調査の概要

(1) 調査に至る経緯

平成21年12月に、王子西遺跡範囲内における個人住宅の建築造成にかかる埋蔵文化財発掘の相談が熊谷市教育委員会になされ、平成22年1月8日に熊谷市教育委員会が試掘調査を実施したところ、平安時代の遺構・遺物が確認された。この結果をもとに事業主と協議を行ったが、現状の保存が困難であるとの確認に至り、事業主の依頼を受け、熊谷市教育委員会が記録保存のための発掘調査を実施したものである。調査にかかる事務は、平成22年1月18日付けで文化財保護法にかかる事業者の「埋蔵文化財発掘の届出」に熊谷市教育委員会の副申を添え埼玉県教育委員会に進達し、熊谷市教育委員会からは「埋蔵文化財発掘調査の通知」（平成22年1月18日付熊教社発第1552号）を埼玉県教育委員会へ通知している。その後、埼玉県教育委員会より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」（平成22年1月25日付教生文第5-1048号）の通知を受理した。

(2) 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査は平成22年1月25日から同年2月9日まで行った。調査面積は約88㎡である。1月25日に重機による表土除去作業を行い、1月27日より作業員による遺構発掘作業と遺構平面図を作成し、2月8日に完掘写真の撮影を行った。2月9日には現場の埋め戻し作業を終了し、機材等を撤収して現場における作業を終了した。取り上げた埋蔵物は、平成22年2月12日付けで熊谷警察署へ発見届（熊教社発第1589号）を、平成22年2月16日付けで埼玉県教育委員会へ埋蔵文化財保管証（熊教社発第1592号）を提出した。

この発掘調査は、熊谷市が平成21年度の文化財関係国庫補助事業を受けており、国1/2、埼玉県1/4、熊谷市1/4の費用負担を行っている。

整理作業は、平成24年10月1日から平成25年3月26日まで実施した。遺物の洗浄・注記・接合・復元作業等を行い、遺構・遺物の実測・トレース、版組、遺物の写真撮影を行い、原稿執筆を行った。そして、印刷業者を選定し、報告書の印刷に入り、校正を行った後、3月26日に報告書を刊行した。

(3) 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 熊谷市教育委員会

ア 発掘調査

平成21年度

事務局 教育長	野原 晃
教育次長	柴崎 久
社会教育課長	斉木 千春
社会教育課文化財保護担当副参事	小林 英夫
社会教育課副課長兼文化財保護係長	新井 端

社会教育課文化財保護係	主査	寺社下	博
	主査	吉野	健
	主査	鯨井	敬浩
	主任	松田	哲
	主任	蔵持	俊輔
	主事	山下	祐樹
発掘担当者	新井	端	

イ 整理・報告書作成

平成24年度

教育長		野原	晃
教育次長		鯨井	勝
社会教育課長		岩上	精純
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事		根岸	敏彦
社会教育課副課長兼文化財保護係長		森田	安彦
	主 幹	吉野	健
	主 査	松田	哲
	主 査	杉浦	朗子
	主 任	蔵持	俊輔
	主 事	山下	祐樹
報告書編集・執筆者		森田	安彦

2 遺跡の立地と環境

(1) 立地と環境

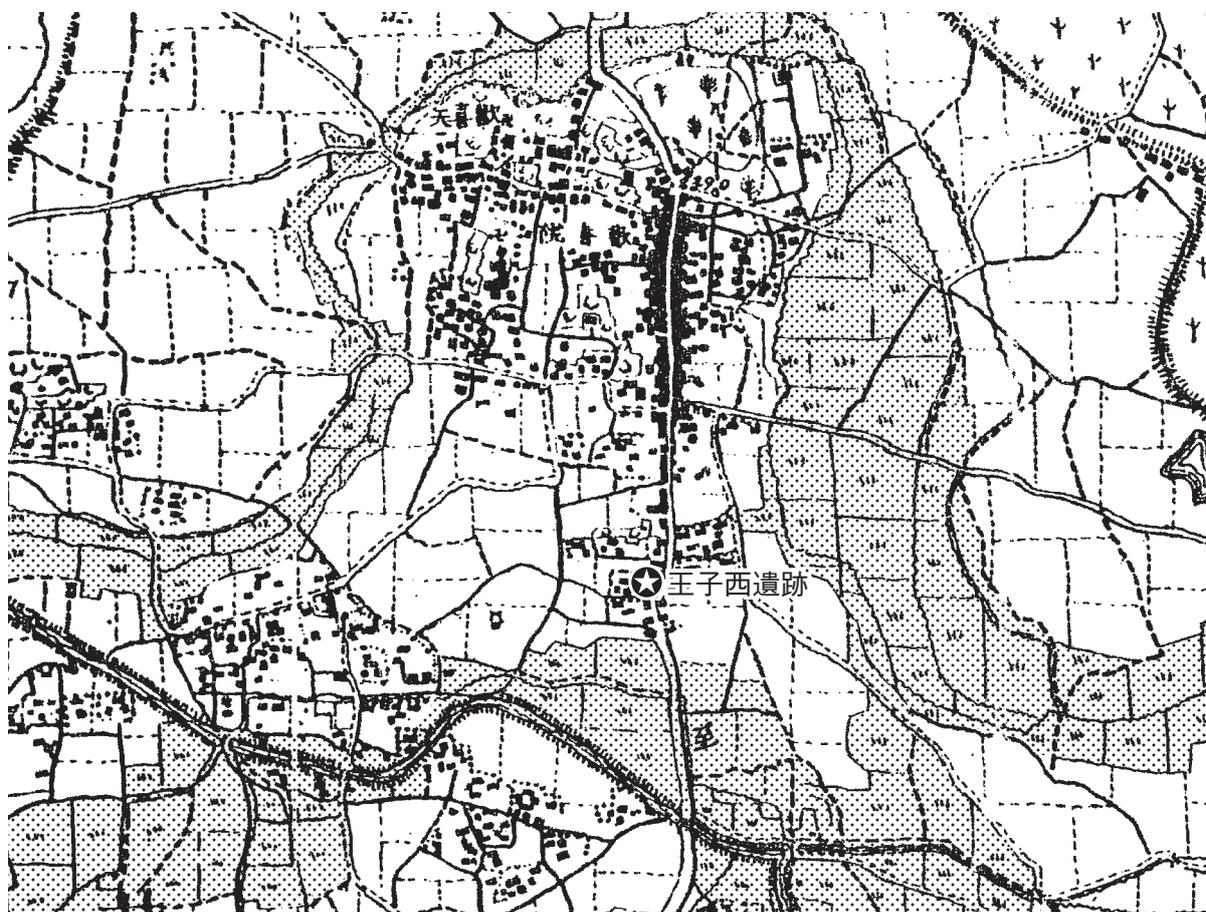
今回報告する王子西遺跡は、熊谷市北部の弥藤吾地区に所在する。旧妻沼町域は、利根川及び利根川の支流によって形成された自然堤防とその後背地からなる低地帯で、福川と奈良川の間形成された南側の微高地、芝川と福川の間の中部微高地、芝川と利根川の間形成された北側の微高地の3つに区分される。王子西遺跡は、この中部微高地に位置している。第38図は、王子西遺跡付近の迅速測図である。遺跡の南側に旧福川が蛇行して東流し、東西及び北側は、旧妻沼市街地の微高地を大きく迂回して流れる、旧利根川流路と考えられる芝川の沖積低地によって画されている。

次に、王子西遺跡周辺の歴史的環境について概観する（第39図）。

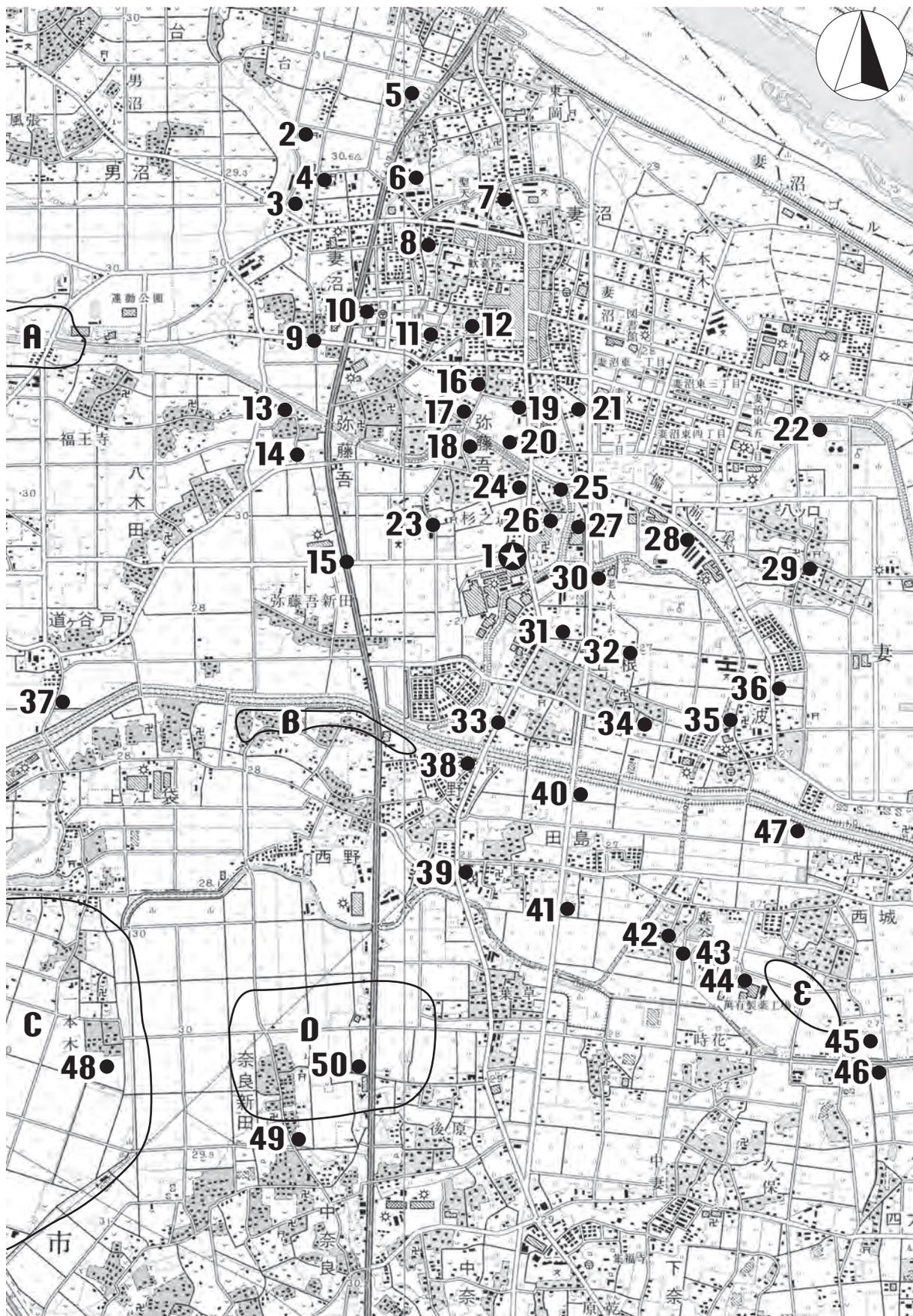
本地域は、旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺跡は、現在のところ確認されていない。

縄文時代前期になると、僅かながら遺物が散見されるようになる。西城切通遺跡（46・妻沼町：1977）、より関山式土器が、寺東遺跡（熊谷市教育委員会 2000）からは諸磯式土器が出土しているが、遺構は確認されていない。

中期になると遺跡数は増加する。特に後半の加曾利E式期のものが多く、妻沼低地の自然堤防上に集中する。寺東遺跡では、加曾利E式期後半の住居跡2軒と埋甕が確認されている。遺構は確認されていないが、道ヶ谷戸条里遺跡（妻沼町教育委員会：1981）より加曾利E式土器が出土している。



第38図 王子西遺跡周辺の地形（迅速測図）



第 39 図 王子西遺跡周辺遺跡位置図 (1/25,000)

後期になると遺跡数は微増する。立地は、中期同様、妻沼低地の自然堤防上に立地する。寺東遺跡では、称名寺式期の住居跡6軒が検出されており、集落の低地への本格的な進出時期として捉えることができる。西城切通遺跡（熊谷市教育委員会：2010）では、高井東式と安行1式を主体とした土器や土偶・石剣・勾玉などが住居跡・土坑より多量に出土しており、本地域における拠点的な集落跡と推測される。諏訪木遺跡（財・埼玉県埋蔵文化財調査事業団：2007）では、住居跡と盛土状遺構が検出され、多量の土器と共に耳飾、土偶、石剣などが多量に出土しており、箱田氏館跡からも近年、住居跡が確認されており、土偶・耳飾・垂飾などの遺物が出土している。本期における低地集落の展開について、新しい知見が蓄積されつつある状況となっている。遺構は確認されていないが、道ヶ谷戸条里遺跡からは、加曾利B式土器が出土している。

晩期になると遺跡数は急激に減少する。諏訪木遺跡（財・埼玉県埋蔵文化財調査事業団：2007）で後期中葉から継続する集落跡が唯一確認されているに留まる。

弥生時代については、縄文時代の遺跡立地を踏襲し、自然堤防上の遺跡が多い。深谷市上敷免遺跡では包含層からではあるが、県内初の遠賀川式土器の壺の胴部片が出土しているが、熊谷市域では現在までのところ確認されていない。

中期から後期初頭にかけては、良好な遺跡が密集する地域として注目される。横間栗遺跡（熊谷市教育委員会：1999）からは、前期末～中期前半の再葬墓が13基確認されており、再葬墓一括資料は1999年3月に埼玉県指定文化財になっている。新荒川扇状地末端の湧水地と妻沼低地末端地が錯綜する低地帯の北島遺跡では、前期末の土坑、後期にかけての取水堰や水田、集落などの遺構がセットで確認されている（財・埼玉県埋蔵文化財調査事業団：1991・1998）。この他、中期の遺跡としては、飯塚北遺跡（財・

第13表 王子西遺跡周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	王子西遺跡	古墳後・平安	26	王子古墳	古墳後
2	大明神遺跡	古墳	27	南王子遺跡	古墳後・奈良・平安
3	雉子尾遺跡	古墳後・奈良	28	上北浦遺跡	縄文後
4	摩多利神社古墳	古墳後	29	屋敷遺跡	古墳後
5	観音堂瓦窯跡	平安・鎌倉	30	出口北遺跡	古墳後
6	緑川遺跡	古墳後・奈良・平安	31	長井庵遺跡	古墳後
7	大我井遺跡	古墳前～後・奈良・平安	32	出口南遺跡	古墳後
8	池ノ上遺跡	古墳後	33	高林遺跡	古墳後・奈良・平安
9	年代遺跡	古墳後	34	本郷遺跡	奈良
10	彦松西遺跡	古墳後・奈良	35	西嬉愛遺跡	古墳後・奈良・平安
11	彦松遺跡	古墳後・奈良・平安	36	東嬉愛遺跡	奈良・平安
12	彦松東遺跡	古墳前・奈良・平安	37	道遠ヶ谷戸遺跡	縄文後
13	鎌ヶ谷戸遺跡	古墳後・奈良・平安	38	実盛館	奈良・平安
14	七の丸遺跡	古墳後・奈良	39	場遠ヶ谷戸遺跡	縄文後
15	弥藤吾新田遺跡	弥生後・古墳前・奈良・平安	40	山ヶ谷戸遺跡	古墳後・奈良・平安
16	神明遺跡	古墳後・奈良	41	鷲ヶ谷戸東遺跡	古墳後・奈良・平安
17	神明南遺跡	古墳後	42	森谷遺跡	古墳後・奈良・平安
18	杉之道遺跡	古墳後・奈良・平安・中世	43	南大ヶ谷戸遺跡	奈良・平安
19	下宿遺跡	古墳後	44	鷲森遺跡	弥生中～後・古墳前～後・奈良・平安
20	道祖神遺跡	古墳後	45	西城城跡	平安
21	猿楽遺跡	古墳	46	長安寺遺跡	古墳後・奈良・平安
22	釜ノ上遺跡	奈良	47	西城切通遺跡	縄文後
23	一本杉遺跡	古墳後・鎌倉・江戸	48	一本木前遺跡	古墳・奈良・平安
24	杉之道東遺跡	古墳後	49	東通遺跡	古墳後
25	王子遺跡	古墳後	50	横塚遺跡	古墳前・平安・中世
A	飯塚古墳群	古墳中	D	奈良古墳群	古墳中期～末
B	上江袋古墳群	古墳後	E	乙鷲森古墳群	古墳後
C	別府条里遺跡	奈良・平安			

埼玉県埋蔵文化財調査事業団：2005)で、再葬墓・土坑・遺物集中区、飯塚遺跡で土坑墓、飯塚南遺跡(妻沼町教育委員会：2004)で住居跡・埋設土器が確認されている。池上遺跡(埼玉県教育委員会：1984)では、東日本でも最古段階の環壕集落が確認されており、その墓域とされる行田市小敷田遺跡が隣接している。

後期には、一本木前遺跡(47・熊谷市教育委員会：2004)で吉ヶ谷式土器が、弥藤吾新田遺跡(15・埼玉県遺跡調査会：1976)では南関東系の弥生町式土器が出土している。

古墳時代になると自然堤防上への進出がより活発化する。前期は確認例がやや少ないが、一本木前遺跡(47・熊谷市教育委員会：2000、2001、2002、2003、2004)では90数軒の住居跡の他に4基の方形周溝墓等も確認されている。第2号方形周溝墓の主体部からヒスイ製の勾玉や緑色凝灰岩製の管玉、人歯等が出土している。この他、大我井遺跡(7・妻沼町：1977)、弥藤吾新田遺跡(15)、鶴森遺跡(43・妻沼町教育委員会2004、妻沼町遺跡調査会2005)、上江袋古墳群(B・妻沼町教育委員会：2005)で住居跡が確認されている。

中期は、本遺跡周辺では5世紀末の古墳として市の指定史跡になっている横塚山古墳(A・埼玉県遺跡調査会：1971、熊谷市遺跡調査会：1977)がある。B種横刷毛の埴輪を持つ帆立貝式前方後円墳であるが、後円部は一部欠損している。中条古墳群の鎧塚古墳(熊谷市教育委員会：1981)、女塚第1号墳(熊谷市教育委員会：1983)は、いずれも帆立貝式前方後円墳である。墳利根川の南に広がる自然堤防上に位置する飯塚古墳群(A・財・埼玉県埋蔵文化財調査事業団：2005、2006)が20基の古墳跡が確認されており、現状では最も規模の大きい古墳群である。5世紀末葉から6世紀初頭に築造を開始した「古式群集墳」で、一辺25mを越す3基の大型方墳を中心に中小の円墳からなる群構成特徴がある。

集落跡では、鶴森遺跡(44)、飯塚南遺跡、道ヶ谷戸遺跡、弥藤吾新田遺跡(15)、北島遺跡、一本木前遺跡(48)で住居跡が確認されている。

後期になると遺跡数が爆発的に増加する。集落跡は大規模になり、古墳も群として多数みられるようになる。集落跡は自然堤防上にも多数営まれるようになり、奈良・平安時代へ継続して営まれる遺跡が多い。飯塚古墳群の北東約1.5kmには、妻沼地域で唯一墳丘の残る、直径30m程の円墳である摩多利神社古墳(4)が位置している。また、福川流域の自然堤防上には、西から深谷市上増田古墳群、熊谷市道ヶ谷戸古墳群、上江袋古墳群(B)、西城切通古墳(47)、乙鶴森古墳群(E)、長安寺古墳(46)、王子古墳(26)などの比較的小規模な古墳群が点在している。道ヶ谷戸古墳群では、直径18m程と推定される円墳が1基確認されている(妻沼町教育委員会：1981)。上江袋古墳群では、20m前後の4基の円墳が確認されており、第1号墳では唯一川原石積の横穴式石室が確認されている(妻沼町教育委員会：2005)。長安寺古墳群は、耕作時に発見され遺棄されたと考えられる多量の埴輪片が集中して出土している(妻沼町教育委員会：2005)。王子古墳では、直径28.5mの円墳が調査されており、主体部は破壊されていたが、角閃石安山岩が発見されていることから、横穴式石室が構築されていたことが推測されている(妻沼町：1977)。

集落跡では、別府・奈良地域の拠点集落として一本木前遺跡(48)、中条地域の拠点集落として北島遺跡が挙げられる。北島遺跡では、前期からの集落規模を拡大し、平安時代にかけて水辺祭祀が行われている。この他、飯塚南遺跡・道ヶ谷戸遺跡・諏訪木遺跡で住居跡が確認されている。

古代に入ると集落規模の拡大と、官衙関連施設と想定される特定集落が確認されている。律令体制の始まる奈良・平安時代における本遺跡一帯は武蔵国幡羅郡に属する。幡羅郡は上秦、下秦、広沢、荏原、幡羅、那珂、霜見、余部の八郷からなる中郡であり、熊谷市西部、深谷市東部を含む一帯が該当すると考えられている。平成13年には熊谷市との境に位置する深谷市幡羅遺跡（深谷市教育委員会：2006～2010）から郡衙の正倉と推定される大型建物群が確認され、幡羅郡衙推定地として確認調査が開始され、これまでに20数棟の大型正倉建物群が確認されている。郡庁や館、厨などの施設は未確認であるが、熊谷市西別府廃寺（熊谷市教育委員会：1992、1994）、西別府祭祀遺跡（熊谷市教育委員会：2000、2011）も含めてこの地域一帯は、当時の中心地だったことが徐々に明らかになってきている。

集落跡は、古墳時代後期以降引き続き営まれる遺跡が多く、かつ規模の大きいものが多い。集落跡以外で注目すべき遺跡としては、前述の西別府廃寺と西別府祭祀遺跡がある。両遺跡は櫛引台地北東端の市北西部西別府地区に所在する。西別府廃寺は8世紀初頭に創建された県内でも古い寺院跡であり、平成2・4年に行われた発掘調査では、瓦溜り状遺構、基壇跡、溝跡等が検出されている。出土した瓦には9世紀後半まで下るものもみられ、寺院は平安時代まで存続していたと考えられている。

西別府祭祀遺跡は西別府廃寺の北西部の台地縁辺部に位置し、湯殿神社裏の湧水堀にある。神社裏の湧水部分からは土師器、須恵器の他に馬形、櫛形、勾玉形、剣形、有線円板等の滑石製模造品が多数検出され、これらの遺物は水辺祭祀に用られたものと考えられている。平成4年度におこなわれた発掘調査では、古墳時代末から平安時代でも末期に位置づけられる土器群が多数検出されており、平安時代の終わり頃まで祭祀遺跡として存続していたものと考えられる。両遺跡と深谷市幡羅遺跡は時間的・空間的に密接な関係にあったと考えられる。この他、条里遺跡として、道ヶ谷戸条里遺跡、中条条里遺跡（熊谷市教育委員会：1979）、別府条里遺跡（C）などの、低地の後背湿地を利用した生産遺跡が遺されている。

平安時代末から中世にかけては武蔵七党やその他在地武士団の館跡がみられるようになる。実盛館跡（38）、西城城跡（45）、東城城跡、中条氏館跡（熊谷市教育委員会：2002）、奈良氏館跡、別府氏館跡（熊谷市教育委員会：2000）、西別府館跡（財・埼玉県埋蔵文化財調査事業団：2010）等があるが、その実態は不明なものが多い。中条氏館跡と別府城跡では、現在も土塁と空堀が一部残っている。本遺跡近隣の遺跡では、大我井遺跡（7）の4基の経塚が著名である（妻沼町教育委員会：1982）。最古の経筒には、「久安」（1145～1151）の紀年銘が残っている。近年、水口氏が再検討を加えており、中世墓と埋経遺構の複合遺跡と推測している（水口：2006）。

中世になると、城館跡以外の遺跡は乏しい。観音堂瓦窯跡（5）は、低地に築かれた有牀式平窯で縄目・布目の平瓦が出土しているが、供給先を含め不明な点が多い。また、国宝「聖天堂」、国指定重要文化財「貴惣門」を有する歓喜院長楽寺は、治承三年（1179）に斎藤別当実盛による白髪神社の改修・合祀を端緒とし、建久八年（1197）に良応僧都によって、別当聖天山歓喜院長楽寺として建立されたものとされている。

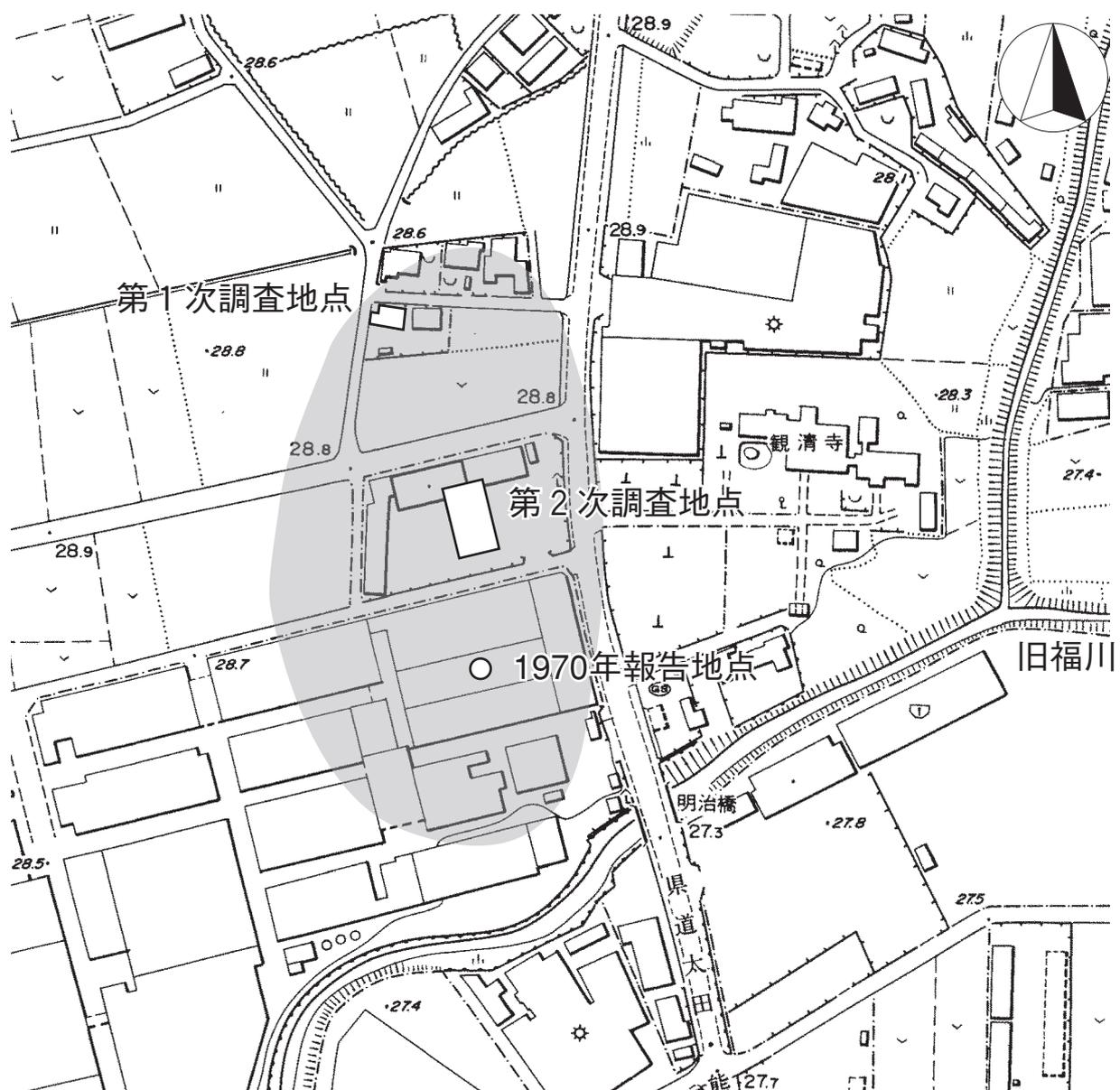
3 検出された遺構と遺物

王子西遺跡は、妻沼低地上の芝川と福川に挟まれた微高地上の福川左岸に位置し、東西 125m、南北 210mの範囲に広がっている（第 40 図）。東側には、曹洞宗の王子山観清寺が位置している。

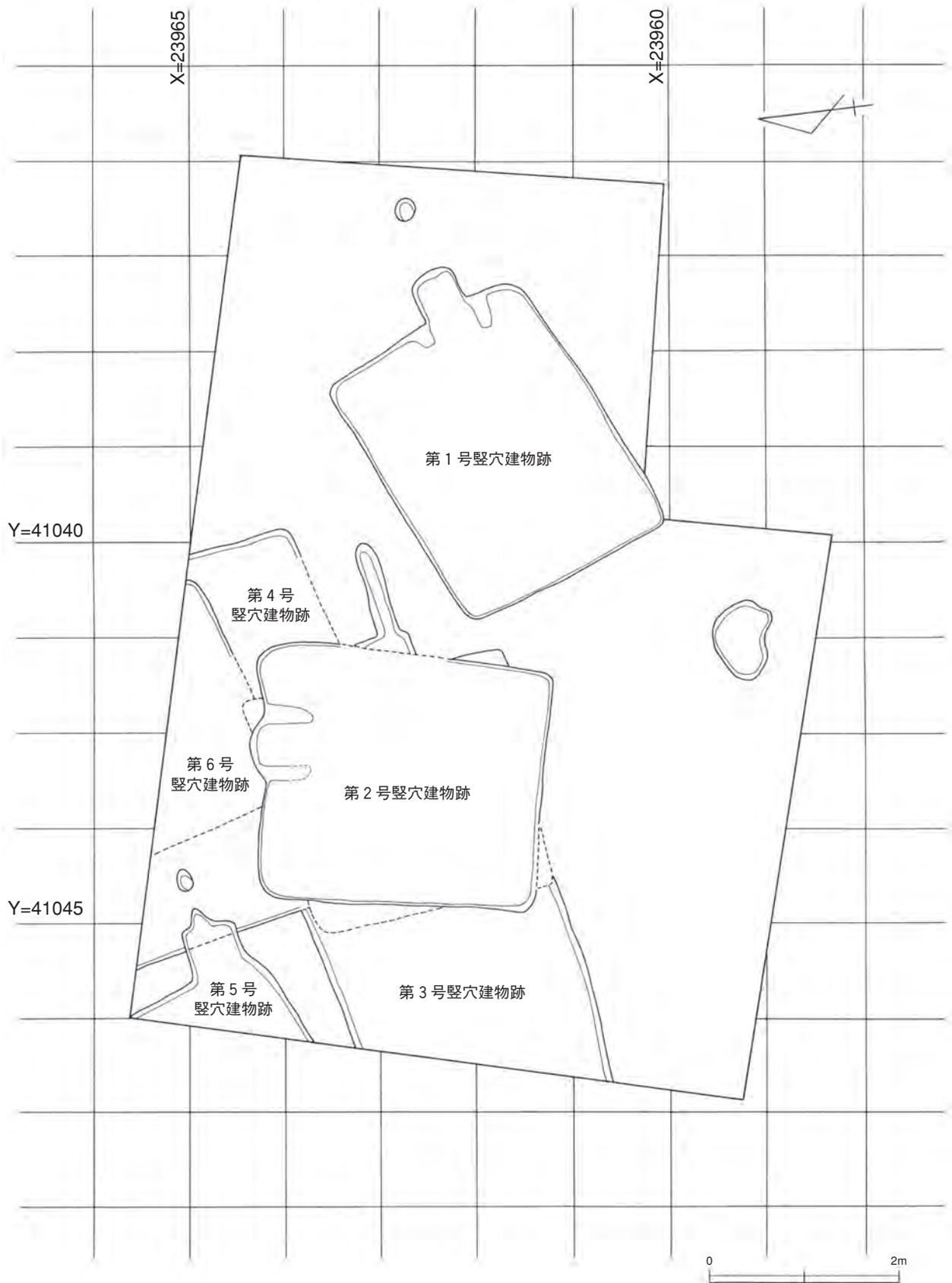
本遺跡の立地する微高地のほぼ中央を南北方向に貫くように、県道太田・熊谷線が通っており、聖天山歆喜院の東側を抜け、刀水橋を経て群馬県に至る。利根川の渡河点として古くより重要な位置を占め、小字名に「登戸」の地名も残る。

この微高地は、西・北・東を旧利根川流路と考えられる芝川の蛇行する自然堤防に囲まれ、南を福川によって画される独立丘状地形を呈しており（第 38 図）、平安時代末に平家政権下で長井庄を治めた長井斎藤氏が、館を構えたとも伝えられている。

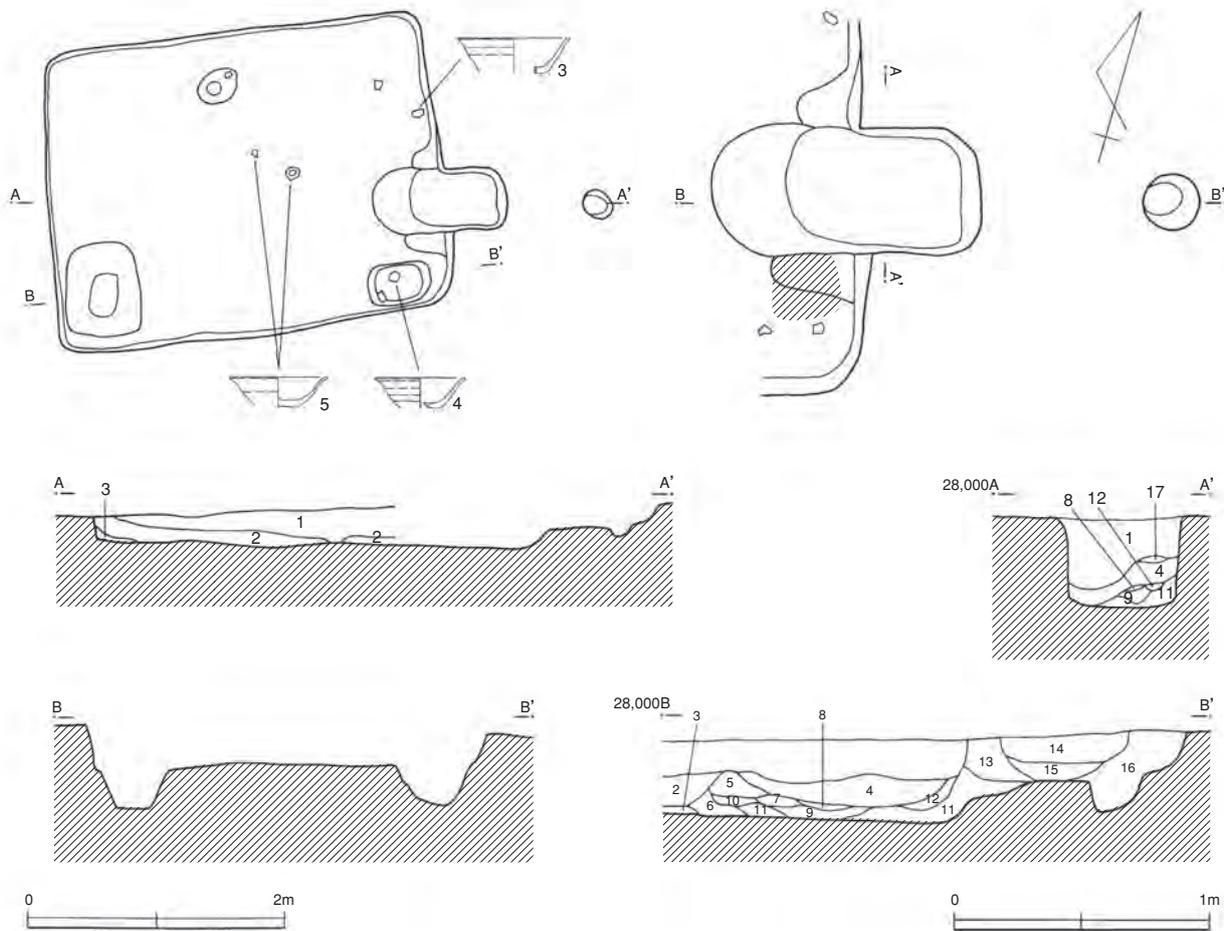
本遺跡の出土遺物が最初に紹介されたのは、1970 年のことである。『埼玉考古第 8 号』に「大里郡妻沼町発見の土師器—須恵器を忠実に模倣した土器—」と題された紹介文が増田逸郎氏によってなされて



第 40 図 王子西遺跡の範囲と調査地点



第41図 王子西遺跡全測図



第1号竖穴建物跡

- | | | | |
|----------|---------------------------|-----------|---------------------------|
| 1. 明黄褐色土 | しまり強、粘性弱。黒色粒・焼土粒若干含。 | 10. 暗褐色土 | しまり強、粘性弱。焼土粒少量含。 |
| 2. 黄褐色土 | しまり強、粘性弱。炭化粒・焼土粒多量含。 | 11. 暗褐色土 | しまり強、粘性弱。焼土ブロック多量含。 |
| 3. 黄褐色土 | しまり強、粘性やや強。炭化粒・焼土粒多量含。 | 11. 暗褐色土 | しまり強、粘性弱。焼土ブロック多量含。 |
| 4. 黄褐色土 | しまり強、粘性弱。炭化粒・焼土粒ブロック状多量含。 | 13. 黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒多量含。カマド崩落土。 |
| 5. 黄橙色土 | ロームブロック。 | 14. 黄褐色土 | しまり・粘性強。ソフトローム層。 |
| 6. 灰黄褐色土 | しまりやや強、粘性弱。焼土ブロック多量含。 | 15. 暗黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒多量含。 |
| 7. 明茶褐色土 | しまり・粘性弱。焼土ブロック・黒褐色土の混合土。 | 16. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。カマド流入土。 |
| 8. 暗褐色土 | しまり・粘性強。焼土粒少量含。 | 17. 焼土 | |
| 9. 明赤褐色土 | しまり強、粘性弱。焼土層。 | | |

第42図 王子西遺跡第1号竖穴建物跡

第14表 第1号竖穴建物跡出土遺物観察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	SI1	ロクロ土師器 坏	(11.0)	3.5	(4.8)	ABDIK	10YR7/4	B	50%	
2	SI1	ロクロ土師器 坏	(11.8)	3.7	(5.8)	ABIK	10YR7/3	B	45%	
3	SI1-4	ロクロ土師器 高台付椀	17.0	5.4	—	ABCGIJK	7.5YR6/4	B	30%	
4	SI1-5	ロクロ土師器 高台付椀	(13.2)	(4.1)	—	ABEIK	7.5YR5/3	B	40%	
5	SI1-2	ロクロ土師器 高台付椀	14.9	4.4	—	ABCIJK	5YR5/3	B	35%	
6	SI1	ロクロ土師器 高台付椀	12.9	(3.0)	5.3	ABEIKN	10YR7/3	B	40%	
7	SI1貯蔵穴	ロクロ土師器 高台付椀	—	(2.6)	—	ABEIK	10YR6/2	B	40%	
8	SI1貯蔵穴	ロクロ土師器 高台付椀	—	(1.6)	(5.8)	ABDGIK	2.5Y5/1	B	50%	
9	SI1	ロクロ土師器 高台付椀	—	(3.9)	—	ABEIK	10YR6/3	B	40%	
10	SI1貯蔵穴	土師器 甕	10.0	4.7	—	ABCIJK	7.5YR6/3	B	30%	

いる（増田：1970）。地元の収集家前原儀久氏が、弥藤吾 578 番地付近で、工場建設中の地下 1 m 程の地点から採取した一括遺物で、古墳時代鬼高期の土師器を紹介している。炭化物・焼土混じりの層から採取したとされており、住居跡が存在した可能性を推測している。

今回報告する第 1 次発掘調査は、紹介文から 40 年後の平成 22 年 1 月に、熊谷市教育委員会により個人住宅建設に伴い行われたものである。調査面積は約 88 m² で、狭い面積ながらも、重複する平安時代の住居跡 7 軒が検出されている。

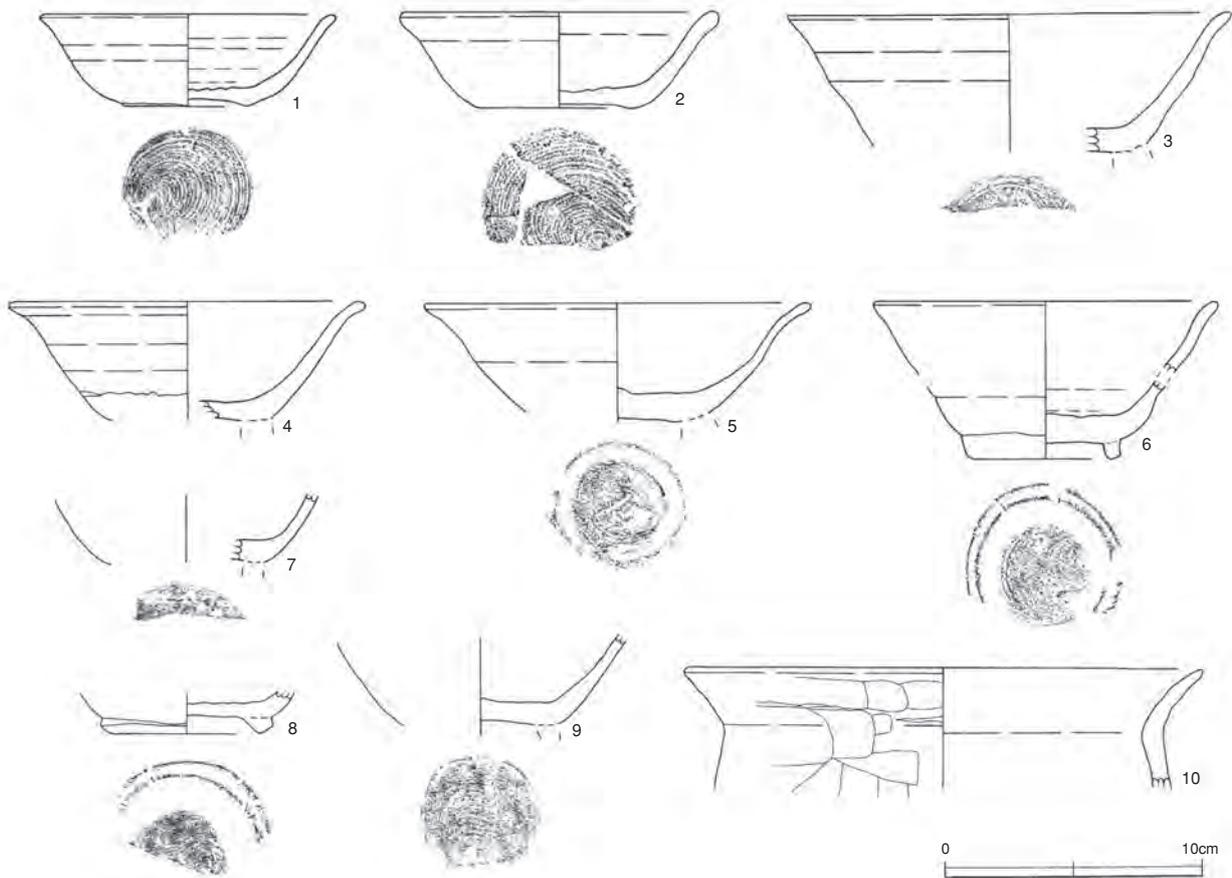
平成 23 年 9 月には、第 1 次調査地点の南約 60m の地点で、熊谷市王子西遺跡調査会により第 2 次調査が行われている（熊谷市王子西遺跡調査会：2012）。調査面積は約 200 m² で、平安時代の住居跡 4 軒、溝跡 5 条等が確認されており、第 2 号溝跡より鉄製鍵が 1 点出土している。

本遺跡は、面積的には広い遺跡ではないが、古墳時代から平安時代にかけて断続的に営まれた集落跡である。

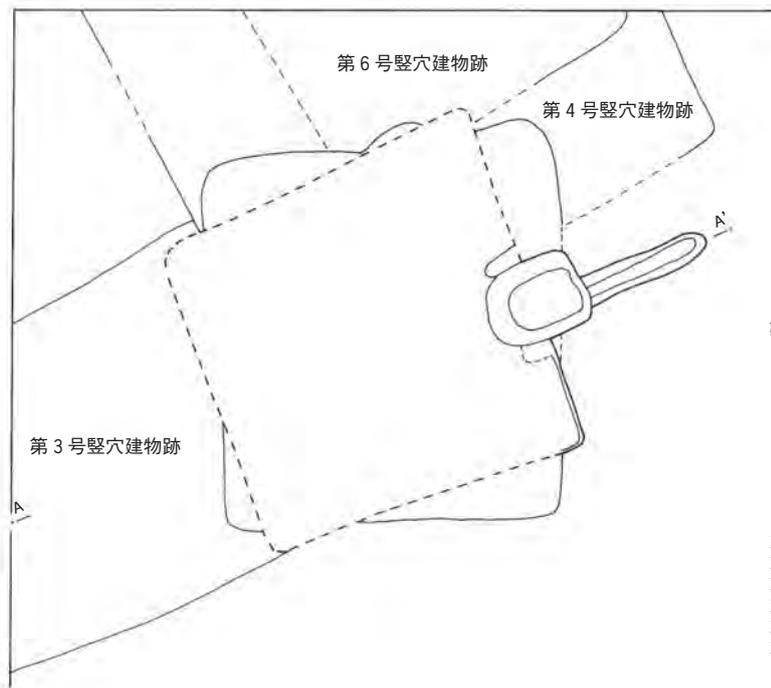
(1) 竪穴建物跡

第 1 号竪穴建物跡（第 42 図）

遺構 調査区東側に位置する。規模は、3.0×2.3m となり、主軸は N-67° E の方位を持つ。東壁やや南側にカマドを持つ。壁の掘り込みは、東壁で 14.5cm、西壁で 21.0cm、南壁で 27.2cm、北壁で 23.5cm を測る。

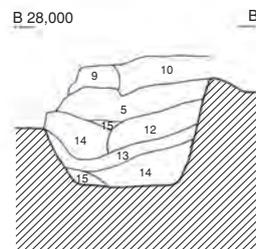
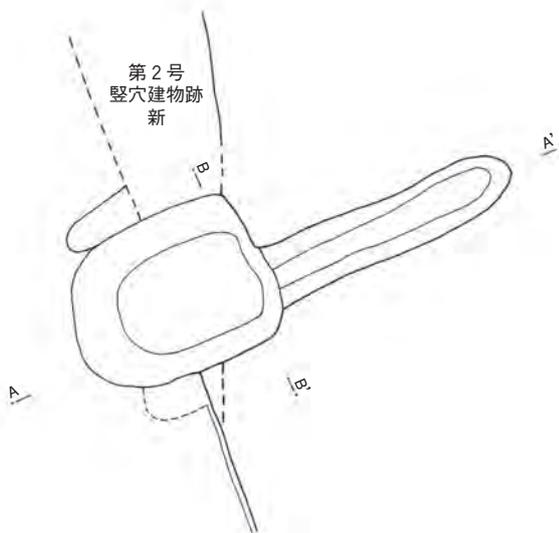
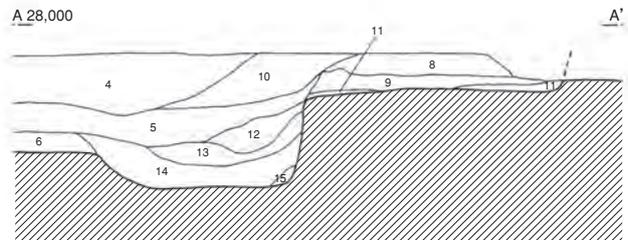
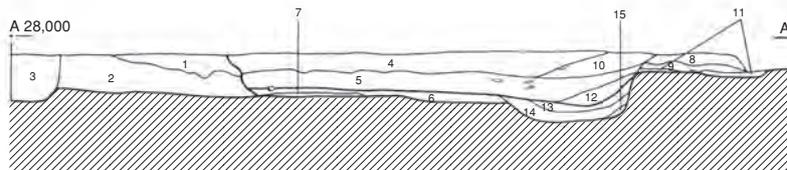


第 43 図 王子西遺跡第 1 号竪穴建物跡出土遺物



第2号竖穴建物跡 古

1. 黒茶褐色土 焼土粒多含。第3号竖穴建物跡覆土。
 2. 黒茶褐色土 焼土塊・炭化粒多含。第3号竖穴建物跡覆土。
 3. 攪乱
 4. 黒茶色土
 5. 黒茶色土
 6. 黒茶色土
 7. 黒茶色土
 8. 茶褐色土
 9. 茶褐色土
 10. 茶褐色土
 11. 焼土層
 12. 灰褐色土
 13. 暗褐色土
 14. 灰・焼土層
 15. 焼土
- ローム粒含。
ローム粒・焼土粒含。
ローム粒・焼土粒含。
しまり・粘性強。焼土含。カマド天井崩落土。
ローム粒・焼土粒含。カマド天井崩落土。
ローム粒・焼土粒含。カマド天井崩落土。
煙道床。赤化層。
ローム粒と焼土粒の混土。
焼土粒含。



第44図 王子西遺跡第2号竖穴建物跡（古）

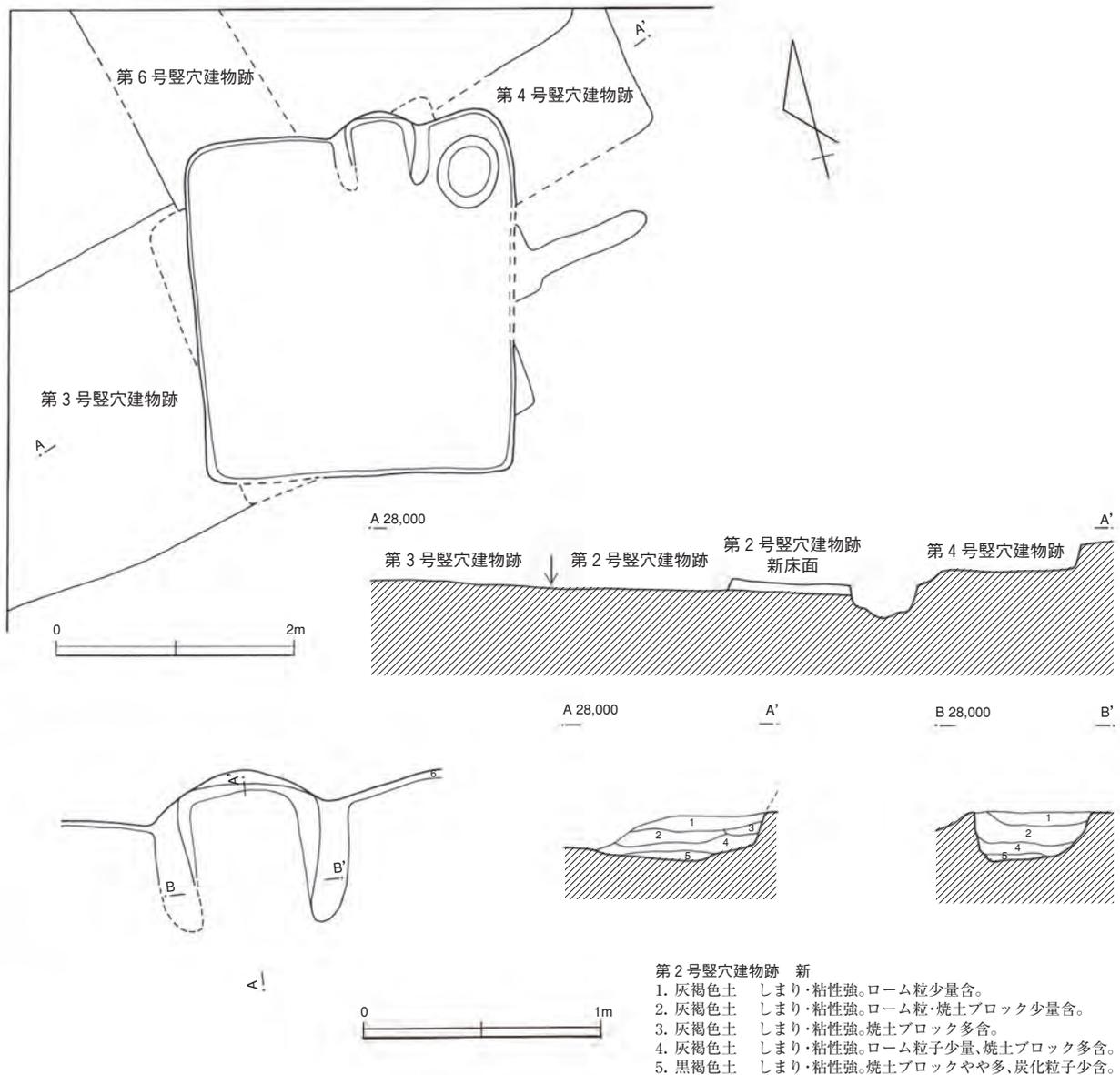
床は直床ではほぼ平坦。柱穴状の掘り込みは確認されていない。貯蔵穴と推測される方形の掘り込みが、カマド南側と竪穴南西隅の2箇所に確認されている。規模は、カマド南側が45 cm × 34 cm、深さ28 cm、住居南西隅が74 cm × 57 cm、深さ31.6 cmを測る。

カマドは、燃焼部を壁外に位置させ、両袖は地山を掘り残している。煙道はトンネル状に天井部が62 cm程残存し、排煙口に至る。

カマド両側および竪穴建物跡北西部2箇所に、床面からやや浮いた状態で炭化粒が集中して検出されている。部分的な検出状況であり、床面に置かれていた有機物が燃焼した痕跡である可能性が高い。

遺物(第43図 第14表) 遺物は、いずれも床面から10 cm程浮いた状態で出土している。完形品は無く、いずれも残存率50%以下となっている。第43図1・2はロクロ土師器の坏。3～9は、ロクロ土師器の高台付の椀。7・8は南西隅の貯蔵穴覆土中より出土している。10は、土師器の甕。

時期 出土遺物から10世紀前半と判断される。



第45図 王子西遺跡第2号竪穴建物跡(新)

第2号住居跡（古）（第44図）

遺構 第3号竪穴建物跡・第4号竪穴建物跡・第6号竪穴建物跡を切って構築されているが、第2号竪穴建物跡（新）にプランの大半が切られている。推定される規模は、(2.5) × (2.6)mとなり、主軸はN-81°Eの方位を持つ。東壁やや南側にカマドを持つ。壁の掘り込みは、東壁で33.0cmを測る。床は直床でほぼ平坦。柱穴状の掘り込みは確認されていない。

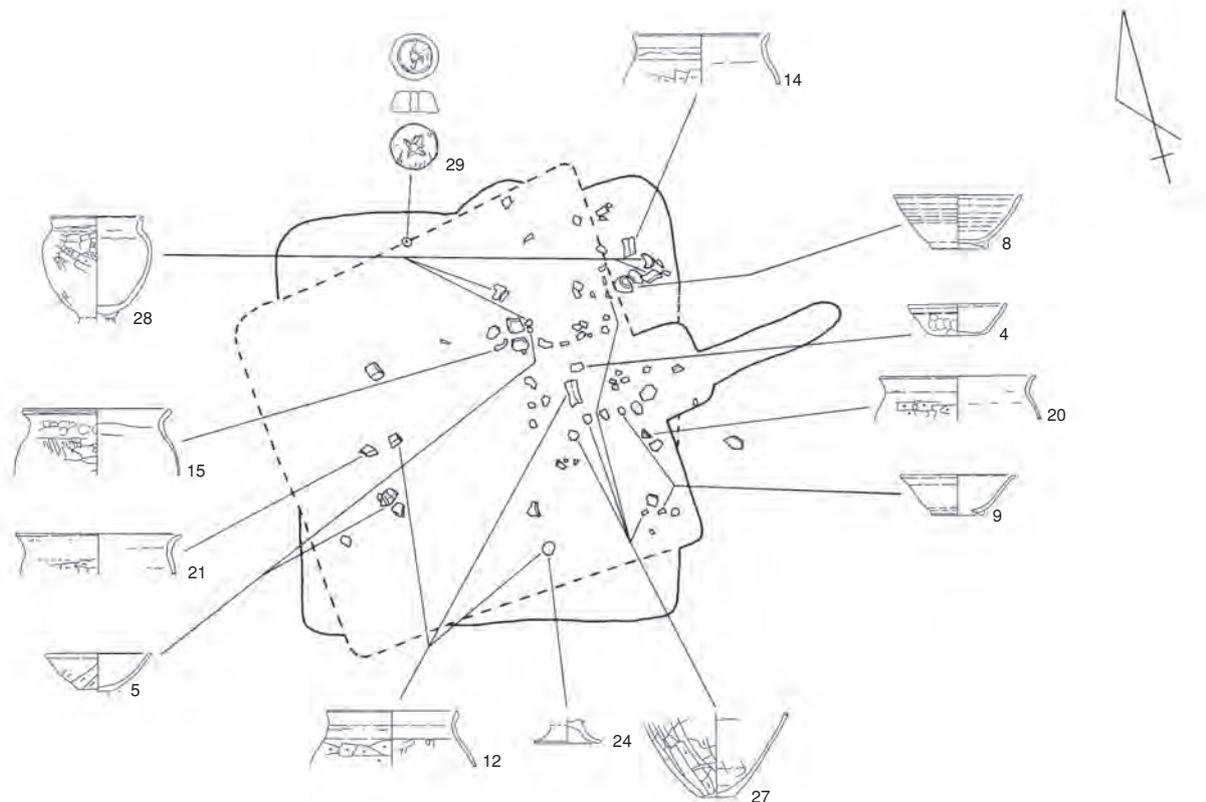
カマドは、燃烧部を壁外に位置させ、両袖はほとんどを第2号竪穴建物跡（新）に削平されており、下部の残存部は地山を掘り残している。

遺物 遺物は、土師器の小片がカマド内より出土しているが、図示するには至らなかった。

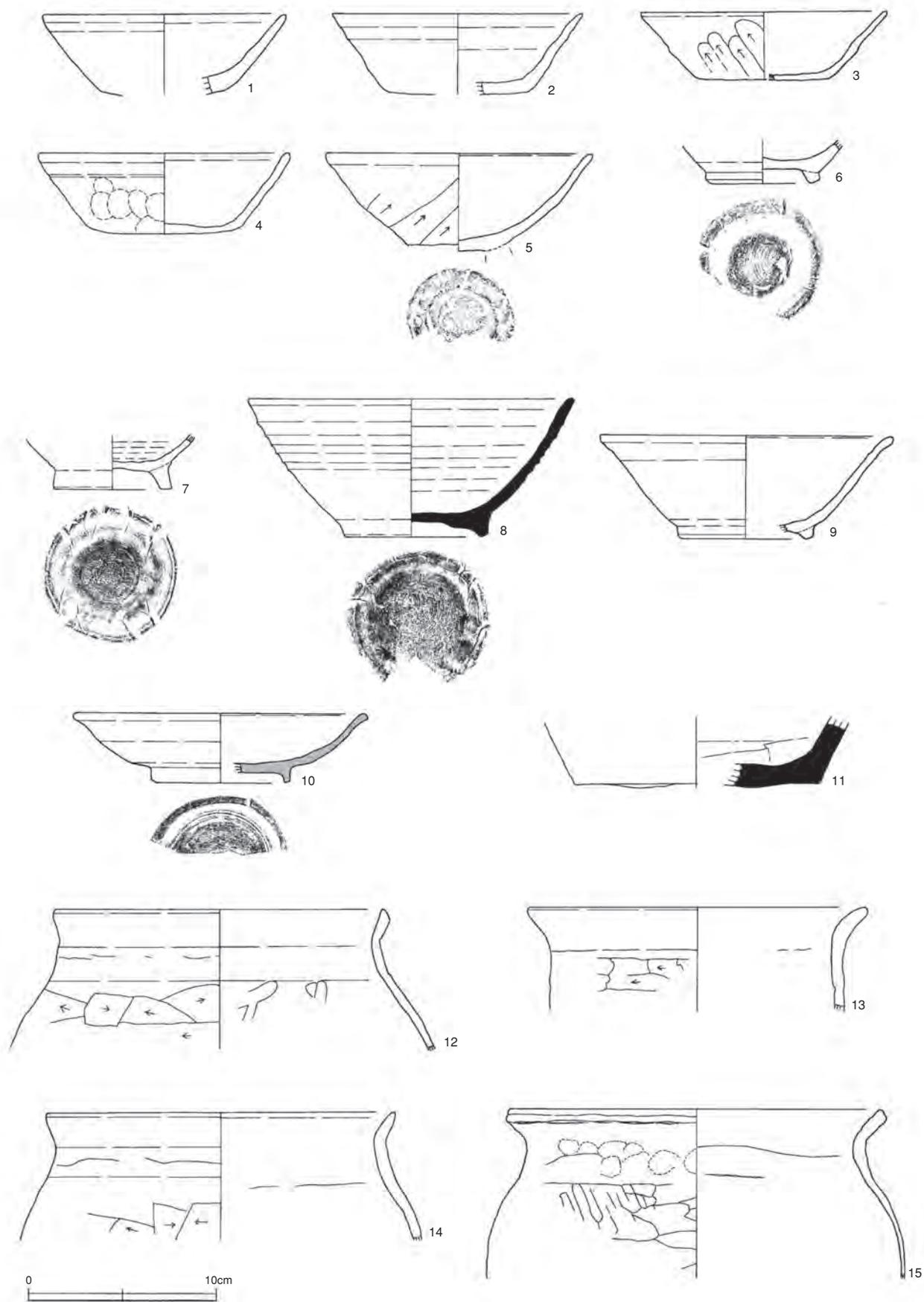
時期 本住居跡の時期を判断する遺物の出土は無い。第2号住居跡（新）に切られていることから9世紀末から10世紀前半と推測される。

第2号竪穴建物跡（新）（第45図）

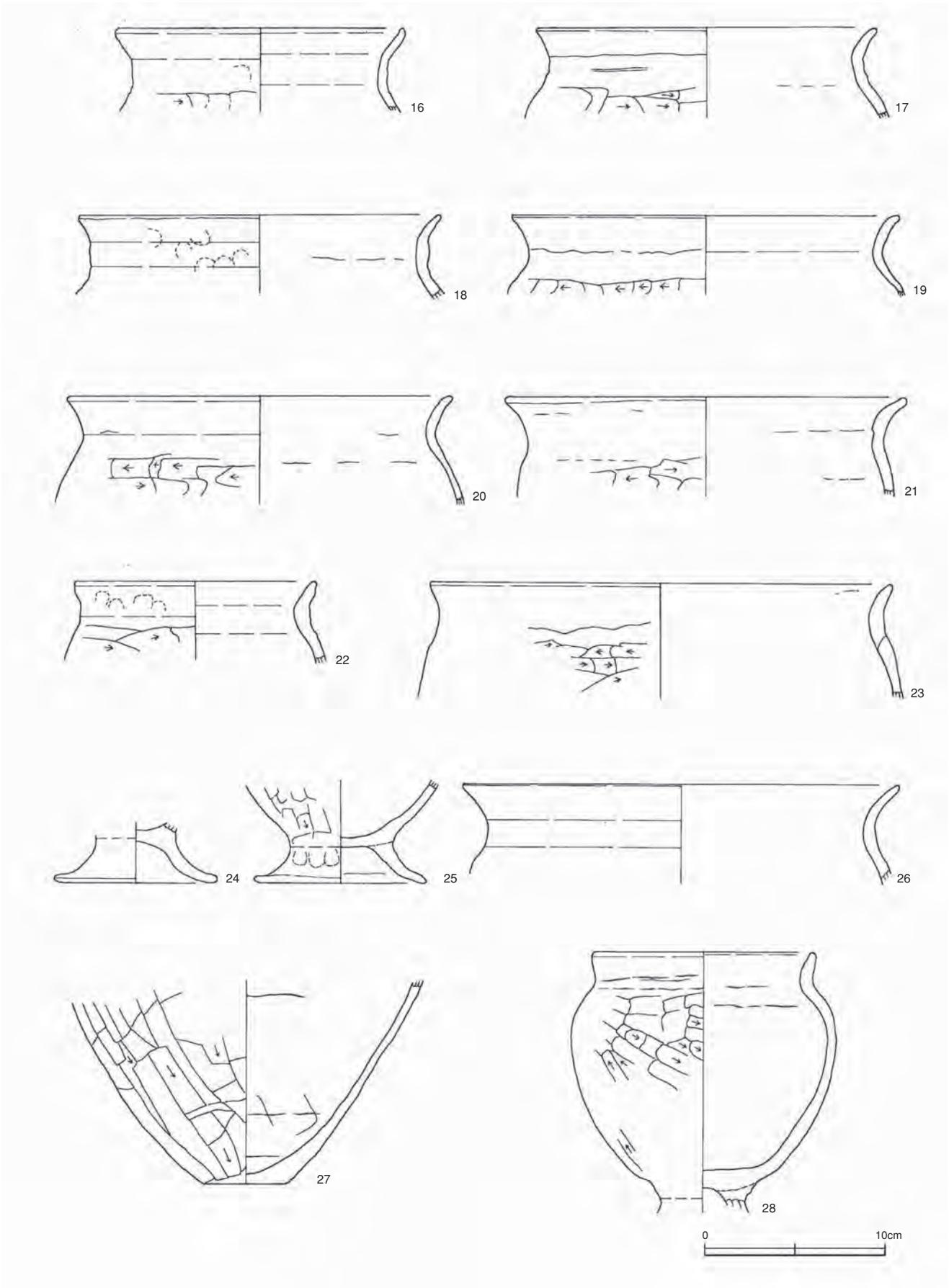
遺構 第2号竪穴建物跡（古）・第3号竪穴建物跡・第4号竪穴建物跡・第6号竪穴建物跡を切って構築されている。規模は、2.8m × 2.6mとなり、主軸はN-11°Wの方位を持つ。北壁やや東寄りにカマドを持つ。壁の掘り込みは、北壁で10cm、南壁で36cmを測る。床は平坦で、東側のみ貼床が確認されている。柱穴状の掘り込みは確認されていない。貯蔵穴と推測される楕円形の掘り込みが、カマド東側に62cm × 52cm、深さ26cmの規模で確認されている。



第46図 王子西遺跡第2号竪穴建物跡遺物分布図



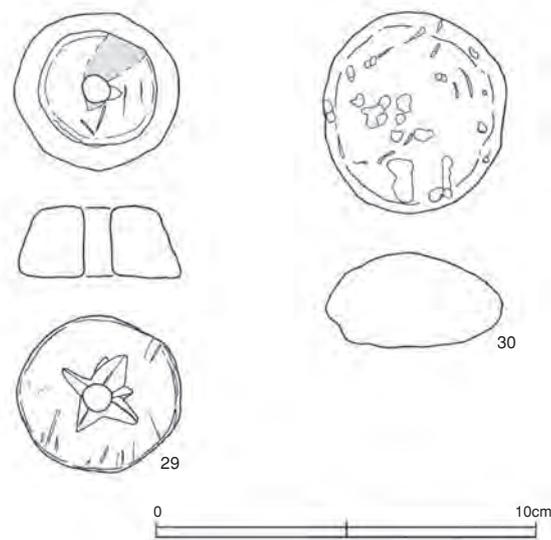
第 47 图 王子西遺跡第 2 号豎穴建物跡出土遺物 (1)



第 48 图 王子西遺跡第 2 号豎穴建物跡出土遺物 (1)

カマドは、燃焼部を袖脇に位置させ、両袖は地山を掘り残している。煙道は確認することが出来なかった。火床面は、被熱によりレンガ状に硬化している。

遺物（第46～49図 第15表） 遺物は、いずれも床面から10cm程浮いた状態で出土している。完形品は無く、ほとんどの遺物が残存率50%以下となっている。第47図1～4は土師器の坏。5は、土師器の高台付椀。6・7は貯蔵穴の覆土中より出土しているロクロ土師器の高台付椀。8は、須恵器の高台付椀。9は、土師器の高台付椀。10はカマド内より出土した灰釉陶器の高台付椀。11は、カマド内より出土した須恵器甕の底部。末野窯産と推測される。第47図12～15、第48図16～23・26は、土師器甕の口縁部。頸部が本来の口の字から崩れてきている。17・21は貯蔵穴の覆土中より、19はカマド内より出土している。



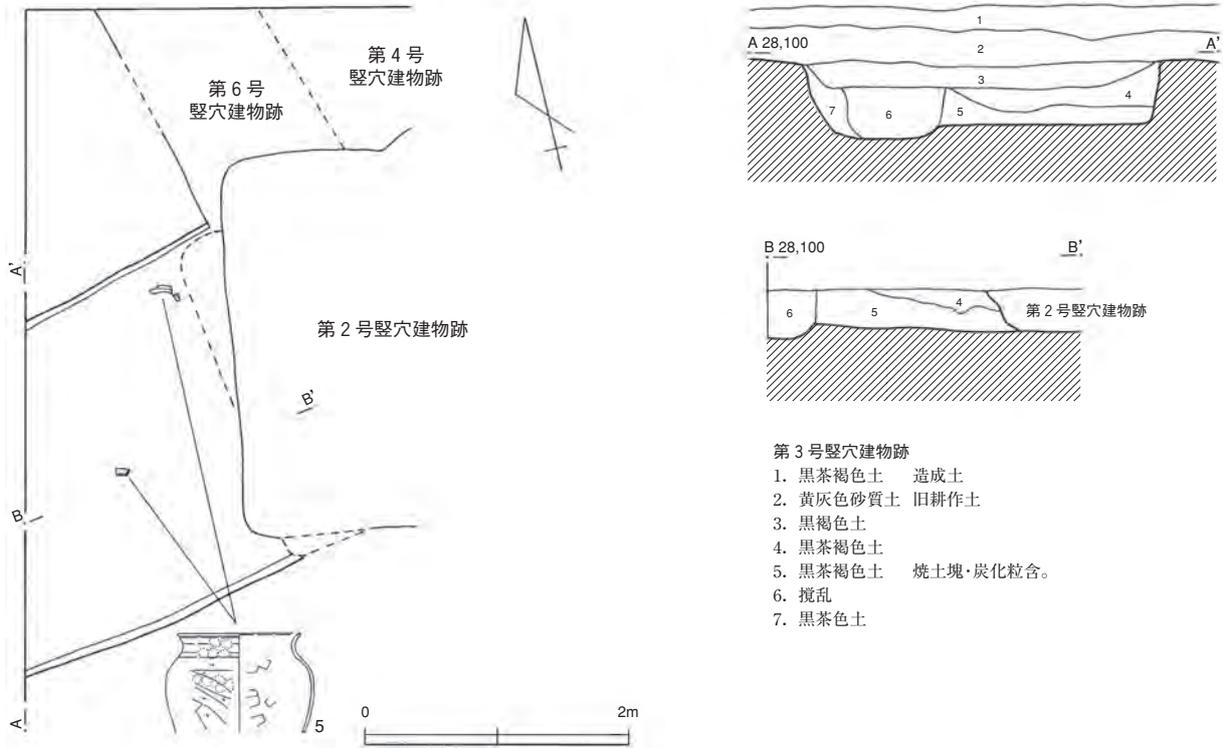
第49図 王子西遺跡第2号竪穴建物跡出土遺物(3)

第15表 第2号竪穴建物跡出土遺物観察表

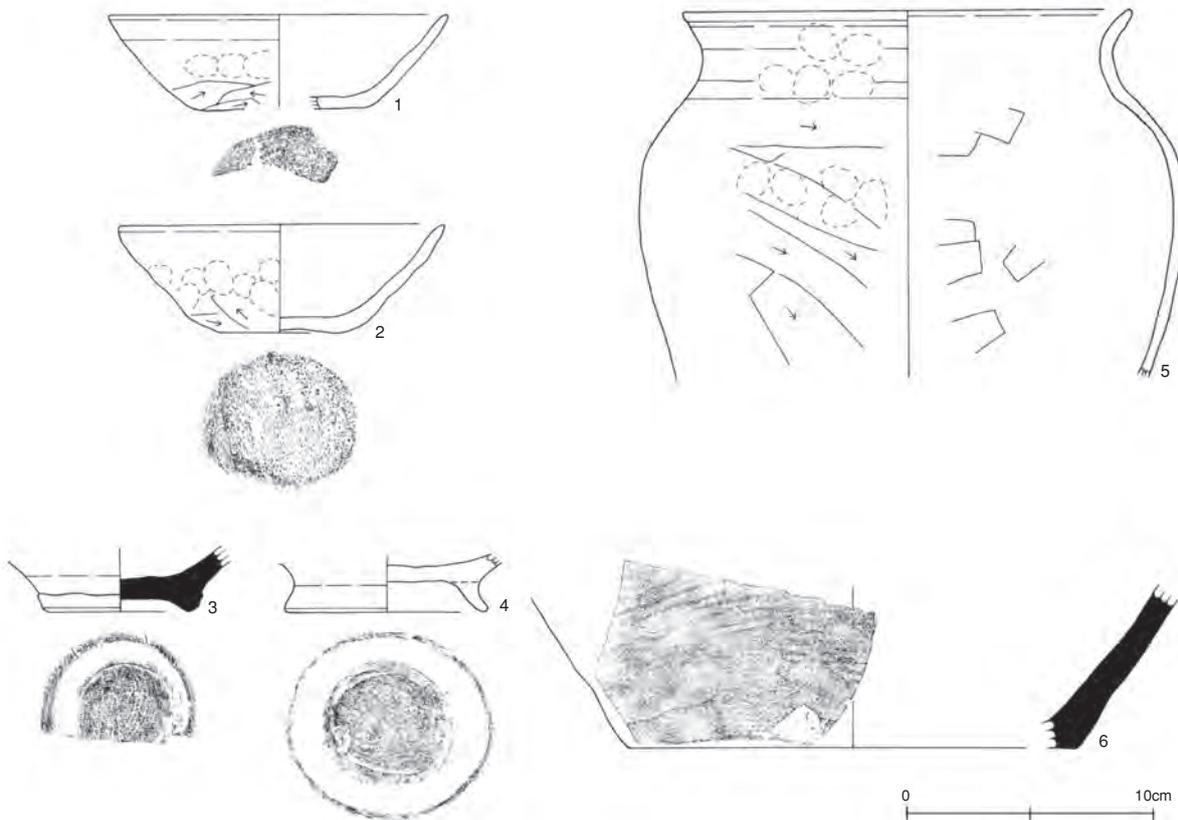
番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	SI2	土師器 坏	(12.8)	(4.3)	(6.5)	ABEGKN	7.5YR	B	40%	
2	SI2	土師器 坏	(13.2)	(4.3)	(7.2)	ABDEGIK	10YR	B	35%	
3	SI2	土師器 坏	(13.0)	(3.7)	(7.0)	ABIJK	10YR	B	25%	
4	SI2-30	土師器 坏	(13.2)	4.4	(7.5)	ABEIJ	7.5YR	B	70%	
5	SI2-1	土師器 高台付 椀	(14.1)	(4.2)	(5.2)	ABEGKN	7.5YR	B	50%	
6	SI2貯蔵穴	ロクロ土師器 高台付椀	—	(2.3)	5.0	ABDK	10YR	B	60%	
7	SI2貯蔵穴	ロクロ土師器 高台付椀	—	(2.9)	6.3	ABIJ	10R	B	50%	
8	SI2-26	須恵器 高台付椀	(17.2)	7.3	7.7	ABIJ	7.5R	B	50%	
9	SI2-14・64	土師器 高台付椀	(15.4)	(5.5)	(6.4)	ABDIN	10YR	B	30%	
10	SI2-カマド23	灰釉陶器 椀	(15.6)	3.7	(6.7)	ABFIN	2.5Y	A	45%	
11	SI2カマド1	須恵器 甕	—	(3.7)	(13.0)	ABN	5Y5/1	B	40%	
12	SI2-3・29	土師器 台付甕	17.4	(7.4)	—	ADEGKN	5YR6/4	A	30%	
13	SI2	土師器 甕	(18.0)	(5.5)	—	ABDGI	10YR6/3	B	20%	
14	SI2-21	土師器 甕	(18.4)	(6.8)	—	ABDEK	10YR5/2	A	10%	
15	SI2-54	土師器 甕	(20.0)	(9.0)	—	ABEGI	2.5Y7/2	B	30%	
16	SI2	土師器 甕	(16.0)	(4.6)	—	ABEI	10YR6/3	B	20%	
17	SI2貯蔵穴	土師器 甕	(18.8)	(5.0)	—	ABCEI	7.5YR6/3	B	20%	
18	SI2	土師器 甕	(20.0)	(4.3)	—	ABDJ	7.5YR6/3	B	20%	
19	SI2カマド2	土師器 甕	(21.4)	(4.4)	—	ABCEIJ	7.5YR5/3	B	15%	
20	SI2-58	土師器 甕	(21.2)	(6.0)	—	ABEIJ	10YR5-3	B	15%	
21	SI2貯蔵穴	土師器 甕	(22.2)	(5.5)	—	ABDJ	7.5YR5/3	B	15%	
22	SI2	土師器 甕	(13.4)	(4.4)	—	ABEI	7.5YR5/2	B	15%	
23	SI2	土師器 甕	(25.4)	(6.4)	—	ABDIJ	10YR6/3	B	15%	
24	SI2	土師器 台付甕	—	(3.3)	9.0	AEJK	7.5YR4/1	B	15%	
25	SI2	土師器 台付甕	—	(5.7)	9.5	ABDEIN	5YR5/3	B	20%	
26	SI2	土師器 甕	(24.0)	(5.5)	—	ABEGI	7.5YR5/3	A	10%	
27	SI2-9・10・13・25	土師器 甕	—	(11.3)	(4.8)	ABGN	5YRN	A	35%	
28	SI2-7・27・28	土師器 台付甕	12.3	(14.5)	—	ABDEIN	10YR6/3	B	40%	
29	SI2-6	紡錘車	下径3.2cm、上径4.3cm、高1.9cm、重量60.0g、孔径0.7cm						100%	色調：5G4/1
30	SI2	軽石	高4.7cm、幅2.5cm、重量34.4cm						100%	色調：2.5Y6/2

第49図29は、頁岩製の紡錘車。上下面には孔を中心に剣先状の刻みが施されている。30は軽石。目立った使用痕は認められない。

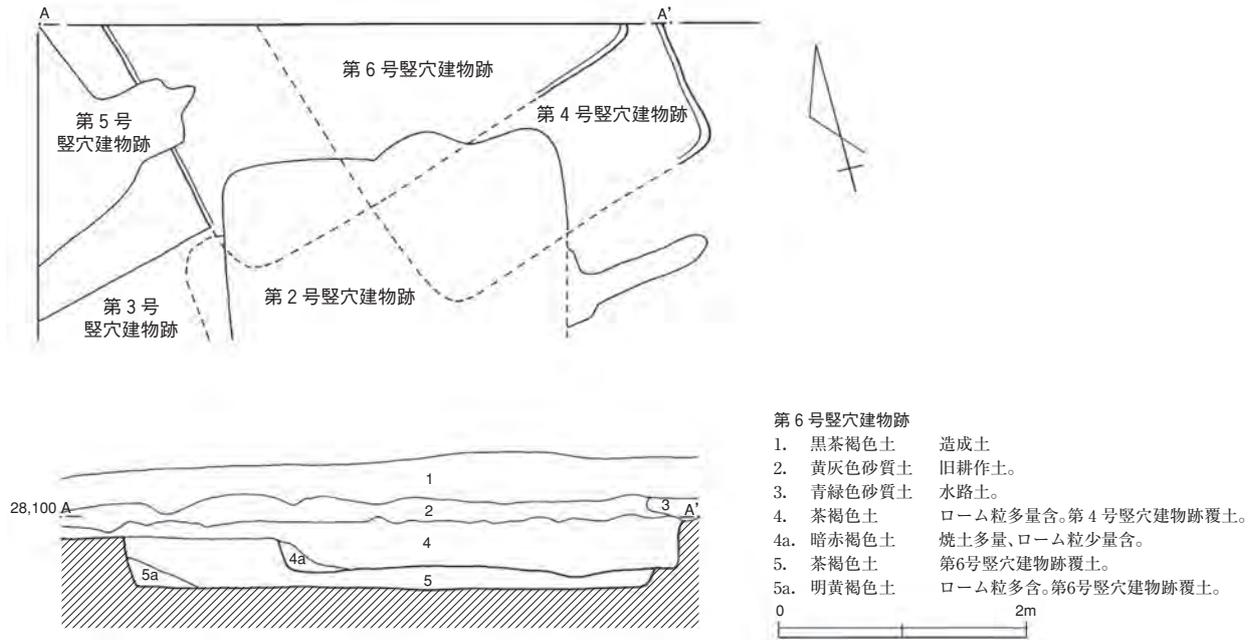
時期 出土遺物から10世紀前半と判断される。



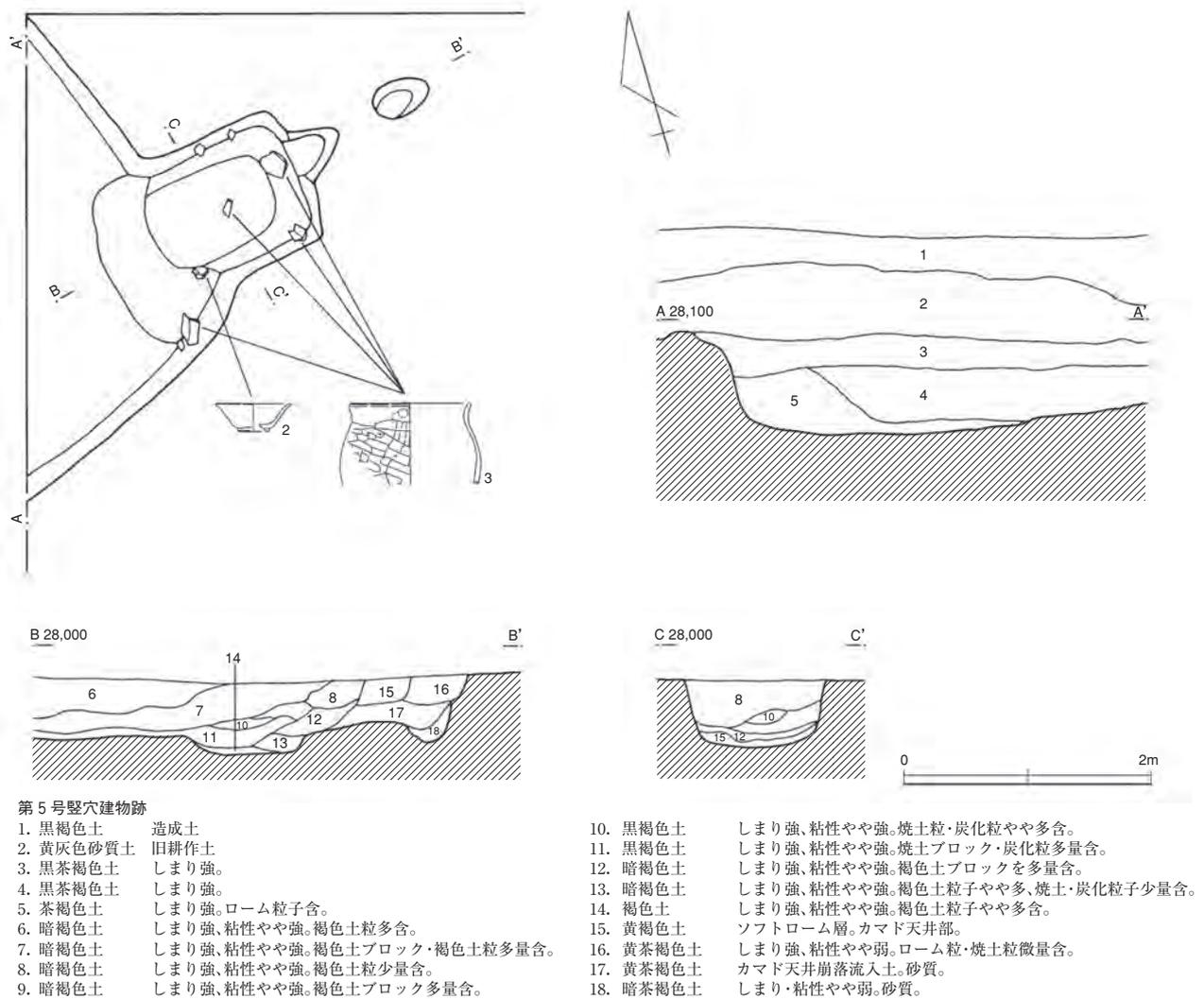
第50図 王子西遺跡第3号竪穴建物跡



第51図 王子西遺跡第3・4号竪穴建物跡出土遺物



第52図 王子西遺跡第4・6号竪穴建物跡



第53図 王子西遺跡第5号竪穴建物跡

第3号竪穴建物跡（第50図）

遺構 西側が調査区外にかかり未調査。東側を第2号竪穴建物跡（古）（新）によって切られている。確認される規模は、3.1×2.6mとなり、主軸はN-74°Eの方位を持つ。カマドは確認されていない。壁の掘り込みは、北壁で30cm、南壁で38cmを測る。床は直床でほぼ平坦。

遺物（第51図 第16表）

第51図1・2は非ロクロ土師器の坏。3は、須恵器の高台付椀。4は、ロクロ土師器の高台付椀。5は、土師器の甕。器厚は薄く、頸部がやや崩れたコの字状を呈している。

時期 出土遺物から9世紀末から10世紀初頭と判断される。

第4号竪穴建物跡（第52図）

遺構 北側が調査区外にかかり未調査。第6号竪穴建物跡を切って構築されているが、南西側を第2号竪穴建物跡（古）（新）に切られている。推定される規模は、2.9m×2.7mとなり、主軸はN-71°Eの方位を持つ。柱穴状の掘り込みおよびカマドは確認されていない。壁の掘り込みは、東壁で20cmを測る。床は直床でほぼ平坦。

遺物（第51図 第17表）

第51図6は、須恵器の甕。末野産と推定される。

時期 出土遺物で時期の特定できる遺物は出土していないが、第51図6から大まかに9世紀～10世紀前半と推測される。

第16表 第3号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	SI3	土師器 坏	13.6	3.8	—	ABCEHIJK	2.5Y5/1	B	30%	
2	SI3床下	土師器 坏	13.0	4.4	4.8	ABDEHIJKM	10YR6/3	B	80%	
3	SI3	須恵器 高台付 椀	—	(2.0)	(6.2)	ABDFL	5Y6/1	B	30%	
4	SI3床下	ロクロ土師器 高台付椀	—	(2.0)	8.2	ABDEHJM	5YR5/3	B	35%	
5	SI3-1・3	土師器 甕	18.0	(14.7)	—	ABCDHIJKM	5YR5/4	B	30%	

第17表 第4号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
6	SI4	須恵器 甕	—	(6.0)	(18.0)	AFL	N4/0	B	20%	末野産

第5号竪穴建物跡（第53図）

遺構 第6号竪穴建物跡を切って構築されている。住居の南東隅コーナー部分が確認されており、プランの大半が調査区外にかかり未調査。床は直床でほぼ平坦。壁の掘り込みは、南壁で26cmを測る。柱穴状の掘り込みは確認されていない。

カマドは、南東コーナー部に位置する。燃焼部を壁外に位置させ、袖部は確認されない。煙道はトンネル状に天井部が20cm程残存し、排煙口に至る。

遺物（第54図 第18表）遺物は、いずれも床面から10cm程浮いた状態で出土している。完形品は無く、いずれも残存率50%以下となっている。第54図1はロクロ土師器の坏で、カマド内より出土している。2は、ロクロ土師器の高台付椀。3は土師器の甕で、カマド内より出土している。器厚がやや厚めで、本来コの字状となる頸部が崩れている。

時期 出土遺物から10世紀前半と判断される。

第6号竖穴建物跡（第52図）

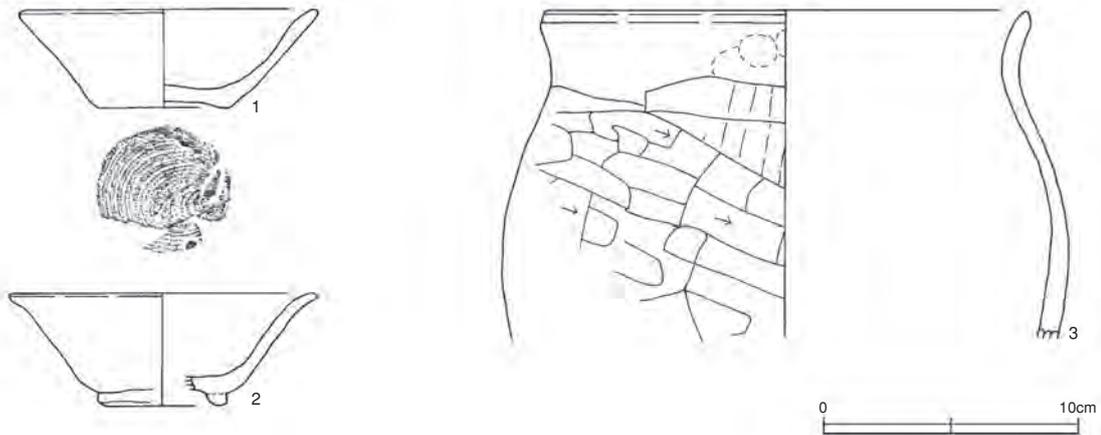
遺構 第4・6号竖穴建物跡に切られ、北側2/3が調査区外にかかり未調査。床は直床でほぼ平坦。柱穴状の掘り込み及びカマドは確認されていない。壁の掘り込みは、西側で35cmを測る。

遺物 遺物は、土師器の小片が覆土中より出土しているが、図示するには至らなかった。

時期 出土遺物で、時期を特定できる遺物は出土していないが、第4・5号竖穴建物跡に切られていることから、9世紀～10世紀前半に位置づけられると推測される。

(2) 遺構外出土遺物（第55図 第19表）

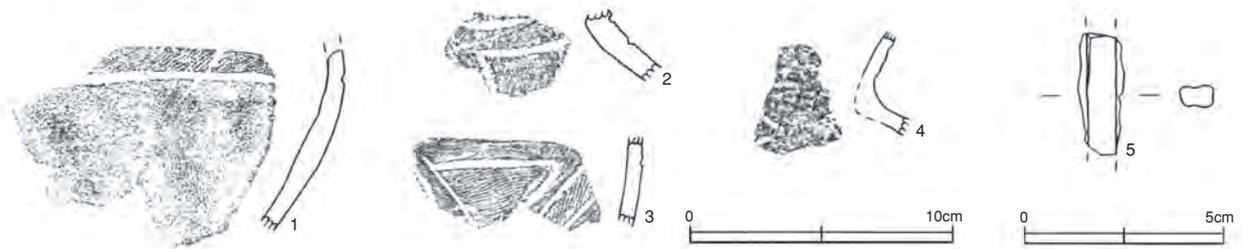
遺構外出土遺物の出土量は少なく、10世紀前半に属する土師器・須恵器片が大半を占めるが、図示するには至らなかった。第55図1～4は、縄文時代後期の堀之内式2式土器。沈線により三角形文を描出し、細い縄文を充填施文している。5は、鉄鏃の柄部。両端を欠損し、残存長3.0cmを測る。



第54図 王子西遺跡第4・6号竖穴建物跡出土遺物

第18表 第5号竖穴建物跡出土遺物観察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	SI5カマド	ロクロ土師器 坏	(11.4)	3.8	— 5.0	ABEIK		B	50%	
2	SI5-5	ロクロ土師器 高台付碗	(11.7)	4.4	(4.4)	ABDIK	10YR6/4	B	30%	
3	SI5カマド	土師器 甕	19.0	(12.9)	—	ABCIJ	10YR5/2	B	45%	



第55図 王子西遺跡遺構外出土遺物

第19表 遺構外出土遺物観察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	遺構外	縄文土器	—	—	—	ABCDIJ	10YR5/3	B	—	破片
2	遺構外	縄文土器	—	—	—	ABCIJK	2.5Y5/2	B	—	破片
3	遺構外	縄文土器	—	—	—	ABCIJK	10YR5/2	B	—	破片
4	遺構外	縄文土器	—	—	—	ABCIJK	2.5Y5/2	B	—	破片
5	遺構外	鉄 鏃						B	25%	柄部のみ残存

4 調査のまとめ

今回の発掘調査によって検出された遺構・遺物は、主体となるのは9世紀末から10世紀前半の平安時代である。調査は個人住宅建設部分のみであるため未知な部分が多い。第2次調査地点では10世紀前半の竪穴建物跡・掘立柱建物跡・溝跡等が、遺物採取地点では古墳時代の遺物が採取されており、本遺跡は、古墳時代より10世紀前半にかけて断続的に営まれた集落跡と推測される。

本遺跡は、妻沼低地上の芝川と福川に挟まれた微高地上南端の福川左岸に位置しており、平安時代末に平家政権下で長井庄を治めた長井齊藤氏が館を構えたとも伝えられている。現在この微高地のほぼ中央を、南北方向に貫くように県道太田・熊谷線が通っており、治承三年（1179）創建と伝えられる聖天山歓喜院と久安（1145～1151）の紀年銘の残る経筒が発見された大我井遺跡（妻沼町教育委員会：1982）の間を抜け、利根川にかかる刀水橋を経て群馬県太田市へ至る。市内では発見されていないが、上野国を通る東山道から分岐した「武蔵路」が、熊谷市域を南下して武蔵国府へ至るルートが想定されており、本遺跡付近を通過している可能性が高く、利根川の渡河点には「津」が整備されたことも考えられる。

第2次調査で注目される遺物として、第2号溝跡より出土した、鉄製鍵が挙げられる（熊谷市王子西遺跡調査会：2012）。鉄製鍵の出土は、県内では本遺跡例を含め8遺跡9点を数える。

川越市光山遺跡（財 埼玉県埋蔵文化財調査事業団：1994）は、遺跡東側に鎌倉街道の奥州道とされる古道が走っており、陸路の渡河点と水路が交差する交通の要衝として発達した集落と推測されている。

上里町中堀遺跡（財 埼玉県埋蔵文化財調査事業団：1997）は、郡家説、国府出先機関説、国司館・留住国司の居宅説・庄園説等あり定まっていない。

行田市築道下遺跡（財 埼玉県埋蔵文化財調査事業団：2000）は、県内屈指の件数・棟数を数える巨大集落遺跡で、元荒川の流通を管掌した集落との推測もなされている。

深谷市北坂遺跡（財 埼玉県埋蔵文化財調査事業団：1981）は、住居跡が緩斜面部に方位をそろえて分布し、那珂郡衙と有機的なつながりを持った集団の集落と推測されている。

和光市花ノ木遺跡（財 埼玉県埋蔵文化財調査事業団：1994）遺跡は、古墳時代後期から平安時代後半まで断続的に営まれた集落で、住居跡・掘立柱建物跡が、地形的に制約された範囲に重層的に確認されている。

本庄市今井遺跡群（財 埼玉県埋蔵文化財調査事業団：1985）遺跡は、7世紀後半から10世紀にかけて営まれた集落跡で、住居跡・掘立柱建物跡・粘土採掘坑等が確認されている。

熊谷市寺内遺跡（江南町：1995）遺跡は、8世紀前半から10世紀にかけての古代寺院跡で、男衾郡の大領壬生吉志福正との関連が推測されている。

寺内遺跡以外は、地方官衙関連人物にかかわる遺跡や交通の要衝に立地する遺跡と推測される、掘立柱建物を伴う大規模集落跡となっている。

本遺跡は、現在のところ調査面積が狭く、遺跡の性格を判断する材料が不足しているが、鍵の存在は、官民にかかわらず重要物品を納めた倉庫の存在が前提となり、組織的な管理体制が存在したことが推測される。鍵の機能は、その重要物品の管理・保管にあり、その倉庫を必要とする施設およびその収納品を備える遺跡は、一定以上の階層に属する人物・機関が存在した遺跡と考えられる。

引用・参考文献

- 熊谷市遺跡調査会 1977 『横塚山古墳』—墳丘裾部の調査—
- 熊谷市遺跡調査会 2011 『瀬戸山遺跡・山ヶ谷戸遺跡』 熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書
- 熊谷市王子西遺跡調査会 2012 『王子西遺跡Ⅱ』
- 熊谷市教育委員会 1979 『中条里遺跡調査報告書Ⅰ』 昭和52年度熊谷市埋蔵文化財調査報告
- 熊谷市教育委員会 1981 『鎧塚古墳』 昭和55年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 熊谷市教育委員会 1983 『めづか』
- 熊谷市教育委員会 1992 『西別府廃寺』 平成3年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 熊谷市教育委員会 1994 『西別府廃寺(第2次)』 平成5年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 熊谷市教育委員会 1999 『横間栗遺跡』 平成10年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 熊谷市教育委員会 2000 『寺東遺跡・別府氏館跡』 平成11年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 熊谷市教育委員会 2000 『一本木前遺跡』 平成11年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 熊谷市教育委員会 2000 『西別府祭祀遺跡』 平成11年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 熊谷市教育委員会 2001 『一本木前遺跡Ⅱ』 平成12年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 熊谷市教育委員会 2002 『中条氏館跡』 平成13年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 熊谷市教育委員会 2002 『一本木前遺跡Ⅲ』 平成13年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 熊谷市教育委員会 2003 『一本木前遺跡Ⅳ』 平成14年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 熊谷市教育委員会 2004 『一本木前遺跡Ⅴ』 平成15年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 熊谷市教育委員会 2009 『西別府祭祀遺跡Ⅱ』 埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書第5集
- 熊谷市教育委員会 2010 『西城切通遺跡』 埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書第6集
- 熊谷市教育委員会 2011 『西別府祭祀遺跡Ⅲ』 埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書第11集
- 栗原文蔵・小林重義 1970 『妻沼町弥藤吾新田遺跡』『埼玉考古』第8号
- 江南町 1995『江南町史 考古資料編1』
- 埼玉県 1984『新編 埼玉県史 資料編3 古代1 奈良平安』
- 埼玉県遺跡調査会 1976『弥藤吾新田遺跡発掘調査報告書』 埼玉県遺跡調査会報告第29集
- 埼玉県遺跡調査会 1977『横塚山古墳』 埼玉県遺跡調査会報告第9集
- 埼玉県教育委員会 1984『池森・池上』 一般国道125号埋蔵文化財発掘調査報告書
- 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1981『埋蔵文化財調査報告書—XI—清水谷・安光寺・北坂』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第1集
- 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1985『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集
- 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991『北島遺跡3』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第103集
- 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994『花ノ木・向原・柿ノ木坂・水久保・丸山台』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第134集
- 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994『光山遺跡群』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第137集
- 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1997『中堀遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集
- 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998『北島遺跡4』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第195集
- 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2000『築道下遺跡Ⅳ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第246集
- 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2005『飯塚北遺跡Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第306集
- 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2005『飯塚古墳群Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第317集
- 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2006『飯塚北Ⅱ/飯塚古墳群Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第321集
- 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2007『諏訪木遺跡Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第336集
- 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2010『西別府館跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第374集
- 塩野 博 1963『埼玉県妻沼町発見の土師器』『埼玉考古』復刊第1号 埼玉考古学会
- 深谷市教育委員会 2006『幡羅遺跡Ⅰ』—正倉跡の調査(1)— 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第75集
- 深谷市教育委員会 2007『幡羅遺跡Ⅱ』—正倉跡の調査(2)— 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第88集
- 深谷市教育委員会 2008『幡羅遺跡Ⅲ』—実務官衙域の調査(1)・道路跡の調査— 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第99集
- 深谷市教育委員会 2009『幡羅遺跡Ⅳ』—実務官衙域の調査(2)— 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第104集

- 深谷市教育委員会 2009 『幡羅遺跡Ⅴ—遺跡北東部の調査— 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第109集
- 深谷市教育委員会 2010 『幡羅遺跡Ⅵ—実務官衙域の調査(3)・実務官衙域周辺の調査— 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書
- 増田逸郎 1970 「大里郡妻沼町発見の土師器—須恵器を忠実に模倣した土器—」『埼玉考古』第8号 埼玉考古学会
- 水口由紀子 2006 「埼玉県熊谷市妻沼経塚の再検討」『埼玉の考古学Ⅱ』 埼玉考古学会
- 妻沼町 1977 『妻沼町誌』 妻沼町誌編纂委員会
- 妻沼町遺跡調査会 2005 『鵜ノ森遺跡 2005年 発掘調査の概要』
- 妻沼町教育委員会 1982 『大我井経塚』 資料集第二号
- 妻沼町教育委員会 1981 『妻沼西南遺跡群Ⅰ—道ヶ谷戸条里・道ヶ谷戸・飯塚南一』 妻沼町埋蔵文化財調査報告第1集
- 妻沼町教育委員会 1995 『沼ノ上・飯塚裏・藤屋敷・中原・八幡木』
- 妻沼町教育委員会 2004 『飯塚南遺跡』
- 妻沼町教育委員会 2004 『鵜ノ森遺跡』
- 妻沼町教育委員会 2004 『飯塚北遺跡3』
- 妻沼町教育委員会 2004 『弥藤吾新田遺跡Ⅱ』
- 妻沼町教育委員会 2005 『上江袋古墳群発掘調査報告書』
- 妻沼町教育委員会 2005 『西城館・長安寺北遺跡』
- 立正大学博物館 2008 『野原古墳群発掘調査報告書』 館蔵資料「基礎文献」叢刊第3輯

立野遺跡



V 立野遺跡の調査

1 調査に至る経過

平成 16 年度に行われた、第 59 回国民体育大会秋季大会における馬術競技場跡地利用として、総合運動公園の造成が当時の江南町において計画された。事業計画地は、立野遺跡（県遺跡 No, 65-054）内に位置しており、馬術競技場造成にかかる事前の発掘調査（第 1・2 次調査）では、墳丘の削平された古墳が 11 基（第 1・3・11～18 号墳・第 1 号小石室）確認されており（江南町教育委員会：2005）、周辺部には墳丘の残る古墳が 7 基確認されていた。町担当課と協議の結果、南西側に残る 3 基の古墳（第 6～8 号墳）については、園路を設け現状保存することとし、南東部に位置する 2 基の古墳（第 4・5 号墳）については、調整池の掘削が計画されており、設計変更が困難であるとの判断から記録保存の措置を講ずることとなった（第 3 次調査）。

第 2 号墳については、駐車場が計画された。墳丘は民地の地境に位置し、両側は既に削平されており、植えられた境木部分がかろうじて残存している状況であった。削平された墳丘断面には、凝灰岩片が確認され、石室が既に失われている可能性があった。古墳の保存協議を行う上で、古墳の依存状況を確認する必要が生じたことから、急遽、石室の残存状況を含めた遺構の確認調査を実施することとなった（第 4 次調査）。

調査にかかる事務は、江南町教育委員会から「埋蔵文化財発掘調査の通知」（平成 17 年 11 月 15 日付江教発第 2116 号）を埼玉県教育委員会へ通知している。

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

発掘調査は平成 17 年 12 月 1 日から同年 12 月 26 日まで行った。調査面積は約 200 m²である。12 月 1 日に重機による表土除去作業を行い、12 月 2 日より作業員による遺構発掘作業と遺構平面図を作成し、12 月 23 日に完掘写真の撮影を行った。12 月 26 日には現場の埋め戻し作業を終了し、機材等を撤収して現場における作業を終了した。取り上げた埋蔵物は、平成 18 年 1 月 4 日付けで熊谷警察署へ発見届を、平成 18 年 1 月 5 日付けで埼玉県教育委員会へ埋蔵文化財保管証を提出した。

この発掘調査は、江南町が平成 17 年度の文化財関係国庫補助事業を受けており、国 1/2、埼玉県 1/4、江南町 1/4 の費用負担を行っている。

(2) 整理・報告書作成

整理作業は、平成 24 年 9 月 3 日から平成 25 年 3 月 26 日まで実施した。

まず、遺物の洗浄、注記、接合、復元作業を行った。その後、遺物の分類を行い、実測作業を開始した。また、これらと並行して遺構の図面整理を行った。

次に、土器等の遺物のトレース・拓本を採り図版を作成し、併せて遺構等のトレース・図版の作成を行った。そして、遺構の写真整理・遺物写真撮影を行い、写真図版の割付をした。また、これと並行して原

稿執筆を行った。

最後に、印刷業者の選定を行い、校正を経て3月26日に本報告書を刊行した。

(3) 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 江南町教育委員会

ア 発掘調査

平成 17 年度

事務局 教育長	馬場 攻
教育次長	岡田 恒雄
次長補佐	小林佐智子
次長補佐	新井 端
主 査	森田 安彦
主 任	吉田 正人
主 任	折川 義典
主 任	神田健一郎
発掘担当者	森田 安彦

イ 整理・報告書作成

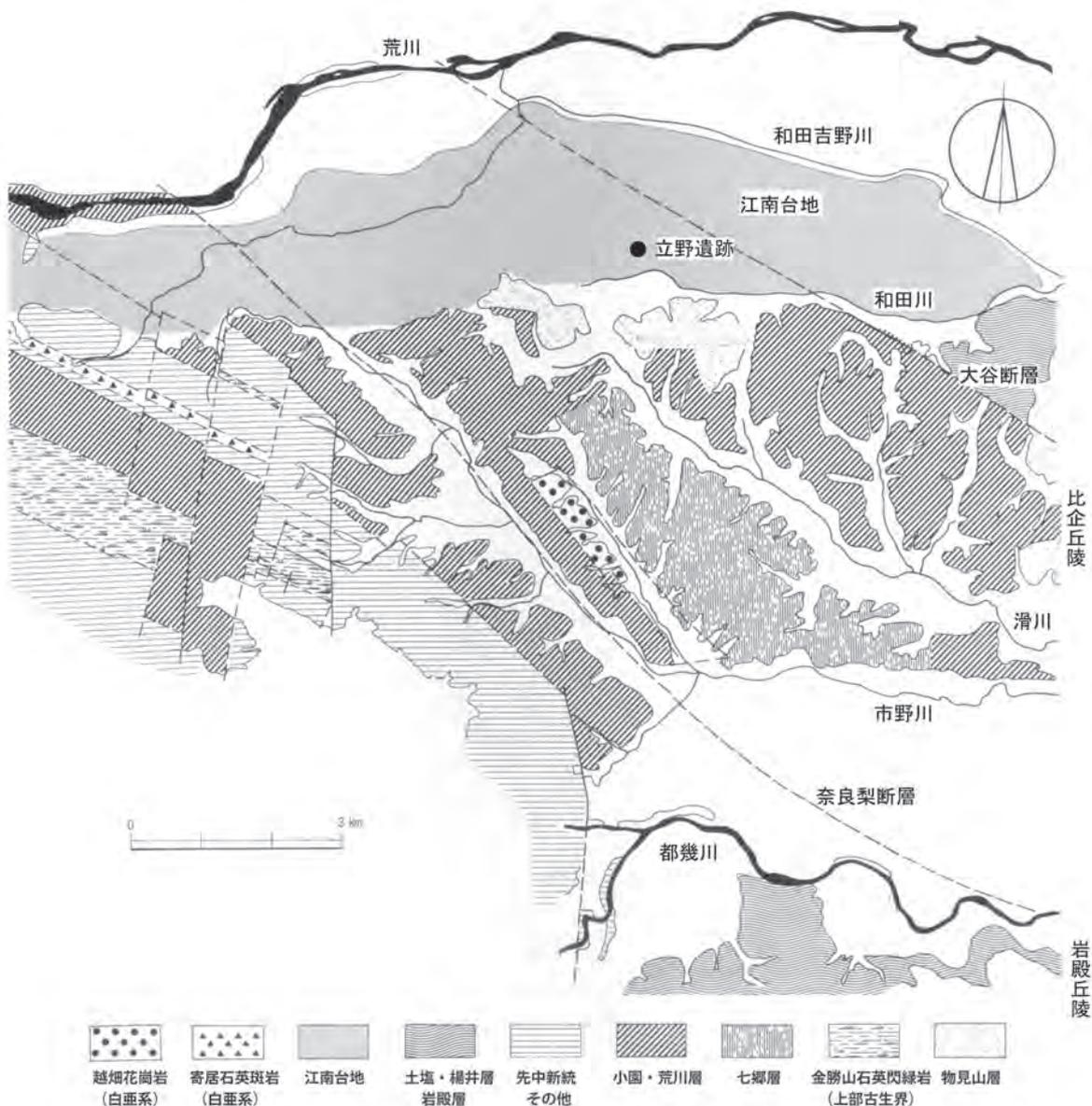
平成 24 年度

主体者 熊谷市教育委員会

事務局 教育長	野原 晃
教育次長	鯨井 勝
社会教育課長	岩上 精純
社会教育課文化財保護担当副参事	根岸 敏彦
社会教育課副課長兼文化財保護係長	森田 安彦
	主 幹 吉野 健
	主 査 松田 哲
	主 査 杉浦 朗子
	主 任 蔵持 俊輔
	主 事 山下 祐樹
報告書編集・執筆者	森田 安彦

2 遺跡の立地と環境

江南台地は、寄居町金尾付近より熊谷市に至る東西 17km、南北 3km にわたる幅狭な洪積台地である。江南台地は、台地の基盤となる荒川中位段丘の発達した第三紀層上に秩父古生層(層厚 8～20m)の上に、川本粘土層とされる灰白色の粘土層(層厚 2～5m)、下部を新期ローム層(層厚 1～2m)に、また、上部を南関東の立川ローム層に対比されている大里ローム層と称されているローム層(層厚 1～2m)が堆積し、表層に腐植土が載っている。台地の海拔高度は、上流の寄居町木持付近で 140m、深谷市上本田付近で 80m、台地末端にあたる熊谷市原新田付近で 45m となり、下流方向に次第に低くなっている。台地の北・東側は、荒川およびその沖積地に面し、比高差 10～15m 程の崖線で画され、崖線下には和田吉野川が流れている。台地上には平地林が発達し、狭小な開析谷や埋没谷が複雑に入り組み、その最奥部および開口部には溜池が築かれており、独特の自然景観を醸し出している。



第 56 図 江南台地・比企丘陵地質概略図 (比企団体研究グループ 1991 より)

比企丘陵は、外秩父山地から東方に半島状に突き出した丘陵であり、北部は江南台地、南部は東松山台地、東部は吉見丘陵に接している。丘陵内では、高根山（標高 105m）、二宮山（標高 132m）、大立山（標高 113m）など標高 100m 前後の山が丘陵西半分の地域に分布して、突出した地形をつくっているが、全体的には 100m 以下の丘陵地形となっている。本丘陵は、地質学的には新生代第三紀層に相当し、礫岩・砂岩・泥岩・凝灰岩等の互層によって構成されている。層序は、下位より、前期中新世に属する七郷層（凝灰岩質で緑色変質が特徴。層厚 830m 以上）、中期中新世に属する小園層（粗粒砂岩を主体とし、礫岩・泥岩・凝灰岩を伴う。層厚 300m）、荒川層（砂岩・泥岩の互層で、下部に礫岩を伴う。層厚 350m）、土塩層（砂質泥岩を主体とし、砂岩・凝灰岩を伴う。層厚 300m）、後期中新世に属する楊井層（礫岩を主体とし砂岩・凝灰岩を伴う。層厚 300m）となり、これらの中新統を不整合に覆って更新世に属する物見山礫層が分布している（比企団体研究グループ：1991）。滑川町福田周辺から産出される通称「福田石」と呼ばれる斜長流紋岩質凝灰岩、熊谷市小江川周辺から産出される通称「小江川石」と呼ばれる白色細粒凝灰岩は、古くは周辺地域に分布する古墳石室石材として利用されている。

今回報告する立野遺跡は、熊谷市南西部の江南台地上に所在する。江南台地崖線部から 1.6km 入った、和田川左岸の標高 70m 前後の平坦地に位置する。和田川左岸に分布する古墳群の中で最上流に位置し、川を挟んだ対岸には、嵐山町古里古墳群北田支群が位置し、さらに南側には熊谷市塩古墳群が立地する比企丘陵北縁を望むことができる。

本遺跡の北側には、古墳時代から平安時代の集落跡である桜山遺跡（第 57 図 1、財・埼玉県埋蔵文化財調査事業団：1995）が地形的に連続し、和田川に沿って東側には、同期の集落遺跡である岩比田遺跡（第 57 図 2、岩比田遺跡調査会：1983）・氷川遺跡（第 57 図 3）が位置している。

次に、立野遺跡周辺の古墳時代の歴史的環境について概観する。

古墳時代の遺跡は、前期と後期に遺跡が増加し、中期の遺跡は極端に少ない。比企丘陵北端から江南台地上を中心に集落跡が分布し、埴輪や鉄製品の生産遺跡、前期・後期の群集墳に特徴が認められる。

古墳時代前期の集落は、中小規模のものが比企丘陵・江南台地上に立地し、生産域と推定される台地上の開析谷の谷津田に面しており、その立地は前時期の弥生時代後期のあり方を踏襲している。調査された主な集落遺跡としては、比企丘陵上においては、釜場遺跡（第 57 図 4、江南町：1995）で、住居跡 11 軒、塩丸山遺跡（第 57 図 5、江南町：1995）で住居跡 1 軒が確認されている。江南台地上では、富士山遺跡（第 57 図 7、江南町：1995）で住居跡 3 軒、姥ヶ沢遺跡（第 57 図 7：江南町：1995）で住居跡 10 軒が確認されている。

また、集落における手工業生産を示す資料として、行人塚遺跡（第 57 図 8、江南町：1995）における小鍛冶関連遺構が挙げられる。竪穴住居跡より、羽口転用の高坏形土器の脚部、鉄滓、台石、叩石などが出土しており、県内でも最も早い段階での製鉄技術の導入事例となっている。

比企丘陵上に立地する塩西遺跡（第 57 図 9、江南町教育委員会：1989）からは、祭祀にかかると推定される土坑から、40 個体の土器が出土しており、S 字状口縁の台付甕形土器、網目状撚糸文の施文された壺形土器、籠目文土器が出土している。

墳墓は、比企丘陵上に立地する。前方後方墳 2 基を中心に方墳 26 基で構成される埼玉県指定史跡塩

古墳群狸塚支群(第57図J、熊谷市教育委員会:2011)が挙げられる。前方後方墳の第1号墳の周溝からは、焼成前底部穿孔の有段口縁壺形土器が出土している。また、主体部については、方墳の第25号墳が調査されており、箱型木棺の直葬が確認され、鉄剣1とガラス小玉4が出土している(江南町教育委員会:1996)。

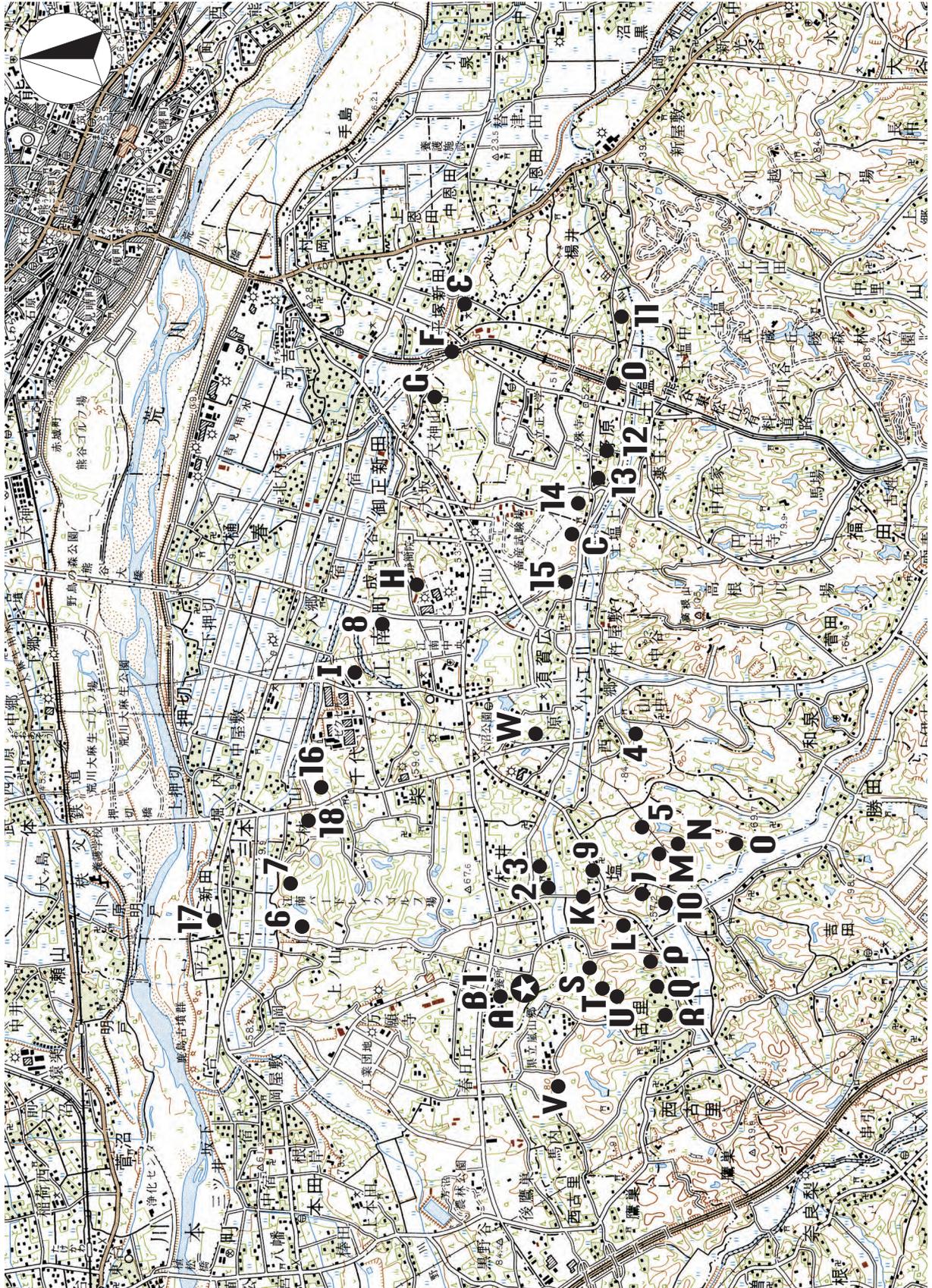
古墳時代中期に属する遺跡は極端に少なく、その実態は不明と言わざるを得ない。比企丘陵上では、塩西遺跡で住居跡2軒(第57図9、江南町教育委員会:1995)、塩新田遺跡(第57図10、江南村教育委員会:1982)で、炉と併用したカマドを持つ住居跡1軒が確認されており、本地域におけるカマド導入の様相を示す好例となる。

後期から終末期にまると、遺跡数は大幅な増加をみる。集落遺跡をみると、和田川流域左岸に集落遺跡が広く展開し、急激に流域の開発が進行した状況がうかがえる。

野原丸山遺跡(第57図11、江南町教育委員会:1996)では7世紀前半に属する住居跡2軒、元境内遺跡(第57図12、熊谷市教育委員会:2009)では、4次に渡る調査が実施され、6世紀前半から奈良・平安時代に至る住居跡28軒が検出され、住居跡より鉄製鋤先や炭化桃核が出土している。諏訪脇遺跡(第57図13、熊谷市教育委員会:2009)では、6世紀前半の住居跡2軒、宮脇遺跡(第57図14、熊谷市教育委員会:2009)からは、6世紀前半の住居跡6軒が検出されており、住居跡からは炭化桃核、羽口、鉄滓、滑石製有孔円盤の未製品等が出土している。本田・東台遺跡(第57図15、江南町教育委員会:1988・1995)は4次に渡る調査が実施されており、6世紀前半から7世紀末にかけての住居跡74軒が検出されており、地形及び遺物の散布状況から想定される住居跡数は200軒を超える規模の集落が想定される、和田川流域中最大規模の集落である。住居跡からは、鉄滓、羽口が出土し、鍛冶炉も検出されている。野原古墳群を挟んで分布する和田川流域左岸のこれらの集落跡は、奈良・平安時代へと発展的に継続するもので、野原古墳群を形成した首長層に支配された人々による集落と考えられ、これらの遺跡から鍛冶関連の遺構・遺物が確認されたことは、該期における手工業生産の実態を示すものとして重要である。この他、宮下遺跡(第57図16、江南村教育委員会:1985)、新田裏遺跡(第57図17、江南町:1995)等で住居跡が確認されている。

墳墓としては、前方後円墳と円墳が存在しており、円墳は小規模なものが群集墳を形成する 경우가多く、6世紀後半から7世紀前半にかけて築造を開始する例がほとんどである。群集墳は、江南台地和田川流域に立地するものとしては、今回報告する立野古墳群(第57図A、江南町教育委員会:2005)のほか、和田川最深部の円墳3基で構成される桜山古墳群(第57図B、江南町:1995)、3基の円墳で構成される上原古墳群(第57図W、江南町:1995)、「踊る埴輪」を出土したことで知られる前方後円墳1基と円墳23基で構成される野原古墳群(第57図C、柳田:1962、亀井:1978、江南町:1996、立正大学博物館:2008)、11基の円墳で構成される野原東古墳群(第57図D、:埼玉県遺跡調査会:1974、江南町:1995)がある。

和田吉野川流域では、江南台地先端部に立地する全長41mの前方後円墳である伊勢山古墳を中心に19基の円墳が確認されている瀬戸山古墳群(第57図E、埼玉県教育委員会:1973、熊谷市:1984、熊谷市教育委員会:1978・2001)、6基の円墳で構成される万吉下原古墳群(第57図F、埼玉県教育委員会:1991)、4基の円墳からなる天神山古墳群(第57図G、江南町:1995)、5基の円墳からなる静簡院古墳群(第



第 57 図 立野遺跡周辺遺跡位置図

57 図H、江南町：1995)、3 基の円墳で構成される上前原古墳群 (第 57 図 I、江南町教育委員会：2006) がある。

この他生産遺跡では、埴輪窯が姥ヶ沢遺跡 (第 57 図 6、江南町千代遺跡群調査会：1998) で 2 群 9 基、権現坂埴輪窯跡群 (第 57 図 19、小澤：1964、江南町千代遺跡群発掘調査会：1998) で 2 群 7 基が調査されている。権現坂埴輪窯跡群では、粘土採掘坑が確認されており、さきたま古墳群をはじめとして周辺の古墳群に埴輪を供給していたことが推測されている。

比企丘陵上に立地するものとしては、総数 98 基が 6 支群に分かれて分布する大規模古墳群である塩古墳群がある。

狸塚支群 (第 I 支群) —4 世紀代に構築された前方後方墳 2 基、方墳 26 基と、7 世紀前半に構築された円墳 8 基の 36 基で構成される (第 57 図 J、熊谷市教育委員会：2011、江南町教育委員会：1996)。

荒井支群 (第 II 支群) —7 世紀前半に構築された 20 基程の円墳が確認されている (第 57 図 K、江南町：1995)。第 13 号墳では、凝灰岩截石石材を用いた複室構造の横穴式石室が確認されており、7 世紀前半の築造が推測されている。

西原支群 (第 III 支群) —21 基の円墳で構成される。調査された埋葬施設は胴張りの横穴式石室で、単室・複室の両構造が存在し、6 世紀末から 7 世紀前半に構築されている (第 57 図 L、江南町：1995)。

諸ヶ谷支群 (第 IV 支群) —方墳 3 基によって構成される小規模な支群。発掘調査は行われていない (第 57 図 M)。

明賀支群 (第 V 支群) —方墳 9 基によって構成される。1 基が調査されており、4 世紀代の構築と推定されている (第 57 図 N、江南町：1996)。

栗崎・神田支群 (第 VI 支群) —円墳 3 基が確認されているが、発掘調査は行われておらず詳細は不明 (第 57 図 O)。

この他、嵐山町域には、52 基以上の古墳が 10 支群に分かれて分布する古里古墳群：駒込支群 (第 57 図 P、嵐山町遺跡調査会：1987)、尾根支群 (第 57 図 Q)、尾根西支群 (第 57 図 R)、北田支群 (第 57 図 S)、上土橋支群 (第 57 図 T)、清水支群、二塚支群 (第 57 図 U)、上耕地支群・神山支群・藤塚支群 (第 57 図 V) がある。

第20表 立野遺跡周辺遺跡一覧表

1	桜山遺跡	12	元境内遺跡	E	瀬戸山古墳群	P	古里古墳群駒込支群
2	岩比田遺跡	13	諏訪脇遺跡	F	万吉下原古墳群	Q	古里古墳群尾根支群
3	氷川遺跡	14	宮脇遺跡	G	天神山古墳群	R	古里古墳群尾根西支群
4	釜場遺跡	15	本田・東台遺跡	H	静簡院古墳群	S	古里古墳群北田支群
5	塩丸山遺跡	16	宮下遺跡	I	上前原古墳群	T	古里古墳群土橋支群
6	姥ヶ沢遺跡	17	新田裏遺跡	J	塩古墳群狸塚支群	U	古里古墳群二塚支群
7	富士山遺跡	18	権現坂埴輪窯跡群	K	塩古墳群荒井支群	V	古里古墳群藤塚支群
8	行人塚遺跡	A	立野古墳群	L	塩古墳群西原支群	W	上原古墳群
9	塩西遺跡	B	桜山古墳群	M	塩古墳群諸ヶ谷支群		
10	塩新田遺跡	C	野原古墳群	N	塩古墳群明賀支群		
11	野原丸山遺跡	D	野原東古墳群	O	塩古墳群栗崎・神田支群		

3 検出された遺構と遺物

立野遺跡は、今回の報告を含め4次に渡る発掘調査が行われている（第58図）。

第1次調査は、2002年10月より12月にかけて、第59回国民体育大会馬場馬術競技場の造成に伴い、6,400㎡が調査されている。調査の結果、墳丘の削平された古墳10基と小石室1基が確認されている。第12号墳からは、金銅製毛彫り杏葉2点が出土している（2005：江南町教育委員会）。第2次調査は、2004年1月に、同国体の調整池造成に伴い350㎡が調査されている。調査の結果、平安時代の住居跡、



第58図 立野遺跡の範囲と調査地点（1/5,000）

中世から近世にかけての井戸、土壙が検出されている。第3次調査は、2005年8月より10月にかけて、同国体跡地利用にかかる公園造成に伴い8,000㎡が調査されている。調査の結果、古墳2基と平安時代の住居跡、中世の地下式壙・井戸・土壙が検出されている。地下式壙からは、五輪塔・板碑・茶臼等が出土している。

今回報告の第4次調査となる立野古墳群第2号墳は、第1次調査区の東側約14mに位置している。第1次調査区において南北方向に並ぶ第11号墳と第1号墳のほぼ中間の東側に位置し、現在確認されている立野古墳群の東端に立地している。

当初、石室部分は既に失われていると思われたが、石室は現地表面下に構築されており、比較的良好な状態で確認することができた。石室は、凝灰岩加工石材を用いて構築されており、本古墳群では初めての確認となる複式構造をとることが確認された。

副葬品として、玄室・前室内より、鉄鏃、大刀等の武器類が出土したが、装身具類は1点も確認されなかった。西側玄門が抜き取られており、石室内に敷かれた舗石が攪乱を受けていることから、盗掘を受けたことが推測される。

(1) 第2号墳

I) 墳丘 (第59～62図)

墳丘は、地境に位置することから、杉の境木が植えられた箇所にかろうじて確認されている。西側は既に削平されており、南側も依存状態は悪い。北側は現状で突出するが、後年の土寄せによるものと判断される。現状で、高さ1.7m、東西6.6m、南北11m程の半円状の墳丘が確認されている。

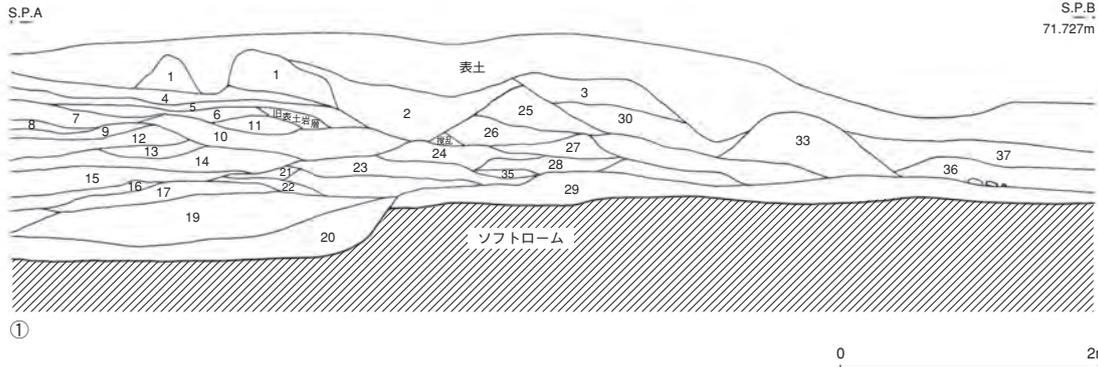
古墳直下である墳土の下からは、石室掘方を除いた全面で旧表土に相当する黒色土が確認されている。旧表土中には遺物の包含は無く、炭化粒や焼土粒が少量含まれていた。旧表土の層厚は、10～15cm程と薄く、概ね平滑な面となっている。

墳丘盛り土は、石室裏込め土・墳丘形成土により構成される。石室裏込め土と墳丘形成土は、独立した層群として積まれているわけではなく、「Z」字状の互層をなして積まれており、層位的には石室裏込め土→墳丘形成土の順に施工されていることが観察される。

石室裏込め土として主体的に用いられる土壌は、白色粘土またはローム土と白色粘土の混合土壌で、石室側壁の設置に伴って用いられている(第60図②第5・8層、第61図①第1～5層、②第1～3層、③第2～7層、④第3～5・11～12層)。側壁設置第3段以降は、裏込め土以外に、墳丘形成土の積み上げが行われている。この段階の主体土は、旧表土・旧表土からローム層への漸移土・ローム土を用いている(第60図②第2～4・6～7・9～10層・14～28層、第61図②第4～9層、③第8～13層、④第1～2・6～10・13～18層)。

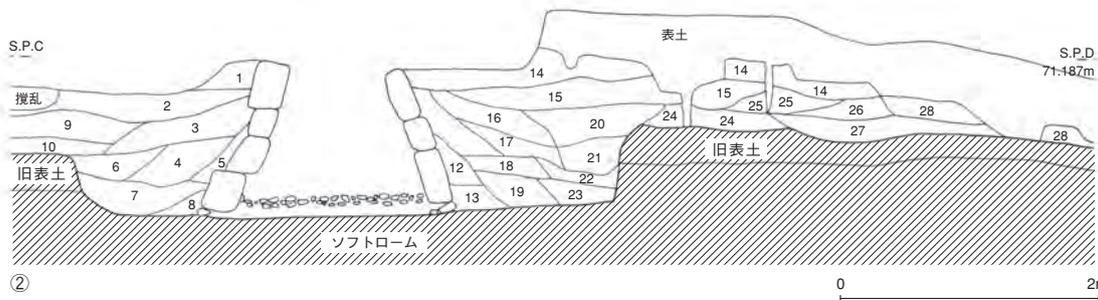
II) 埋葬施設 (第64図)

埋葬施設は、南面する横穴式の複式石室である。石室は、玄室・前室の平面形態が羽子板状を呈する石室で、主に凝灰岩の加工石材を用いて構築されている。羨門部のみに、緑泥片岩石材を横積みして用いている。遺存状態については、天井を含む側壁上端と東側玄門が失われていた。



第2号墳 石室北側墳丘土層説明

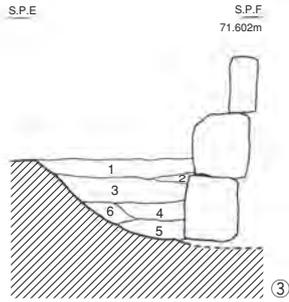
- | | | | |
|-----------|------------------------------------|-----------|----------------------------------|
| 1. 暗褐色土 | しまり・粘性やや弱。ローム粒多量含。粒子やや粗。 | 20. 暗茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒・凝灰岩粒多量含。粒子粗。 |
| 2. 黄褐色土 | しまり・粘性やや弱。ローム粒・炭化粒やや多含。粒子やや粗。 | 21. 暗黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒多量含。粒子やや粗。 |
| 3. 茶褐色土 | しまり・粘性やや弱。ローム粒やや多、凝灰岩粒少量含。粒子やや粗。 | 22. 褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩粒微量含。粒子やや粗。 |
| 4. 暗褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩片少量含。粒子やや粗。 | 23. 黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒・ロームブロック多量含。粒子やや粗。 |
| 5. 暗黄褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩粒多量・粘土粒微量含。粒子やや粗。 | 24. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。 |
| 6. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩粒少量、ローム粒多量含。粒子やや粗。 | 25. 黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。 |
| 7. 黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒多量含。粒子やや粗。 | 26. 暗茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。 |
| 8. 暗黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒・粘土粒少量含。粒子やや粗。 | 27. 黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒多量含。粒子やや粗。 |
| 9. 暗黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒多量、凝灰岩粒微量含。粒子やや粗。 | 28. 暗茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。 |
| 10. 暗褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。 | 29. 黒色土 | しまり・粘性強。旧表土。 |
| 11. 褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒少量、凝灰岩粒微量含。粒子やや粗。 | 30. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒多量含。粒子やや粗。 |
| 12. 暗茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒・凝灰岩粒微量含。粒子やや粗。 | 31. 暗褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。 |
| 13. 明茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒多量、ロームブロック少量含。粒子やや粗。 | 32. 明茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒多量含。粒子やや粗。 |
| 14. 黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒多量、ロームブロック少量含。粒子やや粗。 | 33. 暗褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。 |
| 15. 暗茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒・ロームブロック少量含。粒子やや粗。 | 34. 暗黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒多量含。粒子やや粗。 |
| 16. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。 | 35. 黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒多量含。粒子やや粗。 |
| 17. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム・凝灰岩粒微量含。粒子やや粗。 | 36. 黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒・ロームブロック多量含。粒子やや粗。 |
| 18. 明茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。 | 37. 暗黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。 |
| 19. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。 | | |



第2号墳 前室部墳丘土層説明

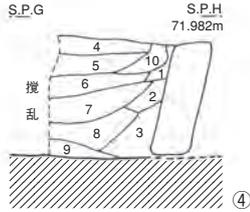
- | | | | |
|-----------|---|-----------|------------------------------------|
| 1. 明茶褐色土 | しまり・粘性やや弱。ローム主体土。凝灰岩粒微量含。粒子やや粗。 | 14. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒・凝灰岩粒微量含。粒子やや粗。 |
| 2. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム主体土。凝灰岩粒微量含。粒子やや粗。 | 15. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。 |
| 3. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム主体土。径3~4cm程のロームブロック少量含。粒子やや粗。 | 16. 暗黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒・粘土粒やや多含。粒子やや粗。 |
| 4. 暗茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム主体土。径2~3cm程のロームブロック微量、凝灰岩片少量含。粒子やや粗。 | 17. 暗黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ロームブロック少量含。粒子やや粗。 |
| 5. 明茶褐色土 | しまり・粘性強。ローム主体土。凝灰岩片少量含。粒子やや粗。 | 18. 黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒やや多、凝灰岩粒少量含。粒子やや粗。 |
| 6. 褐色土 | しまり・粘性強。ローム粒・凝灰岩粒微量含。粒子やや粗。 | 19. 褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒多量、凝灰岩粒少量含。粒子やや粗。 |
| 7. 明褐色土 | 凝灰岩片やや多、ローム粒少量含。粒子やや粗。 | 20. 暗黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ロームブロック多量・ローム粒少量含。粒子やや粗。 |
| 8. 暗黄褐色土 | しまり・粘性強。凝灰岩片・ローム粒少量含。粒子やや粗。 | 21. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒多量含。粒子やや粗。 |
| 9. 黄褐色土 | しまり・粘性強。ローム主体土。径2~4cm程のロームブロック多、凝灰岩粒微量含。粒子やや粗。 | 22. 暗茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒少量、凝灰岩粒微量含。粒子やや粗。 |
| 10. 暗黄褐色土 | しまり・粘性強。ローム主体土。粒子やや粗。 | 23. 暗黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒多量含。粒子やや粗。 |
| 11. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム・粘土粒多量、凝灰岩片少量含。粒子粗。 | 24. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ロームブロック少量含。粒子やや粗。 |
| 12. 暗黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム・粘土粒多量、凝灰岩片微量含。粒子粗。 | 25. 黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ロームブロック・炭化粒少量含。粒子やや粗。 |
| 13. 黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム主体土。凝灰岩片少量含。粒子粗。 | 26. 黒褐色土 | しまり・粘性やや強。旧表土起源土。粒子やや粗。 |
| | | 27. 暗黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒多量含。粒子やや粗。 |
| | | 28. 暗褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。 |

第60図 立野遺跡第2号墳墳丘断面図(1)



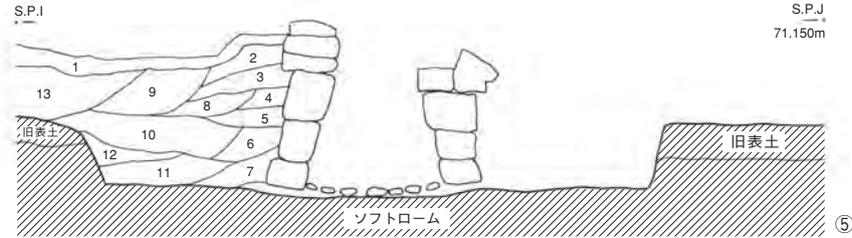
第2号墳 石室掘方土層説明

1. 黒褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒・粘土粒・凝灰岩粒やや多含。粒子やや粗。
2. 青灰色粘土層
3. 暗茶褐色土 しまり・粘性やや強。粘土粒・ローム粒やや多含。粒子やや粗。
4. 暗茶褐色土 しまり・粘性やや強。粘土粒・ローム粒少量含。粒子やや粗。
5. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。粘土粒・ローム粒やや多含。粒子やや粗。
6. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。



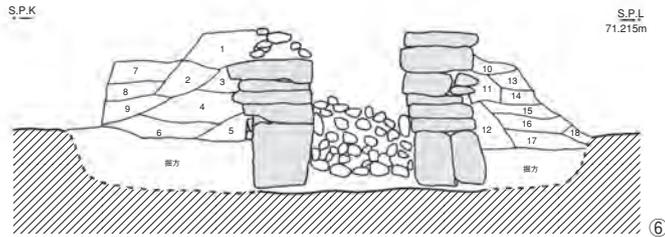
第2号墳 石室西側 墳丘トレンチ土層説明

1. 黄褐色土 しまり・粘性強。青灰色粘土多量含。粒子粗。
2. 黄褐色土 しまり・粘性強。粘土粒・凝灰岩粒微量、ローム粒多量含。粒子やや粗。
3. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。粘土粒・凝灰岩粒微量含。粒子やや粗。
4. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ロームブロック多量、凝灰岩粒微量含。粒子粗。
5. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ロームブロック少量、凝灰岩粒微量含。粒子粗。
6. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ロームブロック・凝灰岩粒微量含。粒子粗。
7. 明黄褐色土 しまり・粘性やや強。ロームブロック・凝灰岩粒微量含。粒子粗。
8. 明黄褐色土 しまり・粘性やや強。ロームブロック微量含。粒子粗。
9. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多量含。粒子やや粗。
10. 茶褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒少量含。粒子やや粗。



第2号墳 墳丘断面土層説明

- | | | | |
|----------|------------------------------------|----------|-------------------------------------|
| 1. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩粒・ローム粒多量含。粒子やや粗。 | 8. 黒褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒ブロック状に少量含。粒子やや粗。 |
| 2. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩粒・凝灰岩片・ローム粒多量含。粒子やや粗。 | 9. 暗褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。 |
| 3. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩粒・ローム粒多量含。粒子やや粗。 | 10. 黄褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩粒・凝灰岩片多量含。粒子やや粗。 |
| 4. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒多量含。粒子やや粗。 | 11. 暗褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒少量、粘土粒・凝灰岩粒微量含。粒子やや粗。 |
| 5. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒多量、粘土粒少量含。粒子やや粗。 | 12. 黒褐色土 | しまり・粘性やや強。粘土粒・ローム粒微量含。粒子やや粗。 |
| 6. 暗黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒多量含。粒子やや粗。 | 13. 暗褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩粒・炭化粒微量含。粒子やや粗。 |
| 7. 暗褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。 | | |

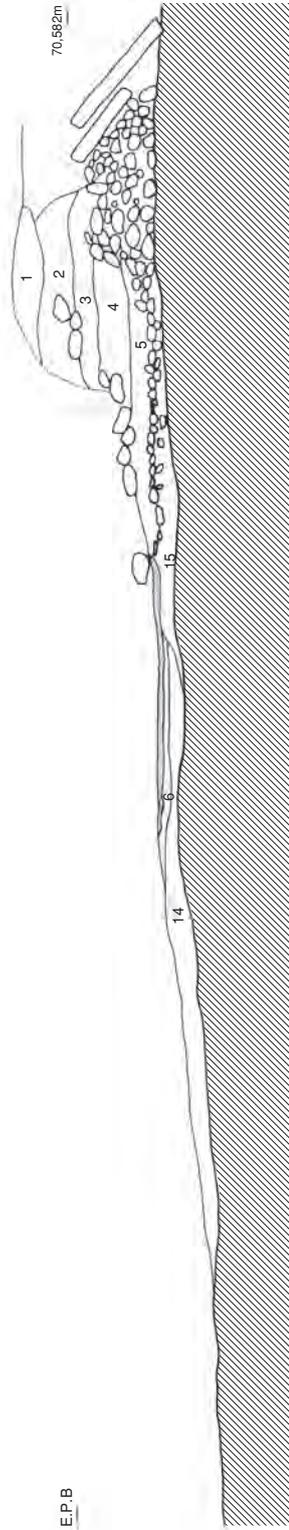
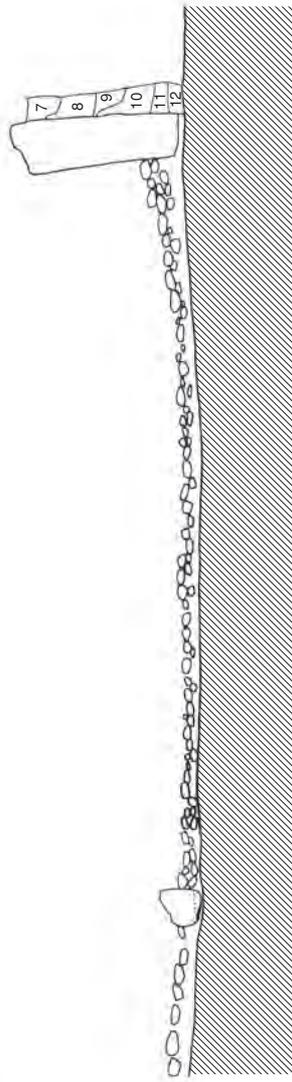


第2号墳 墳丘断面土層説明

- | | | | |
|----------|--|-----------|-------------------------------|
| 1. 明茶褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩粒微量、ロームブロック少量含。粒子やや粗。 | 8. 暗茶褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩粒微量含。粒子やや粗。 |
| 2. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩粒微量、ロームブロックやや多含。粒子やや粗。 | 9. 暗茶褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩粒少量含。粒子やや粗。 |
| 3. 暗茶褐色土 | しまり・粘性やや強。粘土粒・凝灰岩粒微量含。粒子やや粗。 | 10. 黒褐色土 | しまり・粘性やや弱。凝灰岩粒多量含。粒子やや粗。 |
| 4. 黒褐色土 | しまり・粘性やや強。粘土粒・凝灰岩粒少量、ロームブロック少量含。粒子やや粗。 | 11. 黒褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩粒少量含。粒子やや粗。 |
| 5. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。粘土粒・凝灰岩粒少量ローム粒やや多含。粒子やや粗。 | 12. 明茶褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩粒少量含。粒子やや粗。 |
| 6. 暗褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩粒微量、ローム粒やや多含。粒子やや粗。 | 13. 暗茶褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩粒多量含。粒子やや粗。 |
| 7. 明茶褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩粒やや多含。粒子やや粗。 | 14. 黒褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩粒・ローム粒微量含。粒子やや粗。 |
| | | 15. 黒褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩粒微量含。粒子やや粗。 |
| | | 16. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩粒・ローム粒微量含。粒子やや粗。 |
| | | 17. 暗茶褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩粒・ローム粒微量含。粒子やや粗。 |
| | | 18. 黒褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩粒・ローム粒微量含。粒子やや粗。 |

0 2m

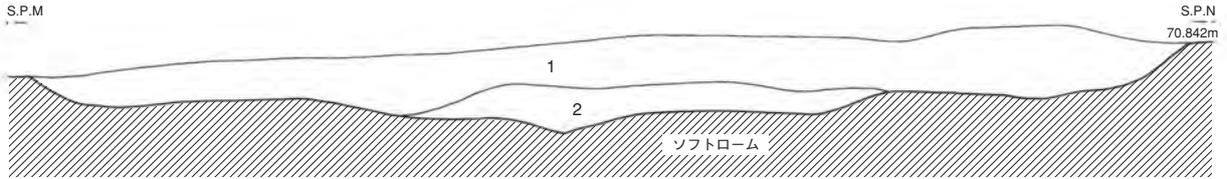
第61図 立野遺跡第2号墳墳丘断面図(2)



第2号墳 石室断面土層説明

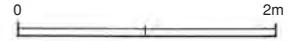
- | | | | |
|----------|--------------------------------|-----------|----------------------------------|
| 1. 明茶褐色土 | しまり・粘性やや弱。ローム粒微量含。粒子やや粗。 | 9. 暗褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒・粘土粒やや多含。粒子やや粗。 |
| 2. 暗茶褐色土 | しまり・粘性やや弱。ローム粒少量含。粒子やや粗。 | 10. 暗茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒・凝灰岩粒少量含。粒子やや粗。 |
| 3. 暗褐色土 | しまり・粘性やや弱。ローム粒・凝灰岩粒少量含。粒子やや粗。 | 11. 明褐色土 | しまり・粘性強。ローム粒少量、凝灰岩粒微量含。粒子やや粗。 |
| 4. 暗褐色土 | しまり・粘性やや弱。ローム粒・凝灰岩粒やや多含。粒子やや粗。 | 12. 黒褐色土 | しまり・粘性やや強。田表土。 |
| 5. 黒褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。 | 13. 茶褐色土 | しまり・粘性やや弱。ローム粒少量含。粒子やや粗。 |
| 6. 黒色土 | しまり・粘性やや弱。ローム粒微量含。粒子やや粗。 | 14. 明褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒やや多、凝灰岩粒微量含。粒子やや粗。 |
| 7. 暗褐色土 | しまり・粘性やや弱。ローム粒微量含。粒子やや粗。 | 15. 暗茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒やや多量含。粒子やや粗。 |
| 8. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。 | | |

第 62 図 立野遺跡第 2 号墳石室断面図

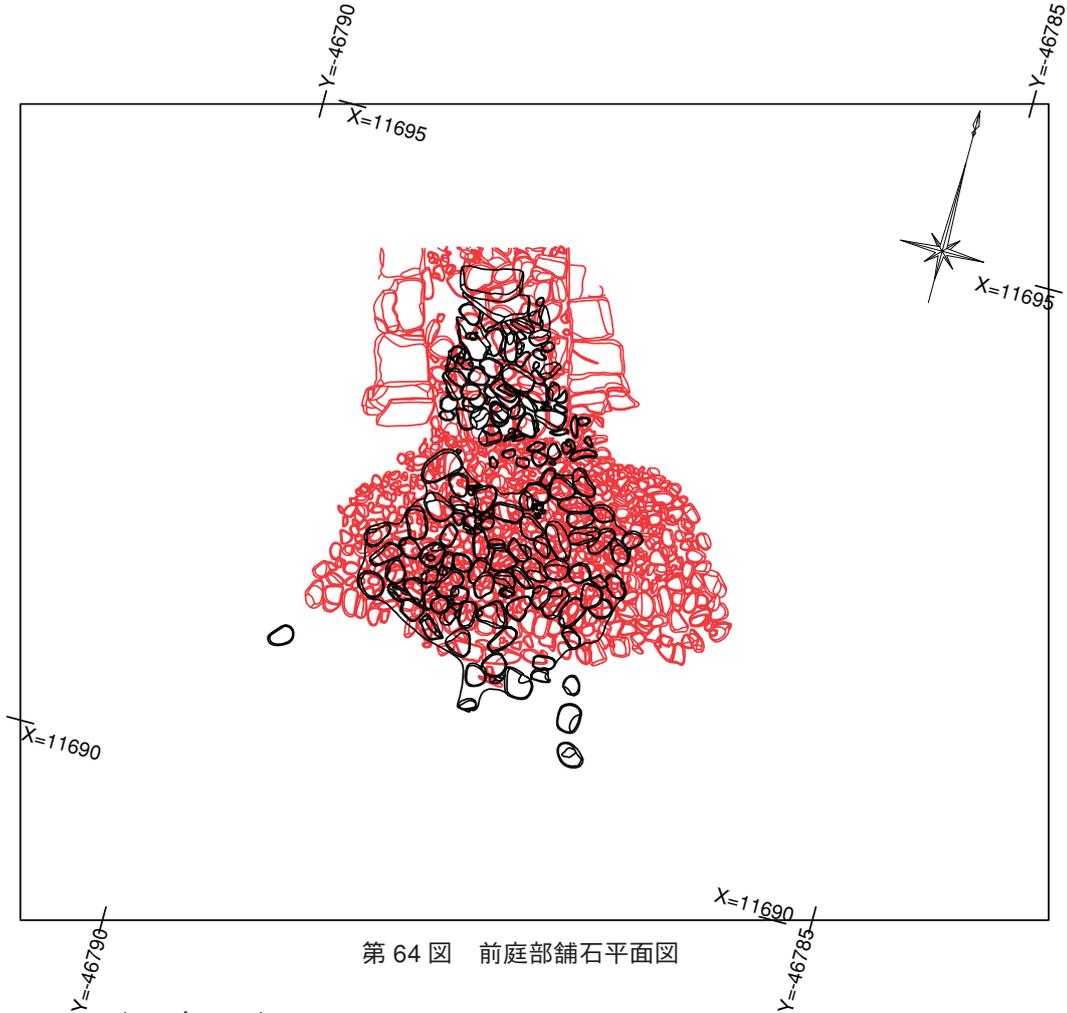


第2号墳 前庭部土層説明

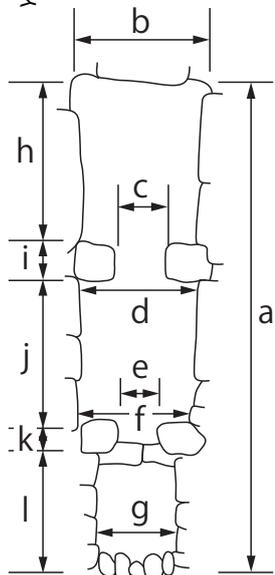
1. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。凝灰岩粒微量含。粒子やや粗。
2. 明褐色土 しまり・粘性やや強。凝灰岩粒少量含。粒子やや粗。



第63図 立野遺跡第2号墳前庭部セクション図



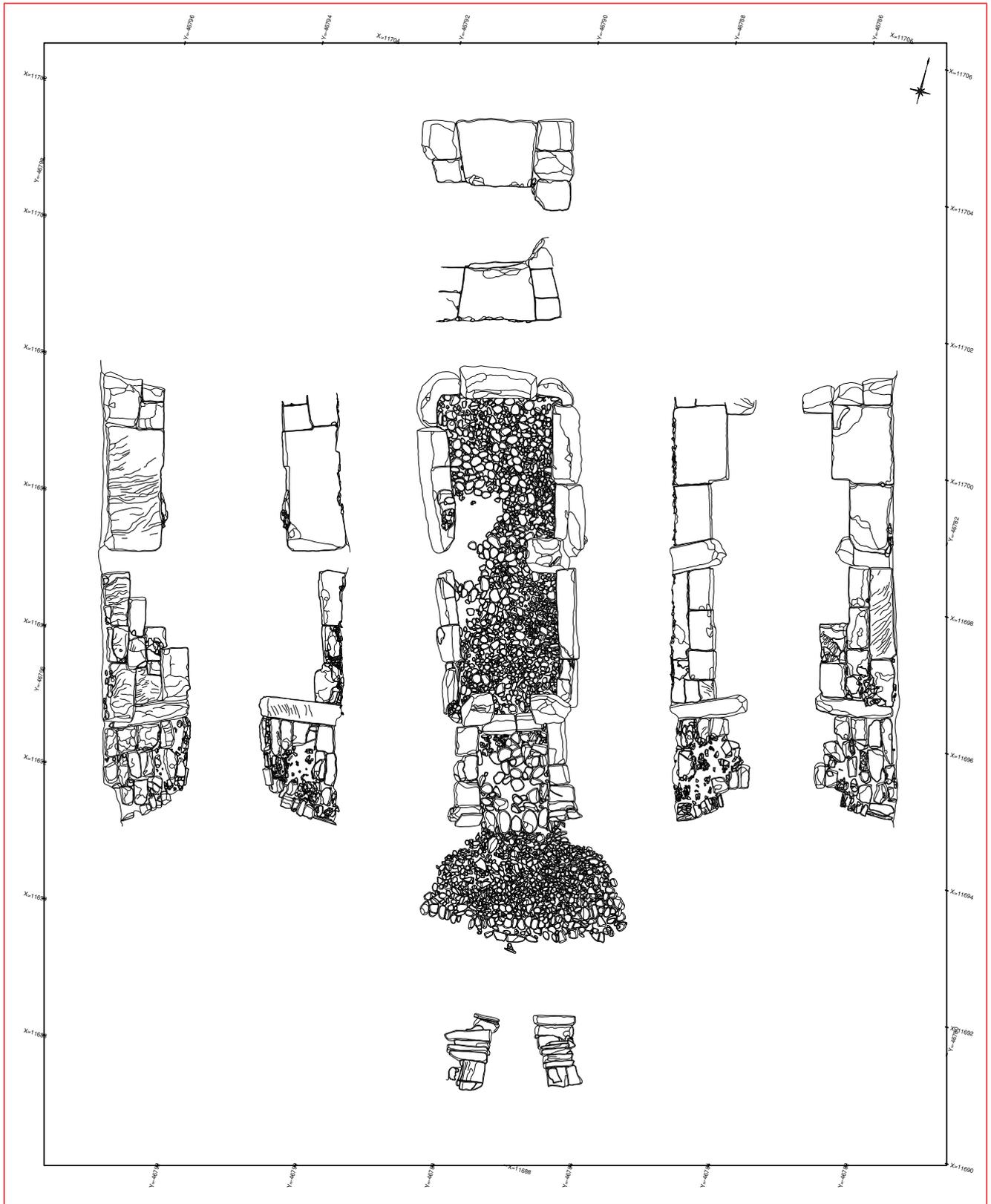
第64図 前庭部舗石平面図



第21表 石室各部位計測表

計測部位	計測値 (m)	備考
a	6.52	石室長
b	1.91	奥壁幅
c	0.74	玄門部幅
d	1.56	前室最大幅 (推定値)
e	0.66	前門部幅
f	1.48	前室部最少幅
g	1.01	羨道部最少幅
h	2.10	玄門部を除く玄室部長
i	0.49	玄門部長
j	1.90	玄門部・前門部を除く前室長
k	0.52	前門部長
l	1.51	前門部を除く羨道長

第65図 立野遺跡第2号墳石室計測部位



第 66 图 立野遺跡第 2 号墳石室平面・立面图

i) 前庭部 (第 64 図)

羨道入口の前面に、扇状にひろがる上下 2 層の舗石を確認している。上下の敷石間には 10 cm 程の茶褐色土が堆積しており、敷石の敷設には時間差が存在する。上部敷石上に土師器碗が 2 点出土している (第 73 図 59・60)。

下部の舗石は、羨門部から長さ 1.8m 程の長さで、扇状に敷設している。扇端部の幅は 3.1m を測る。扇端部に長径 20 cm 程の楕円礫を、長軸方向を揃えるように 2～3 列敷設し、羨道入口にかけて粒径 6 cm 程の小振りな重円礫を密に敷設している。

上部の舗石は、長径 20 cm 程のやや大振りな楕円礫を、羨門部から長さ 2.8m 程の長さで、扇状に敷設している。扇端部の幅は約 2m を測る。

ii) 閉塞施設 (第 62 図)

羨道入口には閉塞施設が確認されている。検出された閉塞施設は、こぶし大から人頭大までの不揃いな多数の凝灰岩、川原石を雑然と羨道入口部に詰め込んだもので、その状態は、閉塞施設と言うよりむしろ封鎖と言える。石室が最後に閉塞された状態を示していると推測される。検出された閉塞施設の下部には、暗茶褐色土の体積が認められた。旧閉塞施設の残骸と推測されるが、追葬時における取り残し土と考えられる。

また、羨道部内には、閉塞施設の上部に緑泥片岩の板石が 2 枚側壁に倒れかかるように検出されており、羨道部の天井石に使用されていたものが落下したものと推測される。

iii) 石室の平面形態 (第 66 図)

石室は、大きく羨道・前室・玄室によって構成される横穴式の複式石室である。羨道部の幅 1.01m で両側縁はほぼ平行し、前室部最少幅 1.48m、前室部最大幅 1.56m、玄室最大幅 1.91m となり、直線的に奥壁部に向かって幅を広める構造となっている。羨道と前室は、前門の立柱石及び床面に設置された梱石によって分かたれている。前室と玄室は、玄門の立柱石によって分かたれている。

iv) 石室の規模 (第 65 図・第 21 表)

石室各部の規模については、破壊による制約のため不明な点が多く、特に高さに係わる数値については、上端部に受けた破壊により一切が不明である。平面形態における計測値を第 65 図・第 21 表に示した。石室全長を 10 とした場合、羨道：前室：玄室の比が 2.7：3.5：3.8 となり、徐々に規模が大きくなるように施工されている。

v) 石室の壁体

石室の壁体は、主に凝灰岩の加工石材で構築されており、所謂「間知積み」の技法が用いられており、各石材相互の接する面において明確な隙間は殆ど確認されない。また、石材が上下に乗り合う箇所控え部には、胴飼石と言われる角度調整のための凝灰岩片が確認され、結果的に石材の設置方法は「転び」を持たせる事となっている。また、奥壁側面の大型石材や、前室部の基底石には、切り組み手法が用いられており、奥壁の両コーナーは、石材を組み合わせたのではなく、石材の削り込みによりコーナー部を作り出している。

vi) 石室の天井

石室の天井については、調査時には完全に失われていたため、その構造は不明である。石室覆土中には、凝灰岩片が少量、緑泥片岩片が微量確認されたが、どちらの石材が構架されていたのかは判断できない。羨道部に関しては、緑泥片岩の板石が落下したと推測される状態で2枚検出されており、緑泥片岩が天井石に使用されていたと推測される。

vii) 石室の床面

石室の床面は、壁体構築の後、川原石を敷き詰める事で舗石面とする。床面は、西側玄門部周辺に盗掘の影響を受け、舗石や玄門の一部は攪乱・抜き取りを受けている。床面の前門部には、凝灰岩の加工石材を用いた柵石が設置されており、前室と羨道を明確に区切っている。

床面における舗石の敷設状況は、玄室、前室、羨道では異なる様相を示している。玄室床面における舗石の敷設状況は、粒径 10 cm程度のやや大振りで扁平な亜円礫を地表面へ直に配した後、やや小振りの不揃いな亜円礫で上部を被覆するように敷設している。前室床面における舗石の敷設状況は、粒径 8 cm程度の小振りの亜円礫を、密に地表面に直に配している。羨道床面における舗石敷設状況は、粒径 12 cm程度の不揃いな亜円礫を粗く地面に直に配している。羨門部の床面には、長径 20 cm程度の楕円礫を5個長軸を揃えて配している。

(2) 出土遺物 (第 67 ~ 73 図)

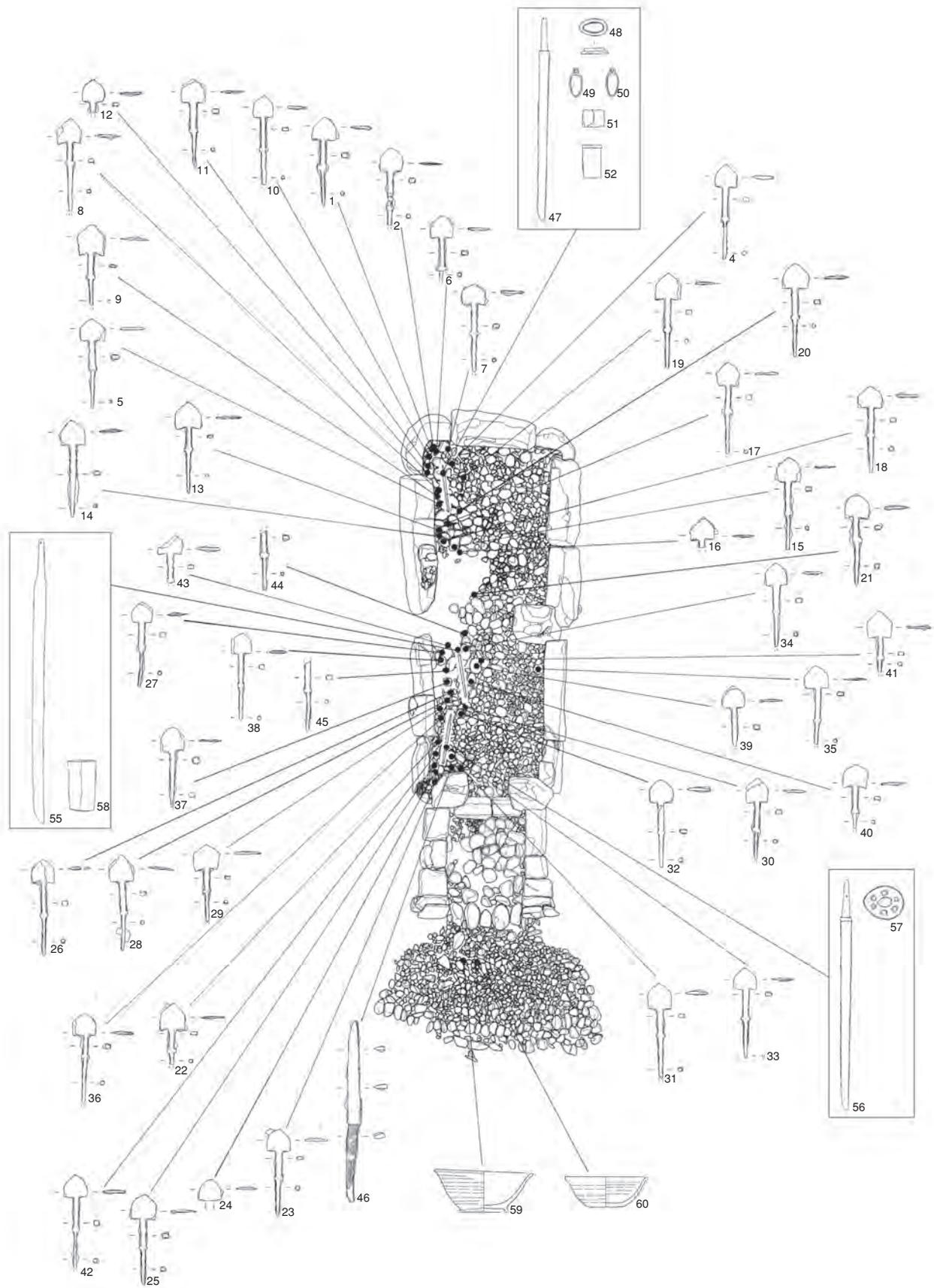
玄室内からは、鉄鏃 25 点、鉄製大刀 1 点、鉄製刀子 1 点、金銅製喰出鏢 1 点、金銅製単脚足金具 2 点、鉄製鞘口金具 1 点、鉄製鞘尻金具 1 点、鉄製鴉目金具 2 点が出土している。前室内からは、鉄鏃 28 点、鉄製大刀 2 点、鉄製鏢 1 点、鉄製鞘尻金具 1 点が出土している。装身具については、石室覆土内の土を篩にかけたが確認されていない。

玄室内・前室内の遺物の出土状況は、西側に偏って遺物が出土している (第 67 図)。大刀は出土状態から、ほぼ元位置を保っていると判断されるが、鉄鏃は雑然と出土しており、追葬時または盗掘時に元位置から動かされている可能性が高い。

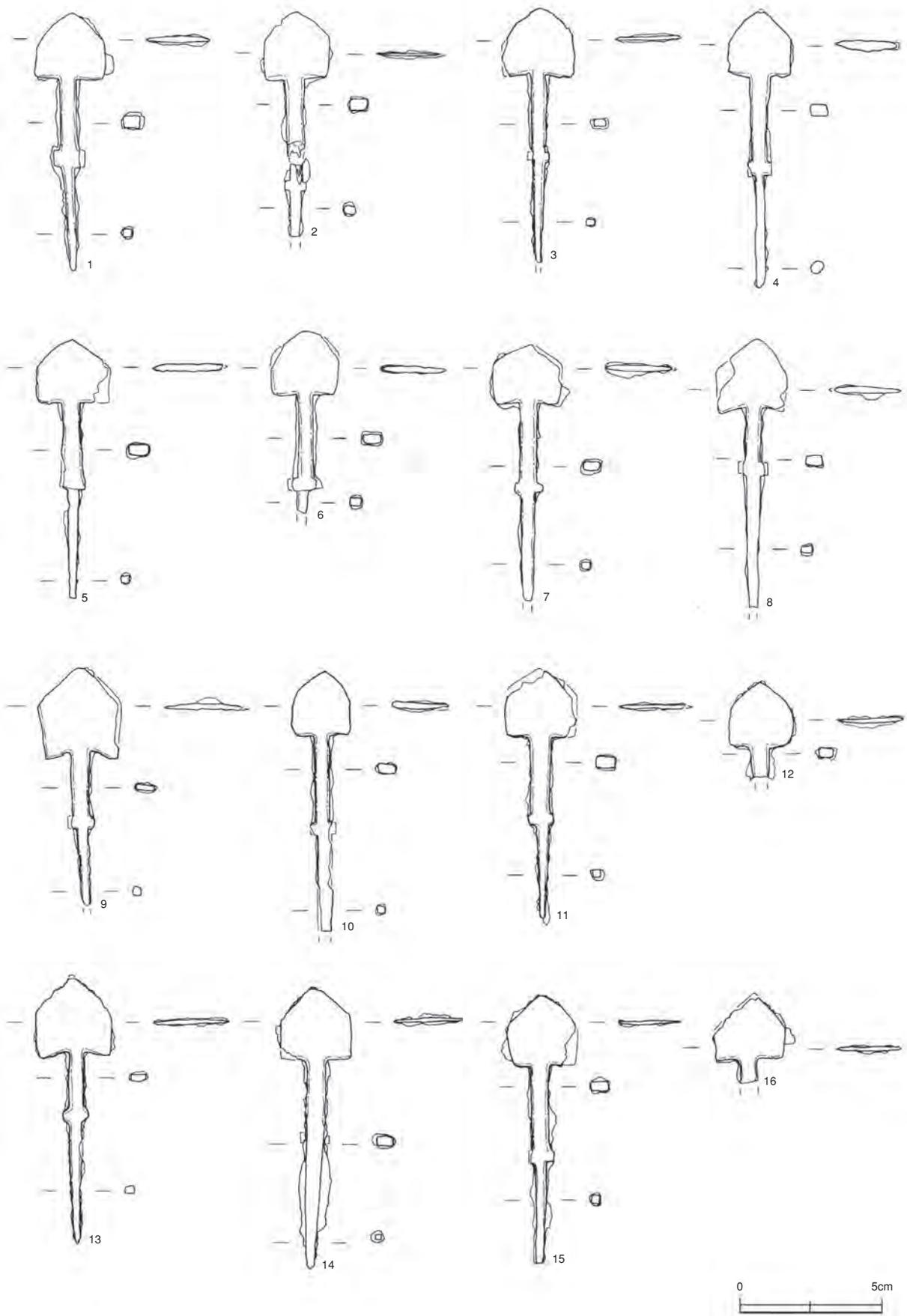
第 68・69 図 1 ~ 21 は、玄室内から出土した鉄鏃。第 69・70 図 17 ~ 45 は前室から出土した鉄鏃。出土位置による形態の違いは認められず、鏃身部の形態は両刃の広根五角形で両関、頸部の形態は短頸で棘籠被造りとなる。ただし、鏃身部にやや鋭い逆刺をもつもの (第 68 図 8・9・13・第 69 図 29・第 70 図 40) と逆刺をもたないものに分けられる。

第 70 図 46 は、玄室内より出土した鉄製の刀子。大きく刀身部と茎部によって構成されている。長さ 18.7 cm を測る。形態は、刀身部は切先へ向かうに従いその幅を減じ、切先部は刀部側が丸みを帯びた所謂ふくら切先状で、刀身部の断面形状は楔形を呈する。刀身部と茎部は刃部側にある弱い関によって分かたれている。茎部は断面長方形を呈し、木質が明瞭に残存している。

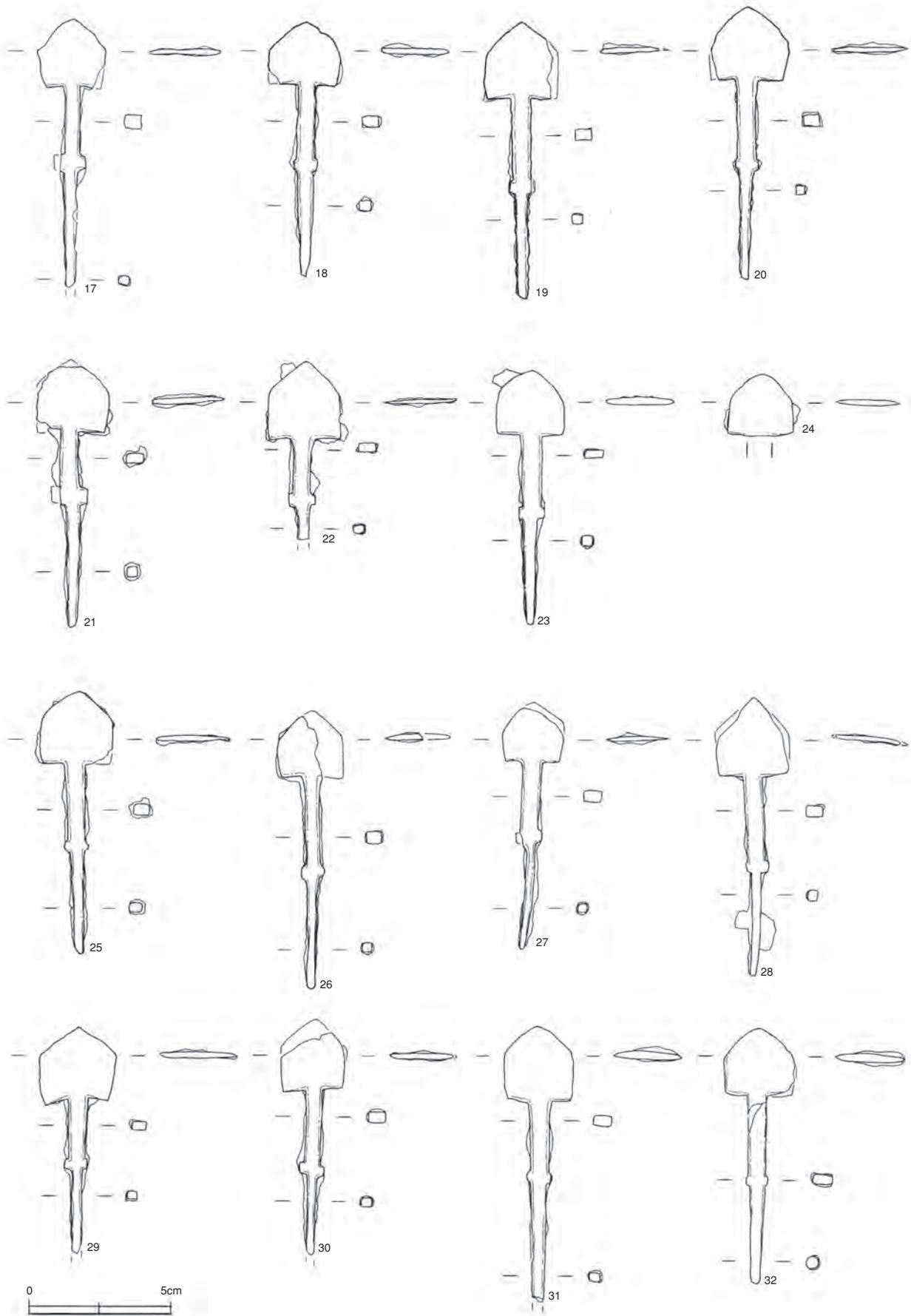
第 71 図 47 は、玄室より出土した鉄製大刀刀身平棟平造り、カマス切先を呈する直茎両区鉄刀である。区は、棟区と刃区の両区。切先部を一部欠き、現存長 55.2 cm を測る。刃身部の断面形状は楔形を呈する。茎部には、長さ 1.2 cm 程の柄木を留めるための目釘が 1 本茎尻近くに残っている。48 は、縁金具と鐔からなる金銅製喰出鐔。倒卵形を呈し、長径 3.8 cm、短径 2.4 cm、高さ 0.8 cm を測る。49・50 は、金銅製



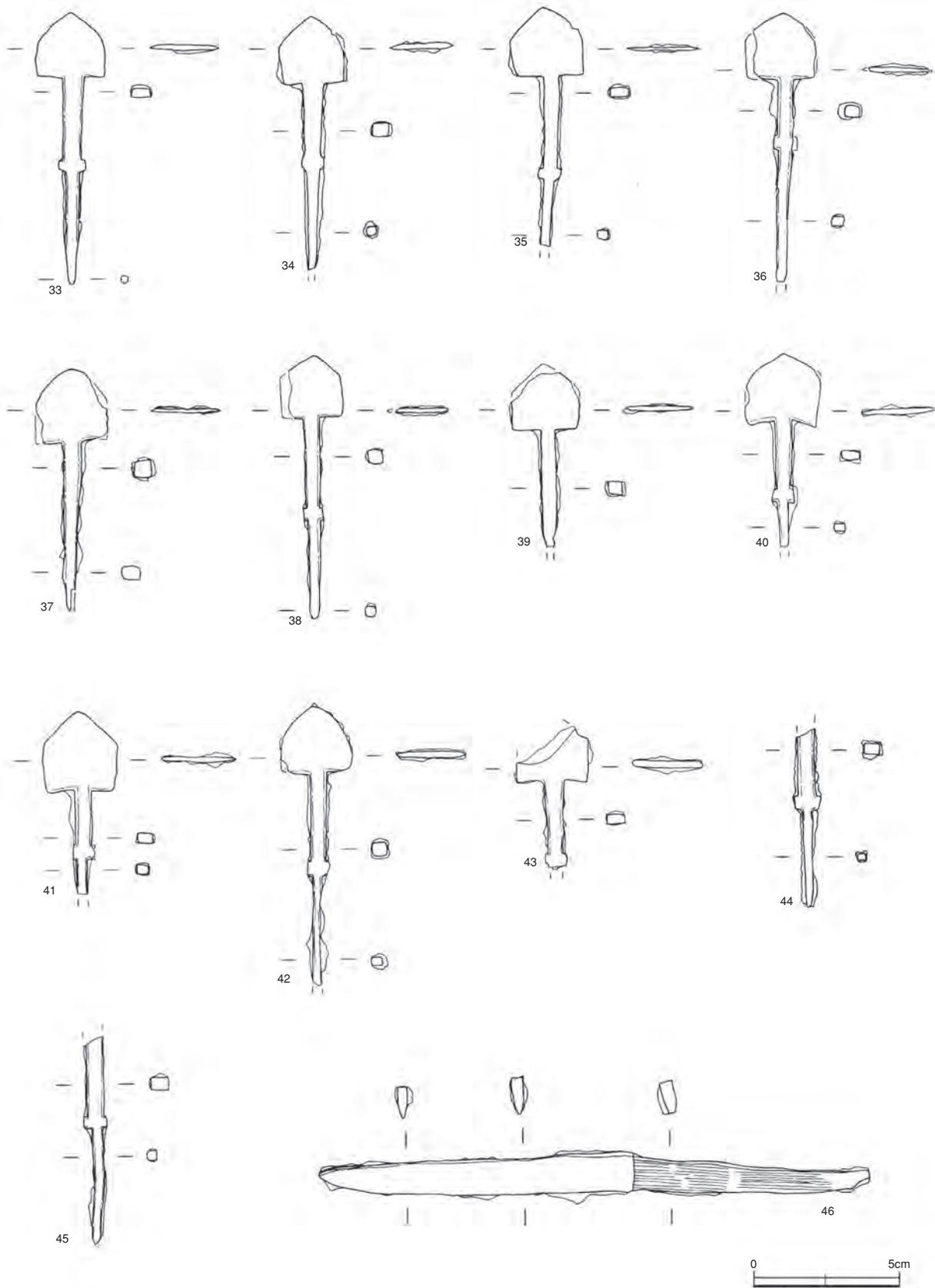
第 67 図 立野遺跡第 2 号墳石室遺物出土状況



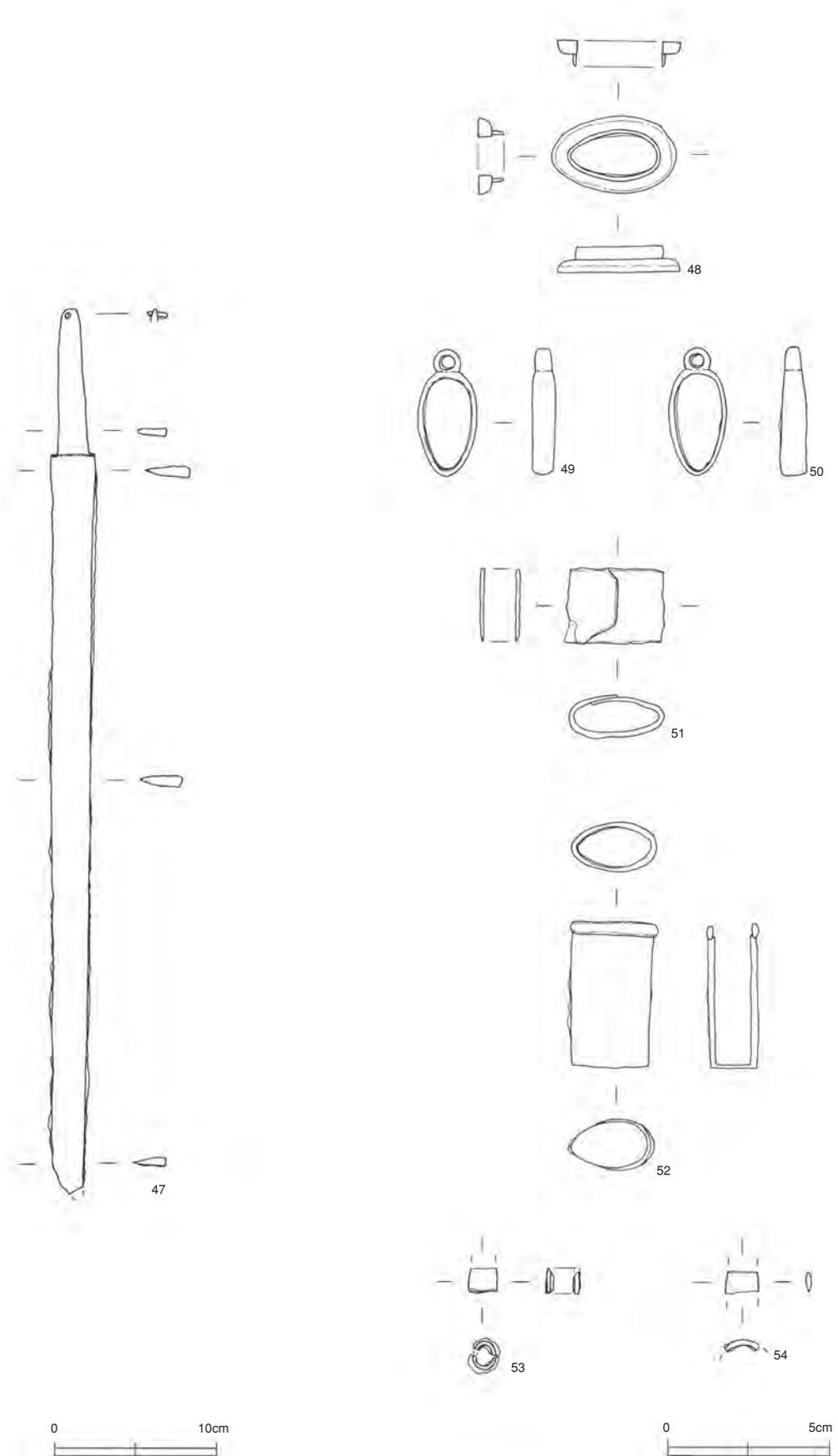
第 68 图 立野遺跡第 2 号墳出土遺物 (1)



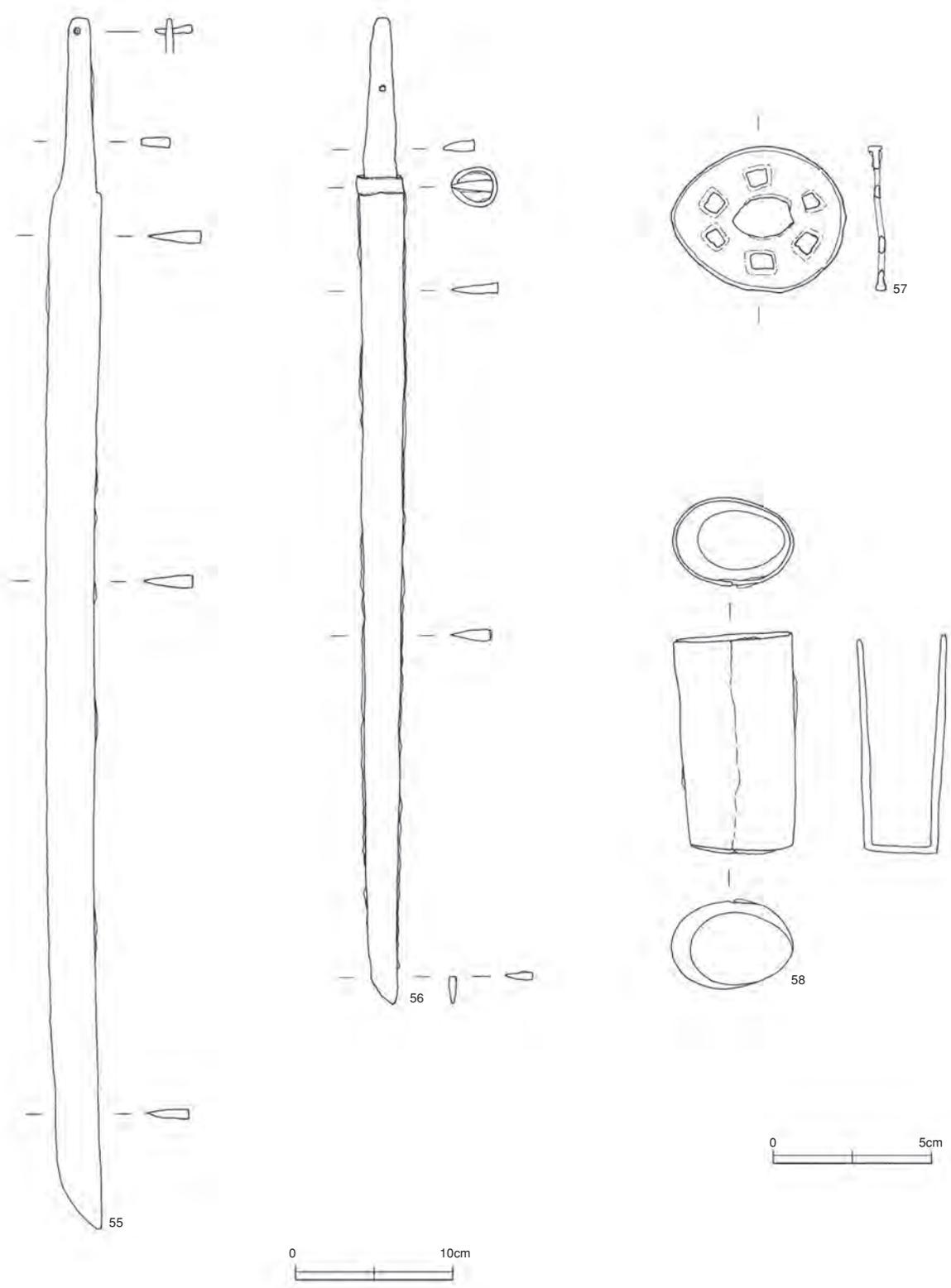
第 69 図 立野遺跡第 2 号墳出土遺物 (2)



第70図 立野遺跡第2号墳出土遺物(3)



第 71 图 立野遺跡第 2 号墳出土遺物 (4)



第 72 図 立野遺跡第 2 号墳出土遺物 (5)

第22表 立野古墳群第2号墳出土鉄鏃計測表

(単位: cm)

図版番号	遺物番号	出土遺構	鏃身部				頭部				備考
			形態	逆刺・閃	長	幅	形態	鏃被形態	鏃被部長	茎部長	
68図1	20-1	第2号墳玄室	広根 五角形	無・両閃	2.5	2.8	短頭	棘鏃被	3.0	3.8	
68図2	20-2	第2号墳玄室	広根 五角形	無・両閃	2.5	2.6	短頭	棘鏃被	(2.7)	(1.8)	鏃被部・茎部一部欠損
68図3	一括	第2号墳玄室	広根 五角形	無・両閃	2.4	2.5	短頭	棘鏃被	3.0	(3.7)	
68図4	6	第2号墳玄室	広根 五角形	無・両閃	2.4	2.3	短頭	棘鏃被	(3.1)	4.4	
68図5	8	第2号墳玄室	広根 五角形	無・両閃	2.3	2.5	短頭	棘鏃被	(2.9)	4.1	
68図6	9	第2号墳玄室	広根 五角形	無・両閃	2.3	2.4	短頭	棘鏃被	3.2	(1.1)	茎部欠損
68図7	10	第2号墳玄室	広根 五角形	無・両閃	2.2	2.9	短頭	棘鏃被	2.9	4.1	
68図8	11	第2号墳玄室	広根 五角形	有・両閃	2.5	2.5	短頭	棘鏃被	(2.2)	(4.9)	
68図9	12	第2号墳玄室	平根 五角形	無・両閃	3.2	2.8	短頭	棘鏃被	(2.3)	(1.0)	
68図10	16	第2号墳玄室	広根 五角形	無・両閃	2.3	2.0	短頭	棘鏃被	(3.6)	(3.4)	茎部一部欠損
68図11	13	第2号墳玄室	広根 五角形	無・両閃	(2.4)	(2.5)	短頭	棘鏃被	2.9	3.6	鏃身部一部欠損
68図12	18	第2号墳玄室	広根 五角形	無・両閃	2.4	2.4			(1.1)		茎部欠損
68図13	19	第2号墳玄室	広根 五角形	有・両閃	(2.8)	2.8	短頭	棘鏃被	2.0	4.6	鏃身先端部欠損
68図14	22-2	第2号墳玄室	広根 五角形	無・両閃	2.6	2.7	短頭	棘鏃被	(3.8)	(3.6)	
68図15	23	第2号墳玄室	広根 五角形	無・両閃	2.5	2.6	短頭	棘鏃被	3.3	3.8	
68図16	22-1	第2号墳玄室	広根 五角形	無・両閃	(2.3)	2.9			(0.8)		茎部欠損
69図17	25	第2号墳玄室	広根 五角形	無・両閃	2.5	2.5	短頭	棘鏃被	(3.0)	4.1	
69図18	31	第2号墳玄室	広根 五角形	無・両閃	2.2	2.5	短頭	棘鏃被	2.9	3.9	
69図19	32	第2号墳玄室	広根 五角形	無・両閃	2.7	(2.4)	短頭	棘鏃被	3.1	4.0	
69図20	33	第2号墳玄室	広根 五角形	無・両閃	2.6	2.7	短頭	棘鏃被	3.0	4.1	
69図21	28	第2号墳玄室	広根 五角形	無・両閃	2.5	2.7	短頭	棘鏃被	2.2	4.6	
69図22	30	第2号墳前室	広根 五角形	無・両閃	2.9	2.9	短頭	棘鏃被	2.0	(1.5)	茎部欠損
69図23	35-1	第2号墳前室	広根 五角形	無・両閃	2.3	2.4	短頭	棘鏃被	2.8	3.9	
69図24	35-2	第2号墳前室	広根 五角形	無・両閃	2.2	2.3	短頭				頸部欠損
69図25	37	第2号墳前室	広根 五角形	無・両閃	2.6	2.8	短頭	棘鏃被	2.9	3.9	
69図26	38	第2号墳前室	広根 五角形	無・両閃	(2.2)	(1.7)	短頭	棘鏃被	3.4	4.2	鏃身部一部欠損
69図27	40	第2号墳前室	広根 五角形	無・両閃	1.9	2.2	短頭	棘鏃被	2.7	4.0	
69図28	41-1	第2号墳前室	広根 五角形	無・両閃	2.4	2.6	短頭	棘鏃被	3.2	3.9	
69図29	41-2	第2号墳前室	平根 五角形	有・両閃	2.8	2.8	短頭	棘鏃被	2.1	(3.2)	茎部一部欠損
69図30	42	第2号墳前室	広根 五角形	無・両閃	(2.1)	2.3	短頭	棘鏃被	2.8	(3.0)	鏃身部・茎部一部欠損
69図31	43	第2号墳前室	広根 五角形	無・両閃	2.6	2.4	短頭	棘鏃被	2.7	(4.4)	
69図32	44	第2号墳前室	広根 五角形	無・両閃	2.4	2.5	短頭	棘鏃被	3.0	3.7	
70図33	45	第2号墳前室	広根 五角形	無・両閃	2.2	2.3	短頭	棘鏃被	3.0	4.2	
70図34	46	第2号墳前室	広根 五角形	無・両閃							
70図35	47	第2号墳前室	広根 五角形	無・両閃							
70図36	48	第2号墳前室	広根 五角形	無・両閃							
70図37	49	第2号墳前室	広根 五角形	無・両閃	2.5	2.4	短頭		(3.9)	(1.9)	茎部一部欠損
70図38	50	第2号墳前室	広根 五角形	無・両閃	2.2	1.8	短頭	棘鏃被	(3.4)	(3.5)	
70図39	51	第2号墳前室	広根 五角形	無・両閃	2.0	2.4	短頭	棘鏃被	(3.1)	(1.0)	茎部一部欠損
70図40	56-1	第2号墳前室	広根 五角形	有・両閃							
70図41	56-2	第2号墳前室	広根 五角形	無・両閃							
70図42	56-3	第2号墳前室	広根 五角形	無・両閃							
70図43	1	第2号墳前室	広根 五角形	無・両閃	(2.0)	(2.5)	短頭	棘鏃被	2.6		茎部欠損
70図44	21	第2号墳前室		両閃				棘鏃被	(2.6)	3.6	鏃身部欠損
70図45	53	第2号墳前室		両閃					(3.0)	(4.2)	鏃身部欠損

第23表 立野古墳群第2号墳出土金属製品計測表

(単位: cm ; g)

図版番号	番号	出土遺構	名称	長さ	幅	厚	重量	備考
70図46	5	第2号墳玄室	刀子	18.7	1.1		29.7	鉄製
71図47		第2号墳玄室	大刀	55.2	2.8			鉄製
71図48		第2号墳玄室	喰出鏢	3.8	2.4	0.8	10.0	金銅製
71図49		第2号墳玄室	単脚足金具	4.0	1.8	0.8	3.0	金銅製
71図50		第2号墳玄室	単脚足金具	3.9	1.8	0.8	2.8	金銅製
71図51		第2号墳玄室	鞆口金具	2.3	3.1	1.4	8.4	鉄製
71図52		第2号墳玄室	鞆尻金具	4.5	2.5			鉄製 (緑部金銅製)
71図53	7-1	第2号墳玄室	鶏目金具	(0.8)	(1.0)	1.1	0.6	鉄製
71図54	7-2	第2号墳玄室	鶏目金具	(0.7)	(1.0)		0.2	鉄製
72図55		第2号墳前室	大刀	77.1	3.2			鉄製
72図56		第2号墳前室	大刀	63.0	3.0			鉄製
72図57		第2号墳前室	鏢	8.2	6.9	0.3		鉄製
72図58		第2号墳前室	鞆尻金具	6.7	3.9			鉄製

単脚足金具。49は、長径4.0cm、短径1.8cm、幅0.8cmを、50は、長径3.9cm、短径1.8cm、幅0.8cmを測る。51は、鉄製鞘口金具。長さ2.3cm、幅3.1cmを測る。薄い鉄板を倒卵形に丸めている。52は、鉄製鞘尻金具。長さ4.5cm、幅2.5cmを測る。内部には鞘尻の木質が残存していた（図版37）。縁部に、リング状の金銅製金具がはめ込まれている。53・54は、鉄製鴉目金具。47の大刀に48の喰出鐔、49・50の単脚足金具、51の鞘口金具が装着した状態で検出されている（図版30）。52の鞘尻金具、53・54の鴉目金具は、大刀付近より出土していることから、セットを構成するものと考えられる。

55は、前室より出土した鉄製大刀刀身平棟平造り、カマス切先を呈する直茎両区鉄刀である。長さ77.1cmを測る。刃身部の断面形状は楔形を呈する。茎部には、長さ2.3cm程の柄木を留めるための目釘が1本茎尻近くに残っている。

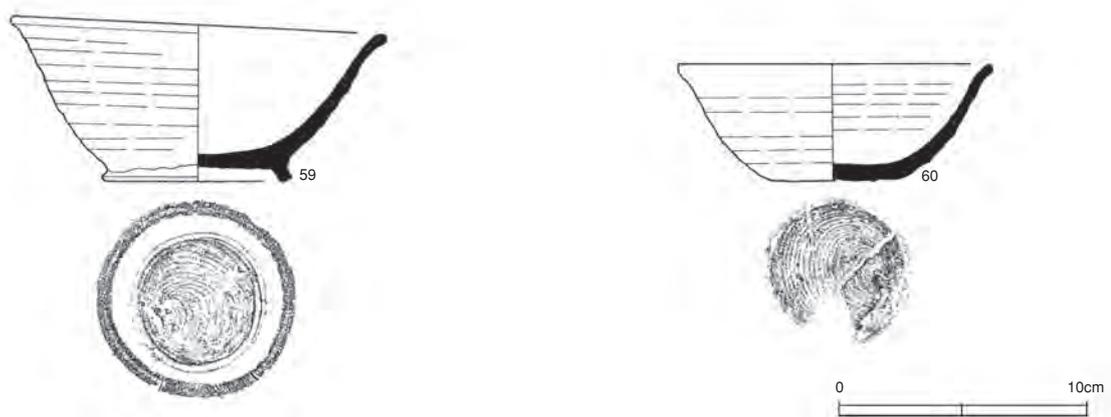
56は、前室より出土した鉄製大刀刀身平棟平造り、カマス切先を呈する直茎両区鉄刀である。長さ63.0cmを測る。柄部に鉄製の鉤が付き、やや中央寄りに目釘穴が穿たれている。

57は、矩形透かしが六窓入る倒卵形を呈する鉄製鏝。長径8.2cm、短径6.9cmを測る。56の大刀に近接して出土している。

58は、鉄製鞘尻金具。長さ6.7cm、最大幅3.9cmを測る。55の大刀に近接して出土している。

第73図59・60は、前庭部の上部敷石上より出土した、須恵器の碗。59は、高台が付く。酸化焰焼成となっている。

本古墳の帰属時期を直接示す土器は出土していない。鉄鏃および大刀の形態から判断し、TK209型式～TK217型式期の6世紀末から7世紀初の時期に比定される。前庭部上部舗石から出土した2点の須恵器は、10世紀に属するものであり、後年の祭祀儀礼等の際に置かれたものと判断される。



第73図 立野遺跡第2号墳出土遺物（6）

第24表 第2号墳出土土器計測表

図版番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
73図59	前庭部	高台碗	14.9	6.6	7.5	ABDIN	7.5YR5/3	B	80%	
73図60	前庭部	碗	12.5	4.6	5.0	ABDGIN	2.5Y6/1	B	40%	

4 調査のまとめ

本古墳群では、これまで第1次調査で11基(第1・3・11～18号墳・第1号小石室)、第3次調査で3基(第4・5号墳・第2号小石室)、第4次調査で1基(第2号墳)の合計15基が調査されている(第74図)。この他、墳丘の残る古墳が現況で4基(第6～9号墳)確認されており、墳丘の失われている古墳が調査区外に相当数存在していることが想定される。第6号墳は墳丘規模で直径20m、第7号墳は直径25m、第8号墳は直径21m、第9号墳は直径17mを現況地形で測る。

今回報告の第2号墳の規模は、墳丘が半分以上削平され、周溝が未確認のためその規模は不明であるが、石室の規模及び構造から推定すると直径20mを超えるものと推測することができる。

本古墳群の特徴として、石室の構築石材と古墳の規模およびその配置には次のような相関関係が認められる。

- | | |
|----------------------|-------------------------------|
| A - 直径20mを超える大型円墳 | — I. 石室は凝灰岩截石(第1・2・12・14号墳) |
| | — II. 石室は河原石・凝灰岩(第4号墳) |
| B - 直径10m～15mの中型円墳 | — I. 石室は凝灰岩截石(第3・17号墳) |
| | — III. 石室は河原石(第5・11・13・15号墳) |
| C - 直径10m以下の小型円墳・小石室 | — III. 石室は凝灰岩片(第16号墳・1・2号小石室) |

古墳の規模をもとにA～Cの3分類すると、その規模に対応する石室石材はA:(I・II)、B:(I・III)、C:(III)となり、凝灰岩截石石材を使用した古墳規模の優位性が認められる。

各古墳の配置は、第12号墳(A I):第13号墳(B III)、第2号墳(A I):第11号墳(B III)、第3号墳(B I):第15号墳(B III)、第17号墳(B I):第18号墳(B ?)、第1号墳(A I):第1号小石室(C III)、第9号墳(B ?):第2号小石室(C III)に纏まる。现阶段では、基本的にA I又はB IとB IIが対となる配置構成をとることが認識される。

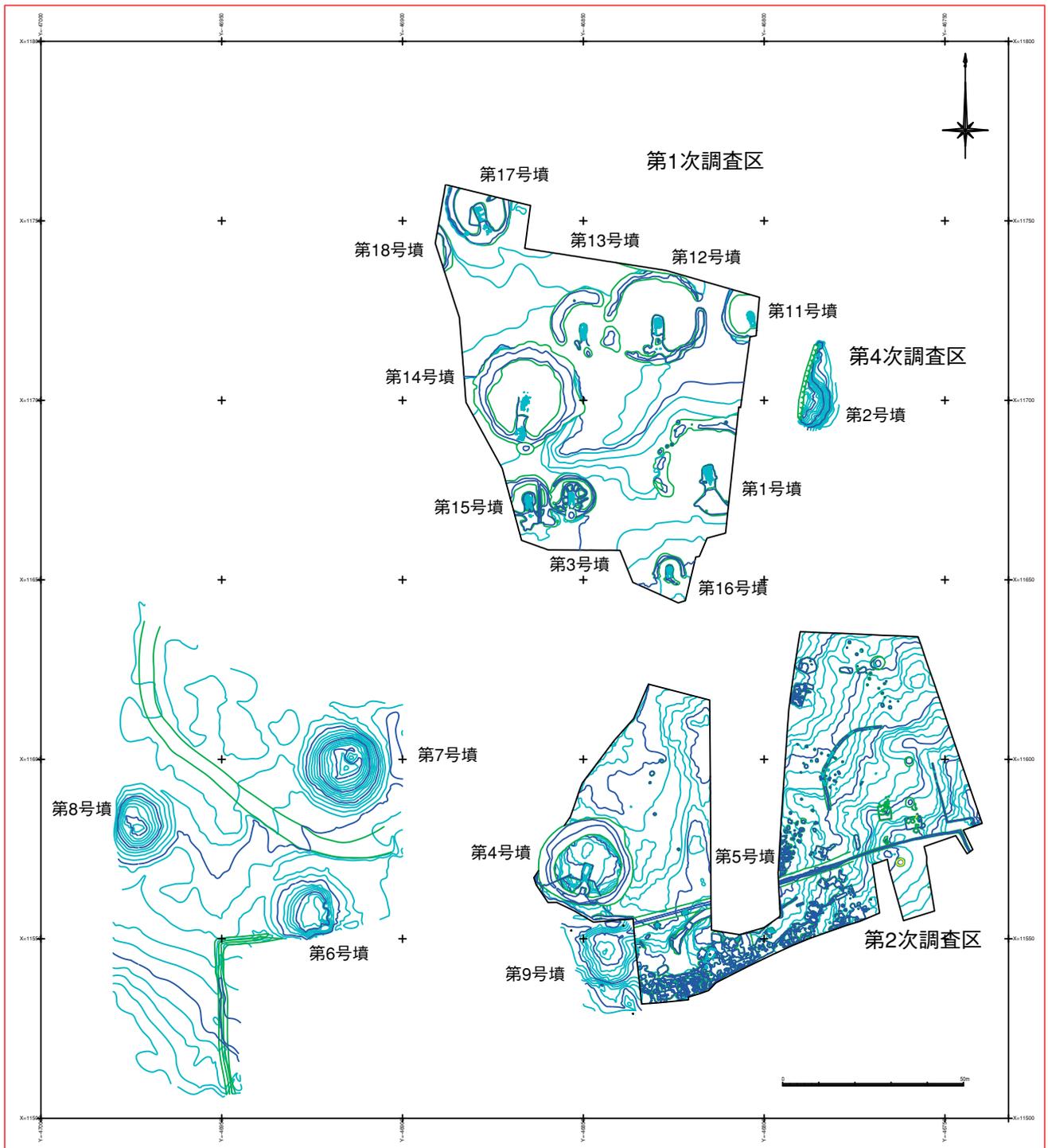
本古墳群の築造時期は、その出土遺物から判断して6世紀末から8世紀初頭とすることができる。

6世紀末～7世紀前葉(第1・2・3・15号墳)、7世紀後葉(第11・12・13・18号墳)、7世紀末～8世紀後葉(第14・17号墳)となり、古墳時代終末期における群集墳とみなすことができる。

出土遺物については、玄室から出土した大刀には、装具として金銅製喰出鐔・金銅製短脚足金具・鉄製鞘口金具・鉄製鞘尻金具(一部金銅製)が付けられている。喰出鐔の出土例は少なく、近隣では、青銅製であるが7世紀後半に比定される東松山市西原第1号墳の方頭大刀に装着されて出土している。

鉄鏃は、石室内より53点出土しており、形態の判別できる43点は、全て広根系鏃身部形態五角形となっている。本古墳に近接する立野古墳群第1号墳からは、広根系鏃身部形態五角形鏃6点と、細根系鏃身部形態五角形鏃1点が出土している(江南町教育委員会:2005)。近隣の古墳では、深谷市鹿島古墳群第1号墳(埼玉県教育委員会:1972)からは、広根系の鏃身部形態五角形鏃4点・長三角形鏃2点、三角形鏃3点が出土している。同古墳群第9号墳からは、広根系の鏃身部形態五角形鏃1点・長三角形鏃2点が出土している。美里町猪俣北第1号墳(美里町教育委員会:1998)からは、広根系の鏃身部形態五角形鏃3点・長三角形鏃と細根系の鏃身部形態五角形鏃1点が出土している。五角形鏃の出土例は少なく、帰属時期はいずれも7世紀前半に比定されている。1つの古墳で43点の広根系五角形鏃のみの単一形態が出土した本古墳例は注目される。

また、前庭部より 10 世紀代に比定される須恵器が出土しており、本古墳の築造時期から 300 年程の期間墳墓として認識され機能していたことになる。本遺跡の北西 1 km 程の地点には、8～10 世紀にかけて存在したことが確認されている寺内古代寺院跡（江南町：1995）や、8 世紀代の掘立柱建物跡群に囲まれた豪族居宅跡が確認されている深谷市百済木遺跡（川本町遺跡調査会：2003）が位置しており、渡来系氏族である壬生氏との関連が推測されている。立野遺跡第 3 次調査区の 9 世紀に比定される住居跡からは、「林内」「寺」「大家」と墨書された土器が出土している。両遺跡と本古墳群との関連を含めた本地域の 7 世紀から平安時代にかけての遺跡群の動向について今後注視していく必要がある。



第 74 図 立野古墳群全測図

引用・参考文献

- 岩比田遺跡調査会 1983『岩比田』
- 小澤國平 1964「江南・権現山窯跡」『台地研究』第14号 台地研究会
- 亀井正道 1978「踊る埴輪出土の古墳とその遺物」『ミュージアム』第三一〇号 東京国立博物館
- 川本町遺跡調査会 2003『百済木遺跡』川本町遺跡調査会報告書第8集
- 熊谷市 1984『熊谷市史 通史編』熊谷市史編さん室
- 熊谷市教育委員会 1978『楊井薬師寺古墳発掘調査報告書』昭和52年熊谷市埋蔵文化財調査報告
- 熊谷市教育委員会 2001『瀬戸山遺跡・瀬戸山古墳群』平成12年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 熊谷市教育委員会 2009『箕輪遺跡4次、5次 中廓遺跡3次 西浦遺跡 元境内遺跡4次 宮脇遺跡2次 諏訪脇遺跡』熊谷市埋蔵文化財調査報告書第4集
- 熊谷市教育委員会 2011『埼玉県指定史跡「塩古墳群」の調査』熊谷市埋蔵文化財調査報告書第10集
- 江南町 1995『江南町史 資料編1 考古』
- 江南村教育委員会 1982『塩前遺跡発掘調査報告書』江南村文化財調査報告第3集
- 江南村教育委員会 1985『江南遺跡群II(宮下遺跡 元稲荷遺跡)』江南村文化財調査報告第5集
- 江南町教育委員会 1988『本田東台 上前原』江南町文化財調査報告第8集
- 江南町教育委員会 1989『塩西遺跡II』江南町文化財調査報告書第9集
- 江南町教育委員会 1996『丸山遺跡』江南町文化財調査報告第11集
- 江南町教育委員会 1999『狸塚27号墳発掘調査報告書』江南町埋蔵文化財調査報告書第12集
- 江南町教育委員会 2005『立野古墳群発掘調査報告書』江南町埋蔵文化財発掘調査報告書第14集
- 江南町教育委員会 2006『上前原遺跡第2号墳発掘調査報告書』江南町埋蔵文化財発掘調査報告書第15集
- 江南町千代遺跡群発掘調査会 1998『千代遺跡群—弥生・古墳時代編—』江南町千代遺跡群発掘調査報告書2
- 埼玉県遺跡調査会 1974『下新田遺跡・荒神脇遺跡・熊野遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査報告書第22集 埼玉県遺跡調査会
- 埼玉県教育委員会 1972『鹿島古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査報告書第1集
- 埼玉県教育委員会 1973『熊谷市楊井古墳発掘調査概要』埼玉県埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
- 埼玉県教育委員会 1991『万吉下原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告書第18集
- 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995『桜山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第162集
- 美里町教育委員会 1998『埼玉県本庄市南大通り線内遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告書第9集第2分冊
- 柳田敏司 1962「踊る埴輪を出土した前方後円墳について」『埼玉研究』第六号 埼玉地理学会・埼玉県地方史研究会・埼玉県考古学会
- 嵐山町遺跡調査会 1987『古里古墳群 北田遺跡・上土橋支群・駒込支群の発掘調査』嵐山町遺跡調査会報告2
- 立正大学博物館 2008『野原古墳群発掘調査報告書』館蔵資料「基礎文献」叢刊第3輯

写 真 图 版



前中西遺跡 調査区全景(西から)



前中西遺跡 調査区全景(北から)

図版2



前中西遺跡 第1号竪穴建物跡(南西から)



前中西遺跡 第1号掘立柱建物跡(北から)



前中西遺跡 第2～4号掘立柱建物跡(北東から)



前中西遺跡 第1・2号溝跡(北から)



前中西遺跡 第3号溝跡(南から)

図版 4



前中西遺跡 第1号方形周溝墓(南から)



前中西遺跡 第1号方形周溝墓南溝遺物出土状況(北から)



前中西遺跡 第1号方形周溝墓南溝弥生土器壺出土状況(南から)



前中西遺跡 第1号方形周溝墓 第15図1



前中西遺跡 遺構外 第16図18



前中西遺跡 第5号ピット 第12図1～3、第7号ピット 第12図4、
第19号ピット 第12図5、第24号ピット 第12図6



前中西遺跡 第1号方形周溝墓 第15図2～24

図版6



前中西遺跡 遺構外 第16図 1～16



前中西遺跡 遺構外 第16図 17・20～24



前中西遺跡 第1号方形周溝墓 第15図 26・27



西別府館跡 調査区西半部全景(南から)



西別府館跡 調査区東半部全景(南から)



西別府館跡 第1号竪穴建物跡(西から)



西別府館跡 第1号竪穴建物跡掘り方(西から)



西別府館跡 第1号竪穴建物跡カマド付近遺物出土状況(西から)



西別府館跡 第2号竪穴建物跡(西から)



西別府館跡 第2号竪穴建物跡遺物出土状況(西から)



西別府館跡 第2号竖穴建物跡遺物出土状況(南から)



西別府館跡 第3号竖穴建物跡(北から)



西別府館跡 第1号掘立柱建物跡、第1～3号溝跡、第27・28号ピット(南から)



西別府館跡 第2号土坑(南から)



西別府館跡 第2号土坑遺物出土状況(南から)



西別府館跡 第1号土坑(北から)



西別府館跡 第14~26号ピット(南から)



西別府館跡 第1号井戸跡(東から)



西別府館跡 第1号豎穴建物跡 第21図2



西別府館跡 第1号豎穴建物跡 第21図4



西別府館跡 第1号豎穴建物跡 第21図5



西別府館跡 第2号豎穴建物跡 第25図3



西別府館跡 第2号豎穴建物跡 第25図4



西別府館跡 第2号豎穴建物跡 第25図5



西別府館跡 第2号豎穴建物跡 第25図10



西別府館跡 第2号豎穴建物跡 第25図11



西別府館跡 第2号豎穴建物跡 第25図12



西別府館跡 第2号豎穴建物跡 第25図16



西別府館跡 第2号豎穴建物跡 第25図17



西別府館跡 第2号豎穴建物跡 第25図18

图版 14



西別府館跡 第2号豎穴建物跡 第25图20



西別府館跡 第2号豎穴建物跡 第25图21



西別府館跡 第2号豎穴建物跡 第25图22



西別府館跡 第3号豎穴建物跡 第28图2



西別府館跡 第2号土坑 第31图1



西別府館跡 第2号土坑 第31图2



西別府館跡 第2号土坑 第31图3



西別府館跡 第1号豎穴建物跡 第21图10



西別府館跡 第1号豎穴建物跡 第21图11



西別府館跡 第2号豎穴建物跡 第26図24



西別府館跡 第2号豎穴建物跡 第26図25



西別府館跡 第2号豎穴建物跡 第26図31



西別府館跡 第3号豎穴建物跡 第28図3



西別府館跡 遺構外 第37図6



西別府館跡 第1号豎穴建物跡 第21図12
第2号豎穴建物跡 第26図32~34
遺構外 第37図4・5
(上段:表 下段:裏)



西別府館跡 遺構外 第37図1 (墨書土器)



西別府館跡 第1号井戸跡 第36図1~3



西別府館跡 第1号竪穴建物跡 第22図17(左:凸面 右:凹面)



西別府館跡 第1号竪穴建物跡 第22図18(左:凸面 右:凹面)

西別府館跡

第 1 号竪穴建物跡 第 21 図 13~14

第 2 号竪穴建物跡 第 26 図 36・37

第 3 号竪穴建物跡 第 28 図 5



西別府館跡 遺構外 第 37 図 11



西別府館跡 第 1 号竪穴建物跡 第 21 図 16



王子西遺跡 航空写真(平成16年5月撮影)



王子西遺跡 調査区全景写真（南東より）



王子西遺跡 第1号竪穴建物跡（南西より）



王子西遺跡 第1号竪穴建物跡完堀状態（北東より）



王子西遺跡 第1号竪穴建物跡カマド



王子西遺跡 第1号竪穴建物跡貯蔵穴



王子西遺跡 第2～6号竪穴建物跡（西より）



王子西遺跡 第2号竪穴建物跡（古）カマド



王子西遺跡 第2～6号竪穴建物跡（東より）



王子西遺跡 調査風景



王子西遺跡 第2号竪穴建物跡（新）カマド



王子西遺跡 第2号竪穴建物跡（新）遺物出土状態



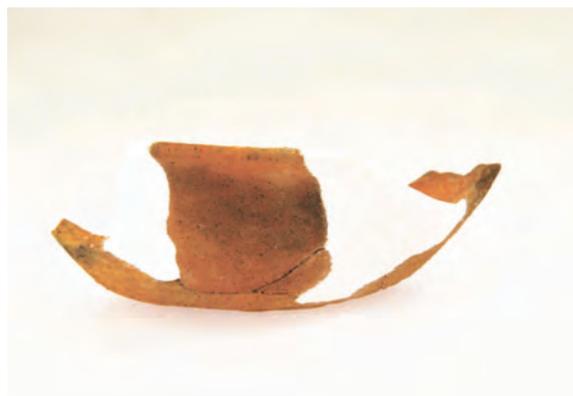
王子西遺跡 第2号竪穴建物跡（新）遺物出土状態



王子西遺跡 第2号竪穴建物跡遺物出土状態



王子西遺跡 第1号豎穴建物跡 第43图1



王子西遺跡 第1号豎穴建物跡 第43图5



王子西遺跡 第1号豎穴建物跡 第43图2



王子西遺跡 第1号豎穴建物跡 第43图6



王子西遺跡 第1号豎穴建物跡 第43图3



王子西遺跡 第1号豎穴建物跡 第43图7



王子西遺跡 第1号豎穴建物跡 第43图4



王子西遺跡 第1号豎穴建物跡 第43图8



王子西遺跡 第 1 号豎穴建物跡 第 43 图 9



王子西遺跡 第 2 号豎穴建物跡 第 47 图 3



王子西遺跡 第 1 号豎穴建物跡 第 43 图 10



王子西遺跡 第 2 号豎穴建物跡 第 47 图 4



王子西遺跡 第 2 号豎穴建物跡 第 47 图 1



王子西遺跡 第 2 号豎穴建物跡 第 47 图 5



王子西遺跡 第 2 号豎穴建物跡 第 47 图 2



王子西遺跡 第 2 号豎穴建物跡 第 47 图 6



王子西遺跡 第2号豎穴建物跡 第47图7



王子西遺跡 第2号豎穴建物跡 第47图11



王子西遺跡 第2号豎穴建物跡 第47图8



王子西遺跡 第2号豎穴建物跡 第47图12



王子西遺跡 第2号豎穴建物跡 第47图9



王子西遺跡 第2号豎穴建物跡 第47图13



王子西遺跡 第2号豎穴建物跡 第47图10



王子西遺跡 第2号豎穴建物跡 第47图14



王子西遺跡 第 2 号豎穴建物跡 第 47 图 15



王子西遺跡 第 2 号豎穴建物跡 第 48 图 19



王子西遺跡 第 2 号豎穴建物跡 第 48 图 16



王子西遺跡 第 2 号豎穴建物跡 第 48 图 20



王子西遺跡 第 2 号豎穴建物跡 第 48 图 17



王子西遺跡 第 2 号豎穴建物跡 第 48 图 21



王子西遺跡 第 2 号豎穴建物跡 第 48 图 18



王子西遺跡 第 2 号豎穴建物跡 第 48 图 22



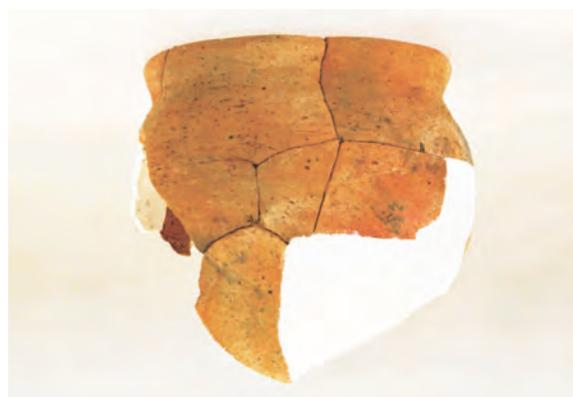
王子西遺跡 第2号豎穴建物跡 第48图 23



王子西遺跡 第2号豎穴建物跡 第48图 27



王子西遺跡 第2号豎穴建物跡 第48图 24



王子西遺跡 第2号豎穴建物跡 第48图 28



王子西遺跡 第2号豎穴建物跡 第48图 25



王子西遺跡 第3号豎穴建物跡 第51图 1



王子西遺跡 第2号豎穴建物跡 第48图 26



王子西遺跡 第3号豎穴建物跡 第51图 2



王子西遺跡 第3号豎穴建物跡 第51图3



王子西遺跡 第5号住居跡 第54图1



王子西遺跡 第3号住居跡 第51图4



王子西遺跡 第5号住居跡 第54图2



王子西遺跡 第3号豎穴建物跡 第51图5



王子西遺跡 第5号住居跡 第54图3



王子西遺跡 第4号豎穴建物跡 第51图6



王子西遺跡 第2号豎穴建物跡 第49図 29
上面



王子西遺跡 遺構外 第55図 5



王子西遺跡 第2号豎穴建物跡 第49図 29
下面



王子西遺跡 第2号豎穴建物跡出土炭化種子



王子西遺跡 第2号豎穴建物跡 第49図 30



王子西遺跡 遺構外 第55図 1~4



立野遺跡 航空写真(昭和58年11月撮影)



立野遺跡第 2 号墳 墳丘現況



立野遺跡第 2 号墳 墳丘盛土土層断面



立野遺跡第 2 号墳 前庭上部舗石



立野遺跡第 2 号墳 前庭下部舗石



立野遺跡第 2 号墳 前庭上部舗石遺物出土状況



立野遺跡第 2 号墳 調査風景



立野遺跡第 2 号墳 調査風景



立野遺跡第 2 号墳 玄室内大刀出土状況



立野遺跡第 2 号墳 前室内大刀出土状況



立野遺跡第2号墳 前室内大刀出土状況



立野遺跡第2号墳 玄室内刀子出土状況



立野遺跡第2号墳 前室内鐺出土状況



立野遺跡第2号墳 玄室内鉄鎌出土状況



立野遺跡第2号墳 玄室内鞆尻金具出土状況



立野遺跡第2号墳 羨道部 (南から)



立野遺跡第2号墳 石室全景 (南より)



立野遺跡第2号墳 前庭部と羨道部 (南より)



立野遺跡第2号墳 石室 (北西より)



立野遺跡第2号墳 調査風景



立野遺跡第2号墳 調査風景



立野遺跡第2号墳 石室全景（南東より）



立野遺跡第2号墳 石室全景（西より）



立野遺跡第2号墳 羨道部（東より）



立野遺跡第2号墳 玄室（東好）



立野遺跡第2号墳 玄室石材（東より）



立野遺跡第2号墳 羨道部（西より）



立野遺跡第2号墳 前室（西より）



立野遺跡第2号墳 玄室石材内部（東面）



立野遺跡第2号墳 玄室奥壁石材内部



立野遺跡第2号墳 玄室奥壁コーナー内部（北西部）



立野遺跡第2号墳 鉄鍬 第68図1~6



立野遺跡第2号墳 鉄鍬 第68図7~12



立野遺跡第2号墳 鉄鍬 第68図13~16、
第69図17・18



立野遺跡第2号墳 鉄鍬 第69図19~24



立野遺跡第 2 号墳 鉄鍬 第 69 図 25~30



立野遺跡第 2 号墳 鉄鍬 第 69 図 31~32、
第 70 図 33~36



立野遺跡第 2 号墳 刀子 第 70 図 46



立野遺跡第 2 号墳 前庭部出土 台付碗 第 73 図 59



立野遺跡第 2 号墳 前庭部出土 碗 第 37 図 60



立野遺跡第2号墳 前室出土 大刀 第72図55



立野遺跡第2号墳 前室出土
鞆尻金具 第72図58



立野遺跡第2号墳 前室出土 鐺 第72図57



立野遺跡第2号墳 前室出土 大刀 第72図56



立野遺跡第2号墳 玄室出土 大刀 第71図47



立野遺跡第2号墳 玄室出土
金銅製喰出鐺・足金具 第71図48~50



立野遺跡第2号墳 玄室出土
鞆口金具・鞆尻金具 第71図51・52



立野遺跡第2号墳 玄室出土
金銅製喰出金具 第71図48



立野遺跡第2号墳 玄室出土
鞆尻金具内残存木質部

報告書抄録

ふりがな	まえなかにしいせき にしべつぶやかたあと おうじにしいせき たてのいせき								
書名	前中西遺跡 西別府館跡 王子西遺跡 立野遺跡								
副書名	市内遺跡発掘調査報告書Ⅳ								
シリーズ名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第14集								
編著者名	森田安彦 吉野 健								
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会								
所在地	〒360-0107 埼玉県熊谷市千代329番地 熊谷市立江南文化財センター TEL 048-536-5062								
発行年月日	西暦2013(平成25)年3月26日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (° ' ")	東緯 (° ' ")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
たてのいせき 立野遺跡	くまがやし いたい ばんち 熊谷市板井238番地2 ほか 他	11202	65-054	36° 6' 26"	139° 18' 37"	20051201 ～ 20051224	200	保存目的 の範囲内 内容確認調 査	
まえなかにしいせき 前中西遺跡	くまがやしなかにしよんちようめ 熊谷市中西四丁目 ばんち ほか 2514番地2他	11202	59-092	36° 8' 52"	139° 23' 59"	20090715 ～ 20090814	120	個人専用 住宅建設	
にしべつぶやかたあと 西別府館跡	くまがやしにしべつぶあざてんじん 熊谷市西別府字天神 ばんち 2214番地1	11202	59-039	36° 11' 33"	139° 20' 3"	20090902 ～ 20091009	71.5	個人専用 住宅建設	
おうじにしいせき 王子西遺跡	くまがやし やとう ごあざおうじ 熊谷市弥藤吾字王子 ばんち 584番地8	11202	61-032	36° 12' 54"	139° 22' 36"	20100125 ～ 20100212	88	個人専用 住宅建設	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
立野遺跡	古墳群	古墳時代	古墳	1	鉄鏃	大刀	刀子	土師器	本古墳群の中で初の 複式構造をもつ石室 を確認した。
前中西遺跡	集落跡 墓	弥生時代 古墳時代	方形周溝墓	1	弥生土器	土師器	須恵器		新たに方形周溝墓が 1基確認され、墓域 の広がり判明し た。
西別府館跡	館跡 集落跡	平安時代 江戸時代	竪穴建物跡	3	土師器	須恵器			集落内に灰釉陶器を 含む土器を副葬した 土坑墓が確認され た。
王子西遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代	竪穴建物跡	6	縄文土器	土師器	須恵器		竪穴建物跡より、線 刻の施された石製紡 錘車出土した。

本報告書は、編集を担当課で行い、印刷は外注により300部作成し、1部当たりの単価は1,582円です。

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第14集

前 中 西 遺 跡
西 別 府 館 跡
王 子 西 遺 跡
立 野 遺 跡

—市内遺跡発掘調査報告書Ⅳ—

平成25年3月26日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／有限会社 英 知